

茨城県教育財団文化財調査報告第129集

茨城中央工業団地造成工事
地内埋蔵文化財調査報告書

南小割遺跡 権現堂遺跡
親塚古墳 後原遺跡
(下 卷)

作業室用

平成10年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第129集

茨城中央工業団地造成工事 地内埋蔵文化財調査報告書

みなみ こわり い せき ごんげんどう い せき
南小割遺跡 権現堂遺跡
おや づか こ ふん うしろ はら い せき
親塚古墳 後原遺跡
(下 卷)

平成10年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

目 次

— 上 卷 —

序

例 言

凡 例

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 南小割遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	10
1 竪穴住居跡	10

— 下 卷 —

2 掘立柱建物跡	1
3 方形周溝墓	7
4 土坑	9
5 溝	49
6 その他の遺構	51
(1) 地点貝塚	51
(2) 地下式壙	57
(3) 不明遺構	61
7 遺構外出土遺物	62
第4節 まとめ	72
第4章 権現堂遺跡	83
第1節 遺跡の概要	83
第2節 基本層序	84
第3節 遺構と遺物	85
1 古墳	85
2 土坑	90

3	井戸	99
4	溝	100
5	遺構外出土遺物	104
第4節	まとめ	113
第5章	親塚古墳	115
第1節	遺跡の概要	115
第2節	基本層序	115
第3節	遺構と遺物	116
1	竪穴住居跡	116
2	塚	119
3	火葬墓	120
4	土坑	122
第4節	まとめ	125
第6章	後原遺跡	127
第1節	遺跡の概要	127
第2節	基本層序	128
第3節	遺構と遺物	128
1	土坑	128
2	溝	132
3	遺構外出土遺物	137
第4節	まとめ	139
付 章		141
付章1	南小割第2地点貝塚試料の分析	143
付章2	南小割遺跡出土炭化材樹種	149
	写真図版	

插图目次

— 上 卷 —

南小割遺跡

第1图	調査区呼称方法概念图	第34图	第18号住居跡実測图	40
第2图	周辺遺跡分布图	第35图	第19号住居跡実測图	40
第3图	南小割遺跡調査区	第36图	第20号住居跡実測图	41
第4图	南小割遺跡基本土層图	第37图	第20号住居跡出土遺物実測图	42
第5图	第1号住居跡実測图	第38图	第21号住居跡実測图	43
第6图	第1号住居跡出土遺物実測图	第39图	第21号住居跡出土遺物実測图	44
第7图	第2号住居跡実測图	第40图	第22号住居跡実測图	45
第8图	第2号住居跡出土遺物実測图	第41图	第22号住居跡出土遺物実測图	46
第9图	第3-A号住居跡実測图	第42图	第23・24号住居跡実測图	48
第10图	第3-A号住居跡出土遺物実測图	第43图	第24号住居跡出土遺物実測图	49
第11图	第4号住居跡実測图	第44图	第25号住居跡実測图	50
第12图	第5号住居跡実測图	第45图	第25号住居跡出土遺物実測・拓影图	51
第13图	第5号住居跡出土遺物実測图	第46图	第26号住居跡実測图	53
第14图	第6号住居跡実測图	第47图	第26号住居跡出土遺物実測图	54
第15图	第7号住居跡実測图	第48图	第27号住居跡実測图	56
第16图	第7号住居跡出土遺物実測图	第49图	第27号住居跡出土遺物実測图	57
第17图	第8号住居跡実測图	第50图	第28号住居跡出土遺物実測图	58
第18图	第8号住居跡出土遺物実測图	第51图	第28・29号住居跡実測图	59
第19图	第9号住居跡実測图	第52图	第29号住居跡出土遺物実測图	59
第20图	第10号住居跡実測图	第53图	第30・31号住居跡実測图	60
第21图	第10号住居跡出土遺物実測图	第54图	第30号住居跡出土遺物実測图	61
第22图	第11号住居跡実測图	第55图	第31号住居跡出土遺物実測图	61
第23图	第12号住居跡実測图	第56图	第32号住居跡実測图	62
第24图	第12号住居跡出土遺物実測图	第57图	第32号住居跡出土遺物実測图	63
第25图	第13号住居跡実測图	第58图	第33号住居跡実測图	65
第26图	第13号住居跡出土遺物実測图	第59图	第33号住居跡出土遺物実測图	65
第27图	第14・15号住居跡実測图	第60图	第34号住居跡実測图	66
第28图	第14号住居跡出土遺物実測图	第61图	第35号住居跡実測图	67
第29图	第15号住居跡出土遺物実測图	第62图	第35号住居跡出土遺物実測图	68
第30图	第16号住居跡実測图	第63图	第36号住居跡実測图	69
第31图	第16号住居跡出土遺物実測图	第64图	第36号住居跡出土遺物実測・拓影图	70
第32图	第17号住居跡実測图	第65图	第37・38号住居跡実測图	71
第33图	第17号住居跡出土遺物実測图	第66图	第37号住居跡出土遺物実測图	72

第67图	第38号住居跡出土遺物実測図	73	第105图	第60号住居跡遺物出土位置図	111
第68图	第39号住居跡実測図	74	第106图	第60号住居跡出土遺物実測図(1)	113
第69图	第39号住居跡出土遺物実測図	75	第107图	第60号住居跡出土遺物実測図(2)	114
第70图	第40号住居跡実測図	76	第108图	第60号住居跡出土遺物実測図(3)	115
第71图	第40号住居跡出土遺物実測図	77	第109图	第61号住居跡実測図	117
第72图	第41号住居跡実測図	78	第110图	第61号住居跡出土遺物実測図	118
第73图	第42号住居跡実測図	79	第111图	第62号住居跡実測図	119
第74图	第42号住居跡出土遺物実測図	80	第112图	第62号住居跡出土遺物実測図	120
第75图	第43号住居跡実測図	81	第113图	第63号住居跡実測図	122
第76图	第43号住居跡出土遺物実測図	82	第114图	第63号住居跡出土遺物実測図	123
第77图	第44号住居跡実測図	83	第115图	第64号住居跡実測図	124
第78图	第44号住居跡出土遺物実測図	83	第116图	第64号住居跡出土遺物実測図(1)	126
第79图	第45号住居跡実測図	84	第117图	第64号住居跡出土遺物実測図(2)	127
第80图	第45号住居跡出土遺物実測図	84	第118图	第65号住居跡実測図	128
第81图	第46号住居跡実測図	85	第119图	第66・67号住居跡実測図	129
第82图	第46号住居跡出土遺物実測図	86	第120图	第66号住居跡出土遺物実測図	129
第83图	第47号住居跡実測図	88	第121图	第67号住居跡出土遺物実測図	131
第84图	第47号住居跡出土遺物実測図	89	第122图	第68号住居跡実測図	133
第85图	第48号住居跡実測図	90	第123图	第68号住居跡出土遺物実測図	134
第86图	第48号住居跡出土遺物実測図	90	第124图	第69号住居跡実測図	134
第87图	第49号住居跡実測図	92	第125图	第69号住居跡出土遺物実測図	135
第88图	第49号住居跡出土遺物実測図	92	第126图	第70・71号住居跡出土遺物実測図	136
第89图	第50号住居跡実測図	93	第127图	第70号住居跡出土遺物実測図	137
第90图	第50号住居跡出土遺物実測図	94	第128图	第71号住居跡出土遺物実測図	138
第91图	第52・53号住居跡実測図	97	第129图	第72号住居跡実測図	139
第92图	第52号住居跡出土遺物実測図	97	第130图	第72号住居跡出土遺物実測図(1)	141
第93图	第53号住居跡出土遺物実測図	98	第131图	第72号住居跡出土遺物実測図(2)	142
第94图	第54号住居跡実測図	99	第132图	第72号住居跡出土遺物実測図(3)	143
第95图	第54号住居跡出土遺物実測図	100	第133图	第72号住居跡出土遺物実測図(4)	144
第96图	第55・56号住居跡実測図	102	第134图	第73号住居跡実測図	147
第97图	第55号住居跡出土遺物実測図	103	第135图	第73号住居跡出土遺物実測図	149
第98图	第56号住居跡出土遺物実測図	104	第136图	第74号住居跡実測図	150
第99图	第57号住居跡実測図	105	第137图	第75・76号住居跡実測図	152
第100图	第58号住居跡実測図	105	第138图	第75号住居跡出土遺物実測図	153
第101图	第58号住居跡出土遺物実測図	106	第139图	第76号住居跡出土遺物実測図	155
第102图	第59号住居跡実測図	108	第140图	第77号住居跡実測図	157
第103图	第59号住居跡出土遺物実測図	109	第141图	第77号住居跡出土遺物実測図	157
第104图	第60号住居跡実測図	110	第142图	第78号住居跡実測図	159

第143图	第78号住居跡出土遺物実測図	160	第181图	第95号住居跡出土遺物実測図	207
第144图	第79号住居跡実測図	161	第182图	第96号住居跡実測図	208
第145图	第79号住居跡出土遺物実測・拓影図	162	第183图	第96号住居跡出土遺物実測図	209
第146图	第80・81号住居跡実測図	164	第184图	第97号住居跡実測図	210
第147图	第80号住居跡出土遺物実測図(1)	166	第185图	第98号住居跡実測図	211
第148图	第80号住居跡出土遺物実測図(2)	167	第186图	第98号住居跡出土遺物実測図	212
第149图	第80号住居跡出土遺物実測図(3)	168	第187图	第99号住居跡実測図	213
第150图	第81号住居跡出土遺物実測図	170	第188图	第99号住居跡出土遺物実測図	214
第151图	第82号住居跡実測・遺物出土位置図	172	第189图	第100号住居跡実測図	216
第152图	第82号住居跡出土遺物実測図(1)	174	第190图	第100号住居跡出土遺物実測・拓影図	217
第153图	第82号住居跡出土遺物実測図(2)	175	第191图	第101号住居跡実測図	218
第154图	第83号住居跡実測図	177	第192图	第101号住居跡出土遺物実測・拓影図	218
第155图	第83号住居跡出土遺物実測図	178	第193图	第102号住居跡出土遺物実測図	219
第156图	第84号住居跡実測図	180	第194图	第102号住居跡実測図	219
第157图	第84号住居跡出土遺物実測図	180	第195图	第103号住居跡実測図	221
第158图	第85号住居跡実測図	181	第196图	第103号住居跡出土遺物実測図	222
第159图	第85号住居跡出土遺物実測図	182	第197图	第104号住居跡実測図	223
第160图	第86号住居跡実測図	183	第198图	第104号住居跡出土遺物実測図	224
第161图	第86号住居跡出土遺物実測図	184	第199图	第105号住居跡実測図	225
第162图	第87号住居跡実測図	185	第200图	第105号住居跡出土遺物実測・拓影図	225
第163图	第87号住居跡出土遺物実測図	185	第201图	第106号住居跡実測図	226
第164图	第88号住居跡実測図	187	第202图	第106号住居跡出土遺物実測図	227
第165图	第88号住居跡遺物出土位置図	188	第203图	第107号住居跡実測図	228
第166图	第88号住居跡出土遺物実測図(1)	189	第204图	第108号住居跡実測図	229
第167图	第88号住居跡出土遺物実測図(2)	190	第205图	第108号住居跡出土遺物実測図(1)	231
第168图	第89号住居跡実測図	192	第206图	第108号住居跡出土遺物実測図(2)	232
第169图	第89号住居跡出土遺物実測図(1)	193	第207图	第109号住居跡実測図	233
第170图	第89号住居跡出土遺物実測図(2)	194	第208图	第109号住居跡出土遺物実測図	234
第171图	第90・91号住居跡実測図	196	第209图	第110・111号住居跡実測図	236
第172图	第90号住居跡遺物出土位置図	197	第210图	第110号住居跡出土遺物実測図	236
第173图	第90号住居跡出土遺物実測図(1)	198	第211图	第112号住居跡実測図	238
第174图	第90号住居跡出土遺物実測図(2)	199	第212图	第113号住居跡実測図	239
第175图	第92号住居跡実測図	201	第213图	第113号住居跡出土遺物実測図	240
第176图	第92号住居跡出土遺物実測図	201	第214图	第114・116・117号住居跡実測図	242
第177图	第93号住居跡実測図	203	第215图	第114号住居跡出土遺物実測図	243
第178图	第93号住居跡出土遺物実測図	203	第216图	第117号住居跡出土遺物実測図	245
第179图	第94・95号住居跡実測図	205	第217图	第115号住居跡実測図	246
第180图	第94号住居跡出土遺物実測図	206	第218图	第115号住居跡出土遺物実測図	247

第219图	第118号住居跡実測図……………248	第257图	第136号住居跡実測・遺物出土位置図……………291
第220图	第118号住居跡出土遺物実測図……………249	第258图	第136号住居跡出土遺物実測図(1)……………292
第221图	第119号住居跡実測図……………250	第259图	第136号住居跡出土遺物実測図(2)……………293
第222图	第119号住居跡出土遺物実測図……………252	第260图	第137号住居跡実測図……………294
第223图	第120号住居跡実測図……………254	第261图	第137号住居跡出土遺物実測図……………294
第224图	第120号住居跡出土遺物実測図……………255	第262图	第138号住居跡実測図……………295
第225图	第121-A号住居跡実測図……………257	第263图	第139号住居跡実測図……………296
第226图	第121-B号住居跡実測図……………257	第264图	第139号住居跡出土遺物実測図(1)……………297
第227图	第121-B号住居跡出土遺物実測図……………258	第265图	第139号住居跡出土遺物実測図(2)……………298
第228图	第122号住居跡実測図……………260	第266图	第140号住居跡実測図……………299
第229图	第122号住居跡出土遺物実測図……………261	第267图	第140号住居跡出土遺物実測・拓影図……………300
第230图	第123号住居跡実測図……………263	第268图	第141号住居跡実測図……………301
第231图	第123号住居跡出土遺物実測図……………264	第269图	第141号住居跡出土遺物実測・拓影図……………302
第232图	第124号住居跡実測図……………266	第270图	第142号住居跡実測・遺物出土位置図……………304
第233图	第124号住居跡出土遺物実測図……………267	第271图	第142号住居跡出土遺物実測図……………305
第234图	第125号住居跡実測図……………268	第272图	第143号住居跡実測図……………306
第235图	第125号住居跡出土遺物実測図……………269	第273图	第143号住居跡出土遺物実測図……………306
第236图	第126号住居跡実測図……………270	第274图	第144号住居跡実測図……………308
第237图	第126号住居跡出土遺物実測・拓影図……………270	第275图	第145号住居跡実測図……………309
第238图	第127号住居跡実測図……………271	第276图	第146号住居跡実測図……………310
第239图	第127号住居跡出土遺物実測・拓影図……………272	第277图	第146号住居跡出土遺物実測図(1)……………311
第240图	第128号住居跡実測図……………274	第278图	第146号住居跡出土遺物実測図(2)……………312
第241图	第128号住居跡出土遺物実測・拓影図……………275	第279图	第147号住居跡実測図……………314
第242图	第129号住居跡実測図……………276	第280图	第147号住居跡出土遺物実測図……………314
第243图	第129号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)……………277	第281图	第148号住居跡実測図……………316
第244图	第129号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)……………278	第282图	第148号住居跡出土遺物実測図……………316
第245图	第130号住居跡実測図……………279	第283图	第149号住居跡実測図……………317
第246图	第130号住居跡出土遺物実測図……………280	第284图	第149号住居跡出土遺物実測図……………318
第247图	第131・132号住居跡実測図……………281	第285图	第150号住居跡実測図……………319
第248图	第131号住居跡出土遺物実測図……………282	第286图	第150号住居跡出土遺物実測・拓影図……………319
第249图	第132号住居跡出土遺物拓影図……………283	第287图	第151号住居跡実測図……………320
第250图	第133号住居跡実測図……………284	第288图	第151号住居跡出土遺物拓影図……………321
第251图	第134号住居跡実測図……………284	第289图	第152号住居跡実測図……………321
第252图	第135号住居跡実測図……………285	第290图	第152号住居跡出土遺物拓影図……………322
第253图	第135号住居跡遺物出土位置図……………286	第291图	第153号住居跡実測図……………323
第254图	第135号住居跡出土遺物実測図(1)……………287	第292图	第153号住居跡出土遺物実測図……………323
第255图	第135号住居跡出土遺物実測図(2)……………288	第293图	第154号住居跡実測図……………324
第256图	第135号住居跡出土遺物実測図(3)……………289	第294图	第154号住居跡出土遺物実測図……………324

第295图	第155号住居跡実測図	325	第330图	第172号住居跡出土遺物実測図	358
第296图	第155号住居跡出土遺物実測図	326	第331图	第173・174号住居跡実測図	360
第297图	第156号住居跡実測図	328	第332图	第173号住居跡出土遺物実測図	361
第298图	第156号住居跡出土遺物実測図	329	第333图	第174号住居跡出土遺物実測図	362
第299图	第157号住居跡実測図	331	第334图	第175号住居跡実測図	363
第300图	第157号住居跡出土遺物実測図	332	第335图	第175号住居跡出土遺物実測図	363
第301图	第158号住居跡実測図	333	第336图	第176号住居跡実測図	365
第302图	第158号住居跡出土遺物実測図	334	第337图	第176号住居跡出土遺物実測図	366
第303图	第159号住居跡実測図	335	第338图	第177号住居跡実測図	368
第304图	第159号住居跡出土遺物実測図	335	第339图	第177号住居跡出土遺物実測図	368
第305图	第160号住居跡実測図	336	第340图	第178号住居跡実測・遺物出土位置図	370
第306图	第160号住居跡出土遺物拓影図	336	第341图	第178号住居跡出土遺物実測図	371
第307图	第161号住居跡実測図	337	第342图	第179号住居跡実測図	372
第308图	第161号住居跡出土遺物実測・拓影図	337	第343图	第180号住居跡実測図	374
第309图	第162号住居跡実測図	338	第344图	第180号住居跡出土遺物実測図	375
第310图	第162号住居跡出土遺物実測図	338	第345图	第181号住居跡実測図	376
第311图	第163号住居跡実測図	339	第346图	第181号住居跡出土遺物実測図	377
第312图	第163号住居跡出土遺物実測・拓影図	340	第347图	第182号住居跡実測図	378
第313图	第164号住居跡実測図	341	第348图	第182号住居跡出土遺物実測図	379
第314图	第164号住居跡出土遺物拓影図	342	第349图	第183号住居跡実測図	380
第315图	第165号住居跡実測図	343	第350图	第183号住居跡出土遺物実測図	380
第316图	第166号住居跡実測・遺物出土位置図	344	第351图	第184号住居跡実測図	381
第317图	第166号住居跡出土遺物実測図	345	第352图	第185号住居跡実測図	382
第318图	第167号住居跡実測図	346	第353图	第185号住居跡出土遺物実測図	383
第319图	第168号住居跡実測図	347	第354图	第186号住居跡実測図	385
第320图	第168号住居跡出土遺物実測図	347	第355图	第186号住居跡出土遺物実測図	386
第321图	第169号住居跡実測図	348	第356图	第187号住居跡実測図	388
第322图	第169号住居跡出土遺物実測図(1)	349	第357图	第187号住居跡出土遺物実測図	389
第323图	第169号住居跡出土遺物実測図(2)	350	第358图	第188号住居跡実測図	391
第324图	第170号住居跡実測図	351	第359图	第188号住居跡出土遺物実測図	392
第325图	第170号住居跡出土遺物実測図	352	第360图	第189号住居跡実測図	393
第326图	第171号住居跡実測図	353	第361图	第189号住居跡出土遺物実測図	394
第327图	第171号住居跡出土遺物実測図(1)	354	第362图	第190号住居跡実測図	395
第328图	第171号住居跡出土遺物実測図(2)	355	第363图	第191号住居跡出土遺物実測図	395
第329图	第172号住居跡実測図	357	第364图	第191号住居跡実測図	396

— 下 卷 —

第365图	第1号掘立柱建物跡実測図	1	第366图	第2号掘立柱建物跡実測図	2
-------	--------------	---	-------	--------------	---

第367図	第3号掘立柱建物跡実測図	3	第405図	第115号土坑実測図	28
第368図	第3号掘立柱建物跡出土遺物実測図	3	第406図	第118号土坑実測図	29
第369図	第4号掘立柱建物跡実測図	5	第407図	第119号土坑実測図	29
第370図	第5号掘立柱建物跡実測図	6	第408図	第122号土坑実測図	30
第371図	第1号方形周溝墓実測図	8	第409図	第125号土坑実測図	30
第372図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図	9	第410図	第126号土坑実測図	31
第373図	第3号土坑実測図	10	第411図	第127号土坑実測図	31
第374図	第4号土坑実測図	11	第412図	第132号土坑実測図	32
第375図	第4号土坑出土遺物実測図	11	第413図	第135号土坑実測図	32
第376図	第5号土坑実測図	12	第414図	第136号土坑実測図	33
第377図	第5号土坑出土遺物実測図	12	第415図	第137号土坑実測図	33
第378図	第9号土坑実測図	12	第416図	第139号土坑実測図	34
第379図	第10号土坑実測図	13	第417図	第140号土坑実測図	34
第380図	第19・20号土坑実測図	14	第418図	その他の土坑実測図(1)	35
第381図	第22号土坑実測図	14	第419図	その他の土坑実測図(2)	36
第382図	第30号土坑実測図	15	第420図	その他の土坑実測図(3)	37
第383図	第37号土坑実測図	16	第421図	その他の土坑実測図(4)	38
第384図	第37号土坑出土遺物実測図	16	第422図	その他の土坑実測図(5)	39
第385図	第45号土坑実測図	17	第423図	その他の土坑実測図(6)	40
第386図	第47号土坑実測図	18	第424図	その他の土坑実測図(7)	41
第387図	第47号土坑出土遺物実測図	18	第425図	その他の土坑出土遺物実測・拓影図	45
第388図	第51号土坑実測図	20	第426図	第1～3号溝土層・断面実測図	50
第389図	第51号土坑出土遺物拓影図	20	第427図	第1-A・B号地点貝塚実測図	51
第390図	第62号土坑実測図	20	第428図	第2-A・B号地点貝塚実測図	53
第391図	第71号土坑実測図	21	第429図	第2-A・B号地点貝塚出土遺物拓影図	53
第392図	第73号土坑実測図	22	第430図	第3号地点貝塚実測図	54
第393図	第73号土坑出土遺物実測図	22	第431図	第3号地点貝塚出土遺物実測図	54
第394図	第74号土坑実測図	23	第432図	第4号地点貝塚実測図	55
第395図	第74号土坑出土遺物拓影図	23	第433図	第4号地点貝塚出土遺物実測・拓影図	55
第396図	第79号土坑実測図	23	第434図	ヤマトシジミ殻高別分布状況・個体数 グラフ	56
第397図	第85号土坑実測図	24	第435図	第1・2号地下式壙実測図	58
第398図	第88号土坑実測図	24	第436図	第2号地下式壙出土遺物実測図	58
第399図	第88号土坑出土遺物拓影図	24	第437図	第3号地下式壙実測図	60
第400図	第98号土坑実測図	25	第438図	第3号地下式壙出土遺物実測図	60
第401図	第100号土坑実測図	26	第439図	第1号不明遺構実測図	61
第402図	第102号土坑実測図	27	第440図	遺構外出土遺物実測・拓影図(1)	63
第403図	第102号土坑出土遺物実測・拓影図	27	第441図	遺構外出土遺物拓影図(2)	64
第404図	第104号土坑実測図	28			

第442図	遺構外出土遺物拓影図(3) ……………	65	第447図	縄文時代前期住居跡のタイプ別平面形 ……	73
第443図	遺構外出土遺物実測・拓影図(4) ……………	66	第448図	タイプ別陥し穴一覧 ……………	76
第444図	遺構外出土遺物実測図(5) ……………	68	第449図	南小割遺跡集落変遷図 ……………	81
第445図	遺構外出土遺物実測図(6) ……………	69	付 図	南小割遺跡遺構全体図	
第446図	遺構外出土遺物実測・拓影図(7) ……………	70			

権現堂遺跡

第450図	権現堂遺跡調査区 ……………	83	第463図	第23号土坑実測図 ……………	95
第451図	権現堂遺跡基本土層図 ……………	84	第464図	第23号土坑出土遺物実測図 ……………	95
第452図	調査C区トレンチ位置図 ……………	85	第465図	その他の土坑実測図(1) ……………	96
第453図	第1号古墳実測図, 第1号古墳墳丘土 ……	86	第466図	その他の土坑実測図(2) ……………	97
	層セクション図, 第1号古墳周溝・墓		第467図	その他の土坑実測図(3) ……………	98
	道土層セクション図, 第1号古墳石室		第468図	第1号井戸実測図 ……………	100
	・墓道断面図		第469図	第1号井戸出土遺物実測図 ……………	100
第454図	第1号古墳石室・掘り方平面図, 土層 ……	89	第470図	第2号溝出土遺物実測図 ……………	101
	セクション図		第471図	第1～4号溝土層セクション・断面図 ……	102
第455図	第1号古墳出土遺物拓影図 ……………	90	第472図	第5号溝土層セクション・断面図 ……………	103
第456図	第3号土坑実測図 ……………	90	第473図	調査A区遺構外出土遺物実測図 ……………	104
第457図	第4号土坑実測図 ……………	91	第474図	調査B区遺構外出土遺物実測・拓影図 ……	105
第458図	第4号土坑出土遺物実測図 ……………	91	第475図	調査C区遺構外出土遺物実測図(1) ……	107
第459図	第9号土坑実測図 ……………	91	第476図	調査C区遺構外出土遺物実測・拓影図(2) ……	108
第460図	第12号土坑実測図 ……………	92	第477図	権現堂遺跡遺構全体図(1) ……………	112
第461図	第12号土坑出土遺物実測図(1) ……………	93	第478図	権現堂遺跡遺構全体図(2) ……………	113
第462図	第12号土坑出土遺物実測・拓影図(2) ……	94			

親塚古墳

第479図	親塚古墳調査区 ……………	115	第485図	第1号火葬墓出土遺物実測図 ……………	121
第480図	親塚古墳基本土層図 ……………	115	第486図	第2号火葬墓実測図 ……………	121
第481図	第1号住居跡実測図 ……………	117	第487図	第2号火葬墓出土遺物実測図 ……………	122
第482図	第1号住居跡出土遺物実測図 ……………	118	第488図	その他の土坑実測図 ……………	124
第483図	第1号塚現況図・土層セクション図 ……	120	第489図	親塚古墳遺構全体図 ……………	125
第484図	第1号火葬墓実測図 ……………	120			

後原遺跡

第490図	後原遺跡調査区 ……………	127	第497図	その他の土坑実測図 ……………	131
第491図	後原遺跡基本土層図 ……………	128	第498図	第3・5・7号溝出土遺物実測図 ……………	135
第492図	第1号土坑実測図 ……………	129	第499図	第1～4号溝土層セクション・断面図 ……	136
第493図	第3号土坑実測図 ……………	129	第500図	第5～7号溝土層セクション・断面図 ……	137
第494図	第4号土坑実測図 ……………	130	第501図	調査A区遺構外出土遺物実測図 ……………	137
第495図	第5号土坑実測図 ……………	130	第502図	後原遺跡遺構全体図 ……………	138
第496図	第6号土坑実測図 ……………	131			

目 次

— 上 卷 —

南小割遺跡

表 1 南小割遺跡周辺遺跡一覽表 ……………	7	表 2 南小割遺跡堅穴住居跡一覽表 ……………	397
------------------------	---	-------------------------	-----

— 下 卷 —

表 3 南小割遺跡土坑一覽表 ……………	46	表 4 陥し穴一覽表 ……………	77
----------------------	----	------------------	----

権現堂遺跡

表 5 権現堂遺跡土坑一覽表 ……………	99
----------------------	----

後原遺跡

表 7 後原遺跡土坑一覽表 ……………	139
---------------------	-----

親塚古墳

表 6 親塚古墳土坑一覽表 ……………	124
---------------------	-----

写 真 図 版 目 次

南小割遺跡

P L 1 遺跡遠景（西方から望む），遺跡全景	遺物出土状況，第33号住居跡，第35号住居跡， 第35号住居跡炉内遺物出土状況
P L 2 調査前風景，遺跡確認状況（中央部），遺構 確認状況（西部），完掘全景(1)~(4)	P L 7 第35号住居跡遺物出土状況，第37号住居跡・ 第32・35号土坑，第37号住居跡竈内遺物出土 状況，第38号住居跡，第39号住居跡，第39号 住居跡貯藏穴内遺物出土状況，第40号住居跡， 第40号住居跡貯藏穴内遺物出土状況
P L 3 第3-A号住居跡，第3-A号住居跡遺物出土 状況，第3-B号住居跡，第4号住居跡，第 5号住居跡，第6号住居跡，第8号住居跡・ 第3号土坑遺物出土状況，第10号住居跡	P L 8 第41号住居跡，第42号住居跡，第42号住居跡 遺物出土状況，第43号住居跡，第44号住居跡， 第46号住居跡，第47号住居跡，第47号住居跡 遺物出土状況
P L 4 第11号住居跡，第13号住居跡，第13号住居跡 貯藏穴内遺物出土状況，第14号住居跡，第14 号住居跡貯藏穴内遺物出土状況，第15号住居 跡，第16号住居跡，第16号住居跡遺物出土状況	P L 9 第49号住居跡，第50号住居跡，第50号住居跡 遺物出土状況，第60号住居跡貯藏穴内遺物出 土状況，第52号住居跡，第54号住居跡遺物出 土状況(1)，第54号住居跡遺物出土状況(2)，第 58号住居跡
P L 5 第17号住居跡，第17号住居跡遺物出土状況， 第18号住居跡，第19号住居跡，第21号住居跡， 第21号住居跡貯藏穴内遺物出土状況，第22号 住居跡，第24号住居跡	P L 10 第58号住居跡遺物出土状況，第59号住居跡，
P L 6 第26号住居跡，第26号住居跡遺物出土状況， 第27号住居跡，第32号住居跡，第32号住居跡	

- 第59号住居跡遺物出土狀況, 第60号住居跡遺物出土狀況, 第60号住居跡
- P L 11 第61号住居跡, 第62号住居跡, 第62号住居跡遺物出土狀況, 第63号住居跡, 第64号住居跡, 第64号住居跡遺物出土狀況(1), 第64号住居跡遺物出土狀況(2), 第66・67号住居跡
- P L 12 第68号住居跡, 第69号住居跡遺物出土狀況, 第71号住居跡, 第71号住居跡竈内遺物出土狀況, 第72号住居跡, 第72号住居跡遺物出土狀況(1), 第72号住居跡遺物出土狀況(2), 第72号住居跡炉内遺物出土狀況
- P L 13 第73号住居跡, 第73号住居跡遺物出土狀況, 第76号住居跡, 第76号住居跡竈内遺物出土狀況, 第77号住居跡, 第78号住居跡, 第79号住居跡, 第79号住居跡遺物出土狀況
- P L 14 第80・81号住居跡, 第82号住居跡, 第82号住居跡遺物出土狀況, 第82号住居跡竈内遺物出土狀況, 第83号住居跡, 第83号住居跡遺物出土狀況(1), 第83号住居跡遺物出土狀況(2), 第84号住居跡
- P L 15 第84号住居跡炉内遺物出土狀況, 第85号住居跡, 第85号住居跡遺物出土狀況, 第86号住居跡, 第87号住居跡, 第89号住居跡, 第89号住居跡遺物出土狀況(1), 第89号住居跡遺物出土狀況(2)
- P L 16 第88号住居跡遺物出土狀況(1), 第88号住居跡遺物出土狀況(2), 第88号住居跡貯藏穴1内第一次遺物出土狀況, 第88号住居跡貯藏穴1内第二次遺物出土狀況, 第88号住居跡P₃内遺物出土狀況, 第88号住居跡
- P L 17 第90・91号住居跡, 第90号住居跡遺物出土狀況, 第90号住居跡貯藏穴1内遺物出土狀況, 第93号住居跡, 第93号住居跡遺物出土狀況, 第94号住居跡, 第94・95号住居跡遺物出土狀況, 第95号住居跡
- P L 18 第96号住居跡, 第96号住居跡遺物出土狀況, 第97号住居跡, 第98号住居跡, 第99号住居跡, 第100号住居跡, 第100号住居跡遺物出土狀況,
- 第101号住居跡
- P L 19 第101号住居跡遺物出土狀況, 第102号住居跡, 第103号住居跡, 第103号住居跡遺物出土狀況, 第104号住居跡, 第104号住居跡遺物出土狀況, 第105号住居跡, 第106号住居跡
- P L 20 第107号住居跡, 第108号住居跡, 第108号住居跡遺物出土狀況, 第109号住居跡遺物出土狀況, 第109号住居跡貯藏穴内遺物出土狀況, 第112号住居跡, 第113号住居跡, 第114・115号住居跡
- P L 21 第116号住居跡, 第117号住居跡, 第117号住居跡遺物出土狀況, 第118号住居跡, 第119号住居跡, 第119号住居跡遺物出土狀況, 第120号住居跡, 第120号住居跡遺物出土狀況
- P L 22 第120号住居跡貯藏穴内遺物出土狀況, 第121-B号住居跡, 第121-B号住居跡遺物出土狀況, 第122号住居跡, 第122号住居跡炉, 第122号住居跡遺物出土狀況, 第123号住居跡, 第123号住居跡遺物出土狀況
- P L 23 第123号住居跡貯藏穴内遺物出土狀況, 第124号住居跡, 第125号住居跡, 第126号住居跡, 第127号住居跡, 第128号住居跡, 第128号住居跡遺物出土狀況, 第129号住居跡
- P L 24 第130号住居跡, 第131号住居跡, 第131号住居跡遺物出土狀況, 第132号住居跡, 第133号住居跡, 第134号住居跡, 第135号住居跡, 第135号住居跡遺物出土狀況
- P L 25 第136号住居跡, 第137号住居跡, 第137号住居跡炉内遺物出土狀況, 第138号住居跡, 第139号住居跡, 第139号住居跡遺物出土狀況, 第140号住居跡・第66号土坑, 第140号住居跡遺物出土狀況
- P L 26 第141号住居跡, 第141号住居跡遺物出土狀況, 第142号住居跡, 第142号住居跡遺物出土狀況(1), 第142号住居跡遺物出土狀況(2), 第143号住居跡, 第143号住居跡遺物出土狀況, 第146号住居跡
- P L 27 第146号住居跡遺物出土狀況, 第147号住居跡,

- 第148号住居跡, 第149号住居跡, 第150号住居跡, 第151号住居跡遺物出土狀況, 第152号住居跡, 第152号住居跡遺物出土狀況
- P L 28 第155号住居跡, 第155号住居跡遺物出土狀況, 第156号住居跡, 第156号住居跡遺物出土狀況, 第157号住居跡, 第158号住居跡, 第158号住居跡遺物出土狀況, 第159号住居跡
- P L 29 第160号住居跡, 第162号住居跡, 第162号住居跡遺物出土狀況, 第163号住居跡, 第166号住居跡, 第166号住居跡炉, 第167号住居跡, 第169号住居跡
- P L 30 第169号住居跡遺物出土狀況, 第169号住居跡炉, 第170号住居跡, 第171号住居跡, 第173・174号住居跡, 第173・174号住居跡遺物出土狀況, 第175号住居跡, 第175号住居跡遺物出土狀況
- P L 31 第176号住居跡遺物出土狀況, 第177号住居跡, 第178号住居跡, 第178号住居跡遺物出土狀況, 第180号住居跡, 第180号住居跡遺物出土狀況, 第181号住居跡遺物出土狀況, 第182号住居跡
- P L 32 第182号住居跡遺物出土狀況, 第183号住居跡, 第184号住居跡, 第186号住居跡, 第187号住居跡, 第188号住居跡, 第188号住居跡貯藏穴内遺物出土狀況, 第189号住居跡遺物出土狀況
- P L 33 第4号土坑遺物出土狀況, 第10号土坑, 第25号土坑遺物出土狀況, 第28号土坑, 第30号土坑, 第37号土坑, 第46号土坑遺物出土狀況, 第47号土坑遺物出土狀況
- P L 34 第62号土坑, 第73号土坑, 第78号土坑, 第79号土坑, 第85号土坑遺物出土狀況, 第86号土坑遺物出土狀況, 第97号土坑, 第98号土坑
- P L 35 第99号土坑, 第100号土坑, 第103号土坑, 第104号土坑, 第108号土坑遺物出土狀況, 第111号土坑, 第114号土坑, 第115号土坑
- P L 36 第118号土坑, 第119号土坑, 第122号土坑, 第126号土坑, 第127号土坑, 第131号土坑遺物出土狀況, 第132号土坑遺物出土狀況, 第135号土坑
- P L 37 第137号土坑, 第3号土坑, 第1号地点貝塚土層断面, 第2号地点貝塚確認狀況, 第3号地点貝塚, 第4号地点貝塚土層断面, 第1号不明遺構, 第1号掘立柱建物跡
- P L 38 第2号掘立柱建物跡, 第2号掘立柱建物跡P₃, 第2号掘立柱建物跡P₆, 第3号掘立柱建物跡, 第3号掘立柱建物跡P₁内遺物出土狀況, 第3号掘立柱建物跡P₂内遺物出土狀況, 第4号掘立柱建物跡, 第5号掘立柱建物跡
- P L 39 第1号方形周溝墓, 第1・2号地下式墳, 第3号地下式墳, 第3号溝
- P L 40 第1~3-A・7・8号住居跡出土土器
- P L 41 第10・12~17・21号住居跡出土土器
- P L 42 第16・17・20~22・24号住居跡出土土器
- P L 43 第22・24~27・29号住居跡出土土器
- P L 44 第27・31・35・37・38号住居跡出土土器
- P L 45 第35・37~40号住居跡出土土器
- P L 46 第42~44・46・47・49号住居跡出土土器
- P L 47 第47・50・52~54号住居跡出土土器
- P L 48 第54・55・58号住居跡出土土器
- P L 49 第59・60号住居跡出土土器
- P L 50 第60・62号住居跡出土土器
- P L 51 第61~64号住居跡出土土器
- P L 52 第64号住居跡出土土器
- P L 53 第64・67・69・71・72号住居跡出土土器
- P L 54 第72号住居跡出土土器
- P L 55 第72号住居跡出土土器
- P L 56 第73・75号住居跡出土土器
- P L 57 第75・76号住居跡出土土器
- P L 58 第76~80号住居跡出土土器
- P L 59 第80・81号住居跡出土土器
- P L 60 第80~82号住居跡出土土器
- P L 61 第82・83号住居跡出土土器
- P L 62 第82~85号住居跡出土土器
- P L 63 第83~85・87・88号住居跡出土土器
- P L 64 第88号住居跡出土土器
- P L 65 第88号住居跡出土土器
- P L 66 第88・89号住居跡出土土器

- P L 67 第89・90号住居跡出土土器
- P L 68 第90・92号住居跡出土土器
- P L 69 第90・92・93・95号住居跡出土土器
- P L 70 第96・98・99号住居跡出土土器
- P L 71 第98・99・103号住居跡出土土器
- P L 72 第103・104・106号住居跡出土土器
- P L 73 第105・106・108号住居跡出土土器
- P L 74 第108～110・113・114号住居跡出土土器
- P L 75 第114・117号住居跡出土土器
- P L 76 第113～115・117・119号住居跡出土土器
- P L 77 第119・120号住居跡出土土器
- P L 78 第120～122号住居跡出土土器
- P L 79 第121-B～124号住居跡出土土器
- P L 80 第124・125・127・129～131号住居跡出土土器
- P L 81 第130・131・135号住居跡出土土器
- P L 82 第135・136号住居跡出土土器
- P L 83 第135・136号住居跡出土土器
- P L 84 第136・139号住居跡出土土器
- P L 85 第139・140・142・143号住居跡出土土器
- P L 86 第143・146・147号住居跡出土土器
- P L 87 第146・148・154・155・156・158号住居跡出土土器
- P L 88 第156～159・162号住居跡出土土器
- P L 89 第163・169・170・172・173号住居跡出土土器
- P L 90 第173～176号住居跡出土土器
- P L 91 第176～178・180号住居跡出土土器
- P L 92 第181～183・185・186号住居跡出土土器
- P L 93 第185～187・189号住居跡，第3号掘立柱建物跡，第1号方形周溝墓出土土器
- P L 94 第1号方形周溝墓，第5・25・37・43・46号土坑出土土器
- P L 95 第47号土坑・第2号地下式壙出土土器
- P L 96 第47号土坑出土土器，遺構外出土土器，第178号住居跡出土土製品
- P L 97 第60・72号住居跡出土土器
- P L 98 第14・27・43・50・54・59・64・108・118・172・191号住居跡，第47号土坑，遺構外出土土製品
- P L 99 第16・81・83・86・88・89・94・96・108・113・115・121-B・124・131・136・139・143・148・157・178号住居跡出土土製品
- P L 100 第3-A・5・10・13～15・18・27・62・86・173号住居跡，遺構外出土土製品
- P L 101 第123号住居跡出土土製品，第12・14・16・21・55・67・163・171・176号住居跡出土土製品
- P L 102 第78・88・122・157・166・171・178号住居跡出土土製品，遺構外出土土製品
- P L 103 第106・131・149・163号住居跡，遺構外出土土製品
- P L 104 第178・186号住居跡，第61・73・102・107・127号土坑，遺構外出土土製品
- P L 105 第100・101・103・106・108・109・123・124・126～128号住居跡，遺構外出土土製品
- P L 106 第83・141号住居跡出土土製品，第129号住居跡出土土製品，第3・4地点貝塚出土土製品，第2号地点貝塚出土土製品，遺構外出土土器・古銭・鉄製品
- P L 107 第1～3号地点貝塚出土土製品，第121-A号住居跡出土鉄滓
- P L 108 第25・79号住居跡出土土器片
- P L 109 第79・100号住居跡出土土器片
- P L 110 第101・126号住居跡出土土器片
- P L 111 第127・128号住居跡出土土器片
- P L 112 第129号住居跡出土土器片
- P L 113 第141・150・152号住居跡出土土器片
- P L 114 第160・161・163号住居跡出土土器片
- P L 115 第36・51・73号土坑出土土器片
- P L 116 第74・88号土坑出土土器片
- P L 117 遺構外出土土器片(1)
- P L 118 遺構外出土土器片(2)
- P L 119 遺構外出土土器片(3)
- P L 120 遺構外出土土器片(4)
- P L 121 遺構外，第2・4号地点貝塚出土土器片，土製炉石，貝
- P L 122 第88号住居跡出土土器，小波状口縁を有する

土器群

権現堂遺跡

- P L 123 試掘全景（調査B区），完掘全景（調査A区），遺構確認状況（調査A区），遺構確認状況（調査C区），第12号土坑，第12号土坑遺物出土状況，第15号土坑，第19号土坑遺物出土状況
- P L 124 第1号古墳，第1号古墳確認状況，第1号古墳土層断面，第1号古墳主体部土層断面，第1号古墳石室
- P L 125 第1号古墳裏込め部土層断面(1)，第1号古墳裏込め部土層断面(2)，第1号古墳石材片出土状況，第1号古墳主体部全景，第3号溝，第4号溝，第1号井戸，遺構外遺物出土状況（蔵骨器）
- P L 126 第12号土坑，遺構外出土土器
- P L 127 遺構外出土土器
- P L 128 第2号溝，第1号井戸，第1号古墳，第12号土坑，遺構外出土土器・石器・古銭
- P L 129 遺構外出土土器片

親塚古墳

- P L 130 調査前全景，遺構確認状況(1)，遺構確認状況(2)，完掘全景，第1号塚土層断面，第1号住居跡，第1号住居跡遺物出土状況(1)，第1号住居跡遺物出土状況(2)
- P L 131 第1号火葬墓確認状況，第1号火葬墓土層断面，第1号火葬墓遺物出土状況，第1号火葬墓，第2号火葬墓確認状況，第2号火葬墓土層断面，第1号土坑，第2号土坑

後原遺跡

- P L 132 遺構確認状況（調査A区），遺構確認状況（調査B区），完掘全景（調査A区），第1号溝，第3号溝，第3号溝遺物出土状況(1)，第3号溝遺物出土状況(2)，第4号溝
- P L 133 第5号溝，第1号土坑，第3号土坑，第4号土坑，第6号土坑，第7号土坑，遺構外遺物出土状況
- P L 134 第1号住居跡，第1・2号火葬墓，遺構外出土土器（親塚古墳），第3・5・7号溝，遺構外出土土器（後原遺跡）

2 掘立柱建物跡

今回の調査では、当遺跡から5棟の掘立柱建物跡を検出した。いずれも、調査エリア中央部から南部にかけて位置しており、北部からは検出されていない。また、長軸方向や規模等に統一性は見出せない。以下、その特徴について記載する。

第1号掘立柱建物跡（第365図）

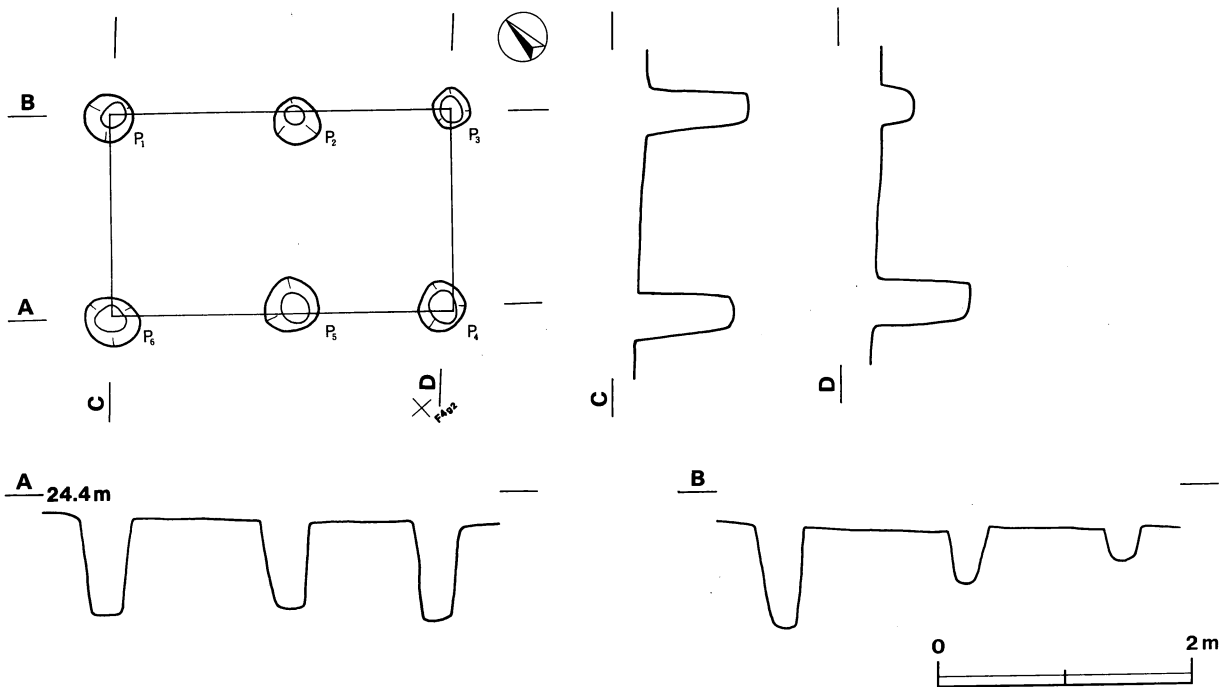
位置 調査区南部，E4j₂区。

長軸方向 N-45°-W

規模 東西2間（約2.70m），南北1間（約1.50m）の建物で，柱間寸法は桁行1.50～1.60m，梁行1.20～1.50mである。柱穴の掘り方は，平面形が軸長30～44cmの隅丸方形で，深さは26～88cmである。柱痕は，上面で確認できなかったが，P₁・P₂の底面に柱を立てたと思われる硬化面が確認されている。

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物がなく，時期や性格については不明である。



第365図 第1号掘立柱建物跡実測図

第2号掘立柱建物跡（第366図）

位置 調査区西部，D2c₈区。

重複関係 本跡は，P₄が第140号住居跡の床面中央部を掘り込んでいるので，本跡が新しい。

長軸方向 N-67°-E

規模 東西2間（約5.00m），南北1間（約3.80m）の建物で，柱間寸法は桁行3.80m，梁行2.50mである。

柱穴の掘り方は，平面形が軸長60～70cmの隅丸方形で，深さは57～66cmである。柱痕は，上面で確認できなかったが，いずれの底面にも柱を立てたと思われる硬化面があり，特に，P₃・P₅・P₆の底面には，径20cm程で，円形の一段低い硬化面が確認されている。

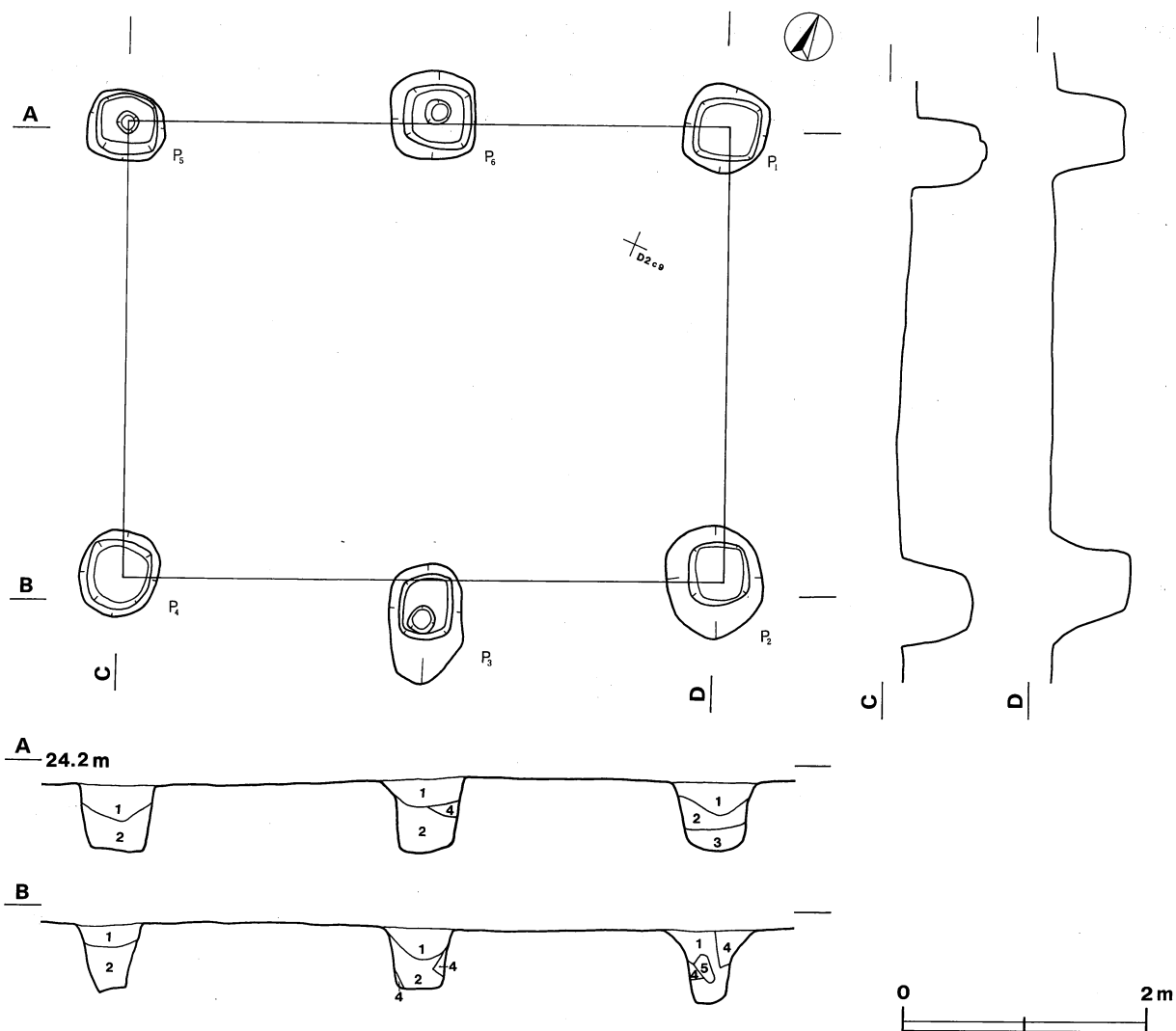
覆土 5層からなる自然堆積である。第1～3層はしまりが弱く、第4・5層はよくしまっている。

土層解説

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量 | 5 黒褐色 ローム粒子多量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量 | |

遺物 柱穴の覆土中から、流れ込みと思われる土師器片(埴, 甕)7点が、出土している。

所見 本跡の時期を判断できる遺物がなく、詳細については不明であるが、柱穴の覆土中の遺物から古墳時代以降の建物跡と思われる。



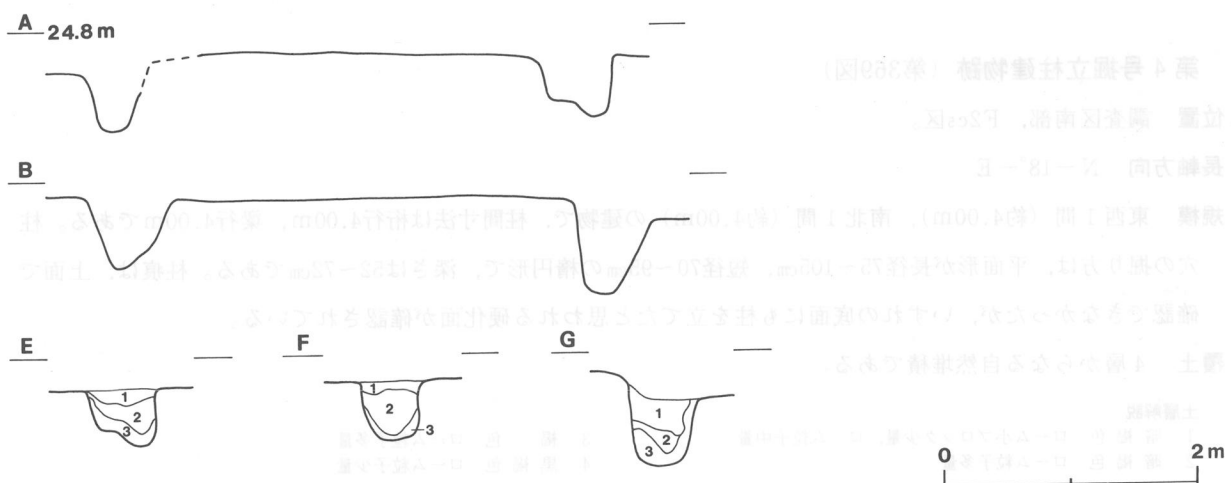
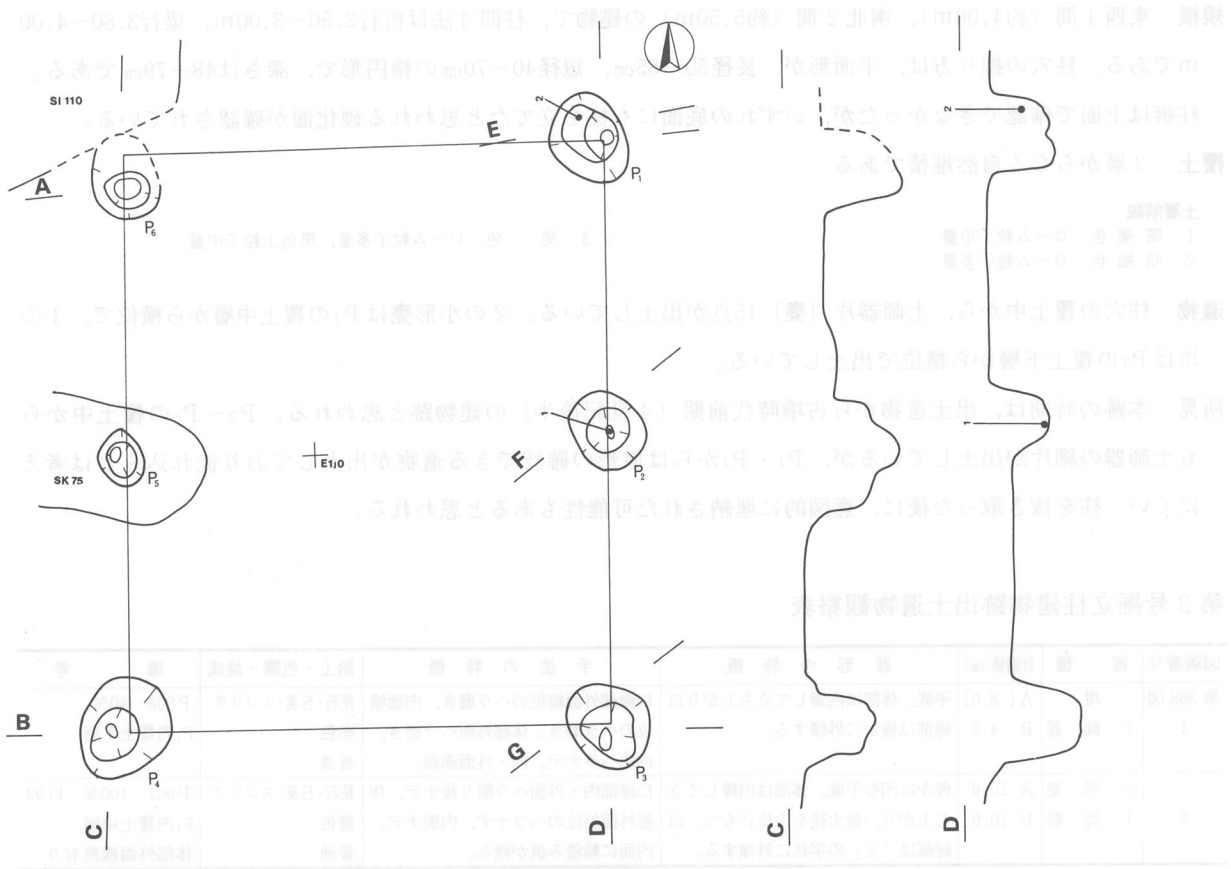
第366図 第2号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡 (第367図)

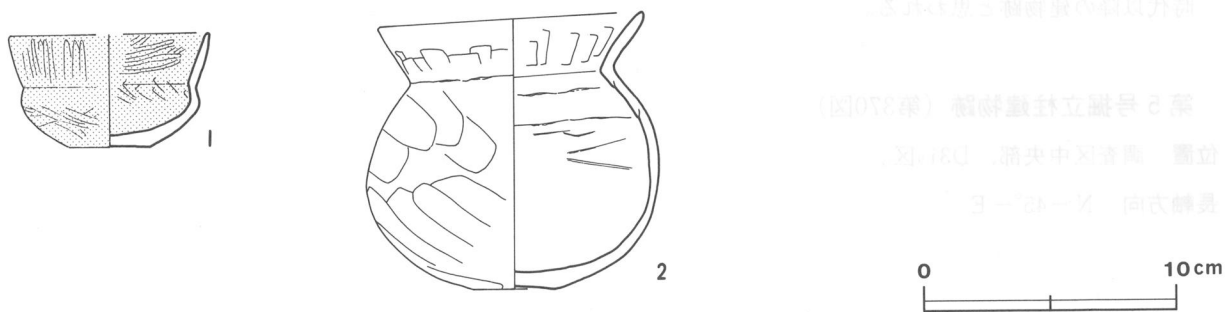
位置 調査区南西端部, Elio区。

重複関係 本跡は、P₂・P₃が第109号住居跡、P₅が第111号住居跡、P₆が第110号住居跡のそれぞれ床面を掘り込んでおり、何れよりも本跡が新しい。また、P₅は第75号土坑に掘り込まれている。

長軸方向 N-3°-E



第367図 第3号掘立柱建物跡実測図



第368図 第3号掘立柱建物跡出土遺物実測図

規模 東西1間(約4.00m)、南北2間(約5.50m)の建物で、柱間寸法は桁行2.50~3.00m、梁行3.80~4.00mである。柱穴の掘り方は、平面形が、長径50~85cm、短径40~70cmの楕円形で、深さは48~79cmである。柱痕は上面で確認できなかったが、いずれの底面にも柱を立てたとと思われる硬化面が確認されている。

覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量

- 3 褐色 ローム粒子多量, 黒色土粒子中量

遺物 柱穴の覆土中から、土師器片(甕)15点が出土している。2の小形甕はP₁の覆土中層から横位で、1の埴はP₂の覆土下層から横位で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期(4世紀後半)の建物跡と思われる。P₃~P₆の覆土中からも土師器の細片が出土しているが、P₁・P₂からは原形の確認できる遺物が出土しており流れ込みとは考えにくい。柱を抜き取った後に、意図的に埋納された可能性もあると思われる。

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第368図 1	埴 土師器	A [8.0]	平底。体部は内彎して立ち上がり口縁部は僅かに外傾する。	口縁部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のヘラ磨き。体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	長石・石英・スコリア 赤色 普通	P908 40% P ₂ 内覆土下層
		B 4.5				
2	小形甕 土師器	A 10.6	僅かに凹む平底。体部は内彎して立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外傾する。	口縁部内・外面ヘラ削り後ナデ。体部外面斜位のヘラナデ、内面ナデ。内面に輪積み痕が残る。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P907 100% PL93 P ₁ 内覆土中層 体部外面靱痕有り
		B 10.9				

第4号掘立柱建物跡(第369図)

位置 調査区南部, F2c5区。

長軸方向 N-18°-E

規模 東西1間(約4.00m)、南北1間(約4.00m)の建物で、柱間寸法は桁行4.00m、梁行4.00mである。柱穴の掘り方は、平面形が長径75~105cm、短径70~95cmの楕円形で、深さは52~72cmである。柱痕は、上面で確認できなかったが、いずれの底面にも柱を立てたとと思われる硬化面が確認されている。

覆土 4層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量

- 3 褐色 ローム粒子多量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量

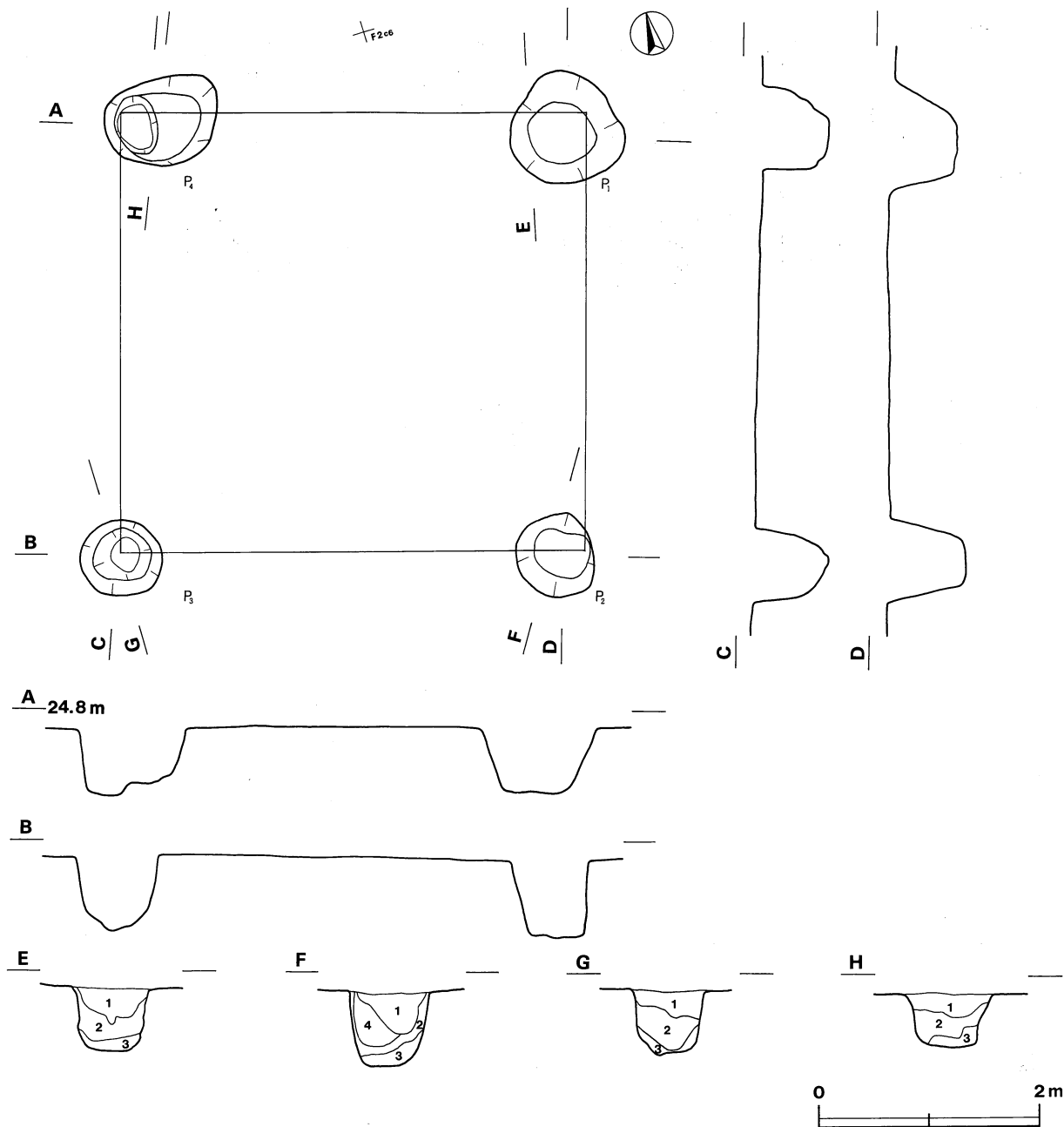
遺物 柱穴の覆土中から、流れ込みと思われる土師器片(甕)39点が出土している。

所見 本跡の時期を判断できる出土遺物がなく、詳細については不明であるが、柱穴の覆土中の遺物から古墳時代以降の建物跡と思われる。

第5号掘立柱建物跡(第370図)

位置 調査区中央部, D3i9区。

長軸方向 N-45°-E



第369図 第4号掘立柱建物跡実測図

規模 東西2間(約4.50m)、南北1間(約4.20m)の建物で、柱間寸法は桁行2.20~2.30m、梁行4.20mである。柱穴の掘り方は、平面形が長径60~75cm、短径55~65cmの楕円形、または、長軸65~70cm、短軸50~55cmの隅丸方形で、深さは52~71cmである。柱痕は、上面で確認できなかったが、いずれの底面にも柱を立てたと思われる硬化面が確認されている。

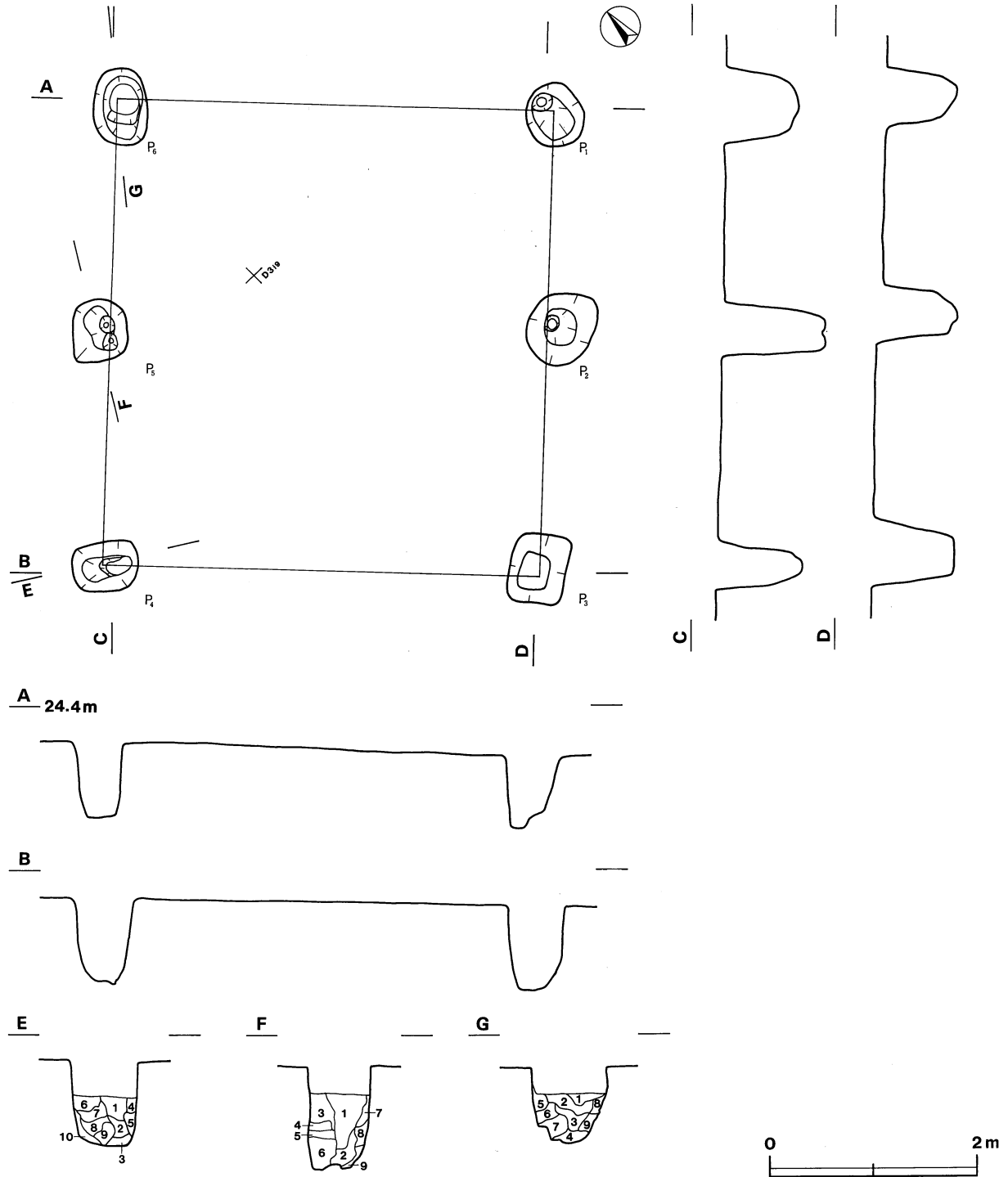
覆土 9~10層の自然堆積である。いずれの柱穴の覆土にも、柱痕と考えられる層(P₄-1~3, P₅-1・2, P₆-1~3)が確認されている。また、P₅の第4・5層及びP₆の第4・6・7層は、硬く締まっており版築されていたと思われる。

P₁土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|--------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム大ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子少量 | 6 黒色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子多量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子少量 | 7 黒褐色 | ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム大ブロック微量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム小ブロック微量, 炭化粒子少量 |
| 4 黒色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子中量 | 9 黒褐色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子少量 |
| 5 黒色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子中量 | 10 暗褐色 | ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量 |

P₂土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 | 9 黒色 | ローム小ブロック微量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム中ブロック少量, ローム粒子少量, 炭化粒子少量 | | |



第370図 第5号掘立柱建物跡実測図

P.土層解説

- | | | | |
|-------|------------|-------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量 | 6 灰褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 明褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 8 黄橙色 | ローム大ブロック中量 |
| 4 橙色 | ローム小ブロック少量 | 9 橙色 | ローム大ブロック中量 |
| 5 褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物 柱穴の覆土中から、土師器片(甕)4点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代以降の建物跡と思われる。

3 方形周溝墓

当遺跡からは、調査区北東端部に当たる河岸段丘の高台(標高28m程)から方形周溝墓1基を検出した。以下、方形周溝墓の特徴及び出土遺物について記載する。

第1号方形周溝墓(第371図)

位置 調査区北東端部, B5f3区。

規模と平面形 規模は南北方向外径17.10m, 内径13.20m, 東西方向外径17.20m, 内径13.60mで、平面形は「口」の字状の隅丸方形である。耕作により、方台部及び周溝の一部は削平されている。

方位 南北方向はN-41°-Eで東に傾いている。

周溝・壁 南西溝及び北西溝の一部に道路がかかるため確認できなかった所があるが、四角形に周回している。

周溝の幅は一定しておらず、上幅の最も広い部分で2.10m, 狭い部分で1.20mである。深さは30~70cmで、東コーナー部が1番浅い。底面はほぼ平坦であるが、僅かに緩やかに落ち込む部分が4カ所認められる。これは、意図的に掘られたとは考えられず、周溝の掘り込み作業時に下げてしまったものと思われる。本跡が構築されている場所は、南西方向に緩やかに下る斜面部であり、その自然地形同様に周溝の底面が傾斜している。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方に違いは認められず、どちらも緩やかに傾斜して立ち上がる。

覆土 周溝内の覆土は4~8層に分けられる。自然堆積と思われ、最下層には壁が崩れてできたと考えられるロームブロックが含まれている。

土層解説

E-E'

- | | | | |
|--------|----------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム中・大ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量 | | |

F-F'

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量, 炭化粒子中量 | 5 黒褐色 | ローム小ブロック微量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 6 褐色 | ローム小・大ブロック少量, ローム粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 | | |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック微量, ローム粒子中量, 焼土粒子微量, 炭化粒子少量 | | |

G-G'

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック微量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム小ブロック中量, ローム粒子多量, 炭化粒子微量 |

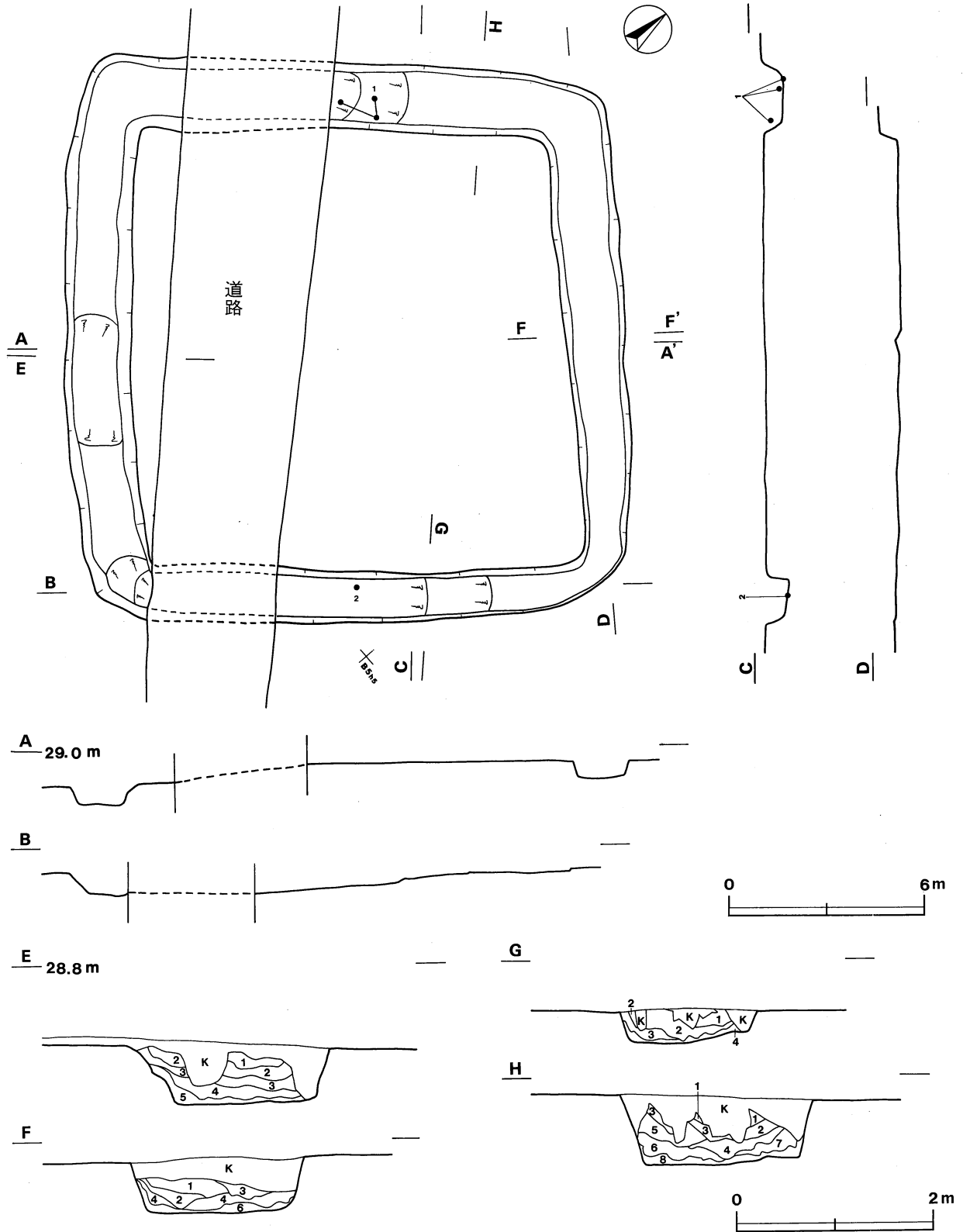
H-H'

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子中量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック微量, ローム粒子中量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子中量 | 8 褐色 | ローム小~大ブロック中量, ローム粒子多量, 炭化粒子微量 |

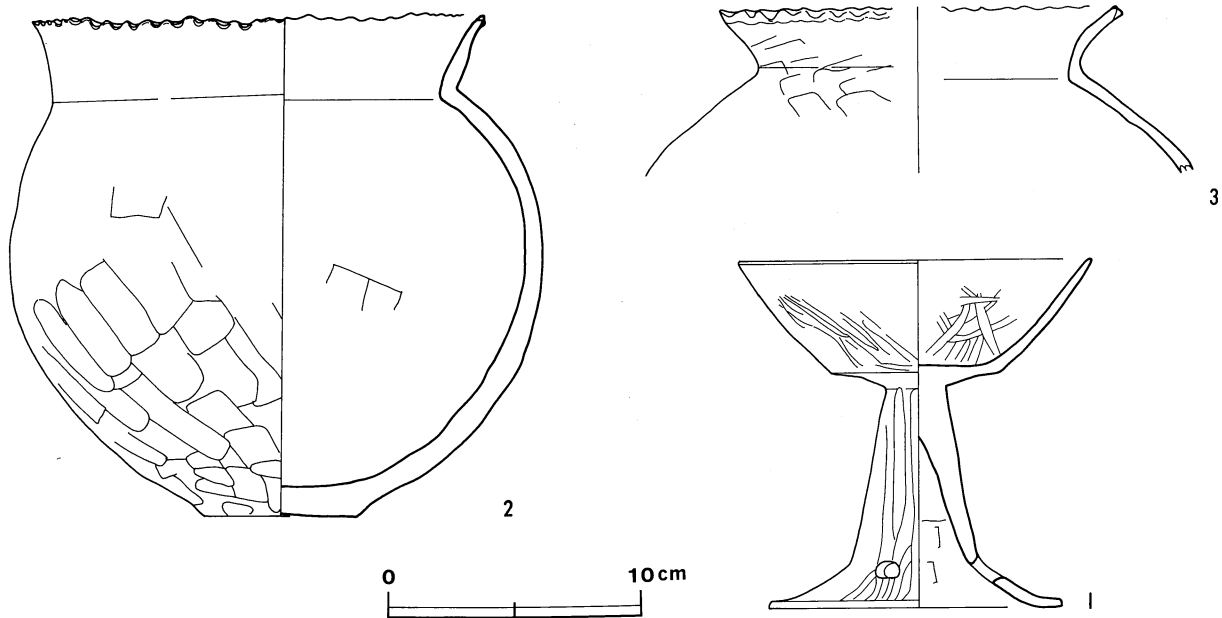
遺物 周溝の覆土中から、土師器片（高杯，埴，甕，壺）10点，及び握りこぶし大の礫3個が出土している。

第372図2の甕は南東溝の底面から出土している。1の高杯は北西溝の覆土下層から，3の甕は覆土中からどちらも破片で出土している。

所見 主体部は確認できなかったが，本跡の時期は，出土遺物等から古墳時代前期（4世紀前半）と思われる。



第371図 第1号方形周溝墓実測図



第372図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図

第1号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第372図 1	高土師器	A 14.0 B 13.7 D 11.6 E 8.8	脚部はラッパ状に開く。坏部は内彎気味に立ち上がり、下位に稜をもつ。脚部と裾部の境に3孔を穿つ。	坏部内・外面ヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P909 70% PL93 北西溝覆土下層
2	甕土師器	A 17.8 B 19.8 C 6.1	平底。体部は球状で、最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外傾する。波状口縁。	口縁部内・外面ナデ。体部外面上位から中位ヘラナデ、下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。	長石・石英・スコリア 浅黄橙色 普通	P910 90% PL94 南東溝底面 二次焼成
3	甕土師器	A [15.9] B (6.5)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は「く」の字状に外反する。波状口縁。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P911 10% 覆土中 口縁部外面煤付着

4 土坑

当遺跡からは、138基の土坑を検出した。ここでは、土坑の形状、規模、覆土の状態及び出土遺物等に特徴があるものについて記載し、それ以外の土坑については一覧表に記載した。

第3号土坑（第373図）

位置 調査区南部，G4a1区。

重複関係 本跡の北部が、第8号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸5.96m，短軸2.24mの長方形で、深さは34cmである。

長径方向 N-90°-W

壁面 なだらかに立ち上がっている。

底面 平坦であり、部分的に踏み固められている。長軸線上の西部にピット(P1)を確認した。径25cm程の円形で、深さは75cmである。

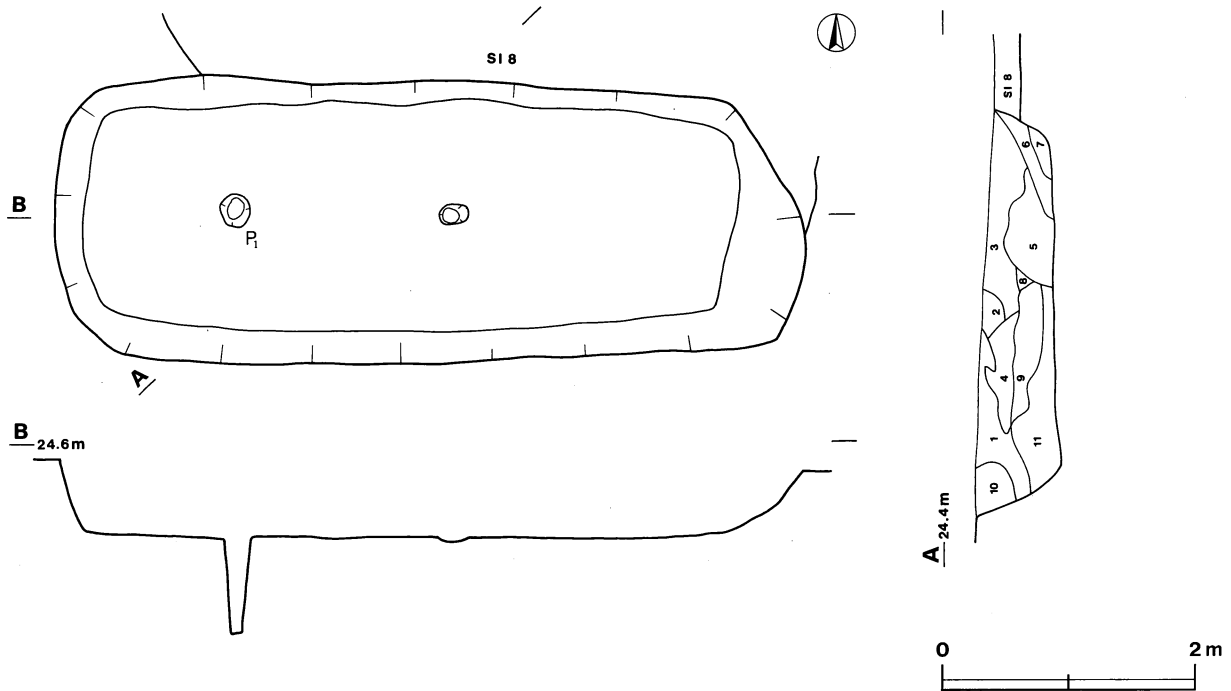
覆土 11層からなる人為堆積である。各層中にローム中ブロック及び粘土ブロックが混入している。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭化物少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭化物少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・炭化物少量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・炭化物中量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭化物・粘土小ブロック少量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 7 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子・炭化物少量
- 8 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック少量, 炭化物少量
- 9 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, 炭化物中量, 焼土粒子少量
- 10 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 11 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量, 炭化粒子・炭化物・焼土粒子少量

遺物 覆土中から流れ込みと思われる土師器片69点, 陶器片2点が出土している。いずれも細片であり実測不可能である。また, 覆土下層から底面にかけて炭化材, 灰, 焼土塊及び石等が出土している。

所見 本跡は, 重複関係から第8号住居跡(古墳時代前期)より新しい時期のものである。形態から小竪穴遺構と思われるが, 詳細な時期や性格については不明である。



第373図 第3号土坑実測図

第4号土坑 (第374図)

位置 調査区南東部, F4f4区。

規模と平面形 長径1.66m, 短径1.58mのほぼ円形で, 深さは38cmである。

長径方向 N-34°-E

壁面 垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。

覆土 10層からなる人為堆積である。各層中にローム小・中ブロックが含まれ, 特に上層は多量である。

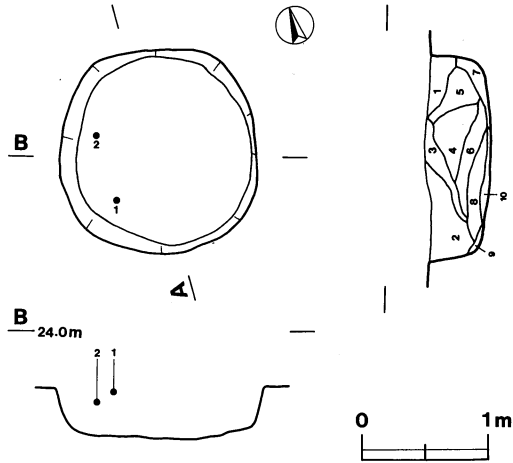
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, 焼土中ブロック・炭化材少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量

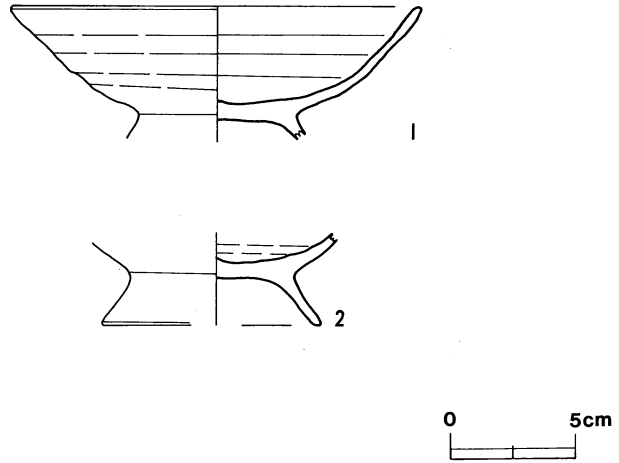
- 5 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量
- 8 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量
- 10 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック少量

遺物 覆土中から土師器片58点が出土している。1と2の高台付坏が覆土上層から破片で出土している。

所見 本跡は、遺物から平安時代（10世紀）の円筒土坑と思われる。



第374図 第4号土坑実測図



第375図 第4号土坑出土遺物実測図

第4号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第375図 1	高台付坏 土師器	A 16.3 B (5.4) E (1.1)	高台端部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。高台部貼り付け後ナデ。	長石・石英・スコリアにぶい 橙色 普通	P 890 60% 覆土上層
2	高台付坏 土師器	B (3.7) D (8.7) E 2.1	体部欠損。「ハ」の字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。高台部貼り付け後ナデ。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P 891 30% 覆土上層

第5号土坑（第376図）

位置 調査区南端部, G4c2区。

重複関係 本跡の北東部が、第7号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.72m, 短径1.60mの円形で、深さは40cmである。

長径方向 N-74°-E

壁面 垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。

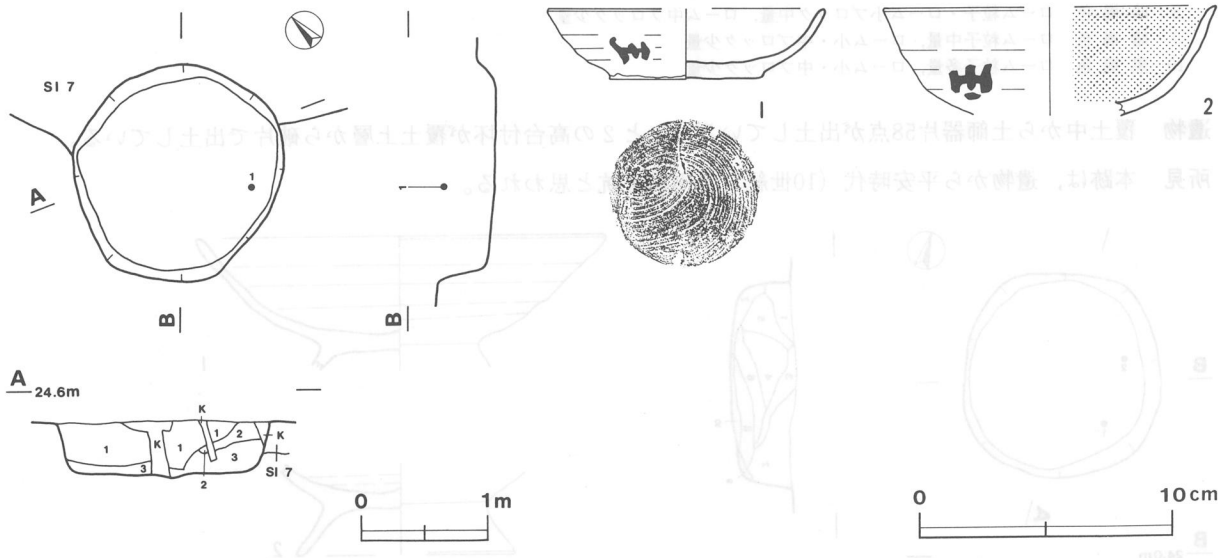
覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量

遺物 覆土中から土師器片27点が出土している。1と2の墨書の皿（体部外面に1が「王」、2が「玉」の文字）が覆土下層から出土している。

所見 本跡は、遺物から平安時代（10世紀）の円筒土坑と思われる。



第376図 第5号土坑実測図

第377図 第5号土坑出土遺物実測図

第5号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第377図 1	皿 土師器	A [11.0] B 2.8 C 6.1	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。体部外面に「王」の字の墨書有り。	長石・石英・スコリア・針状鉱物 橙色 普通	P 892 70% PL94 覆土下層
2	皿 土師器	A [13.2] B (4.3)	体部片。体部は内彎し、口縁部で僅かに外反する。	体部外面ロクロナデ、内面横位のヘラ磨き。体部外面に「玉」の字の墨書有り。内面黒色処理。	長石・石英・スコリア・針状鉱物 にぶい赤褐色 普通	P 893 20% PL94 覆土中

第9号土坑（第378図）

位置 調査区南東部，F4f5区。

重複関係 本跡は、北部を第2号地下式壇に掘り込まれている。また、本跡は、第13号住居跡の西部を掘り込んでいる。従って、本跡は、第2号地下式壇より古く第13号住居跡より新しい。

規模と平面形 長径[1.62]m，短径1.46mのほぼ円形で、深さは42cmである。

長径方向 N-10°-E

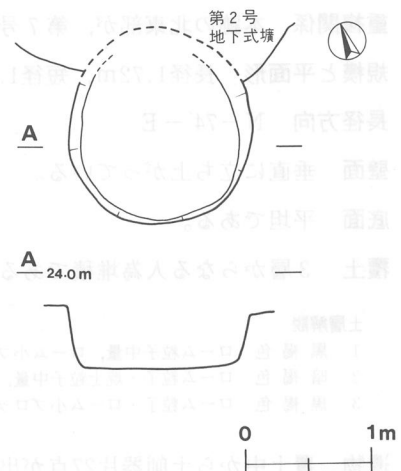
壁面 垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる人為堆積と思われるが、重複のため堆積状況は部分的な確認である。

遺物 覆土中から土師器片42点が出土している。いずれも細片で実測不可能である。

所見 本跡は、遺物から平安時代（10世紀）の円筒土坑と思われる。



第378図 第9号土坑実測図

第10号土坑（第379図）

位置 調査区南東部，F4f4区。

重複関係 本跡は，北東部を第8号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長径2.90m，短径1.46mの楕円形で，深さは2.10mである。

長径方向 N-20°-W

壁面 垂直で部分的にオーバーハングして立ち上がる。

底面 平坦である。

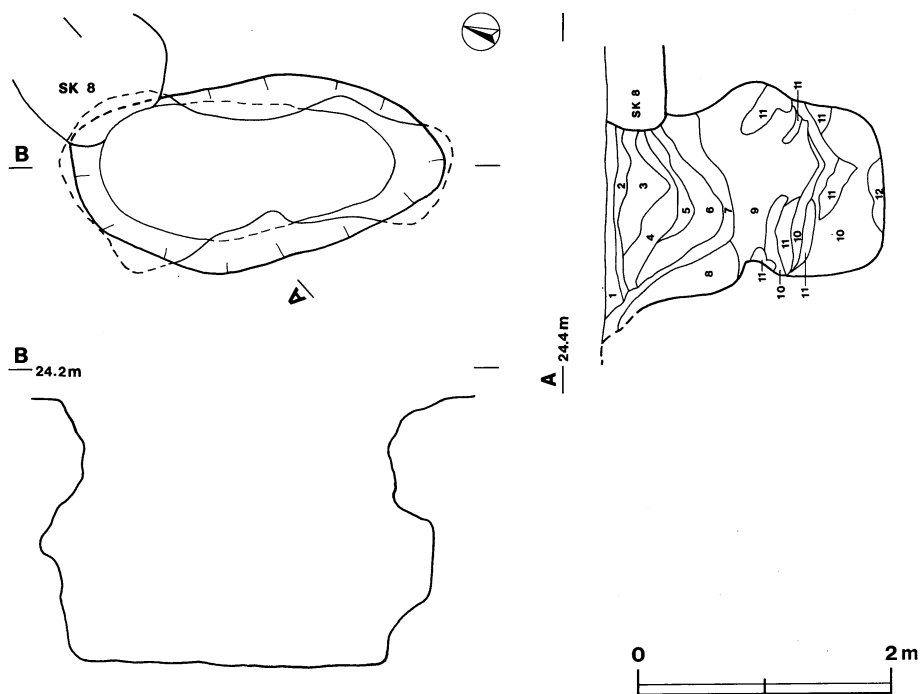
覆土 12層からなる人為堆積である。特に上層は，ローム大ブロックを下・中層に比べ多く含んでいる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・ローム小・大ブロック中量，炭化粒子少量	7 褐色	ローム粒子多量，焼土粒子少量
2 暗褐色	ローム大ブロック少量	8 褐色	ローム粒子多量
3 黒褐色	ローム粒子少量，炭化粒子少量	9 褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック中量
4 黒褐色	ローム粒子少量	10 褐色	ローム粒子多量，黒色土粒子少量
5 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	11 黄橙色	鹿沼土小ブロック多量
6 暗褐色	ローム粒子多量，焼土粒子少量	12 暗褐色	ローム粒子・黒色土粒子多量

遺物 出土していない。

所見 本跡は，遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが，遺物がなく詳細な時期については不明である。



第379図 第10号土坑実測図

第20号土坑（第380図）

位置 調査区南部，F3j0区。

重複関係 本跡は，第19号土坑に東壁を掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長径1.02m，短径[0.94]mの円形で，深さは40cmである。

長径方向 N-17°-W

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

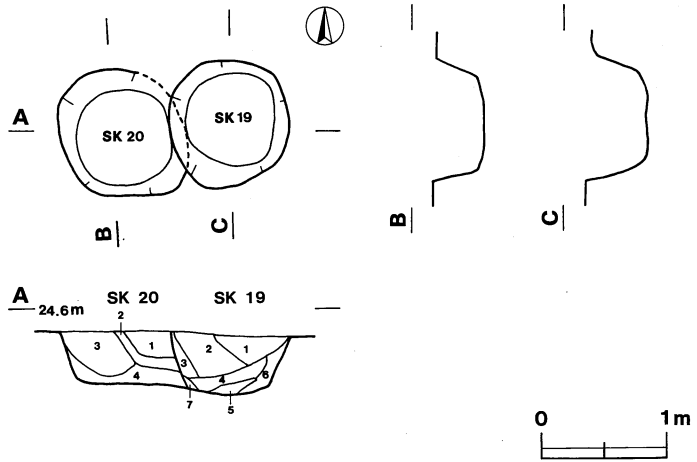
覆土 4層からなる人為堆積である。各層中にローム小・中ブロックが混入している。

第19号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

第20号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, ローム中ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量



第380図 第19・20号土坑実測図

遺物 土師器片7点が覆土下層から出土し

ている。いずれも細片で実測不可能である。

所見 本跡は、遺物から平安時代（10世紀）の円筒土坑と思われる。

第22号土坑（第381図）

位置 調査区南部, F3f9区。

規模と平面形 長径1.96m, 短径1.82mの円形で、深さは35cmである。

長径方向 N-44°-W

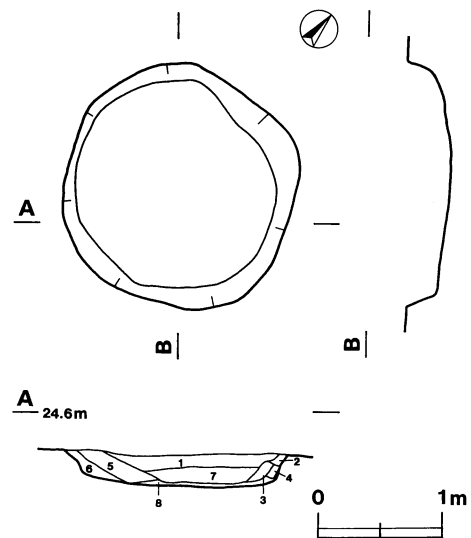
壁面 やや外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 8層からなる人為堆積である。北西壁付近から東壁付近にかけて焼土粒子が含まれている。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量, 炭化粒子・炭化物中量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・炭化物多量, 焼土小ブロック中量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・炭化物中量, 焼土粒子・焼土小ブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・炭化物少量, 焼土中量, 焼土小ブロック少量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子・炭化物多量, 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量



第381図 第22号土坑実測図

遺物 土師器片37点が覆土下層から出土している。いずれも細片で実測不可能である。

所見 本跡は、遺物から平安時代（10世紀）の円筒土坑と思われる。

第30号土坑（第382図）

位置 調査区南東部，F4g₂区。

規模と平面形 長径2.38m，短径1.50mの楕円形で，深さは2.16mである。

長径方向 N-12°-E

壁面 垂直で部分的にオーバーハングして
立ち上がる。

底面 平坦である。

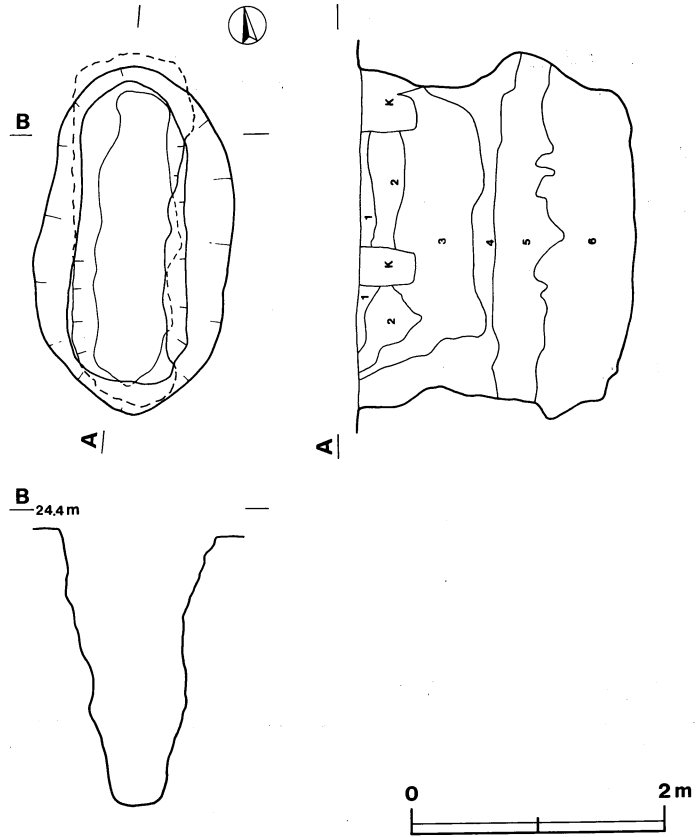
覆土 6層からなる自然堆積である。中層には，壁面の崩れによると思われるローム中ブロックが混入している。上層は，焼土粒子を少量含む。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック・焼土粒子・炭化物少量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量 |
| 5 | 黄橙色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，鹿沼土多量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子多量，ローム小・中ブロック多量 |

遺物 覆土中から流れ込みと思われる土師器片18点が出土している。

所見 本跡は，遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが，遺構に伴う遺物がなく詳細な時期については不明である。



第382図 第30号土坑実測図

第37号土坑（第383図）

位置 調査区南部，F3a₆区。

規模と平面形 長軸1.90m，短軸1.68mの長方形で，深さは86cmである。

長軸方向 N-17°-E

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

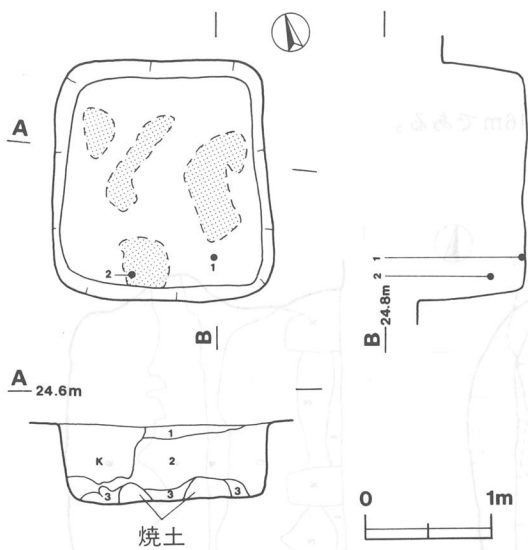
覆土 3層からなる人為堆積である。床面から下層にかけて，焼土・炭化粒子が多量に含まれている。中層には，ローム小～大ブロックが混入している。

土層解説

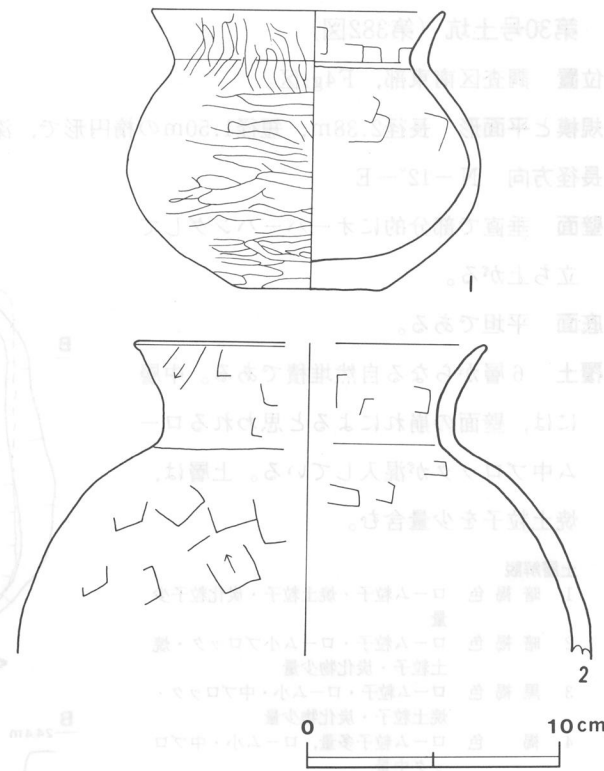
- | | | | | | |
|---|------|-----------------------------|---|-----|------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量 | 3 | 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子中量 |
| 2 | 極暗褐色 | ローム粒子中量，ローム小・中・大ブロック・炭化粒子少量 | | | |

遺物 土師器片127点，石9点が出土している。1の小形甕は，南東コーナー付近の覆土下層から斜位で，2の甕は南壁寄りの覆土中層から破片で出土している。

所見 本跡は，遺物から古墳時代後期（6世紀頃）の土坑と思われる。



第383図 第37号土坑実測図



第384図 第37号土坑出土遺物実測図

第37号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第384図 1	小形甕 土師器	A 11.7	平底。体部は内彎気味に立ち上がり最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。体部外面横位のヘラ磨き、内面横位のヘラナデ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P 897 95% PL94 南東コーナー付近覆土下層 外面煤付着
		B 11.0				
		C 5.5				
2	甕 土師器	A [14.0]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は軽く外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P 898 20% 南壁寄り覆土中層
		B (12.4)				

第45号土坑 (第385図)

位置 調査区南部, F3b7区。

重複関係 本跡は、第99号土坑に北東壁を掘り込まれ、更に南壁を第43号住居跡に掘り込まれている。従って、本跡は、第99号土坑及び第43号住居跡より古い。

規模と平面形 長径3.54m, 短径2.34mの楕円形で、深さは1.96mである。

長径方向 N-65°-W

壁面 垂直で部分的にオーバーハングして立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 12層からなる自然堆積である。下層には、壁面の崩れによるものと思われるロームブロックが混入している。

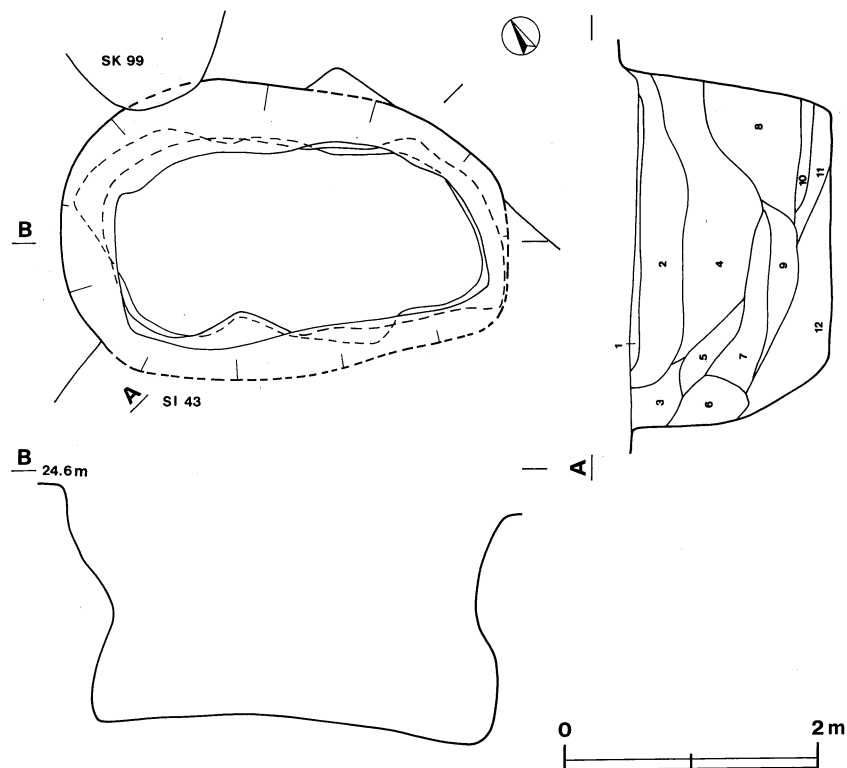
土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

- 5 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子中量，焼土粒子少量
- 6 褐色 ローム粒子多量
- 7 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量
- 8 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック中量
- 9 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 10 明褐色 ローム粒子多量
- 11 黒褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック少量，ローム小ブロック中量
- 12 褐色 ローム粒子多量，鹿沼土粒子少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は，遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが，遺物がなく詳細な時期については不明である。



第385図 第45号土坑実測図

第47号土坑（第386図）

位置 調査区南西部，E2c0区。

重複関係 本跡は，第128号住居跡の南東コーナー部を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.84m，短径1.68mの楕円形で，深さは62cmである。

長軸方向 N-19°-E

壁面 垂直に立ち上がる。

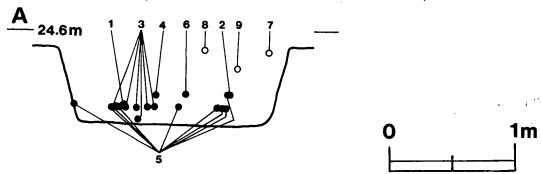
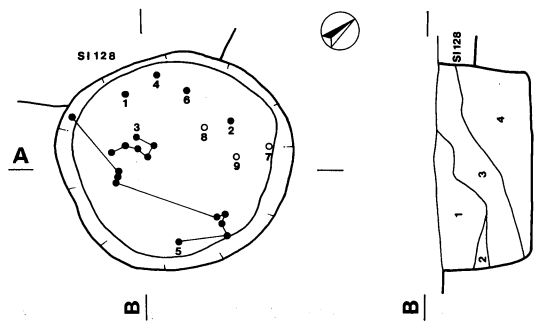
底面 平坦である。

覆土 4層からなる人為堆積である。各層とも，ローム小・中ブロックを含んでいる。第4層から遺物が集中して出土している。

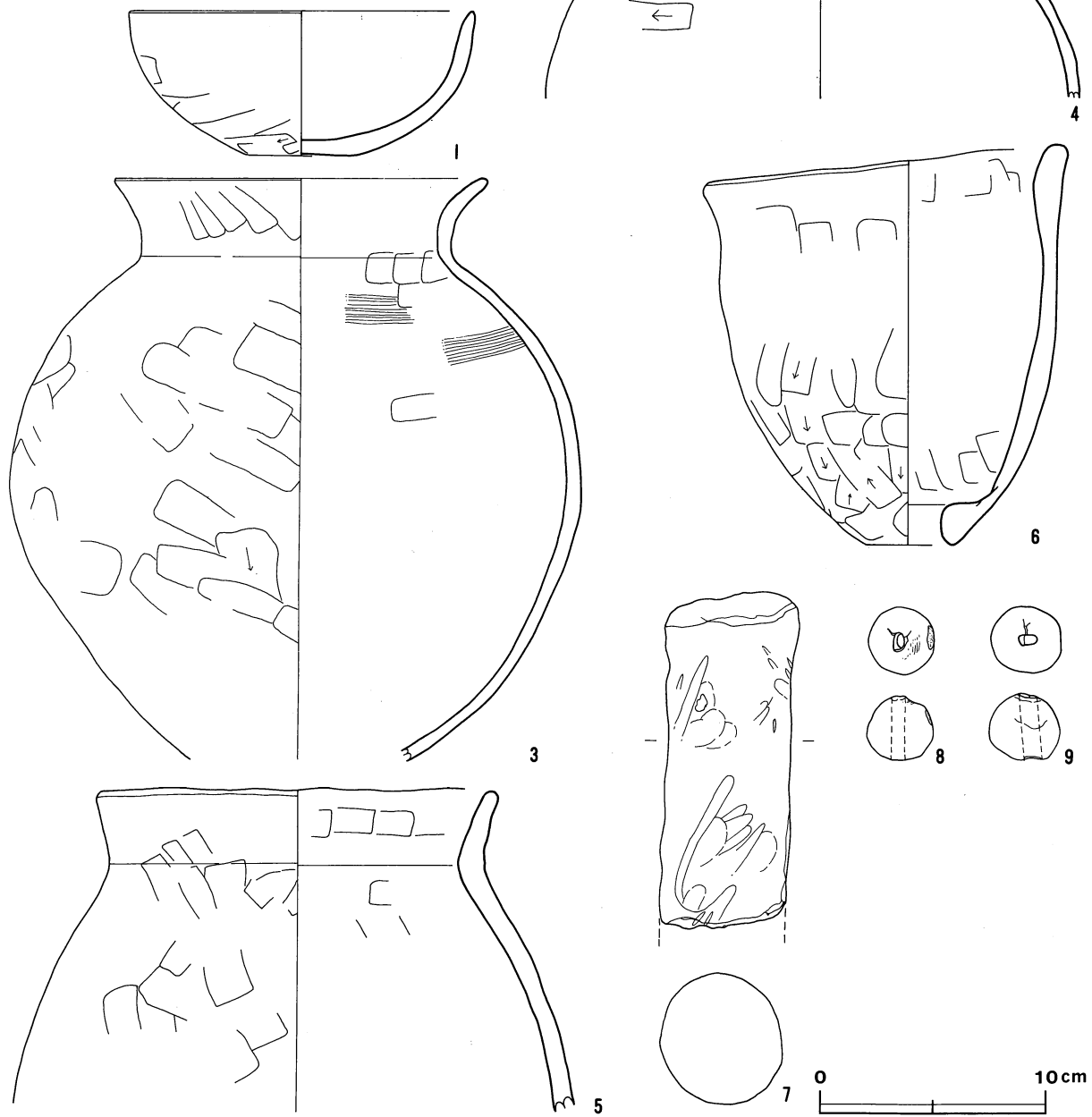
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量，炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック中量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土小ブロック微量

遺物 土師器片101点が覆土中から出土している。1の坏は西壁寄りから正位で，2の椀は北壁付近から正位



第386图 第47号土坑实测图



第387图 第47号土坑出土遗物实测图

で、3の甕は中央部寄りから破片で、4の甕は中央部から破片で、5の甕は南壁寄りから破片で、6の甗は北西壁寄りから斜位で、いずれも覆土下層から出土している。8と9の土玉及び7の支脚は、北壁寄りの覆土中層から出土している。

所見 本跡は、遺物から古墳時代後期（6世紀頃）の土坑と思われる。

第47号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第387図 1	坏 土師器	A 15.4	僅かに凹む平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P901 100% PL95 西壁寄り覆土下層
		B 6.4				
		C 4.6				
2	椀 土師器	A 14.1	丸底。体部は、内彎して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、下位横位のヘラナデ。内面上位ヘラナデ、下位粗い縦位のヘラ磨き。外面に輪積み痕が残る。	長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P902 100% PL95 北壁付近覆土下層 外面煤付着 二次焼成
		B 9.9				
3	甕 土師器	A 16.6	底部欠損。体部は球状で最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部外面ヘラナデ、内面ナデ。体部外面粗いヘラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。内面に僅かにハケ目痕有り。	長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P903 70% PL96 中央部覆土下層 外面煤付着二次焼成
		B (25.8)				
4	甕 土師器	A 16.5	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部はなだらかに外反する。	口縁部内・外面ハケ目整形。体部外面ヘラナデ一部ハケ目整形、内面ヘラナデ。内面に輪積み痕が残る。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P904 40% PL95 中央部覆土下層 外面煤付着
		B (12.3)				
5	甕 土師器	A 17.8	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は僅かに外傾する。	口縁部外面ヘラナデ、内面横位の粗いヘラ削り後ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P905 40% 南壁寄り覆土下層
		B (14.3)				
6	甗 土師器	A 16.2	無底式。体部は内彎して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部外面ナデ、内面ヘラ削り後ナデ。体部外面上位ヘラナデ、下位ヘラ削り。内面上位ヘラナデ、下位ヘラ削り後ナデ。内面輪積み痕有り。	長石・石英・スコリア 赤色 普通	P906 100% PL95 北西壁寄り覆土下層 外面煤付着二次焼成
		B 17.8				
		C 3.8				

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第387図7	支脚	(14.9)	5.6	5.6	—	(494.6)	北壁寄り覆土中層	DP277 破片
8	土玉	3.0	2.9	3.0	0.3~0.6	23.9	北壁寄り覆土中層	DP276
9	土玉	3.0	3.2	3.0	0.8	26.1	北壁寄り覆土中層	DP275

第51号土坑（第388図）

位置 調査区南西部，E2i4区。

重複関係 本跡は、第78号住居跡に北コーナー部を掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.66m，短軸2.38mの隅丸長方形で、深さは36cmである。

長軸方向 N-40°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

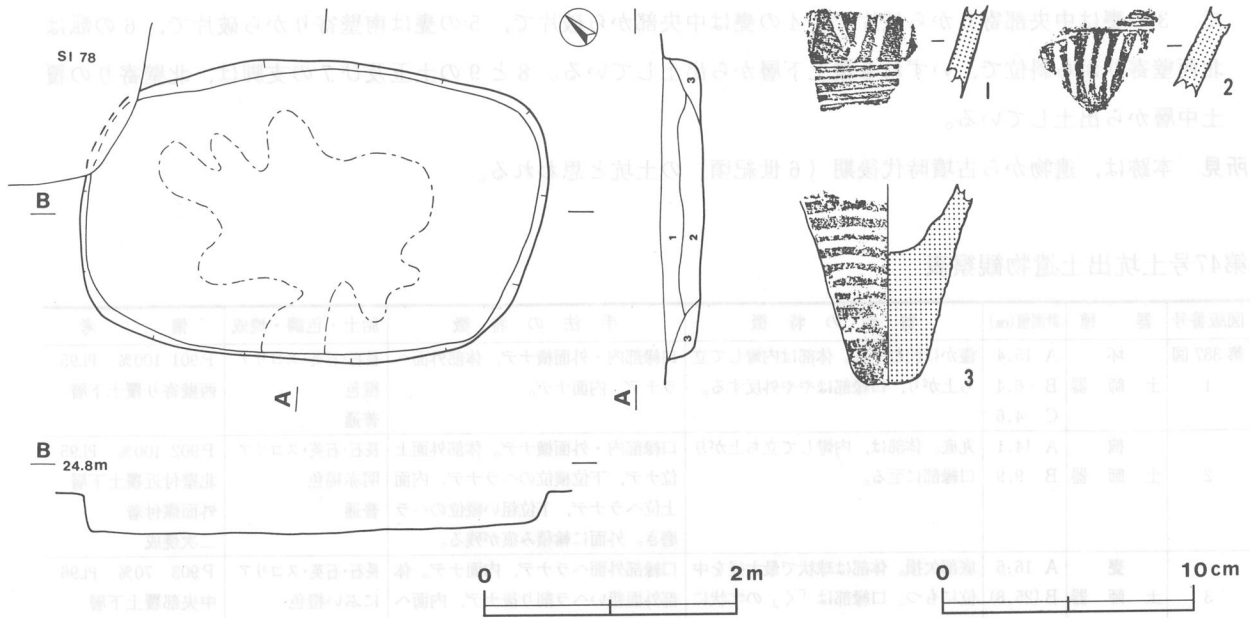
覆土 3層からなる自然堆積である。壁際には、壁面の崩れによると思われる褐色土が堆積している。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

遺物 覆土中から縄文土器の深鉢片3点及び石8点が出土している。

所見 本跡は、遺物から縄文時代早期の土坑と思われるが、詳細な時期や性格については不明である。



第388図 第51号土坑実測図

第389図 第51号土坑出土遺物拓影図

第389図 1～3は、第51号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、半截竹管による沈線が施されている。3は尖底部片で、竹管状工具による太沈線が数段周回している。底部先端は摩滅痕が有る。

第62号土坑 (第390図)

位置 調査区西部, D2j3区。

重複関係 本跡は、第63号土坑に東壁を掘り込まれている。

規模と平面形 長径1.64m, 短径1.60mの円形で、深さは1.94mである。

長径方向 N-64°-W

壁面 垂直に立ち上がり、部分的にオーバーハングしている。

底面 平坦である。

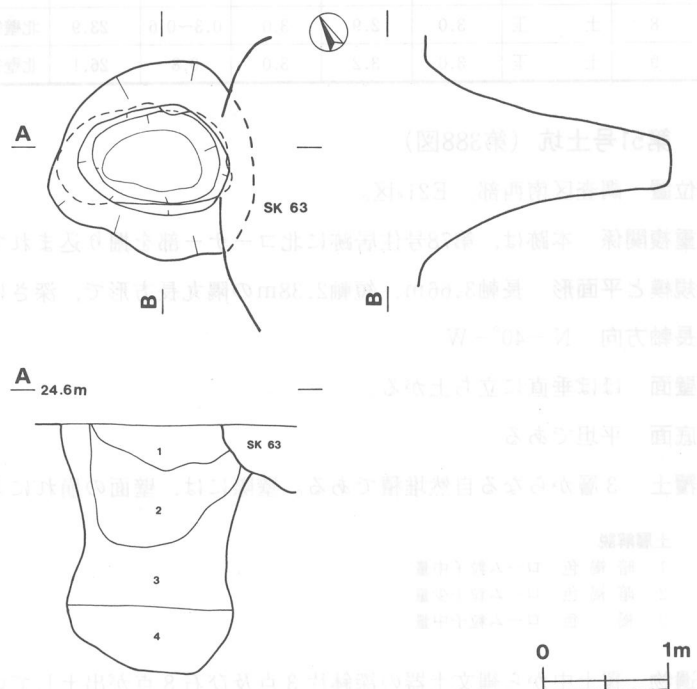
覆土 4層からなる自然堆積である。第4層は鹿沼土の層で、第1～3層はローム小ブロックを少量含む暗褐色土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、遺物がなく詳細な時期については不明である。



第390図 第62号土坑実測図

第71号土坑 (第391図)

位置 調査区南部, F2g5区。

重複関係 本跡は, 南部を第58号住居跡に掘り込まれており, 本跡が古い。

規模と平面形 長径2.78m, 短径1.04mの円形で, 深さは2.06mである。

長径方向 N-30°-E

壁面 垂直に立ち上がり, 部分的にオーバーハン
グし, 上位で外傾する。底面に近いほど狭くなる。

底面 平坦である。

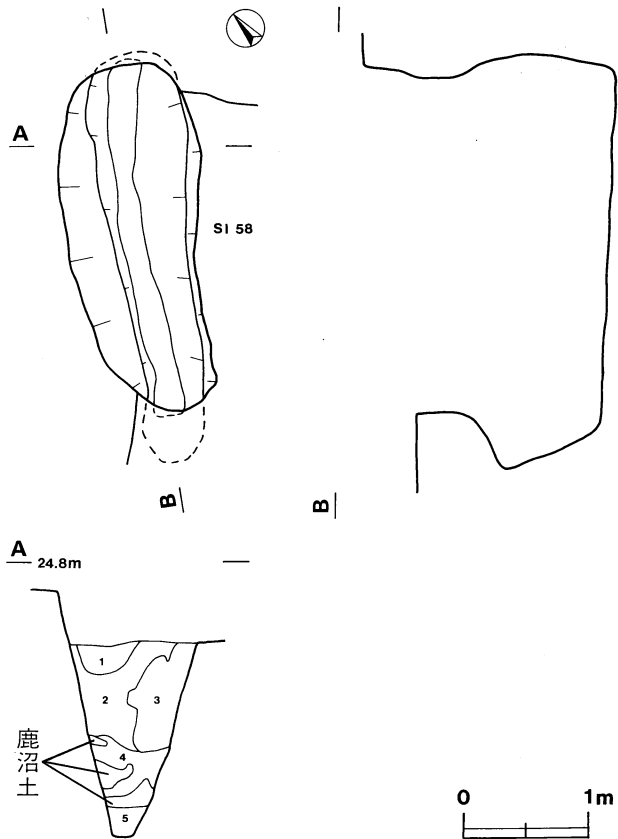
覆土 5層からなる。下層は, 壁面である鹿沼土
が崩れてできたと考えられる鹿沼大ブロックが
混入している。上層は, ローム中ブロックを少
量含む暗褐色土である。下層は自然堆積で, 上
層は人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 |
| 2 | 明褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少
量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量, 炭化物
中量 |

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 遺構の形態から縄文時代の陥し穴
と思われるが, 遺物がなく詳細な時期につい
ては不明である。



第391図 第71号土坑実測図

第73号土坑 (第392図)

位置 調査区西部, E1g0区。

規模と平面形 長径2.88m, 短径0.86mの長楕円形で, 深さは2.16mである。

長径方向 N-22°-W

壁面 垂直に立ち上がり, 部分的にオーバーハン
グし, 上位で外傾する。底面に近いほど狭くなる。

底面 平坦である。

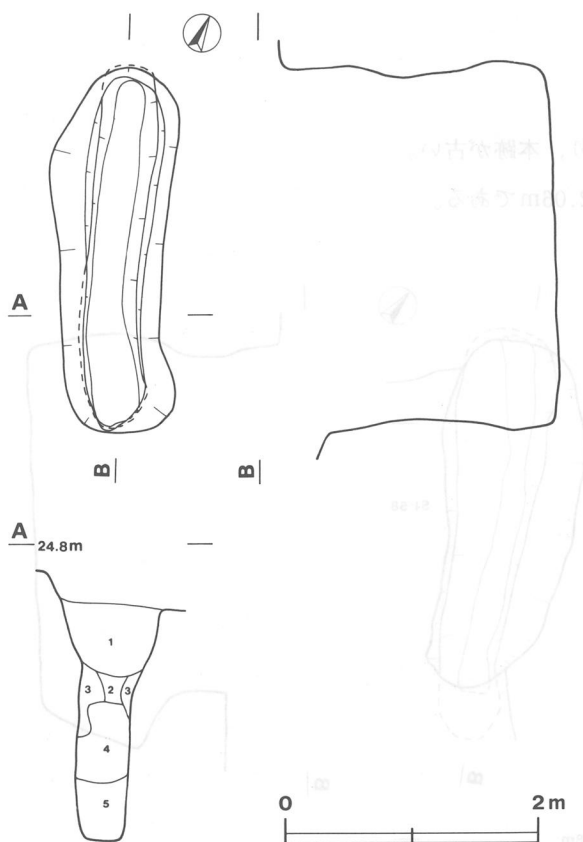
覆土 5層からなる自然堆積である。下層は鹿沼土を含み, 上層は黒色粒子を少量含む暗褐色土である。

土層解説

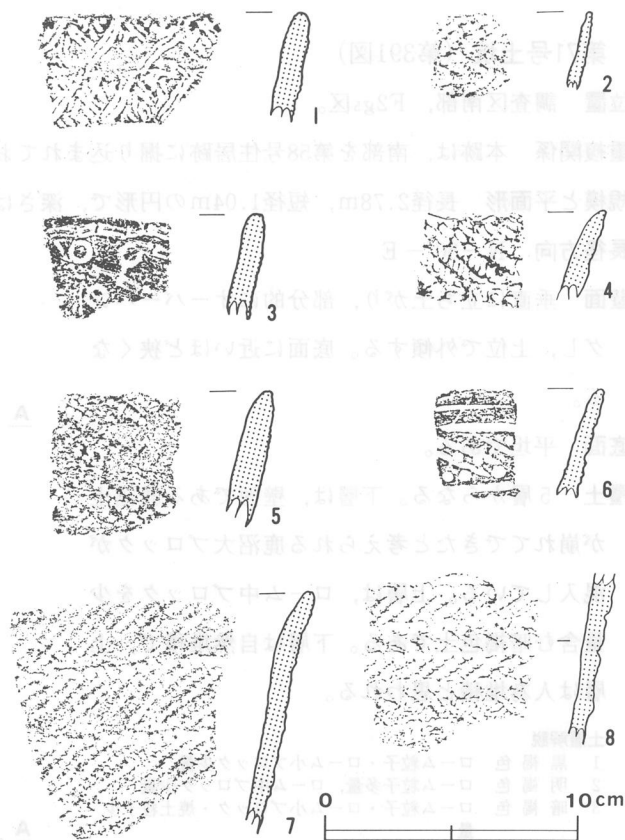
- | | | |
|---|------|-----------------------|
| 1 | 極暗褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子・黒色土粒子少量 |
| 3 | 明褐色 | ローム粒子多量, 黒色土粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム小・中ブロック少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量, 鹿沼土粒子多量 |

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片が, 70点覆土中から出土している。いずれも細片で実測は不可能である。

所見 本跡は, 遺構の形態と遺物から縄文時代前期前葉の陥し穴と思われる。



第392図 第73号土坑実測図



第393図 第73号土坑出土遺物拓影図

第393図1～8は、第73号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。1～7は口縁部片である。1は撚糸の押圧が、2は羽状縄文が施されている。3は口縁直下に押し引き刺突文と竹管による刺突文が施されている。4・5は単節縄文による羽状縄文が施されている。6は竹管状工具による沈線と円錐形の刺突文が施されている。7は付加条一種付加1条の縄文が施されている。8は胴部片で、ループ文が施されている。

第74号土坑 (第394図)

位置 調査区西部, E1g0区。

重複関係 本跡は、第112号住居跡の南西部, 第129号住居跡の炉北側を掘り込んでおり、本跡が最も新しい。

規模と平面形 長径1.20m, 短径0.94mの楕円形で、深さは1.66mである。

長径方向 N-63°-W

壁面 下位から中位は垂直で一部オーバーハングし、上位で段をもち外傾して立ち上がる。底面に近いほど狭くなる。

底面 平坦である。

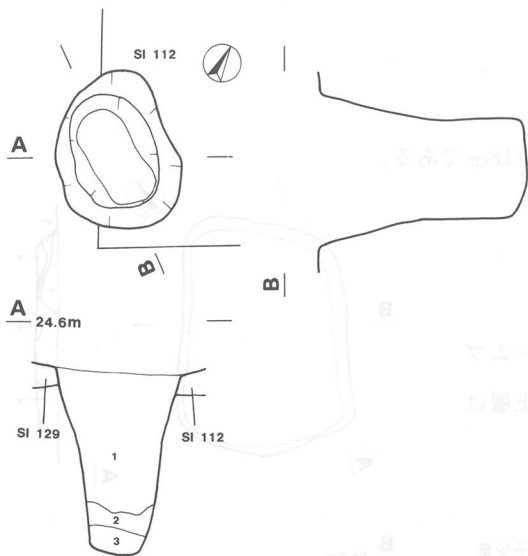
覆土 3層からなる自然堆積である。第3層には壁面が崩れて混入した鹿沼土が含まれている。

土層解説

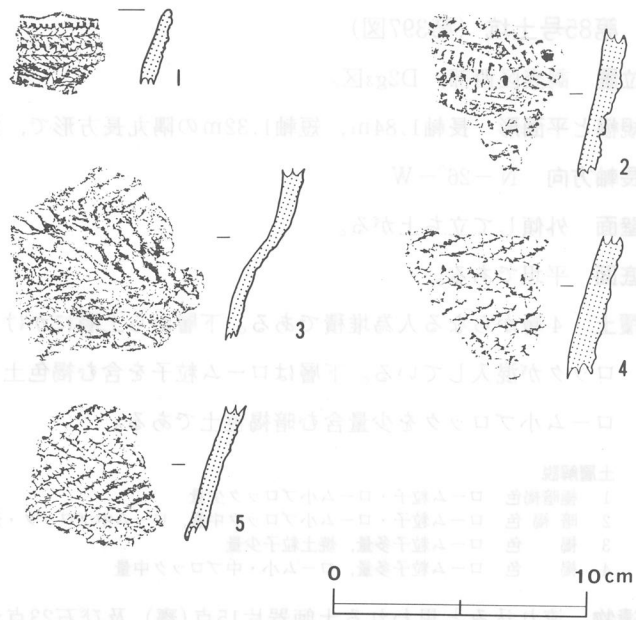
- 1 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・鹿沼土粒子中量

遺物 流れ込みと思われる縄文式土器片が、15点覆土中から出土している。いずれも細片で実測は不可能である。

所見 本跡は、遺構の形態と遺物から縄文時代前期前葉の陥し穴と思われる。



第394図 第74号土坑実測図



第395図 第74号土坑出土遺物拓影図

第395図 1～5は、第74号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、口縁直下に細隆帯を二段貼付し、一段目はキザミ目が、二段目は交互刺突が施されている。2～5は胴部片である。2は燃糸圧痕文、キザミ目、円形刺突文が施されている。更に、小瘤が貼付されている。3・5は単節の羽状縄文が、4はループ文が施されている。

第79号土坑 (第396図)

位置 調査区西部, E2c1区。

重複関係 本跡は、覆土上層を第108号住居跡の貯蔵穴に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長径1.30m, 短径1.06mの楕円形で、深さは1.64mである。

長径方向 N-69°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、上位で外傾する。

底面 平坦である。

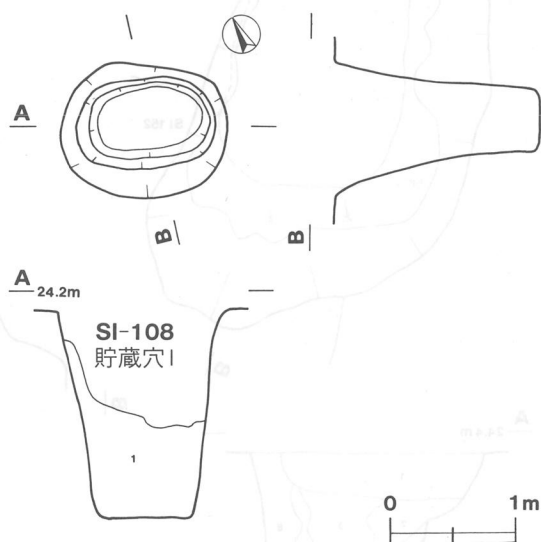
覆土 1層からなる自然堆積である。覆土の大部分が第108号住居跡に掘り込まれているため、残存しているのは1層のみである。

土層解説

1 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・鹿沼土粒子中量, ローム中ブロック少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、詳細な時期については不明である。



第396図 第79号土坑実測図

第85号土坑 (第397図)

位置 調査区西部, D2g3区。

規模と平面形 長軸1.84m, 短軸1.32mの隅丸長方形で, 深さは18cmである。

長軸方向 N-26°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

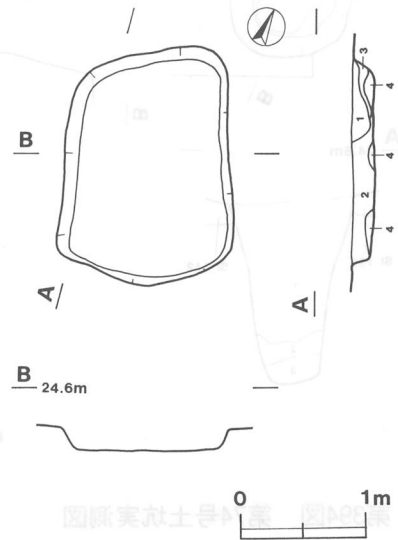
覆土 4層からなる人為堆積である。下層から上層にかけてロームブロックが混入している。下層はローム粒子を含む褐色土で, 上層はローム小ブロックを少量含む暗褐色土である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量

遺物 流れ込みと思われる土師器片15点(甕), 及び石23点が出土している。いずれも細片で実測は不可能である。

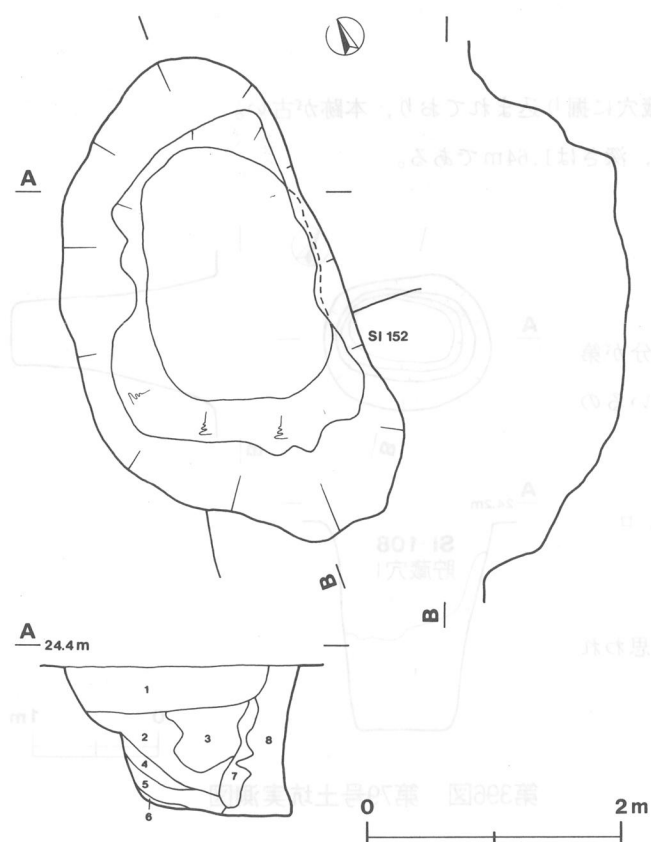
所見 本跡は, 遺物から古墳時代の土坑と思われるが, 詳細な時期については不明である。



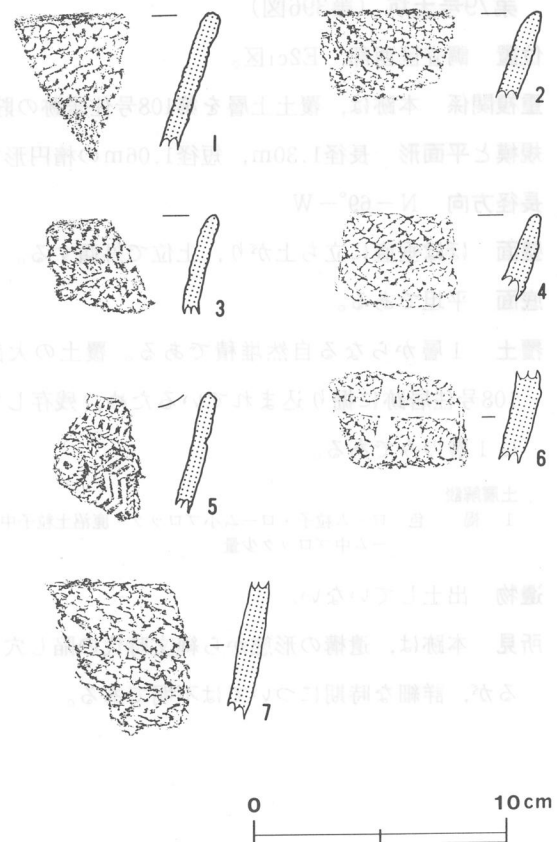
第397図 第85号土坑実測図

第88号土坑 (第398図)

位置 調査区西部, D2f2区。



第398図 第88号土坑実測図



第399図 第88号土坑出土遺物拓影図

重複関係 本跡は、第152号住居跡の北西壁を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長径3.66m, 短径2.18mの楕円形で、深さは1.24mである。

長径方向 N-13°-E

壁面 短径方向は、ほぼ垂直に立ち上がるが、長径方向は外傾している。

底面 平坦である。

覆土 8層からなる人為堆積である。下層から上層にかけてローム小・中ブロックが混入している。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|------|---|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック少量 | 6 褐色 | ローム粒子・黒色土粒子多量, 炭化粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量 | 7 褐色 | ローム粒子・黒色土粒子多量, ローム大ブロック中量, ローム小・中ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 | 8 褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量 | | |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物 覆土中から縄文土器片62点(深鉢), 及び石29点が出土している。いずれも細片で実測は不可能である。

所見 本跡は、遺構の形態と遺物から縄文時代前期前葉の陥し穴と思われる。

第399図1~7は、第88号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。1~5は口縁部片である。1はループ文, 2は組紐文, 3・4は単節縄文が施されている。5は口縁直下に二段の細隆帯が貼られ、さらにキザミ目, 捺糸圧痕による蕨手文, 仕切文が施されている。6・7は胴部片で単節縄文が施され、さらに6はヘラ状工具による太沈線が交差している。

第98号土坑 (第400図)

位置 調査区南部, E3j8区。

規模と平面形 長径2.50m, 短径1.16mの長楕円形で、深さは1.46mである。

長径方向 N-27°-W

壁面 垂直に立ち上がり、部分的にオーバーハングし、上位で外傾する。底面に近いほど長径方向に平行に狭くなる。

底面 平坦である。逆木を立てた跡と思われるピットが4か所長径方向に並ぶ。

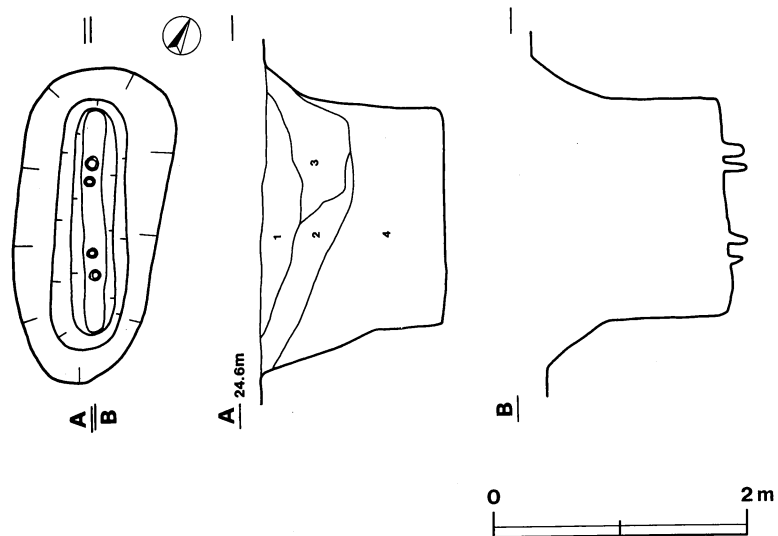
覆土 4層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、遺物がなく詳細な時期については不明である。



第400図 第98号土坑実測図

第100号土坑 (第401図)

位置 調査区南東部, F3e6区。

重複関係 本跡は, 第32号住居跡の南コーナー部に掘り込まれており, 本跡が古い。

規模と平面形 長径2.48m, 短径1.42mの楕円形で, 深さは1.90mである。

長径方向 N-41°-W

壁面 垂直で部分的にオーバーハングして立ち上がる。

底面 平坦である。

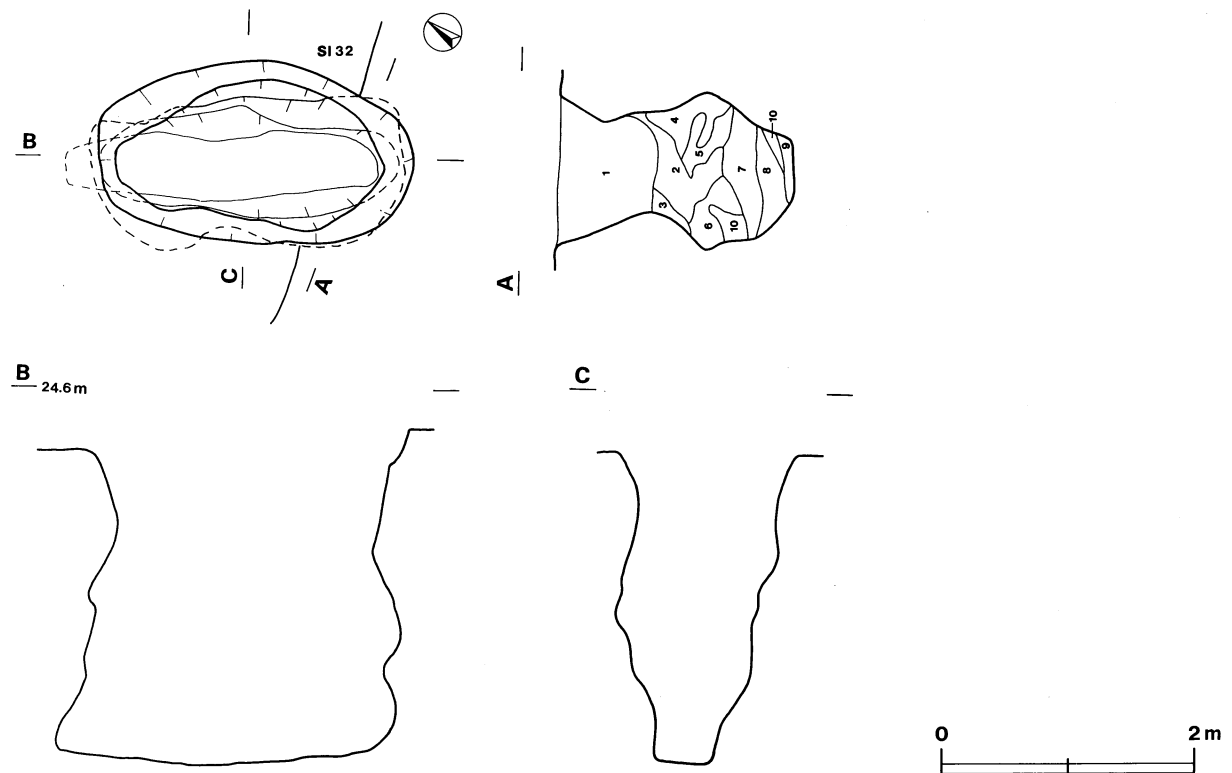
覆土 10層からなる人為堆積である。下層から上層にかけてローム小・中ブロックが中量混入している。

土層解説

1	極暗褐色	ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・炭化粒子少量	5	褐色	ローム粒子・ローム小・中ブロック多量
2	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量	6	褐色	ローム粒子多量, 黒色土粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック中量	7	黒褐色	ローム粒子・ローム小・中ブロック少量
4	褐色	ローム粒子・ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量	8	褐色	ローム粒子・ローム小・中ブロック多量
			9	黒褐色	ローム粒子・ローム中ブロック少量, ローム小ブロック中量
			10		鹿沼土

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが, 遺物がなく詳細な時期については不明である。



第401図 第100号土坑実測図

第102号土坑 (第402図)

位置 調査区南部, F3e2区。

重複関係 本跡は, 第49号住居跡の南コーナー部に掘り込まれており, 本跡が古い。

規模と平面形 長径3.42m, 短径2.04mの楕円形で, 深さは2.58mである。

長径方向 N-53°-W

壁面 垂直に立ち上がるが、部分的にオーバーハングしている。

底面 平坦である。

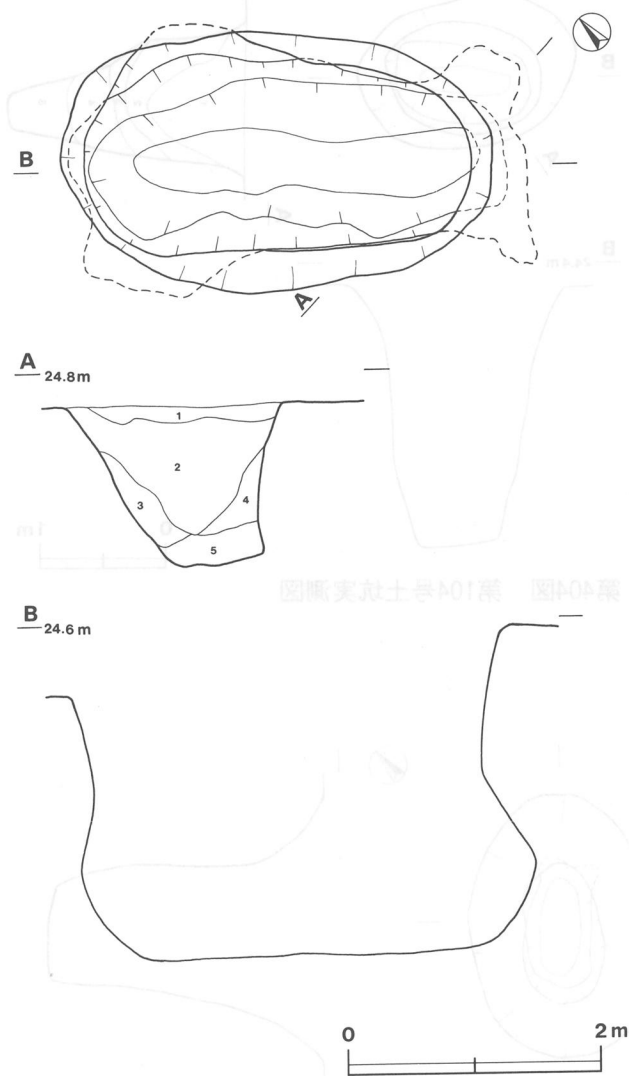
覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

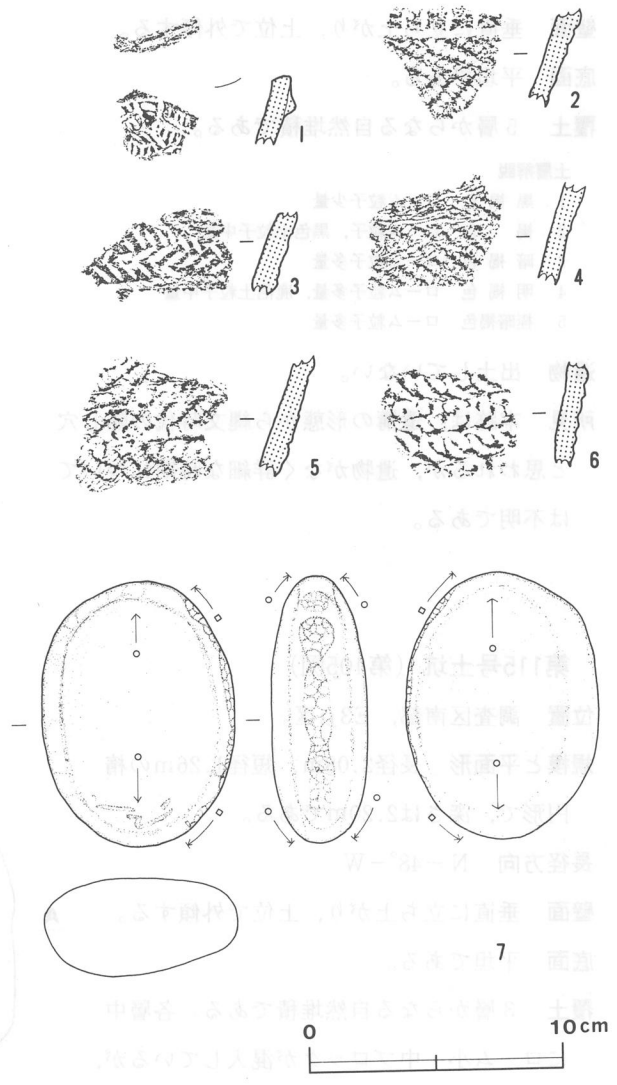
- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量 | 5 褐色 ローム粒子中量, 黒色土粒子多量 |
| 3 褐色 ローム粒子多量 | |

遺物 覆土中から、流れ込みと思われる縄文土器片29点が出土している。いずれも細片で、実測は不可能である。7の磨石は、覆土中から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態と遺物から縄文時代前期前葉の陥し穴と思われる。



第402図 第102号土坑実測図



第403図 第102号土坑出土遺物実測・拓影図

第403図1～6は、第102号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片である。1は波状口縁で、口縁直下にキザミ目が施され、小瘤が貼付されている。2は撚糸圧痕文と単節の羽状縄文が施されている。3～6は胴部片である。3は撚糸圧痕文、4は単節RLの縄文が施されている。5は単節の羽状縄文が、6にはループ文が施されている。

第102号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第403図7	磨石	10.6	7.7	3.8	442.7	砂岩	覆土中	Q112 PL104

第104号土坑 (第404図)

位置 調査区西部, E3h3区。

規模と平面形 長径1.72m, 短径1.18mの楕円形で, 深さは2.08mである。

長径方向 N-46°-W

壁面 垂直に立ち上がり, 上位で外傾する。

底面 平坦である。

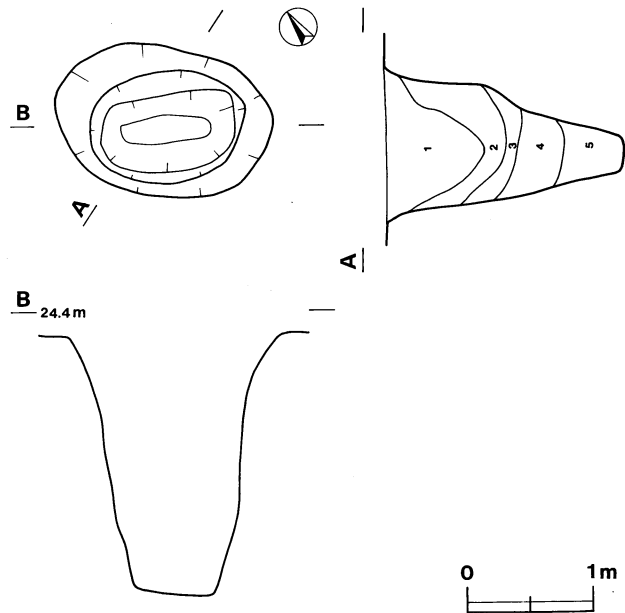
覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子, 黒色土粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 明褐色 ローム粒子多量, 鹿沼土粒子中量
- 5 極暗褐色 ローム粒子多量

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが, 遺物がなく詳細な時期については不明である。



第404図 第104号土坑実測図

第115号土坑 (第405図)

位置 調査区南部, E3j1区。

規模と平面形 長径2.08m, 短径1.26mの楕円形で, 深さは2.20mである。

長径方向 N-48°-W

壁面 垂直に立ち上がり, 上位で外傾する。

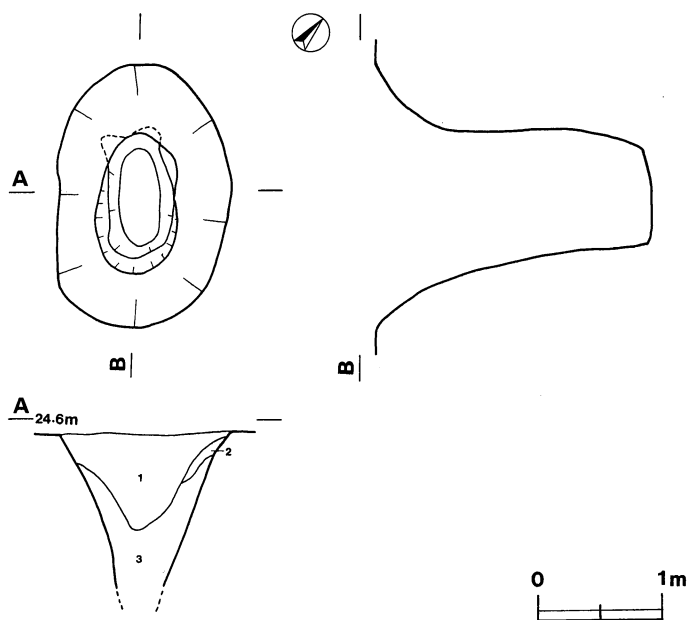
底面 平坦である。

覆土 3層からなる自然堆積である。各層中にローム小・中ブロックが混入しているが, レンズ状堆積の様相を呈しており自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・黒色土粒子少量

遺物 出土していない。



第405図 第115号土坑実測図

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、遺物がなく詳細な時期については不明である。

第118号土坑（第406図）

位置 調査区西部，D2b7区。

重複関係 本跡は、南西部を第99号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長径[1.90]m，短径[0.86]mの長楕円形で，深さは1.20mである。

長径方向 N-34°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり，上位で外傾する。底面に近いほど長径方向と平行に狭くなる。

底面 平坦である。

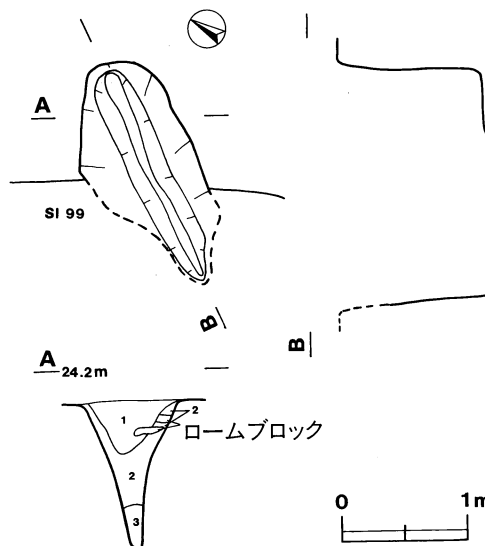
覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、遺物がなく詳細な時期については不明である。



第406図 第118号土坑実測図

第119号土坑（第407図）

位置 調査区西部，D2a5区。

規模と平面形 長径1.94m，短径1.16mの楕円形で，深さは1.06mである。

長径方向 N-34°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり，上位で外傾する。底面に近いほど長径方向と平行に狭くなる。

底面 平坦である。

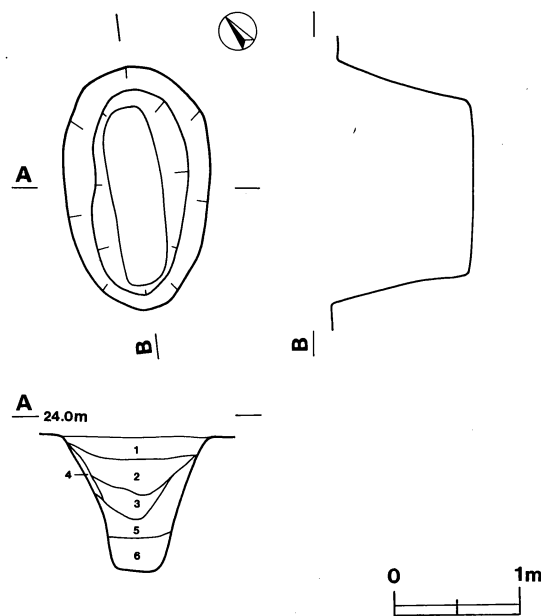
覆土 6層からなる自然堆積である。下層は，壁面が崩れて混入したと思われるローム小ブロックを多量含む。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量
- 4 明褐色 ローム粒子・黒色土粒子多量
- 5 明褐色 ローム粒子多量，黒色土粒子中量
- 6 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、遺物がなく詳細な時期については不明である。



第407図 第119号土坑実測図

第122号土坑 (第408図)

位置 調査区西部, D2e9区。

規模と平面形 長径1.68m, 短径1.44mの楕円形で, 深さは2.02mである。

長径方向 N-36°-W

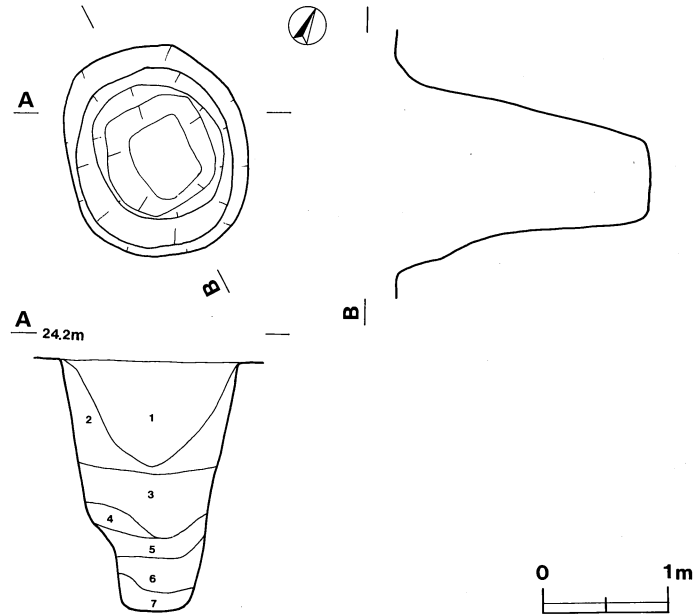
壁面 垂直に立ち上がり, 上位で外傾する。

底面 平坦である。

覆土 7層からなる自然堆積である。中層には, 壁面が崩れて混入したと思われるロームブロック塊が含まれている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ローム粒子・鹿沼土粒子中量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子・鹿沼土粒子多量



第408図 第122号土坑実測図

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが, 遺物がなく詳細な時期については不明である。

第125号土坑 (第409図)

位置 調査区北部, A3e3区。

規模と平面形 長軸2.55m, 短径1.28mの隅丸長方形で, 深さは1.45mである。

長軸方向 N-46°-E

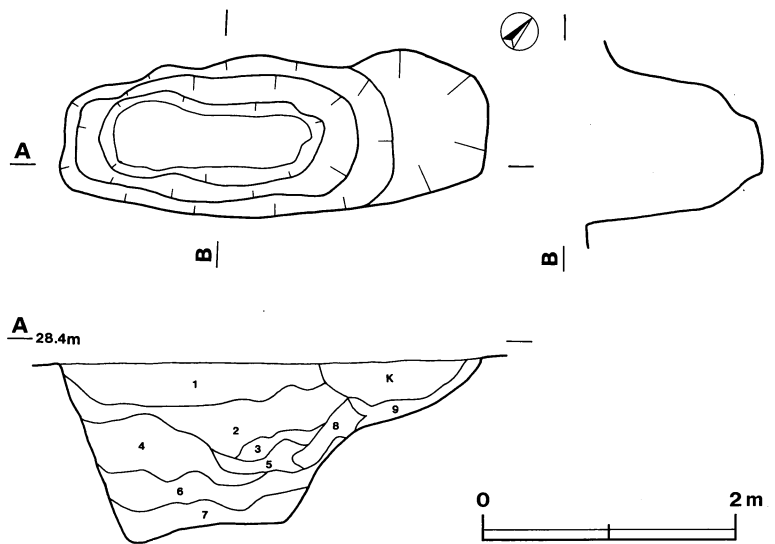
壁面 ほぼ垂直に立ち上がり, 上位は外傾する。

底面 平坦である。

覆土 9層からなる人為堆積である。下層は, 鹿沼土の大ブロックが多量に混入している。また, 各層中にはローム小~大ブロックが含まれている。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 明褐色 ローム粒子多量, ローム小・中・大ブロック中量
- 7 にぶい褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック・鹿沼土大ブロック多量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 9 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・炭化粒子少量



第409図 第125号土坑実測図

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが, 遺物がなく詳細な時期については不明である。

第126号土坑 (第410図)

位置 調査区中央部, E4c2区。

規模と平面形 長径2.31m, 短径2.07mの楕円形で, 深さは1.40mである。

長径方向 N-56°-E

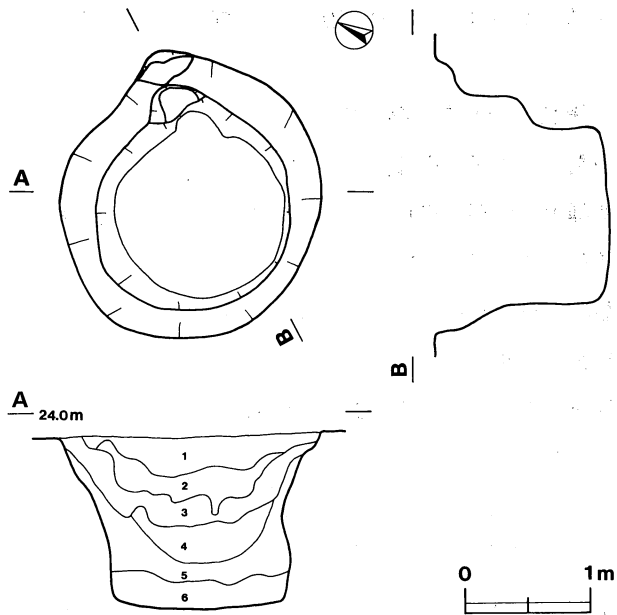
壁面 ほぼ垂直に立ち上がり, 上位は外傾する。

底面 平坦である。

覆土 6層からなる自然堆積である。壁面の崩れによるとと思われるローム小ブロックが各層に混入している。

土層解説

- | | |
|--------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 灰褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子・炭化材少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・鹿沼土粒子少量 |
| 5 明褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック・炭化粒子・鹿沼土粒子少量 |
| 6 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・鹿沼土粒子少量 |



第410図 第126号土坑実測図

遺物 覆土中から, 流れ込みと思われる土師器片が77点出土している。

所見 本跡は, 遺構の形態と遺物から古墳時代の井戸と思われるが, 時期を決定できる遺物がなく, 詳細な時期については不明である。

第127号土坑 (第411図)

位置 調査区中央部, E4c1区。

規模と平面形 長軸2.21m, 短軸1.07m隅丸長方形で, 深さは1.95mである。

長軸方向 N-3°-W

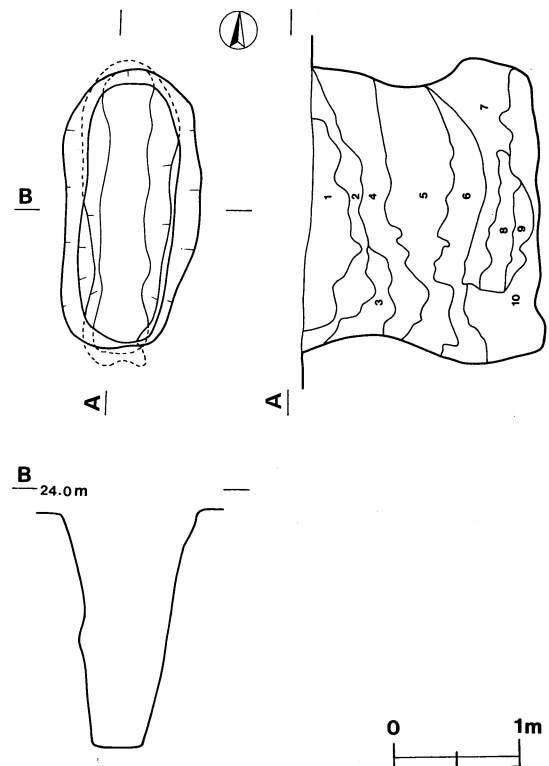
壁面 ほぼ垂直に立ち上がり, 部分的にオーバーハングして, 上位は外傾する。

底面 平坦である。

覆土 10層からなる自然堆積である。下層には, 壁面が剝がれ落ちたと考えられる鹿沼土塊が含まれている。各層ともローム粒子を多く含む褐色土で構成されている。

土層解説

- | | |
|--------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 明褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 明褐色 | ローム粒子多量 |
| 6 明褐色 | ローム粒子多量 |
| 7 明褐色 | ローム粒子中量 |
| 8 黄橙色 | 鹿沼土粒子・鹿沼土小ブロック多量 |
| 9 褐色 | ローム粒子少量 |
| 10 明褐色 | ローム粒子・鹿沼土粒子少量 |



第411図 第127号土坑実測図

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、遺物がなく詳細な時期については不明である。

第132号土坑（第412図）

位置 調査区中央部，E3g0区。

規模と平面形 径1.00mの円形で、深さは32cmである。

長径方向 N-0°

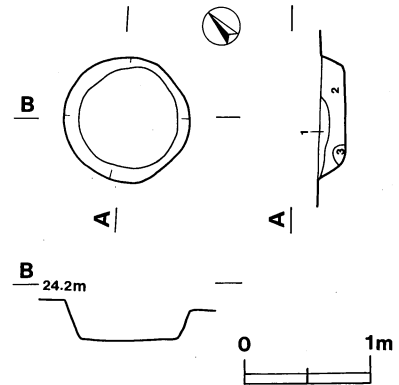
壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。

覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 黒色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量



第412図 第132号土坑実測図

遺物 土師器片5点（坏，甕）が、覆土下層から出土している。いずれも細片で実測不可能である。

所見 本跡は、遺物から平安時代（10世紀）の円筒土坑と思われる。

第135号土坑（第413図）

位置 調査区南西部，D3j9区。

規模と平面形 長径2.02m，短径0.70mの長楕円形で、深さは1.30mである。

長径方向 N-24°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり，上位で外傾する。底面に近いほど長径方向と平行に狭くなる。

底面 平坦である。

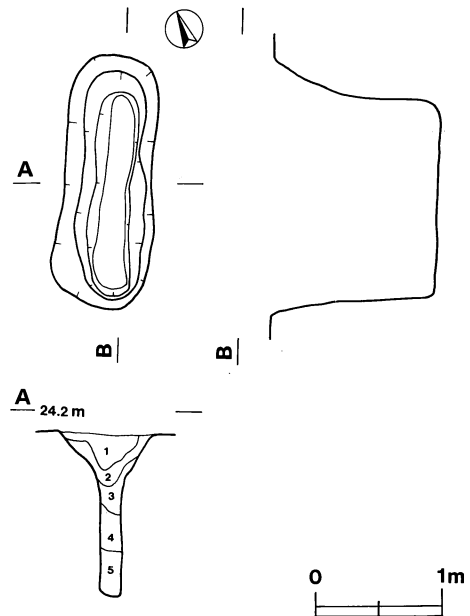
覆土 5層からなる自然堆積である。下層はローム小ブロックを中量含むが，中層～上層となるに連れて少なくなる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子・黒色土粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、遺物がなく詳細な時期については不明である。



第413図 第135号土坑実測図

第136号土坑（第414図）

位置 調査区中央部，D3a0区。

重複関係 本跡は，南部を第191号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長径1.42m，短径1.00mの楕円形で，深さは1.94mである。

長径方向 N-80°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、上位で外傾する。

底面 平坦である。

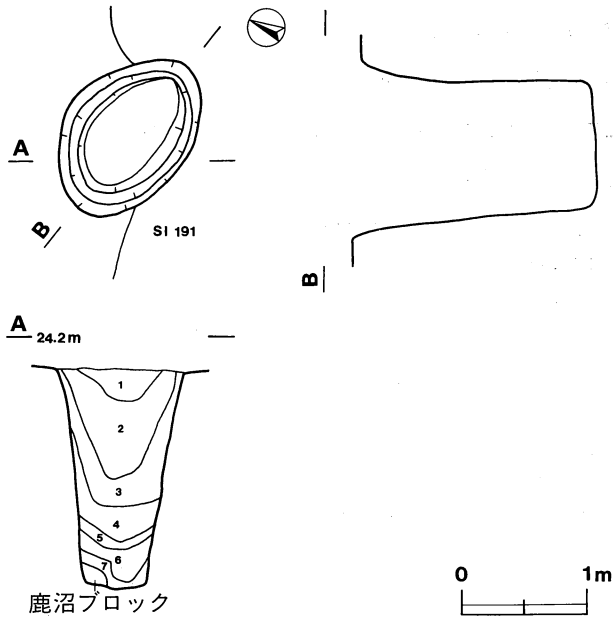
覆土 7層からなる自然堆積である。下層は鹿沼土を多量に含む黒褐色土で、中層はローム小ブロックを中量含む明褐色土である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 3 明褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック中量
- 4 極暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子・黒色土粒子中量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子・鹿沼土粒子中量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、遺物がなく詳細な時期については不明である。



第414図 第136号土坑実測図

第137号土坑 (第415図)

位置 調査区東部, D4c3区。

重複関係 本跡は、第175号住居跡の東コーナー部に上部を掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長径1.56m, 短径1.15mの楕円形で、深さは2.27mである。

長径方向 N-66°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、上位で外傾する。

底面 平坦である。

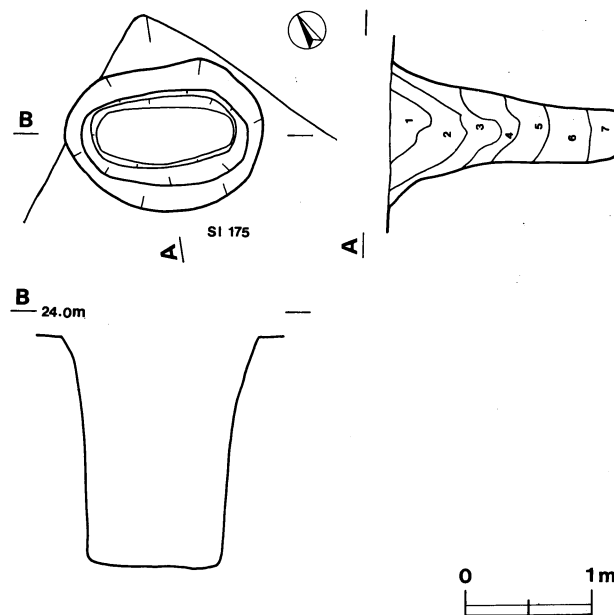
覆土 7層からなる自然堆積である。下層は鹿沼土を多量に含む暗褐色土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子・黒色土粒子多量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量
- 7 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが、遺物がなく詳細な時期については不明である。



第415図 第137号土坑実測図

第139号土坑 (第416図)

位置 調査区東部, D4d3区。

重複関係 本跡は、第175号住居跡に上部を掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長径1.14m, 短径1.10mの円形で, 深さは2.17mである。

長径方向 N-77°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり, 上位で外傾する。

底面 平坦である。

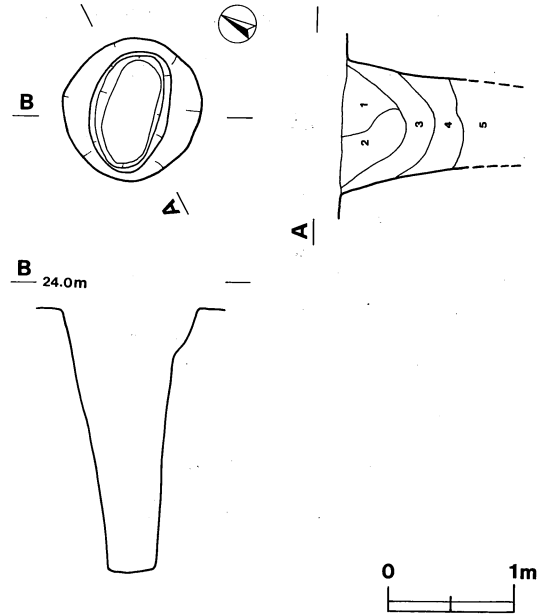
覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 褐色 ローム粒子・黒色土粒子多量
- 5 褐色 ローム粒子中量

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが, 遺物がなく詳細な時期については不明である。



第416図 第139号土坑実測図

第140号土坑 (第417図)

位置 調査区中央部, C3j4区。

規模と平面形 長径1.02m, 短径0.86mの楕円形で, 深さは1.50mである。

長径方向 N-10°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり, 上位で外傾する。

底面 平坦である。

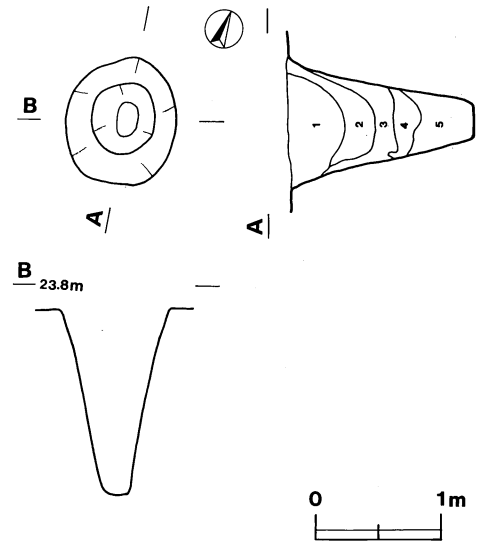
覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

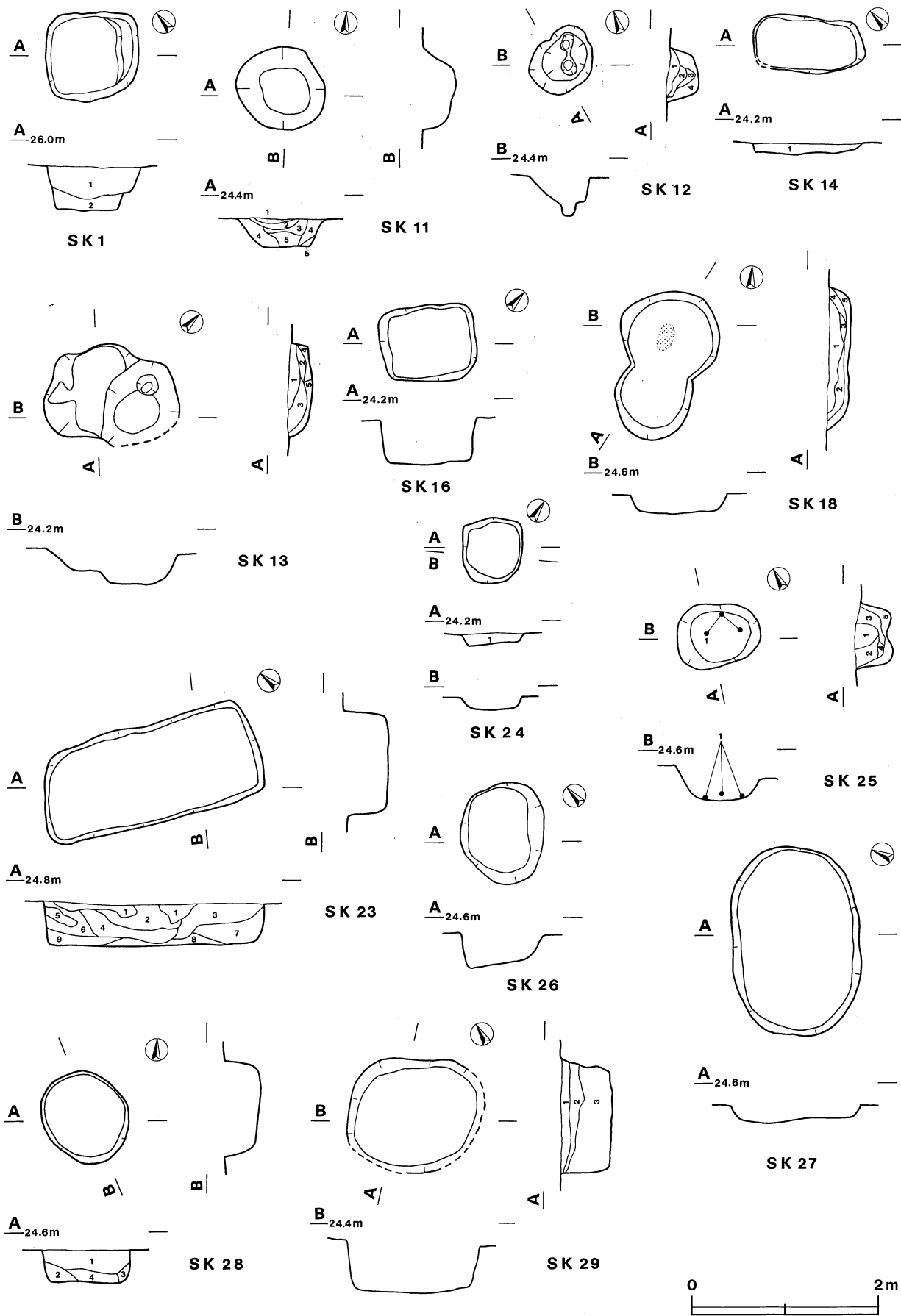
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 明黄褐色 ローム粒子少量, 鹿沼土小ブロック中量
- 4 黄橙色 ローム粒子・鹿沼土粒子多量
- 5 明褐色 ローム粒子多量

遺物 出土していない。

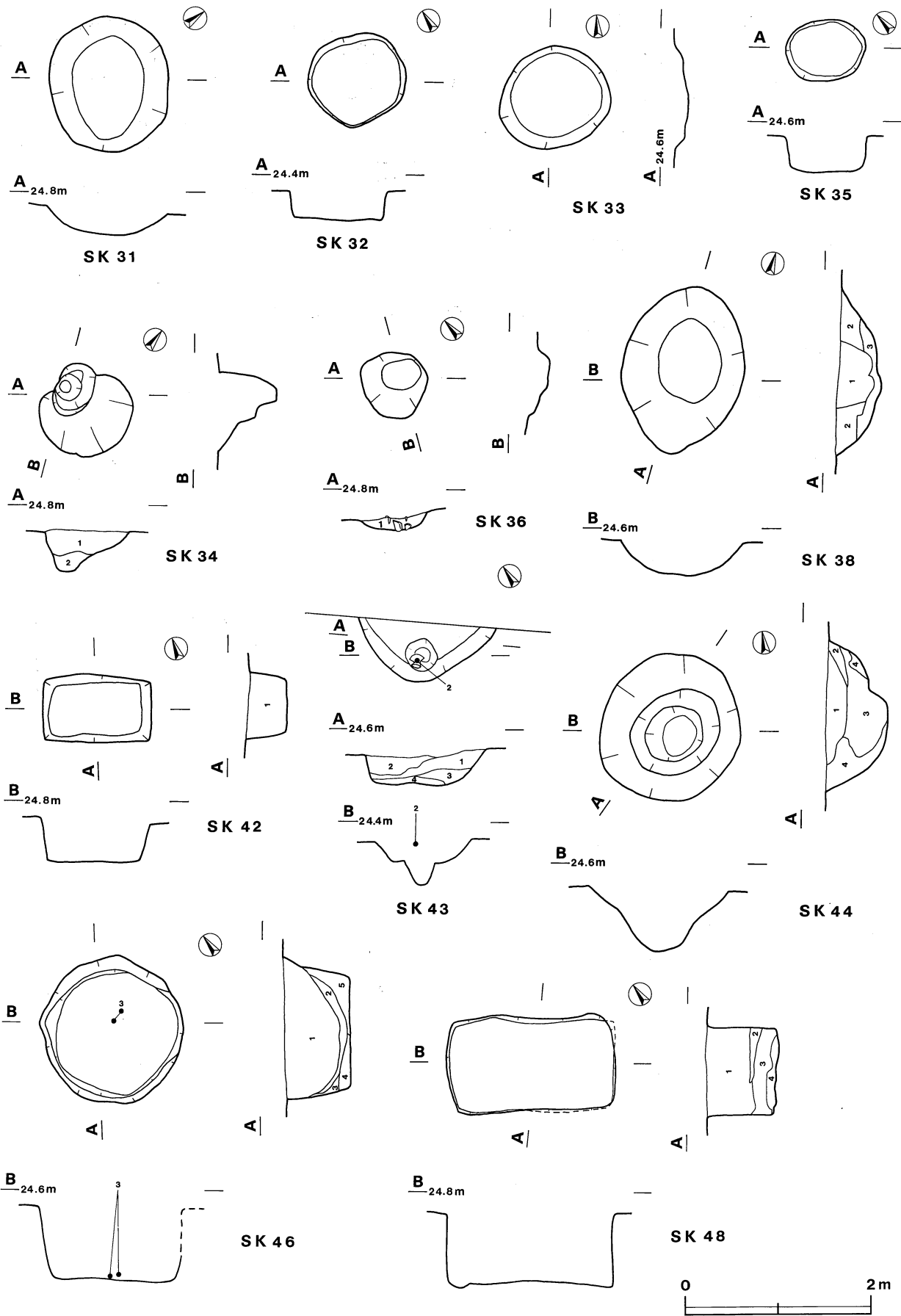
所見 本跡は, 遺構の形態から縄文時代の陥し穴と思われるが, 遺物がなく詳細な時期については不明である。



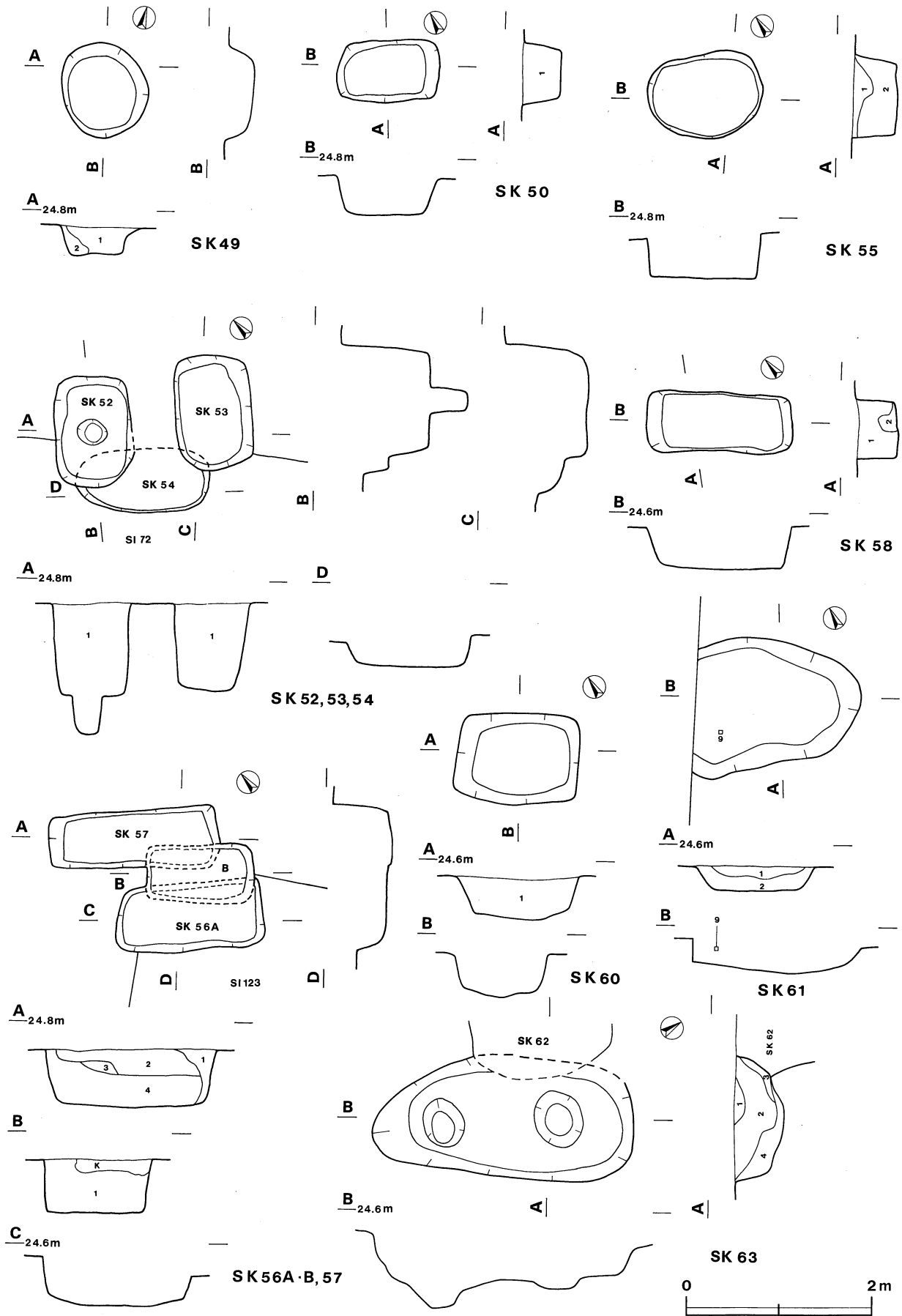
第417図 第140号土坑実測図



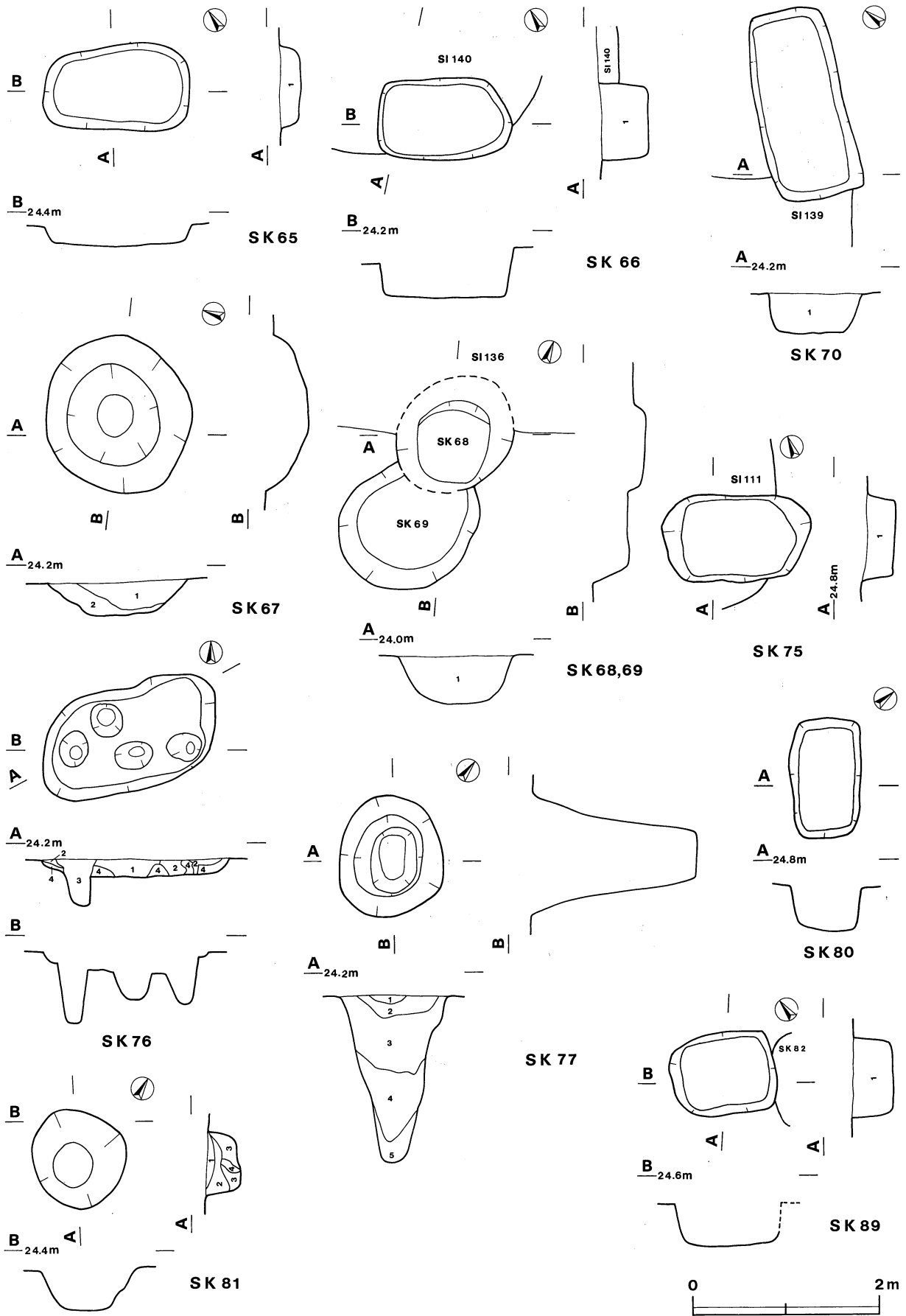
第418図 その他の土坑実測図(1)



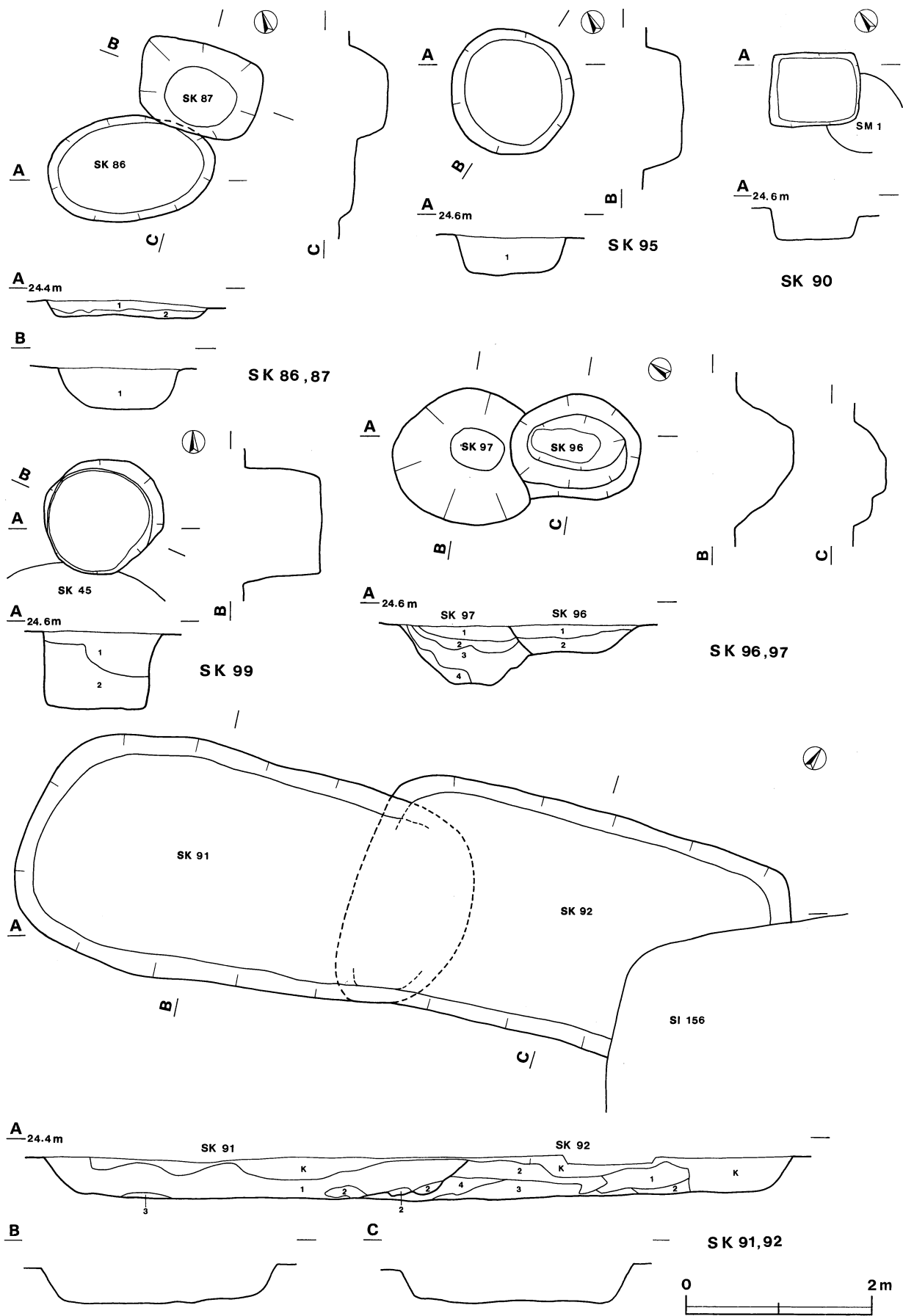
第419図 その他の土抗実測図(2)



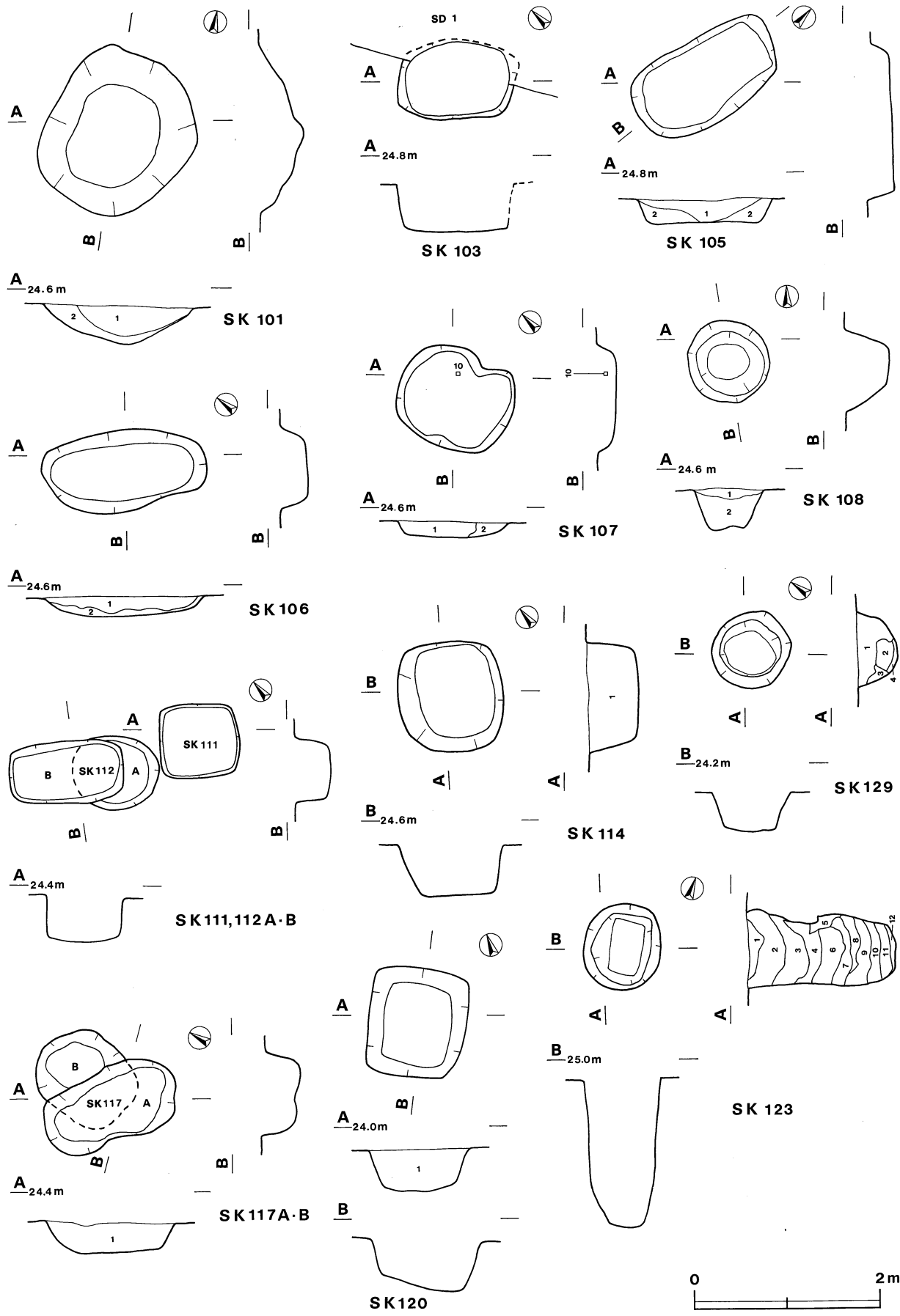
第420図 その他の土坑実測図(3)



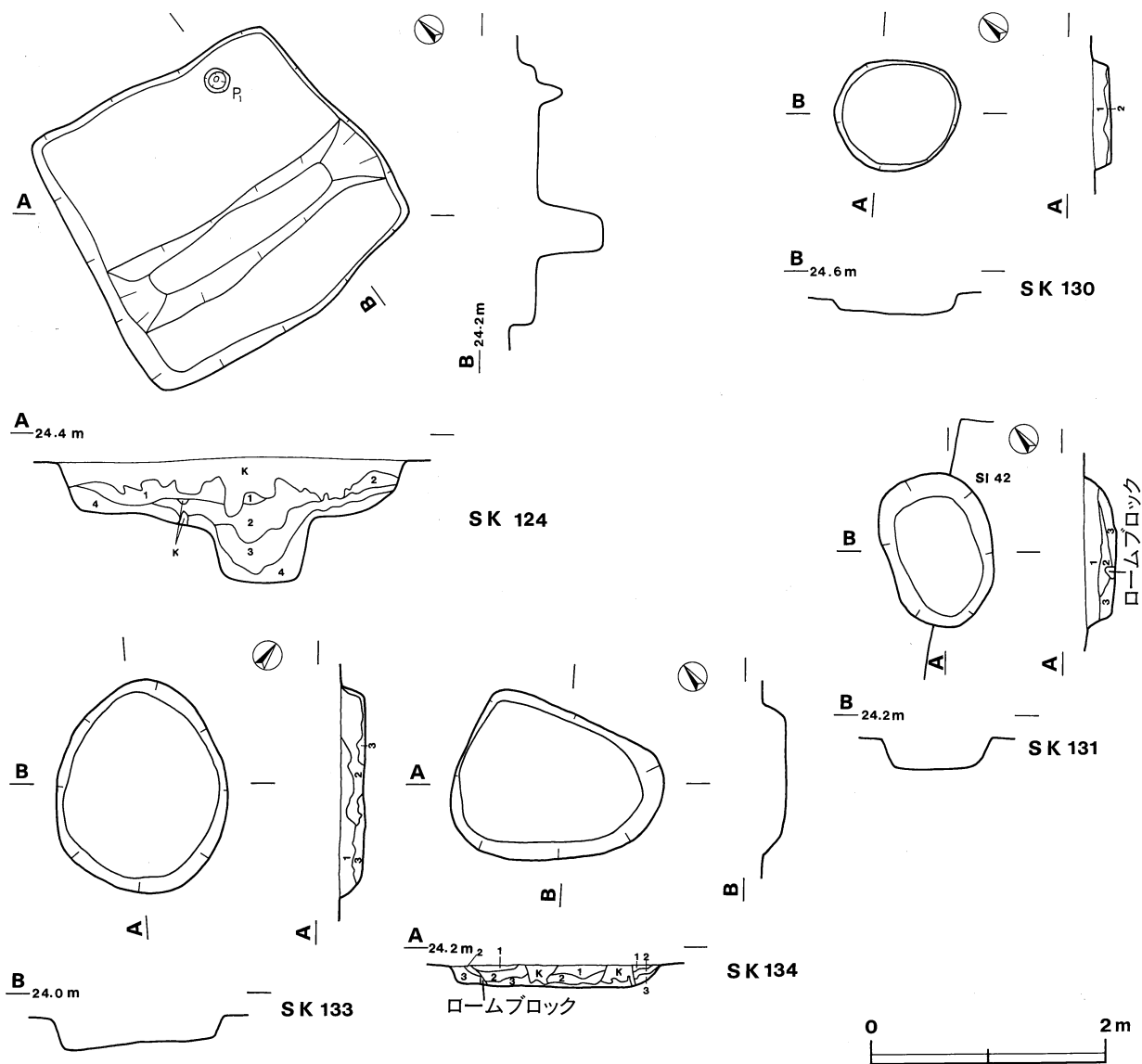
第421図 その他の土抗実測図(4)



第422図 その他の土坑実測図(5)



第423図 その他の土坑実測図(6)



第424図 その他の土坑実測図(7)

第1号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量

第12号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック少量
- 4 赤褐色 ローム粒子少量

第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

第14号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック・炭化物少量

第18号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・焼土粒子少量

第23号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子・ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量, ローム大ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量
- 6 極暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量, ローム大ブロック少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量
- 9 極暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量

第24号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・焼土粒子・炭化材少量

第25号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

第28号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量

第29号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小・中ブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック少量, 炭化物少量, 焼土粒子少量

第34号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・焼土小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量

第36号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・炭化物少量

第38号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量

第42号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック多量

第43号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中・大ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量

第44号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子・黒色土粒子多量
- 3 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, 黒色土粒子少量

第46号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量
- 4 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 5 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量

第48号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック多量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック少量

第49号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第50号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量

第52号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, ローム粒子・大ブロック少量

第53号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, ローム粒子・大ブロック少量

第55号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック少量

第56-B号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック少量

第57号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中・大ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 極暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量

第58号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, ローム中ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中・大ブロック少量

第60号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック少量

第61号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・黒色土粒子中量

第63号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第65号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量, ローム大ブロック少量

第66号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック少量

第67号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第68号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック中量

第70号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック・焼土粒子少量

第75号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量

第76号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化物少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量

第77号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・黒色土粒子少量
- 3 黒色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 5 明褐色 ローム粒子・鹿沼土粒子多量

第81号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・黒色土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量

第86号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・黒色土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量

第87号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中・大ブロック少量

第89号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量

第91号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック少量
- 2 明褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・山砂粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第92号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小・中・大ブロック中量
- 4 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

第95号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, ローム中ブロック少量

第96号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 明褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量

第97号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 4 明褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量

第99号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック少量

第101号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量, 黒色土粒子少量

第105号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 にぶい褐色 ローム粒子少量, 黒色土粒子多量

第106号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・黒色土粒子少量

第107号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 明褐色 黒色土粒子中量, ローム粒子少量

第108号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量

第114号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック少量

第117-A号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量, ローム大ブロック少量

第120号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック少量

第123号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, 鹿沼土粒子・鹿沼土小ブロック少量
- 6 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 7 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・鹿沼土粒子少量
- 8 にぶい黄橙色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・鹿沼土粒子少量
- 9 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック・鹿沼土粒子・鹿沼土小ブロック少量
- 10 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・鹿沼土粒子・鹿沼土小ブロック少量
- 11 黒褐色 ローム粒子・鹿沼土粒子少量
- 12 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・鹿沼土粒子少量

第124号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, ローム小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化物中量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・炭化物少量

第129号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量

第130号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

第131号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量

第133号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子・黒色土粒子多量

第134号土坑土層解説

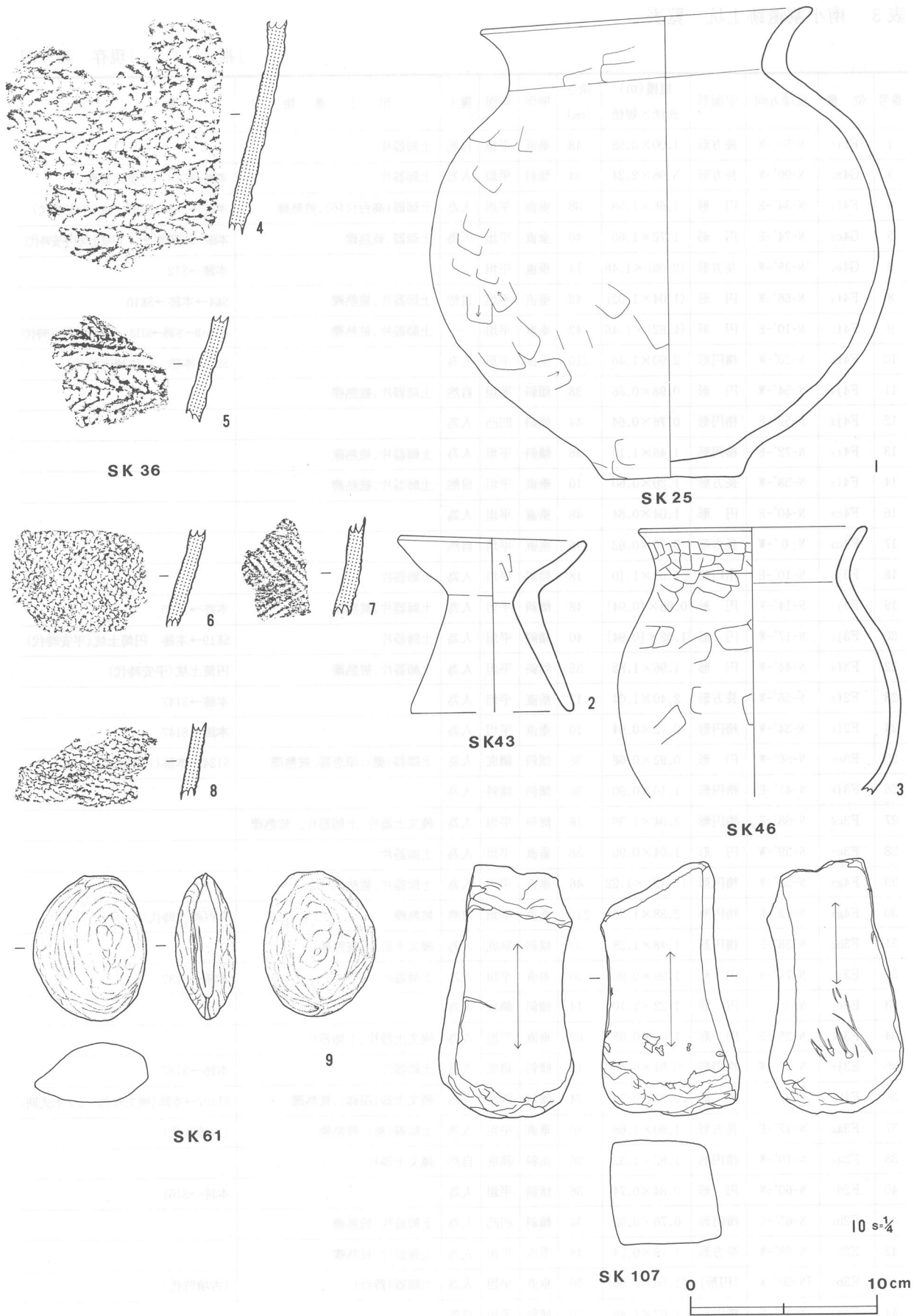
- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子・黒色土粒子中量

その他の土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第425図 1	甕 土師器	A 17.9	平底。体部は球状で最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ, 内面ナデ。	長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P896 70% PL94 SK25底面 外面煤付着 二次焼成
		B 25.2				
		C 7.4				
2	器台 土師器	A 10.2	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は外傾して立ち上がる。器受部中央に貫通孔を穿つ。口縁部外削ぎ。	器受部外面ナデ, 内面ヘラ削り後ナデ。脚部内・外面ナデ。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P899 70% PL94 SK43南コーナー部覆土中層 二次焼成
		B 9.2				
		D〔8.8〕				
		E 6.4				
3	甕 土師器	A 12.4	底部欠損。体部は内彎し, 口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部外面横位のヘラ削り後ナデ, 内面ナデ。体部外面粗いヘラナデ, 内面ナデ。	長石・石英・スコリア・ 粗い砂粒 赤色 普通	P900 60% PL94 SK46中央部底面 外面煤付着 二次焼成 内面剥離
		B(14.6)				

第425図4・5は第36号土坑から, 6～8は第61号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。4・5は胴部片でループ文が, さらに5には撚糸圧痕文が施されている。6～8の胴部片は, 6・8が組紐文, 7には単節の羽状縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第425図9	不明石製品	7.9	6.1	3.2	185.1	雲母片岩	SK-61覆土上層	Q111 PL104
10	砥石	18.2	9.9	9.7	1779.3	凝灰岩	SK-107覆土上層	Q113 PL104



第425図 その他の土抗出土遺物実測・拓影図

表3 南小割遺跡土坑一覽表

〔 〕推定 () 現存 新→旧

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	F2i7	N-50°-W	長方形	1.00×0.98	48	垂直	平坦	自然	土師器片	
3	G4a1	N-90°-W	長方形	5.96×2.24	34	傾斜	平坦	人為	土師器片	本跡→SI8 小竪穴遺構
4	F4f4	N-34°-E	円形	1.66×1.58	38	垂直	平坦	人為	土師器(高台付坏),被熱磔	本跡→SK8 円筒土坑(平安時代)
5	G4c2	N-74°-E	円形	1.72×1.60	40	垂直	平坦	人為	土師器,被熱磔	本跡→SI7墨書「王」 円筒土坑(平安時代)
6	G4e1	N-35°-W	長方形	(2.06)×1.46	14	垂直	平坦	—		本跡→SI2
8	F4f4	N-66°-W	円形	(1.04×1.02)	42	垂直	平坦	自然	土師器片,被熱磔	SK4→本跡→SK10
9	F4f5	N-10°-E	円形	[1.62]×1.46	42	垂直	平坦	—	土師器片,被熱磔	SK2A・B→本跡→SI13 円筒土坑(平安時代)
10	F4f4	N-20°-W	楕円形	2.90×1.46	210	垂直	平坦	人為		SK8→本跡 T.P(縄文時代)
11	F4j4	N-54°-W	円形	0.98×0.86	38	傾斜	平坦	自然	土師器片,被熱磔	
12	F4j3	N-52°-E	楕円形	0.76×0.64	44	傾斜	凹凸	人為		
13	F4i3	N-72°-E	楕円形	1.46×1.10	38	傾斜	平坦	人為	土師器片,被熱磔	
14	F4i3	N-38°-W	長方形	1.20×0.60	10	垂直	平坦	自然	土師器片,被熱磔	
16	F4c3	N-40°-E	円形	1.04×0.84	48	垂直	平坦	人為		
17	F4c3	N-0°-W	長方形	0.70×0.62	46	垂直	平坦	自然		
18	F3j0	N-10°-E	楕円形	1.62×1.10	18	傾斜	平坦	人為	土師器片	
19	F3j0	N-14°-W	円形	0.98×[0.94]	48	傾斜	平坦	人為	土師器片,被熱磔	本跡→SK20
20	F3j0	N-17°-W	円形	1.02×[0.94]	40	傾斜	平坦	人為	土師器片	SK19→本跡 円筒土坑(平安時代)
22	F3f9	N-44°-W	円形	1.96×1.82	35	傾斜	平坦	人為	土師器片,被熱磔	円筒土坑(平安時代)
23	F2f2	N-56°-W	長方形	2.40×1.04	12	垂直	平坦	人為		本跡→SI47
24	F2f1	N-34°-W	楕円形	0.72×0.64	10	垂直	平坦	人為		本跡→SI47
25	E3e5	N-66°-W	円形	0.92×0.68	38	傾斜	鍋底	人為	土師器(甕),須恵器,被熱磔	SI24→本跡(古墳時代)
26	F3j8	N-41°-E	楕円形	1.10×0.90	36	傾斜	傾斜	人為		
27	F3c8	N-68°-E	楕円形	2.04×1.36	18	傾斜	平坦	人為	縄文土器片,土師器片,被熱磔	
28	F3c7	N-39°-W	円形	1.04×0.90	38	垂直	平坦	人為	土師器片	
29	F4g2	N-52°-W	楕円形	[1.42]×1.22	46	垂直	平坦	人為	土師器片,被熱磔	
30	F4g2	N-12°-E	楕円形	2.38×1.50	216	垂直	平坦	自然	被熱磔	T.P(縄文時代)
31	F3h2	N-38°-E	楕円形	1.48×1.28	32	傾斜	鍋底	人為	縄文土器片,被熱磔	
32	E3j7	N-74°-W	円形	1.06×0.96	30	垂直	平坦	人為	土師器片	本跡→SI37
33	E3e5	N-0°	円形	1.22×1.10	14	傾斜	鍋底	人為		
34	F3e2	N-25°-E	円形	1.00×0.98	62	垂直	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	
35	E3j7	N-57°-W	楕円形	0.84×0.66	12	傾斜	鍋底	人為	土師器片	本跡→SI37
36	F1b0	N-0°	円形	0.72×0.72	24	傾斜	鍋底	人為	縄文土器(深鉢),被熱磔	SI107→本跡(縄文時代-二ツ木式期)
37	F3a6	N-17°-E	長方形	1.90×1.68	86	垂直	平坦	人為	土師器(甕),被熱磔	(古墳時代)
38	F3a8	N-10°-W	楕円形	1.82×1.32	36	傾斜	鍋底	自然	縄文土器片	
40	F2d1	N-60°-W	円形	0.84×0.74	36	傾斜	平坦	人為		本跡→SI61
41	E2h1	N-65°-E	楕円形	0.76×0.52	34	傾斜	凹凸	人為	土師器片,被熱磔	
42	E2h1	N-68°-W	長方形	1.18×0.74	48	垂直	平坦	人為	土師器片,被熱磔	
43	E3b5	[N-50°-W]	[円形]	(1.50×0.66)	50	垂直	平坦	人為	土師器(器台)	(古墳時代)
44	F3a9	N-42°-E	楕円形	1.62×1.48	70	傾斜	平坦	自然		
45	F3b7	N-65°-W	楕円形	3.54×2.34	196	垂直	平坦	人為		T.P(縄文時代)

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) 長径×短径	高さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
46	E3d1	N-0°	円形	1.52×1.52	78	垂直	平坦	人為	縄文土器片,土師器(甕),不明土製品	
47	E2c0	N-19°-E	楕円形	1.84×1.68	62	垂直	平坦	人為	土師器(坏,碗,甕,甗),支脚	(古墳時代)
48	E2i4	N-57°-W	長方形	1.82×1.00	78	垂直	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	
49	E2j4	N-39°-W	長方形	1.02×0.92	30	傾斜	平坦	人為	縄文土器片,土師器片,被熱磔	
50	E2i2	N-65°-W	長方形	1.10×0.66	40	垂直	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	
51	E2i4	N-40°-W	隅丸長方形	3.66×2.38	36	垂直	平坦	自然	縄文土器(深鉢-尖底土器),被熱磔	(縄文時代)
52	E2i5	N-46°-E	長方形	1.20×0.84	136	垂直	平坦	人為	土師器片,被熱磔	本跡→SK54
53	E2i6	N-41°-E	長方形	1.24×0.82	92	垂直	平坦	人為	土師器片,被熱磔	本跡→SK54
54	E2i5	N-49°-W	長方形	1.46×[0.72]	34	垂直	平坦	-		SK52,53→本跡
55	F2a6	N-59°-W	楕円形	1.25×0.90	49	垂直	平坦	人為		
56A	E2f8	N-42°-W	長方形	1.60×0.74	50	垂直	平坦	人為	縄文土器片,土師器片,被熱磔	SK56B→本跡
56B	E2e8	N-52°-W	[長方形]	1.22×[0.62]	58	垂直	平坦	人為	土師器片	本跡→SK56A,57
57	E2e8	N-52°-W	長方形	1.86×0.60	58	垂直	平坦	人為		SK56B→本跡
58	E2e8	N-50°-W	長方形	1.58×0.64	46	垂直	平坦	人為	縄文土器片,土師器片,被熱磔	
59	E2d0	N-13°-E	楕円形	1.26×1.10	18	傾斜	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	
60	E2a2	N-59°-W	長方形	1.34×1.02	46	傾斜	鍋底	人為		
61	D2i2	N-71°-W	楕円形	[1.82]×1.48	28	傾斜	平坦	自然	縄文土器(深鉢),石器	(縄文時代-関山Ⅱ式期)
62	D2j3	N-64°-W	円形	1.64×1.60	194	垂直	平坦	自然		SK63→本跡 T.P(縄文時代)
63	D2j3	N-25°-E	楕円形	2.84×1.30	42	垂直	鍋底	自然		本跡→SK62
64	D2j4	N-38°-E	楕円形	1.24×1.12	38	傾斜	鍋底	自然	土師器片,被熱磔	
65	D2j4	N-57°-W	長方形	1.58×0.92	24	傾斜	平坦	人為	縄文土器片	
66	D2d8	N-63°-W	長方形	1.42×0.90	50	垂直	平坦	人為		本跡→SI140
67	D2c8	N-0°	円形	1.62×1.62	44	傾斜	鍋底	自然	縄文土器片,被熱磔	
68	C2j8	[N-8°-E]	[楕円形]	[1.38×1.21]	54	傾斜	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	本跡→SI136,SK69
69	C2j8	N-16°-E	楕円形	1.58×1.36	42	傾斜	平坦	-		SK68→本跡
70	D3d1	N-41°-E	長方形	2.06×0.92	42	垂直	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	本跡→SI139
71	F2g5	N-30°-E	楕円形	2.78×1.04	206	垂直	平坦	人為		SI58→本跡 T.P(縄文時代)
72	F1a0	N-50°-W	楕円形	1.72×1.26	42	傾斜	鍋底	自然		
73	E1g0	N-22°-W	楕円形	2.88×0.86	216	垂直	平坦	自然	縄文土器片,剥片,被熱磔	T.P(縄文時代-ニツ木式期)
74	E1g0	N-63°-W	楕円形	1.20×0.94	166	垂直	平坦	自然	縄文土器片	SI129→本跡 T.P(縄文時代-ニツ木式期)
75	E1i9	N-75°-W	長方形	1.56×0.92	54	傾斜	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	本跡→SI110
76	D2c9	N-76°-E	楕円形	1.72×1.14	77	傾斜	凹凸	人為		
77	D2f8	N-48°-W	楕円形	1.32×1.12	180	垂直	平坦	自然	縄文土器片,被熱磔	SI141→本跡 T.P(縄文時代)
78	E1j8	N-66°-W	隅丸方形	1.44×1.40	210	垂直	平坦	-	縄文土器片,土師器片,被熱磔	
79	E2c1	N-69°-W	楕円形	1.30×1.06	164	垂直	平坦	自然		SI108→本跡 T.P(縄文時代)
80	F2c9	N-51°-W	長方形	1.30×0.78	56	垂直	平坦	人為	土師器片	本跡→SI54
81	D2f3	N-0°	円形	1.00×1.00	44	傾斜	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	
82	D2i3	N-56°-W	[長方形]	1.90×(1.20)	44	傾斜	平坦	人為		SK89→本跡→SK83
83	D2i3	N-30°-E	長方形	1.76×1.30	42	傾斜	平坦	人為		SK82→本跡
84	D2h3	N-76°-E	楕円形	0.88×0.72	42	傾斜	鍋底	自然		
85	D2g3	N-26°-W	隅丸長方形	1.84×1.32	18	傾斜	平坦	人為	土師器片,被熱磔	(古墳時代)
86	D2f3	N-77°-W	楕円形	1.60×1.10	12	傾斜	平坦	人為	被熱磔	SK87→本跡
87	D2f4	N-62°-W	長方形	1.30×0.90	44	傾斜	平坦	人為	土師器片,被熱磔	本跡→SK86
88	D2f2	N-13°-E	楕円形	3.66×2.18	124	傾斜	鍋底	人為	縄文土器(深鉢),剥片,被熱磔	T.P(縄文時代前期)
89	D2i2	N-63°-W	長方形	1.12×0.90	42	垂直	平坦	人為	被熱磔	本跡→SK82
90	F2i6	N-53°-W	長方形	0.98×0.78	30	垂直	平坦	-	縄文土器片,土師器片,被熱磔	

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) 長径×短径	高さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
91	D3h5	N-65°-E	長方形	4.66×2.36	40	傾斜	平坦	人為	縄文時代,土師器片,被熱磔	本跡→SK92
92	D3h6	N-67°-E	長方形	4.76×2.54	40	傾斜	平坦	人為	縄文時代,土師器片,被熱磔	SI156,SK91→本跡
93	D2d6	N-11°-E	楕円形	2.62×1.88	10	傾斜	平坦	自然		
94	D2d6	N-48°-W	楕円形	1.46×1.08	50	傾斜	鍋底	人為		
95	F3a9	N-2°-E	円形	1.42×1.32	42	垂直	平坦	人為		
96	E3j9	N-21°-W	楕円形	1.14×1.10	34	傾斜	平坦	自然		本跡→SK97
97	E3j9	N-31°-W	円形	1.50×1.46	64	傾斜	平坦	自然		SK96→本跡
98	E3j8	N-27°-W	楕円形	2.50×1.16	146	垂直	平坦	自然		T.P(縄文時代)
99	F3a7	N-39°-E	円形	1.32×1.20	84	垂直	平坦	人為	土師器片	
100	F3e6	N-41°-W	楕円形	2.48×1.42	190	垂直	平坦	人為	被熱磔	T.P(縄文時代)
101	F3d4	N-21°-E	楕円形	1.78×1.50	248	傾斜	鍋底	自然		
102	F3e2	N-53°-W	楕円形	3.42×2.04	258	垂直	平坦	自然	縄文土器片,石器	SI149→本跡 T.P(縄文時代-ニツ木式期)
103	F2d6	N-46°-W	長方形	1.26×[0.86]	50	垂直	平坦	人為	土師器片	本跡→SD1
104	E3h3	N-46°-W	楕円形	1.72×1.18	208	垂直	平坦	自然		T.P(縄文時代)
105	E3h4	N-10°-E	長方形	1.66×0.90	28	傾斜	平坦	自然	縄文土器片	本跡→SI184
106	E3h4	N-42°-W	楕円形	1.78×0.90	30	傾斜	平坦	自然	縄文土器片,剥片,被熱磔	
107	E3f2	N-17°-W	楕円形	1.24×1.08	20	傾斜	平坦	人為	縄文土器片,土師器片,石器(砥石),剥片	
108	E3e3	N-0°	円形	0.90×0.88	50	傾斜	平坦	人為	土師器片,被熱磔	
109	E3c2	N-54°-E	不整形	1.84×1.36	60	傾斜	凹凸	自然		
110	E3g3	N-54°-E	方形	0.88×0.86	30	傾斜	鍋底	自然		SK116→本跡
111	E2a5	N-56°-W	方形	0.84×0.80	50	垂直	平坦	人為	土師器片,須恵器	
112A	E2a5	N-53°-W	楕円形	(0.92)×0.80	22	垂直	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	SK112B→本跡
112B	E2a5	N-58°-W	長方形	1.26×0.68	38	垂直	平坦	人為		本跡→SK112A
113	D2i6	N-65°-E	楕円形	3.96×1.60	62	傾斜	鍋底	-	縄文土器片,土師器片,被熱磔	本跡→SI104
114	E3b4	N-38°-E	方形	1.22×1.12	54	垂直	平坦	人為		
115	E3j1	N-48°-W	楕円形	2.08×1.26	220	垂直	平坦	自然		T.P(縄文時代)
116	E3g3	N-41°-E	楕円形	2.32×0.86	60	垂直	凹凸	人為		本跡→SK110
117A	D2c6	N-12°-E	長方形	1.50×0.74	36	傾斜	平坦	人為		本跡→SK117B
117B	D2c6	N-53°-W	楕円形	1.10×0.90	38	傾斜	平坦	人為	被熱磔	SK117A→本跡
118	D2b7	N-34°-E	[楕円形]	[1.90×0.86]	120	垂直	平坦	自然		SI99→本跡 T.P(縄文時代)
119	D2a5	N-34°-E	楕円形	1.94×1.16	106	垂直	平坦	自然		T.P(縄文時代)
120	D2a5	N-34°-E	長方形	1.20×1.08	110	傾斜	平坦	人為		
121	C2j9	N-75°-W	楕円形	1.46×1.22	54	傾斜	平坦	自然		
122	D2e9	N-36°-W	楕円形	1.68×1.44	202	垂直	平坦	自然		T.P(縄文時代)
123	D3h6	N-23°-W	楕円形	0.94×0.83	160	垂直	平坦	自然		SI182→本跡 T.P(縄文時代)
124	C3i5	N-17°-E	長方形	2.64×2.42	95	傾斜	凹凸	人為	土師器片	
125	A3e3	N-46°-E	隅丸長方形	2.55×1.28	145	垂直	平坦	人為		T.P(縄文時代)
126	E4c2	N-56°-E	楕円形	2.31×2.07	140	垂直	平坦	自然	土師器片	
127	E4c1	N-3°-W	隅丸長方形	2.21×1.07	195	垂直	平坦	自然		T.P(縄文時代)
128	D4f2	N-67°-W	隅丸長方形	(1.19)×1.46	82	傾斜	平坦	自然	土師器片	SI173→本跡→SI174
129	D4e5	N-44°-W	円形	0.86×0.83	44	傾斜	鍋底	人為	土師器片,須恵器,被熱磔	
130	D4c7	N-42°-W	楕円形	1.07×0.95	17	傾斜	平坦	人為	土師器片	
131	E3g9	N-29°-E	楕円形	1.34×0.91	27	傾斜	平坦	人為	土師器片,鉄滓	
132	E3g0	N-0°	円形	1.00×1.00	32	傾斜	平坦	人為	土師器片	円筒土坑(平安時代)
133	D4h2	N-37°-W	楕円形	1.82×1.46	30	傾斜	平坦	人為	縄文土器片	
134	D3g8	N-33°-W	不定形	1.74×1.34	18	傾斜	平坦	自然	粘土塊	

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
135	D3j ₉	N-24°-E	楕円形	2.02×0.70	130	垂直	平坦	自然		T.P(縄文時代)
136	D3a ₀	N-80°-W	楕円形	1.42×1.00	194	垂直	平坦	自然		SI191→本跡 T.P(縄文時代)
137	D4c ₃	N-66°-W	楕円形	1.56×1.15	227	垂直	平坦	自然		本跡→SI175井戸
138	D4c ₂	N-49°-W	楕円形	(1.24)×1.06	40	傾斜	鍋底	自然		SI178→本跡
139	D4d ₃	N-77°-E	円形	1.14×1.10	217	垂直	平坦	自然		本跡→SI175井戸
140	D3j ₄	N-10°-W	楕円形	1.02×0.86	150	垂直	平坦	自然		T.P(縄文時代)

5 溝

今回の調査で、当遺跡からは3条の溝を検出した。ここでは、溝の形状、規模、覆土の状態及び出土遺物等について記載する。

第1号溝（付図）

位置 調査区南部，F2・F3区。

重複関係 本跡は、F3f₁区で第29・51号住居跡の南西壁を、F2d₀区で第54号住居跡の南西壁と第103号土坑を、F2b₈区で第118号住居跡の北東部を、F2a₈区で第119号住居跡の南西部を、F2i₆区で第72号住居跡の北東壁と第103号土坑をそれぞれ掘り込んでおり、本跡が最も新しい。

規模と形状 上幅0.70～1.30m，下幅0.50～0.90m，深さは13～20cmで、全長約41mである。F3e₁区で北西方向にほぼ直角に折れる「逆L字状」である。底面は丸みを帯び、断面形は「U字状」である。

方向 F3f₁区から北東方向に延び、F3e₁区で北西方向（N-35°-W）にほぼ直角に折れ、直線状に延びている。

覆土 4層からなり、自然堆積と考えられる。上・中層には焼土粒子が含まれ、更に中層には焼土ブロックが流れ込んでいる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 3 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・焼土小・中ブロック中量，炭化粒子少量 | 4 褐色 | ローム粒子多量 |

遺物 覆土中から、流れ込みと考えられる土師器片（甕）22点が出土している。

所見 本跡は、6軒の古墳時代前期の住居跡を掘り込んでいることから、それらよりも新しい時期に構築されたものであるが、時期を決定できる遺物がなく、詳細な時期や性格については不明である。

第2号溝（付図）

位置 調査区北西部，C2・D2区。

規模と形状 上幅0.50～1.10m，下幅0.23～0.62m，深さは16cm程で、全長約12mである。北西方向に傾斜しながらほぼ直線に延び、底面は皿状で、断面形はU字状である。北西端部は、長方形に掘り込まれている。

方向 D2b₈区から北西方向（N-49°-W）に直線的に延びている。

覆土 3層からなり、自然堆積と考えられる。全体的にローム粒子が多い層である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量 | 3 明褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量，黒色粒子少量 | | |

遺物 土師器片(甕) 6点, 須恵器片 1点が覆土中から出土している。いずれも細片であり, 流れ込みと考えられる。

所見 本跡は, 時期を決定できる遺物がなく, 詳細は不明である。

第3号溝 (付図)

位置 調査区中央部, C3・D3・E3区。

重複関係 本跡は, E4e₄区で第153号住居跡の南西壁を, D3h₇区で第156号住居跡の南西部を, D3f₆区で第146号住居跡の北東壁を, C3i₃区で第157号住居跡の南西壁をそれぞれ掘り込んでおり, 本跡が最も新しい。

規模と形状 上幅1.70~2.10m, 下幅1.40~1.50m, 深さは30~55cmで, 全長約88mである。E4f₁区から北西方向に直線的に延びている。底面は平坦で, 断面形は逆台形状である。南側に僅かに傾斜している。

方向 N-25°-W

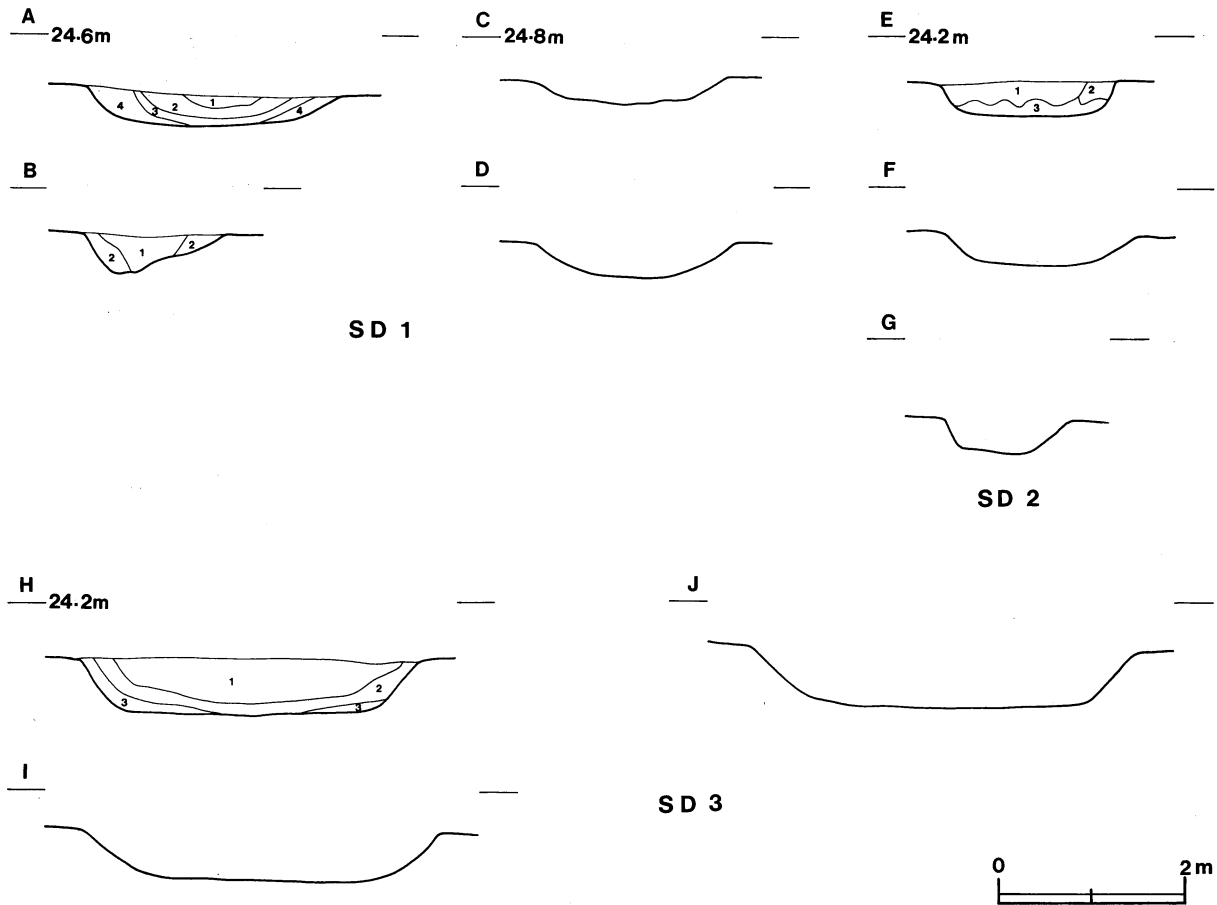
覆土 3層からなり, 自然堆積と考えられる。全体にローム粒子が含まれるが, 特に第2層に多い。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------|------|-----------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子中量 | 3 褐色 | 黒色粒子多量, ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量 | | |

遺物 覆土中から, 土師器片が甕を中心に771点出土している。いずれも細片であり, 流れ込みと考えられる。

所見 本跡は, 4軒の古墳時代前期の住居跡を掘り込んでいることから, それらよりも新しい時期に構築されたものであるが, 時期を決定できる遺物がなく, 詳細な時期や性格については不明である。



第426図 第1~3号溝土層・断面実測図

6 その他の遺構

当遺跡から、地点貝塚6基、地下式竈3基、不明遺構1基を検出した。以下に、形状、規模、覆土の状態及び出土遺物等について記載する。

(1) 地点貝塚

当遺跡から、地点貝塚6基（A・Bを含む）を検出している。いずれも調査エリアの南西端部に位置している。貝の抽出には、2～5mmメッシュの篩を用いた。魚骨等の小動物遺体は、検出できなかったが、篩のメッシュより更に細片化している可能性が考えられる。

第1-A号地点貝塚（第427図）

位置 調査区南西部，F2i6区。
規模と平面形 長軸1.10m，短軸1.06mの楕円形で、深さ8cmである。

長径方向 N-14°-W

壁面 なだらかに立ち上がる。

底面 凹凸があり、僅かに傾斜する。

覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

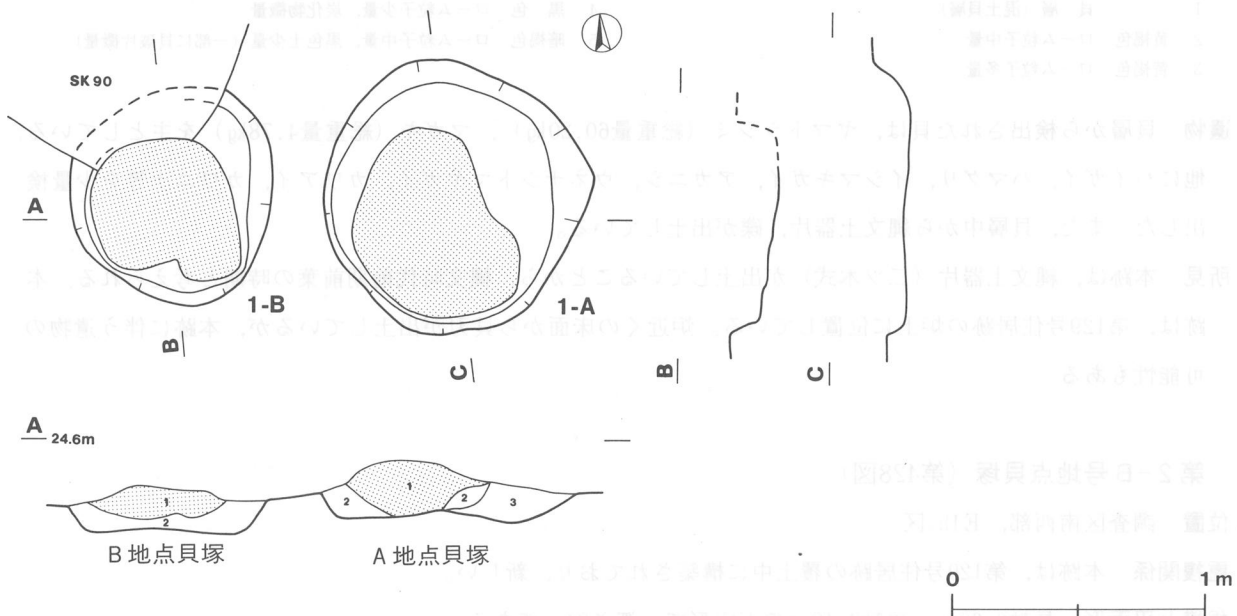
- | | |
|---------------------------|--------------|
| 1 貝層 | 3 褐色 ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子，炭化粒子微量，ローム粒子少量 | |

遺物 貝層から検出された貝は、ヤマトシジミを主体とし総重量10.7kgである。その他として、カワアイ，イシマキガイが少量出土している。

所見 土器片等が出土しておらず、詳細な時期については不明であるが、第2号地点貝塚と近い時期と考えられることから縄文時代前期前葉と思われる。

第1-B号地点貝塚（第427図）

位置 調査区南西部，F2i6区。



第427図 第1-A・B号地点貝塚実測図

重複関係 本跡は、第90号土坑に北壁を掘り込まれている。

規模と平面形 長軸0.86m、短軸0.80mの楕円形で、深さ14cmである。

長径方向 N-10°-W

壁面 なだらかに立ち上がる。

底面 平坦であるが、僅かに傾斜する。

覆土 2層からなる人為堆積である。

土層解説

- | | |
|---|------------------------------|
| 1 | 貝層 |
| 2 | 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子微量 |

遺物 貝層から検出された貝は、ヤマトシジミを主体とし総重量5.2kgである。第1-A号地点貝塚と同様に他にカワアイ、イシマキガイが少量出土している。

所見 本跡は、第1-A号地点貝塚の西側に隣接しており、ほぼ同時期に構築されたと思われる。土器片等が出土しておらず詳細な時期については不明であるが、第2号地点貝塚と同一時期と考えられることから縄文時代前期前葉と思われる。

第2-A号地点貝塚 (第428図)

位置 調査区南西部, E1h0区。

重複関係 本跡は、第129号住居跡の覆土中に構築されており、新しい。

規模と平面形 長軸1.56m、短軸0.92mの不定形で、深さ28cmである。

長径方向 N-0°

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 5層からなる人為堆積である。第4層は、第1層である貝層を覆う。第5層には、微細な貝破片が混入しているが、第4層には含まれていない。第4層は、貝層と第5層の接点であり、貝の成分が変化して土壌化した可能性がある。

土層解説

- | | | | |
|---|-------------|---|-------------------------------|
| 1 | 貝層 (混土貝層) | 4 | 黒色 ローム粒子少量, 炭化物微量 |
| 2 | 黄褐色 ローム粒子中量 | 5 | 暗褐色 ローム粒子中量, 黒色土少量 (一部に貝破片微量) |
| 3 | 黄褐色 ローム粒子多量 | | |

遺物 貝層から検出された貝は、ヤマトシジミ (総重量60.20kg)、マガキ (総重量4.78kg) を主としている。他にハイガイ、ハマグリ、イシマキガイ、アカニシ、ウネナシトマヤガイ、カワアイ、カワニナ等を少量検出した。また、貝層中から縄文土器片、礫が出土している。

所見 本跡は、縄文土器片 (二ツ木式) が出土していることから、縄文時代前期前葉の時期と考えられる。本跡は、第129号住居跡の炉上に位置している。炉近くの床面から貝刃が出土しているが、本跡に伴う遺物の可能性もある。

第2-B号地点貝塚 (第428図)

位置 調査区南西部, E1h0区。

重複関係 本跡は、第129号住居跡の覆土中に構築されており、新しい。

規模と平面形 長軸0.60m、短軸0.48mの不定形で、深さ24cmである。

長径方向 N-5°-W

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 4層からなる人為堆積である。貝は、堆積状況から判断して、壁際に少量の表土が流入した後に北壁側から投げ入れられている。

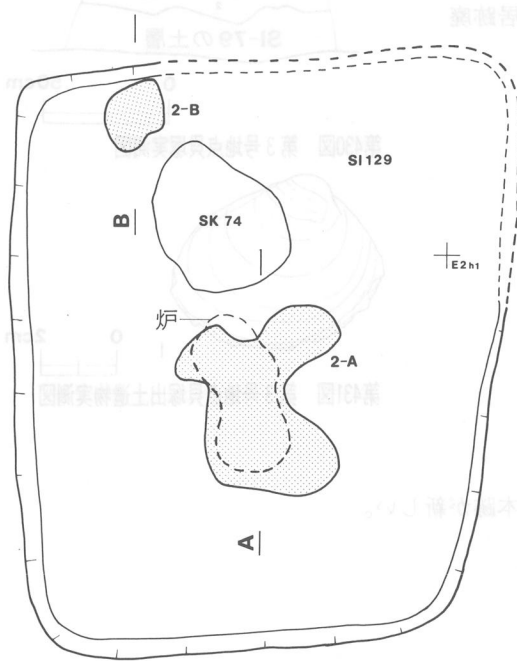
土層解説

- | | | | | | |
|---|-----------|---------------------|-----|---------------------------|--------------------------------|
| 1 | 貝層 (混土貝層) | 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量, 黒色土少量 (一部に貝破片微量) | |
| 2 | 黄褐色 | ローム粒子中量 | 5 | 黒褐色 | ローム粒子・褐色土粒子・黒色土粒子中量, 炭化物・貝破片少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 | | | |

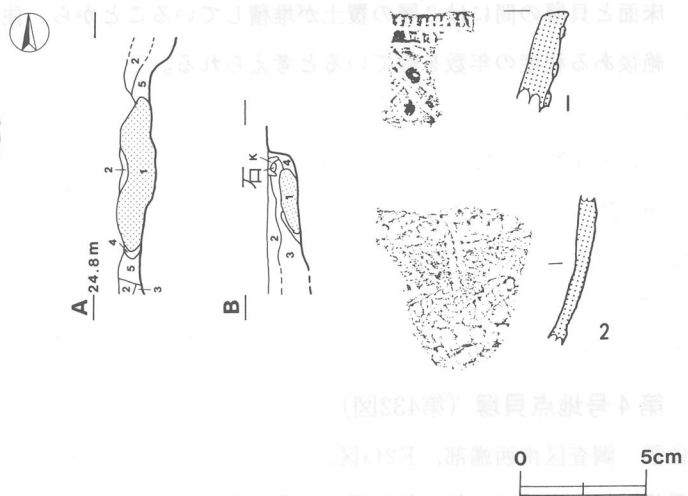
遺物 貝層から検出された貝は、ヤマトシジミ (総重量49.60kg), マガキ (総重量1.20kg) を主体としている。

他にハイガイ, ハマグリ, イシマキガイ, アカニシ, ウネナシトマヤガイ, カワアイ, カワニナ等を少量検出した。また、貝層中から縄文土器片, 礫が出土している。

所見 貝層が第129号住居跡の床面まで達しており、接していた住居跡の床面は硬化していた。踏み固めたことによるのではなく、貝による化学変化の可能性が高い。貝層と床面との間に覆土が殆どないことから、住居跡の廃絶直後に貝塚が形成されたと考えられる。本跡は、縄文土器 (二ツ木式) が出土していることから、縄文時代前期前葉の時期と考えられる。



第428図 第2-A・B号地点貝塚実測図



第429図 第2-A・B号地点貝塚出土遺物拓影図

第429図1・2は第2号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、瘤状貼付文が施されている。また口縁端部はヘラ状工具によるキザミ目が施されている。2は胴部片で、ループ文が施されている。

第3号地点貝塚 (第430図)

位置 調査区南西部, E2g2区。

重複関係 本跡は、第79号住居跡の覆土中に形成されている。

規模と平面形 長軸2.16m, 短軸0.86mの不定形で、深さ20cmである。

長径方向 N-0°

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

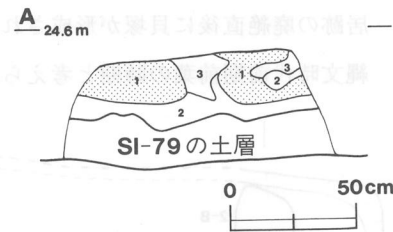
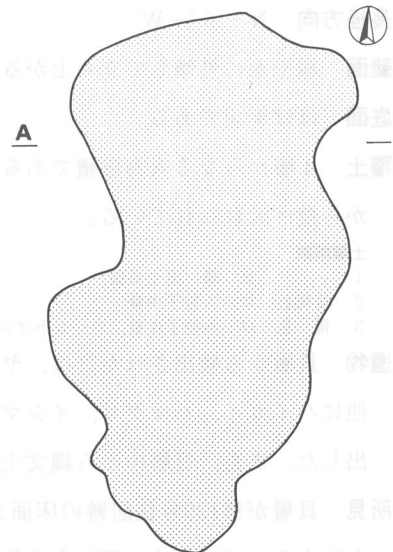
覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 貝層
- 2 黒褐色 ローム粒子中量 (混土貝層)
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量

遺物 貝層から検出された貝は、ヤマトシジミ (総重量99.90kg)、マガキ (総重量4.20kg) が主体である。他にハイガイ、イシマキガイ、ウネナシトマヤガイ、カワアイ、カワニナ等を少量検出した。貝層中から貝刃が1点出土している。

所見 本跡は、土器片等が出土しておらず詳細な時期については不明であるが、第2号地点貝塚と同一時期と考えられることから縄文時代前期前葉と思われる。第79号住居跡の覆土中に形成されているが、床面と貝層の間には2層の覆土が堆積していることから、住居跡廃絶後ある程度の年数を経ていると考えられる。



第430図 第3号地点貝塚実測図



第431図 第3号地点貝塚出土遺物実測図

第4号地点貝塚 (第432図)

位置 調査区南西端部, F2f3区。

重複関係 本跡は、第46号住居跡の覆土中に形成されており、本跡が新しい。

規模と平面形 径0.70mの円形で、深さ22cmである。

長径方向 N-29°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

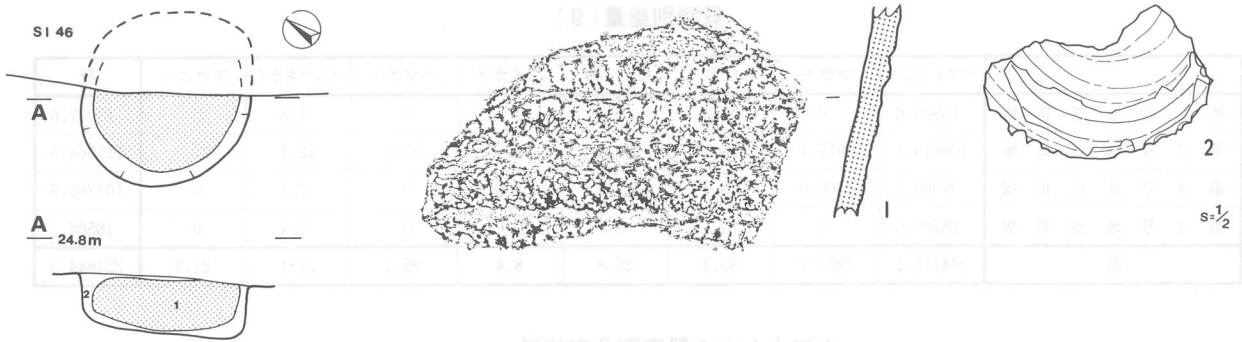
覆土 2層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 貝層 (混土貝層)
- 2 暗褐色 ローム粒子微量

遺物 貝層から検出された貝は、ヤマトシジミ (総重量18.50kg) が主体で、他にカワアイ、イシマキガイを少量検出した。また、貝層中から縄文土器細片が2点、貝刃1点が出土している。

所見 本跡は、遺物から縄文時代前期前葉の時期と考えられる。第46号住居跡の覆土中に形成されているが、貝層と床面は接しており住居跡廃絶後まもなく貝が投棄されたと考えられる。



第432図 第4号地点貝塚実測図

第433図 第4号地点貝塚出土遺物実測・拓影図

第433図1は第4号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で、ループ文が施されている。

ヤマトシジミの殻高・殻長別個体数及び分布状況表

ヤマトシジミ殻高別個体数(個)

殻高 (mm)	14-15	16-17	18-19	20-21	22-23	24-25	26-27	28-29	30-31	計
第1号地点貝塚	0	13	32	100	175	182	142	60	16	720
第2号地点貝塚	13	133	180	130	119	88	74	37	12	786
第3号地点貝塚	0	6	57	143	111	67	31	9	4	428
第4号地点貝塚	0	0	16	51	71	130	105	16	0	389

ヤマトシジミ殻高別分布状況(%)

殻高 (mm)	14-15	16-17	18-19	20-21	22-23	24-25	26-27	28-29	30-31
第1号地点貝塚	0	2	4	14	24	26	20	8	2
第2号地点貝塚	2	17	22	17	15	11	9	5	2
第3号地点貝塚	0	2	13	33	26	16	7	2	1
第4号地点貝塚	0	0	5	13	18	33	27	4	0

ヤマトシジミ殻長別個体数(個)

殻長 (mm)	16-17	18-19	20-21	22-23	24-25	26-27	28-29	30-31	32-33	計
第1号地点貝塚	10	17	73	174	157	183	77	29	0	720
第2号地点貝塚	22	116	243	123	106	87	35	39	15	786
第3号地点貝塚	0	22	84	131	106	49	28	8	0	428
第4号地点貝塚	0	14	24	45	39	160	83	24	0	389

ヤマトシジミ殻長別分布状況(%)

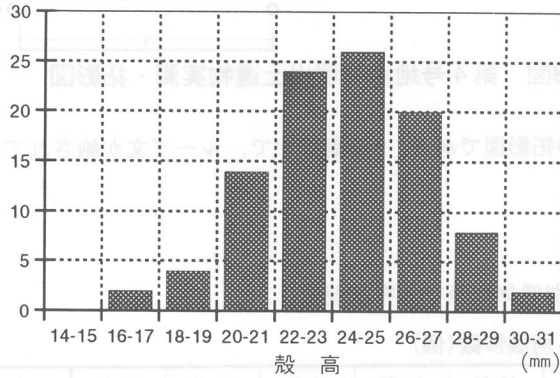
殻長 (mm)	16-17	18-19	20-21	22-23	24-25	26-27	28-29	30-31	32-33
第1号地点貝塚	2	2	10	24	22	25	11	4	0
第2号地点貝塚	3	15	30	15	14	11	5	5	2
第3号地点貝塚	0	5	20	30	24	12	7	2	0
第4号地点貝塚	0	4	7	11	10	41	21	6	0

貝種別重量(ｇ)

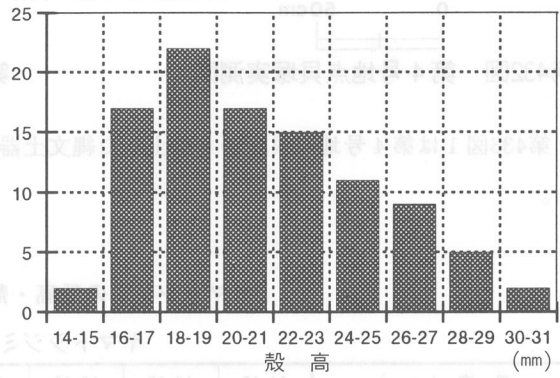
	ヤマトシジミ	マガキ	カワアイ	カワニナ	ハイガイ	ハマグリ	イシマキガイ	アカニシ	計
第1号地点貝塚	15900.0	0	6.3	0	0	0	1.3	0	15907.6
第2号地点貝塚	109815.1	5977.7	18.3	20.0	4.6	95.2	12.1	21.3	115964.3
第3号地点貝塚	99900.0	1300.0	50.0	5.8	3.8	0	7.3	0	101265.9
第4号地点貝塚	18500.0	0	5.7	0	0	0	0.4	0	18506.1
計	244115.1	7277.7	80.3	25.8	8.4	95.2	21.1	21.3	251644.9

ヤマトシジミ殻高別分布状況

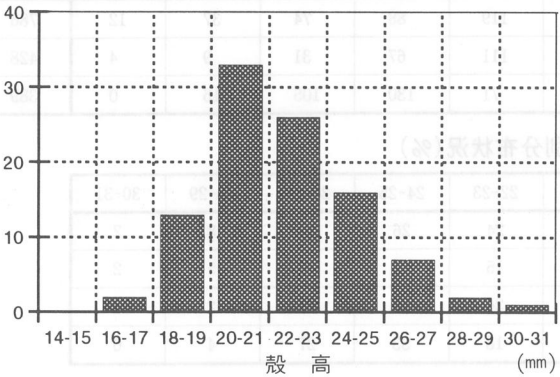
(%) 第1号地点貝塚



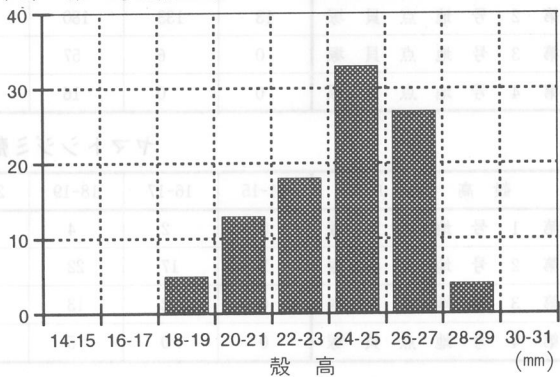
(%) 第2号地点貝塚



(%) 第3号地点貝塚

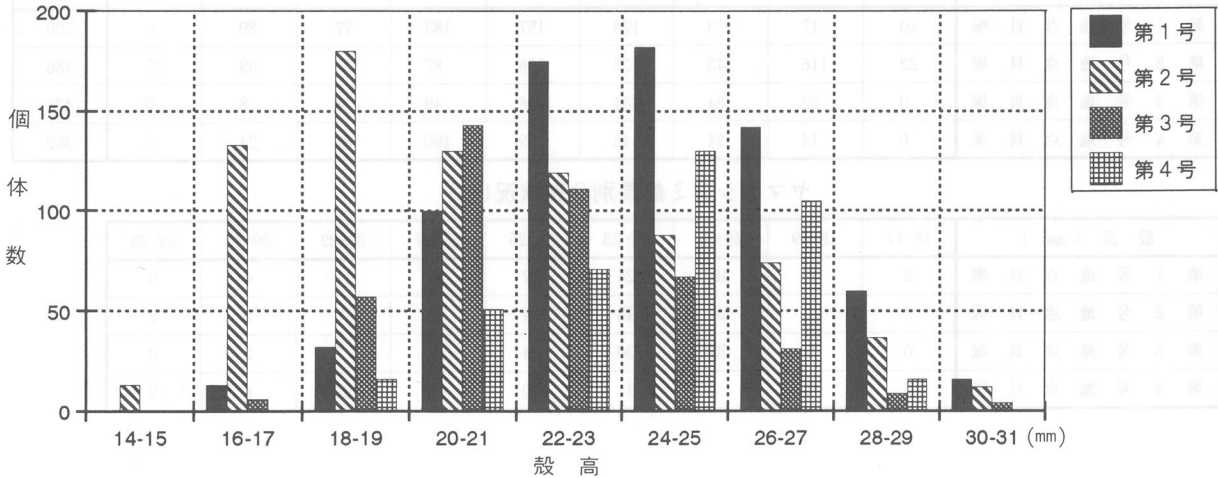


(%) 第4号地点貝塚



(個)

ヤマトシジミ殻高別個体数



第434図 ヤマトシジミ殻高別分布状況・個体数グラフ

(2) 地下式墳

本遺跡からは、調査エリア南端部から地下式墳を3基検出した。第1号地下式墳と第2号地下式墳が重複し、第3号地下式墳は東側半分が農道の為調査エリア外となっている。以下、形状や特徴について記載する。

第1号地下式墳〔SK-2A〕(第435図)

位置 調査区南西部, F4f5区。

重複関係 本跡は、主室の南コーナー部で第9号土坑と第13号住居跡を掘り込んでいる。また、第2号地下式墳に、本跡の大部分が掘り込まれている。

主軸方向 N-70°-E

竪坑 上面は、長径1.60m、短径1.30mの楕円形で深さは1.20mである。底面は、長径0.90m、短径0.80mの隅丸方形で、ほぼ水平な平坦面であるが、主室との境い付近には僅かに盛り上がり認められる。

主室 底面は、長径3.50m、短径2.70mの隅丸方形で、平坦面であるが竪坑側は緩やかなスロープ状となっている。深さは、確認面までで1.40mである。主室の大部分が、第2号地下式墳の主室とほぼ同レベルで重複しており境界が明確にとらえられない。

壁 竪坑は、外傾して立ち上がっている。主室は、ほぼ垂直に立ち上がり、南西壁と北壁はオーバーハングしている。

覆土 覆土の殆どが、第2号地下式墳に掘り込まれているため本跡の覆土は2層のみである。2層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック多量, 炭化物少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック多量, 鹿沼土多量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、第2号地下式墳との重複関係から中世(15世紀後半~16世紀)と考えられる。

第2号地下式墳〔SK-2B〕(第435図)

位置 調査区南西部, F4f5区。

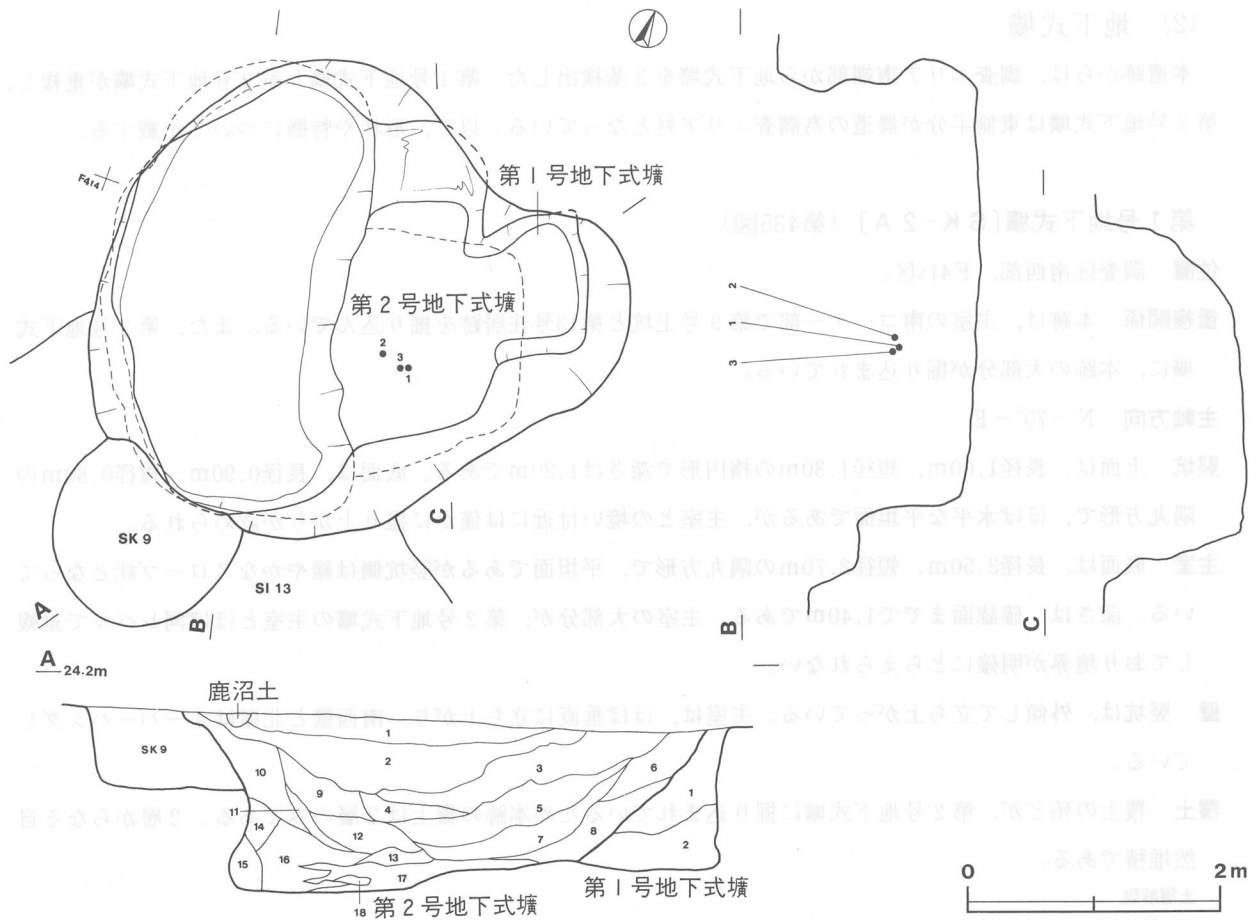
重複関係 本跡は、第1号地下式墳を掘り込んでおり、本跡が新しい。

主軸方向 N-70°-E

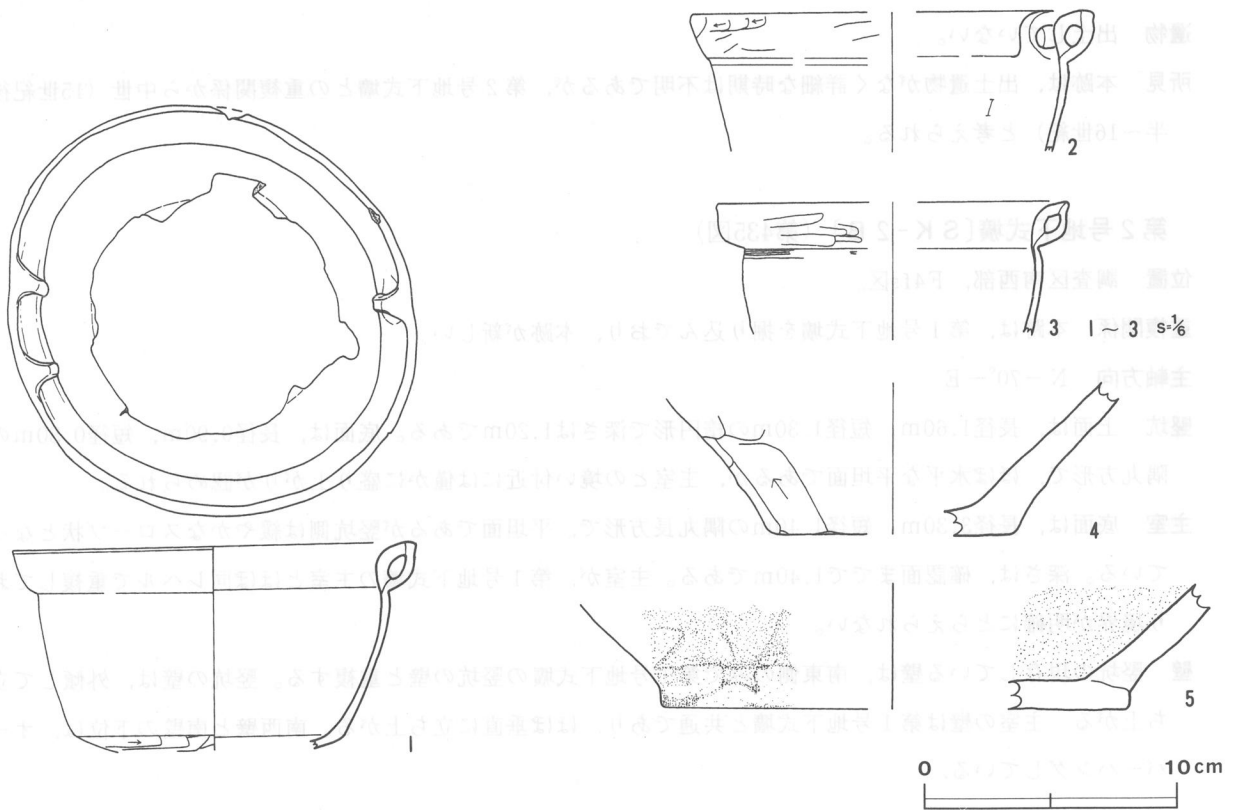
竪坑 上面は、長径1.60m、短径1.30mの楕円形で深さは1.20mである。底面は、長径0.90m、短径0.80mの隅丸方形で、ほぼ水平な平坦面であるが、主室との境い付近には僅かに盛り上がり認められる。

主室 底面は、長径3.30m、短径1.40mの隅丸長方形で、平坦面であるが竪坑側は緩やかなスロープ状となっている。深さは、確認面までで1.40mである。主室が、第1号地下式墳の主室とほぼ同レベルで重複しており境界が明確にとらえられない。

壁 竪坑の現存している壁は、南東側のみで第1号地下式墳の竪坑の壁と重複する。竪坑の壁は、外傾して立ち上がる。主室の壁は第1号地下式墳と共通であり、ほぼ垂直に立ち上がる。南西壁と南壁の下位は、オーバーハングしている。



第435図 第1・2号地下式墳実測図



第436図 第2号地下式墳出土遺物実測図

覆土 18層からなる自然堆積である。壁際と下層には、壁面の崩れによると思われるローム小～大ブロックが多量に含まれている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック少量, 焼土粒子少量 | 10 褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック多量, 鹿沼土多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック少量 | 11 黒褐色 | ローム小ブロック中量, 炭化物少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量 | 12 暗褐色 | ローム小ブロック多量, ローム中ブロック少量, 炭化物少量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック微量, 焼土小粒子微量 | 13 黒褐色 | ローム小ブロック多量, ローム中ブロック少量, 鹿沼土少量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化物微量 | 14 黒褐色 | ローム小ブロック多量, 炭化物少量 |
| 6 暗褐色 | ローム中ブロック微量, ローム小ブロック中量, 鹿沼土中量 | 15 明褐色 | ローム大ブロック多量, 鹿沼土少量 |
| 7 褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック多量, 鹿沼土少量 | 16 暗褐色 | ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化物微量 | 17 橙色 | 鹿沼土多量 |
| 9 褐色 | ローム粒子多量, ローム小・中ブロック多量, 炭化物少量 | 18 明褐色 | ローム中ブロック多量 |

遺物 覆土中から土師器片235点, 土師質土器片101点, 陶器5点が出土している。1～3の内耳鍋は覆土中層から破片で, 4の片口鉢は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から中世(15世紀後半～16世紀)の時期と考えられる。

第2号地下式壙出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第436図 1	内耳土鍋 土師質土器	A 32.0 B (16.5) C (21.4)	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は体部との境に浅い凹線が巡り内彎する。耳は内彎気味に立ち上がり外反して上端部に至る。	口縁部, 体部とも内・外面ナデ。底部外面ヘラナデ, 内面ナデ。	石英・長石・スコリア 浅黄橙色 普通	P884 60% PL95 中央部覆土中層 炭化物付着 二次焼成
2	内耳土鍋 土師質土器	A [32.3] B (11.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎する。口縁部は内彎し, 体部との境に浅い凹線が巡る。耳は内彎気味に立ち上がり外反して上端部に至る。	口縁部外面ヘラ削り後ナデ, 内面ナデ。体部内・外面ナデ。	石英・長石・雲母 赤灰色 普通	P885 20% PL95 中央部覆土中層 煤・炭化物付着
3	内耳土鍋 土師質土器	A [28.2] B (10.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎する。口縁部は体部との境に浅い凹線が巡り内彎する。耳は内彎気味に立ち上がり外反して上端部に至る。	口縁部外面ヘラ削り後ナデ, 内面ナデ。体部内・外面ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P886 20% 中央部覆土中層 煤・炭化物付着
4	片口鉢 陶器	B (6.1) C [10.0]	底部片。平底。体部は外反気味に立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ, 内面ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい赤褐色 普通	P888 5% 覆土中 底部二次焼成
5	甕 陶器	B (5.0) C [18.9]	底部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面口口ナデ。全面施釉。	長石・石英・スコリア 灰色 普通	P889 5% 覆土中

第3号地下式壙〔SK-7B〕(第437図)

位置 調査区南西部, F4i7区。

重複関係 本跡は, 第12号住居跡を, また北西壁が第7-A号土坑を掘り込んでおり, 両遺構より新しい。

主軸方向 N-56°-Wと推測される。

竪坑 エリア外の為確認できず。

主室 底面は, 長径2.80m, 短径確認できた範囲で1.40m隅丸方形で, 平坦面である。深さは, 確認面からで1.40mである。主室の約半分が, 調査エリア外であるため正確な規模はとらえられない。

壁 主室は, 外傾して立ち上がり, 中位で各壁面ともオーバーハングする。

覆土 14層からなる自然堆積である。中層には, 主室の天井部が崩落してできたと考えられるローム小・中ブ

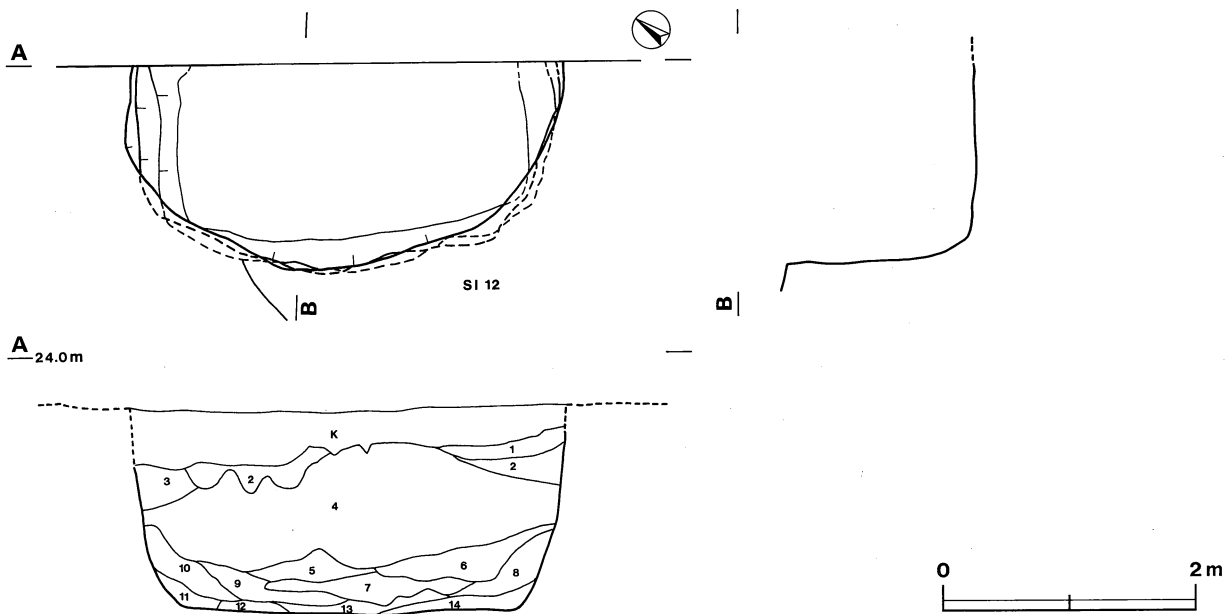
ロックの厚い層がある。

土層解説

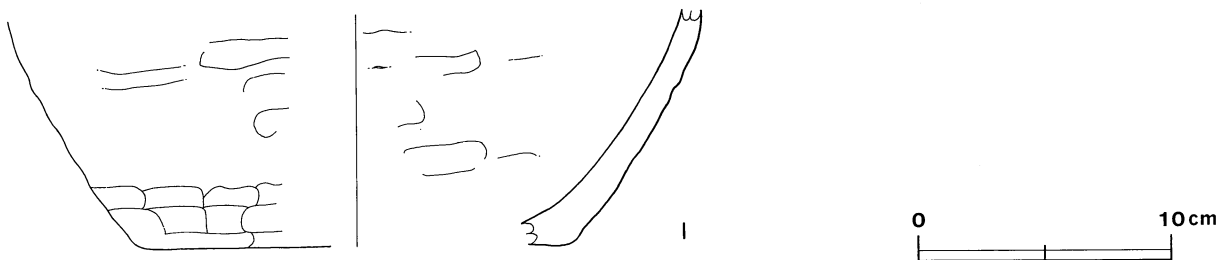
- | | | | |
|-------|---|--------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量, 焼土粒子少量, 炭化材少量 | 9 褐色 | ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量, 焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小・中ブロック中量, 炭化物中量 | 10 明褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量 | 11 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量 |
| 4 明褐色 | ローム中・大ブロック多量 | 12 明褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, ローム中ブロック少量 |
| 5 褐色 | ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量 | 13 黒褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化物少量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量, 焼土粒子少量 | 14 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック多量 |
| 7 褐色 | ローム中・大ブロック中量 | | |
| 8 黒褐色 | ローム粒子多量, ローム小・中ブロック多量 | | |

遺物 覆土中から陶器片が1点出土しているが流れ込みと思われる。

所見 本跡は、遺構に伴う出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、他の地下式壙と同じく中世（15世紀後半～16世紀）と考えられる。



第437図 第3号地下式壙実測図



第438図 第3号地下式壙出土遺物実測図

第3号地下式壙出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第438図 1	甕 陶器	B(9.2) C(17.2)	体部下位の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ヘラ削り後ナデ。	長石・石英・スコリア 灰色 普通	P895 10% 南壁付近覆土中

(3) 不明遺構

調査エリアの南西部から、周溝状の遺構を1基検出した。住居跡との重複が激しいため、上層は削平されている所が多い。以下、遺構の形状や特徴について記載する。

第1号不明遺構（第439図）

位置 調査エリア南西部，F2g7区。

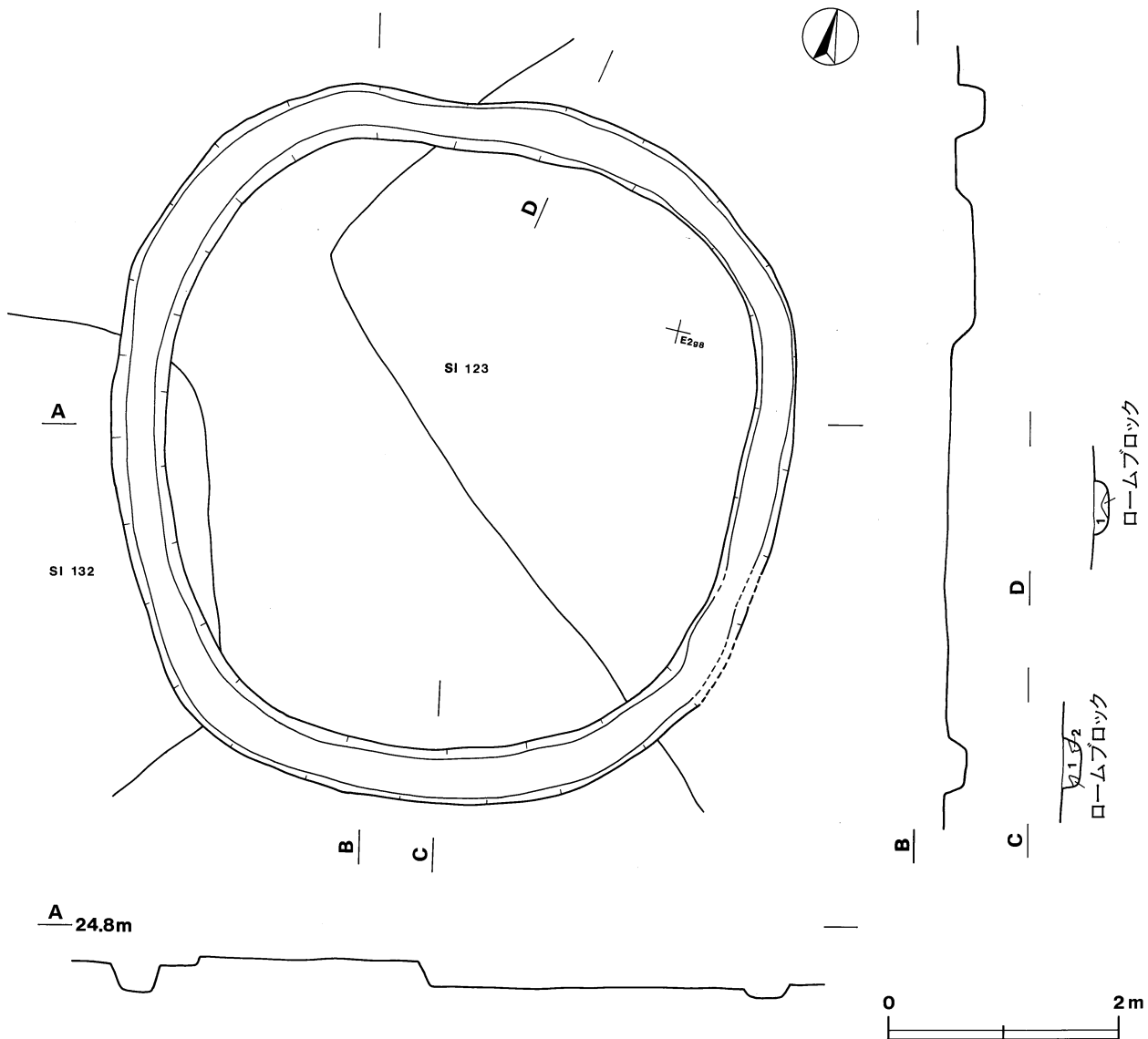
重複関係 本跡は北東部が第123号住居跡を，南西部が第132号住居跡をそれぞれ掘り込んでおり，本跡が最も新しい。

規模と形状 周溝は南北方向に最大径があり，長径6.10m，短径5.90mの楕円形である。上幅は42～50cm，下幅は18～32cmで，深さ16～28cmである。断面形は逆台形状で，壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック塊



第439図 不明遺構実測図

遺物 覆土中から流れ込みと思われる土師器片7点, 縄文土器片2点が出土している。

所見 本跡は, 重複関係から古墳時代前期以降の時期と思われるが, 決定できる遺物がなく詳しい時期については不明である。

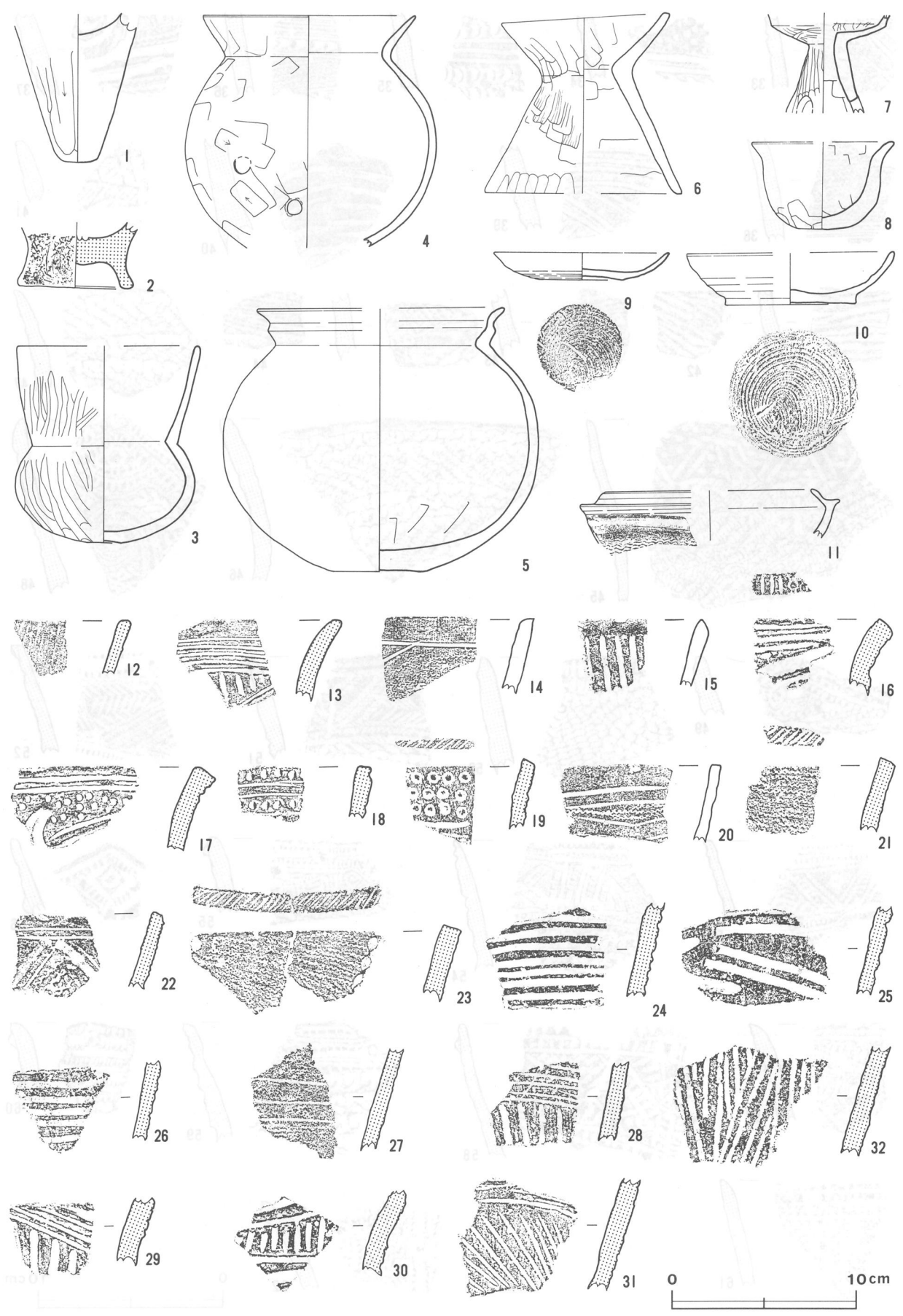
7 遺構外出土遺物

当遺跡からは, 直接遺構に伴わない土器や土製品, 石器・石製品, 鉄製品・古銭が出土している。それらについて, 実測図(第440~446図)及び観察表, 一覧表で一括して報告する。

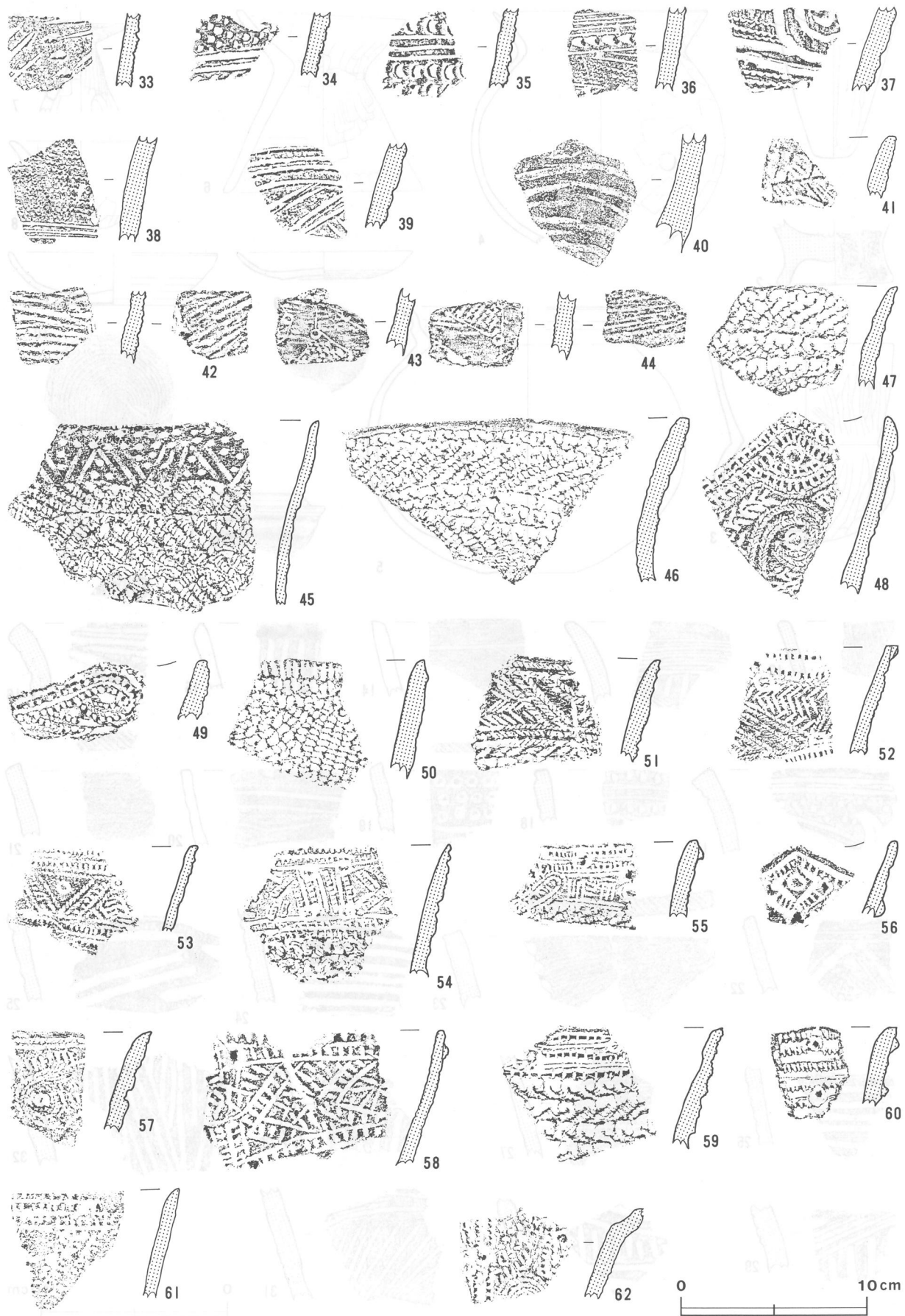
遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第440図 1	尖底土器 縄文土器	B(7.3)	尖底部片。外面縦位のヘラ磨き。天狗の鼻状を呈する。	長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P912 5% PL96 SI-64 二次焼成, 繊維土器
2	深鉢 縄文土器	B(3.6) C 6.3	底部片。繊維土器。底部は「ハ」の字状に開き, 上げ底である。外面に原体端部の押圧が見られる。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P913 5% 表採 繊維土器

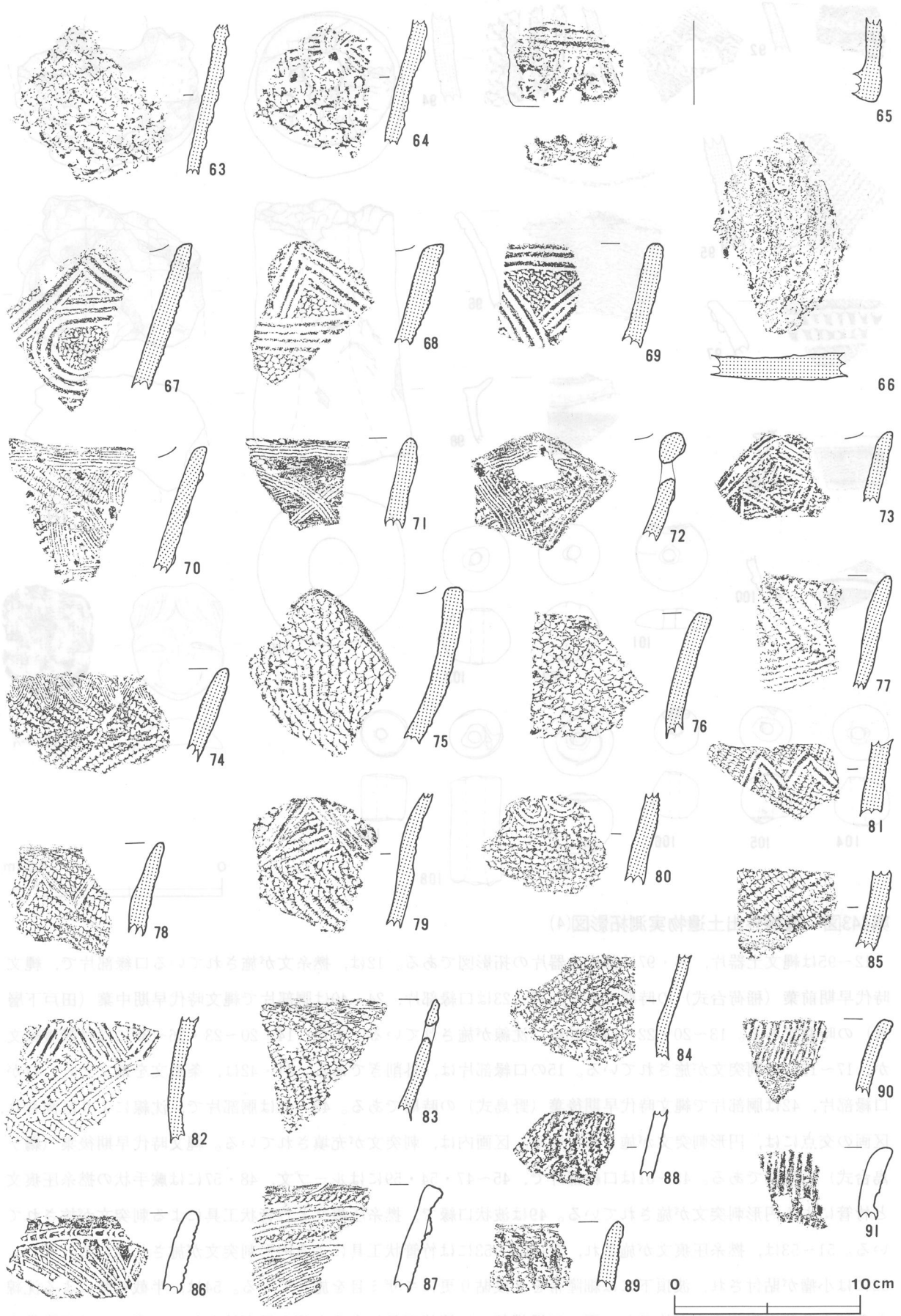
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第440図 3	埴 土師器	A(10.0) B 10.7 C 1.9	僅かに凹む平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外傾する。	口縁端部内・外面横ナデ。口縁部中位から体部の外面縦位のヘラ磨き, 内面ナデ。	長石・石英・スコリア 褐灰色 普通	P917 90% SI-101内面剥離 二次焼成, 外面煤付着
4	甕 土師器	A 11.7 B(12.6)	底部欠損。体部は球状で最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外傾する。体部中位及び下位それぞれに単孔を穿つ。	口縁部外面ヘラナデ, 内面ナデ。体部ヘラナデ, 内面ナデ。	長石・石英・スコリア 赤色 普通	P919 50% PL96 表採 二次焼成, 内面剥離, 孔は外面から穿たれている。
5	甕 土師器	A(13.5) B 14.4 C 5.0	平底。体部は球状で最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外反して立ち上がり, 中位で稜をもつ。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ナデ, 内面ヘラナデ。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P918 70% PL96 表採 外面煤付着
6	器台 土師器	A 9.2 B 9.8 D(10.8) E 6.7	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は外傾して立ち上がる。器受け部中央に貫通孔をもつ。	器受部外縦位の面ヘラナデ, 内面横位のヘラナデ。脚部外面ハケ目整形, 下位ヘラ削り。内面横位のヘラナデ。脚部内面に輪積み痕が残る。	長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P915 70% PL96 表採 外面煤付着
7	器台 土師器	B(5.4) E(3.9)	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は内彎気味に立ち上がり, 下位に弱い稜をもつ。器受け部中央に貫通孔をもつ。脚部に3孔を穿つ。	器受部内・外面ヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き, 内面横位のヘラナデ。内・外面赤彩痕。	長石・石英・スコリア にぶい赤褐色 普通	P916 30% 表採
8	ミニチュア土器 土師器	A(7.8) B 4.8 C 2.6	平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上・中位ナデ, 下位ヘラナデ, 内面ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P920 60% PL96 SI-140
9	皿 土師器	A 9.6 B 1.5 C 4.6	突出した平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部に至る。	ロクロ整形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P894 60% SK-6
10	皿 土師器	A(11.3) B 2.8 C 7.1	平底。体部は内彎して立ち上がり口縁部に至る。	ロクロ整形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P914 60% SI-98
11	高坏 須恵器	A(11.2) B(2.7)	口縁部片。体部は内彎し, 口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は内傾する。	ロクロ整形。体部外面に櫛描による横走波状文。	長石・スコリア 灰色 普通	P1000 5% PL96 SD-3



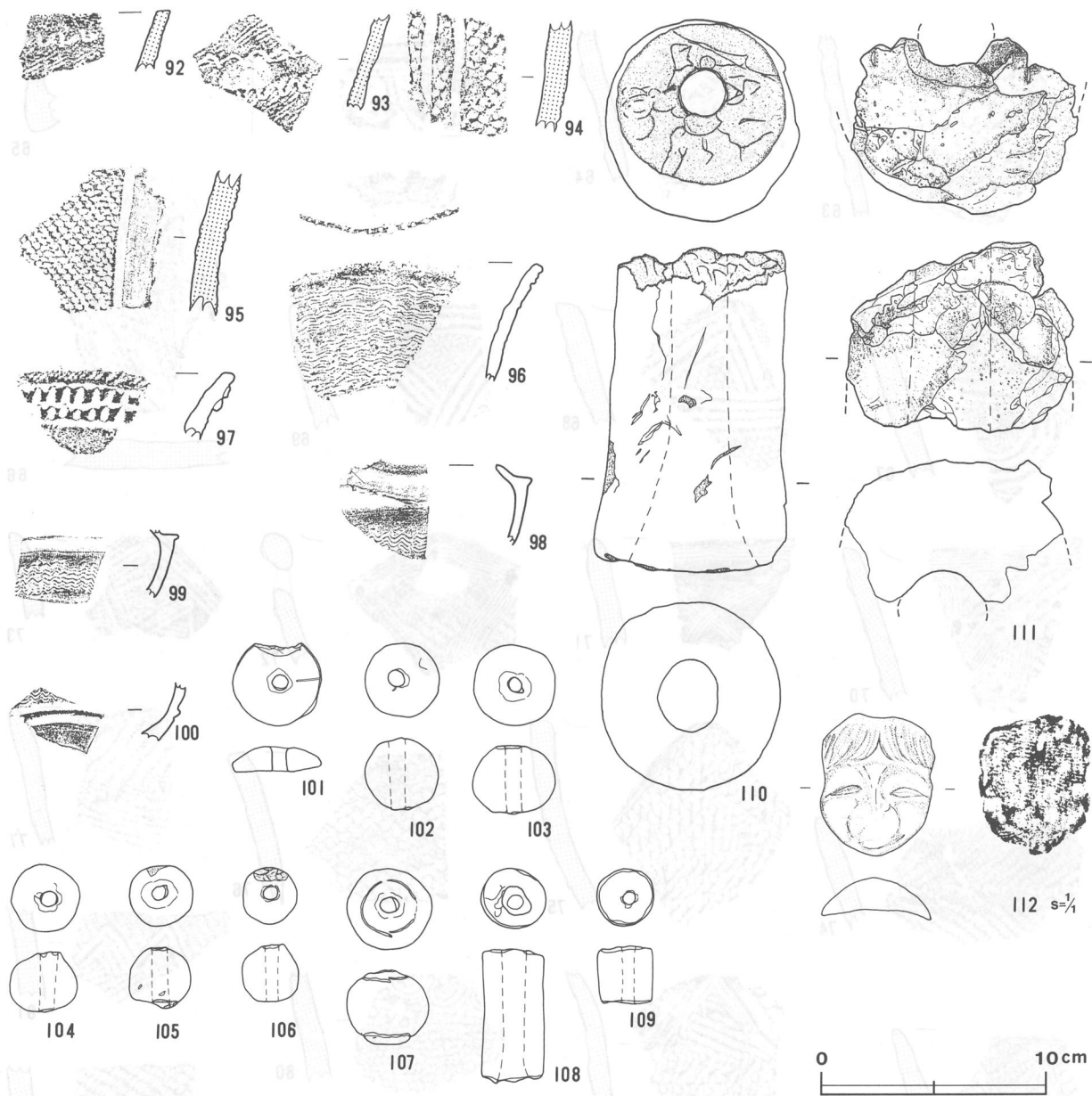
第440図 遺構外出土遺物実測・拓影図(1)



第441图 遺構外出土遺物拓影图(2)



第442图 遺構外出土遺物拓影图(3)



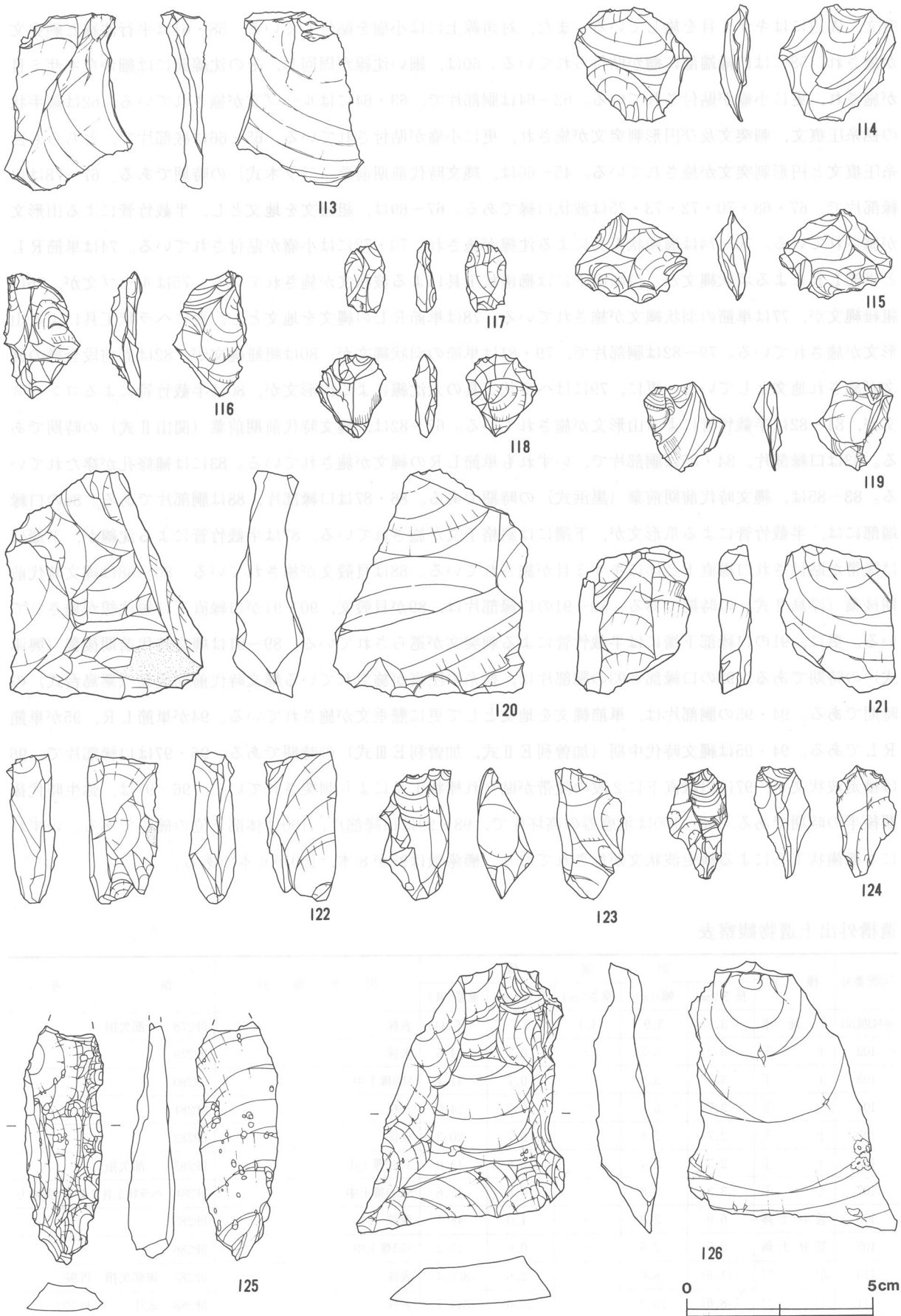
第443図 遺構外出土遺物実測拓影図(4)

12～95は縄文土器片、96・97は弥生土器片の拓影図である。12は、撚糸文が施されている口縁部片で、縄文時代早期前葉（稻荷台式）の時期である。13～23は口縁部片、24～40は胴部片で縄文時代早期中葉（田戸下層式）の時期である。13～20・22・24～40は、沈線が施されている。また、14・20～23・36～38には貝殻腹縁文が、17～19には刺突文が施されている。15の口縁部片は、外削ぎである。41・42は、条痕文を地文とし、41が口縁部片、42は胴部片で縄文時代早期後葉（野鳥式）の時期である。43・44は胴部片で、沈線により区画され、区画の交点には、円形刺突文が施されている。区画内は、刺突文が充填されている。縄文時代早期後葉（鶴ヶ島台式）の時期である。45～61は口縁部片で、45～47・54・59にはループ文、48・57には蕨手状の撚糸圧痕文と竹管による円形刺突文が施されている。49は波状口縁で、撚糸圧痕文と竹管状工具による刺突文が施されている。51～53は、撚糸圧痕文が施され、更に52・53には竹管状工具による円形刺突文が施されている。また、52には小瘤が貼付され、波頂下には細隆帯を2段貼り更にキザミ目を施している。54は、半截竹管による沈線と角押文及び円形刺突文が施され、更に口縁端部には棒状工具によるキザミ目が施されている。55は細隆帯を巡らせキザミ目を施している。56は波状口縁で、竹管状工具による沈線で菱形に区画し、その中心には円形刺

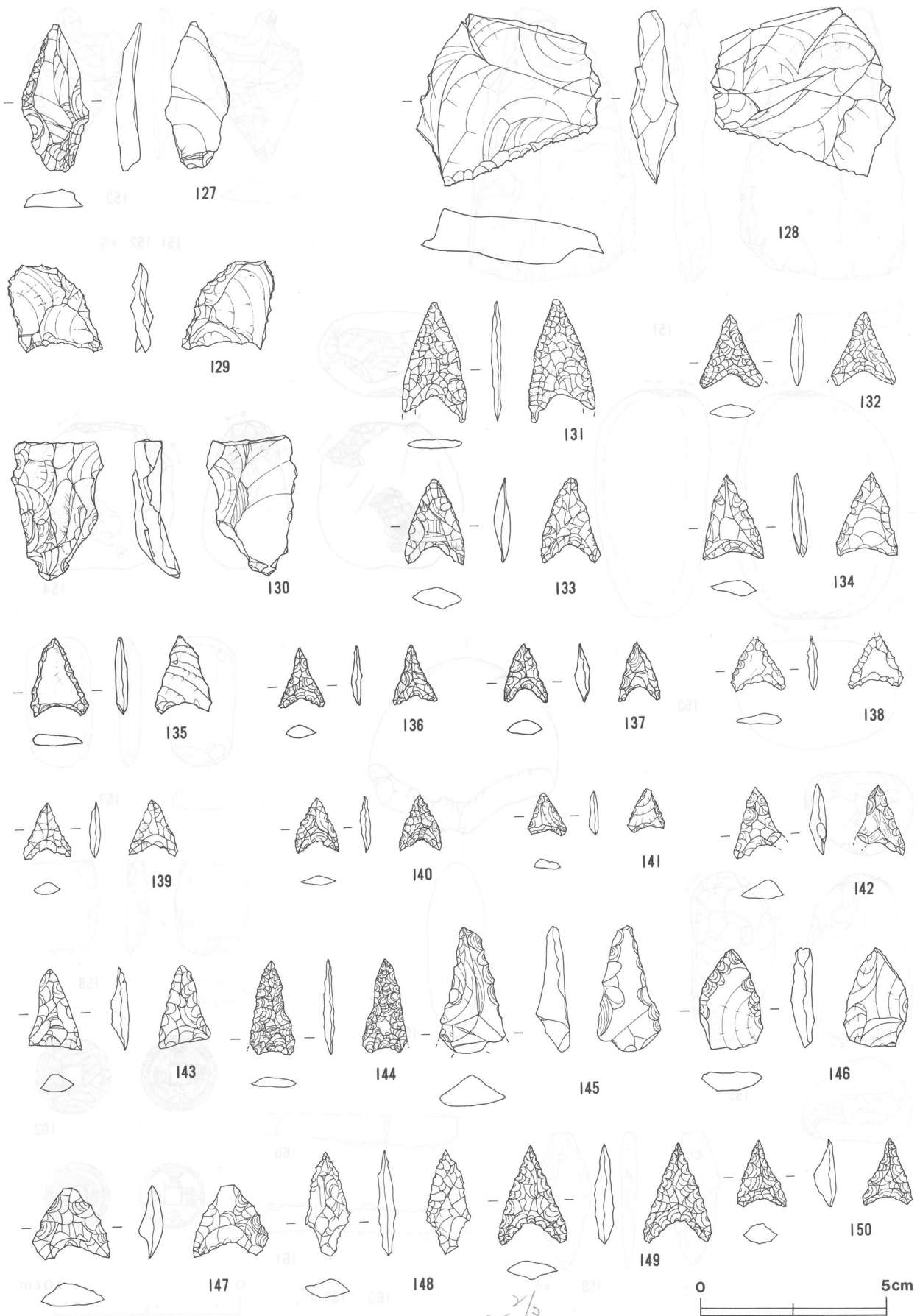
突文、周辺にはキザミ目を施している。また、対角線上には小瘤を貼付している。58・61は平行沈線と刺突文が施され、58には口縁端部に瘤が貼付られている。60は、細い沈線が周回し、その沈線間には細かなキザミ目が施され、更に小瘤が貼付されている。62～64は胴部片で、63・64にはループ文が施されている。62は蕨手状の捺糸圧痕文、刺突文及び円形刺突文が施され、更に小瘤が貼付されている。65・66は底部片で、どちらも捺糸圧痕文と円形刺突文が施されている。45～66は、縄文時代前期前葉（二ツ木式）の時期である。67～78は口縁部片で、67・68・70・72・73・75は波状口縁である。67～69は、組紐文を地文とし、半截竹管による山形文が施されている。70～74は櫛歯状工具による沈線が施され、70・72には小瘤が貼付されている。74は単節RLと単節LRによる羽状縄文が、口縁直下には櫛歯状工具による波状文が施されている。75はループ文が、76は組紐縄文が、77は単節の羽状縄文が施されている。78は単節RLの縄文を地文とし、更にヘラ状工具による山形文が施されている。79～82は胴部片で、79・81は単節の羽状縄文が、80は組紐縄文が、82は直前段合捺の縄文が施され地文としている。更に、79にはヘラ状工具の太沈線による山形文が、80は半截竹管によるコンパス文が、81・82は半截竹管による山形文が施されている。67～82は、縄文時代前期前葉（関山Ⅱ式）の時期である。83は口縁部片、84・85は胴部片で、いずれも単節LRの縄文が施されている。83には補修孔が穿たれている。83～85は、縄文時代前期前葉（黒浜式）の時期である。86・87は口縁部片、88は胴部片である。86の口縁端部には、半截竹管による爪形文が、下端には斜格子文が施されている。87は半截竹管による沈線が、下端には隆帯が貼付され口縁直下と伴にキザミ目が施されている。88は貝殻文が施されている。86～88は縄文時代前期後葉（浮島Ⅱ式）の時期である。89～91の口縁部片は、89が貝殻文、90・91が口縁直下に短沈線が施されている。更に、91の口縁部下端には半截竹管による刺突文が巡らされている。89～91は縄文時代前期後葉（興津式）の時期である。92の口縁部と93の胴部片は、捺糸の圧痕が施されている縄文時代前期後葉（粟島台式）の時期である。94・95の胴部片は、単節縄文を地文として更に懸垂文が施されている。94が単節LR、95が単節RLである。94・95は縄文時代中期（加曾利EⅡ式、加曾利EⅢ式）の時期である。96・97は口縁部片で、96は横走波状文が、97は口縁直下に2段の隆帯が貼られ棒状工具により刺突されている。96・97は、弥生時代後期後半の時期である。98～100は須恵器の高坏片で、98・99は口縁部片、100は体部下位の破片である。いずれにも櫛歯状工具による横走波状文が施されており、櫛歯数は98が8本、100が6本である。

遺構外出土遺物観察表

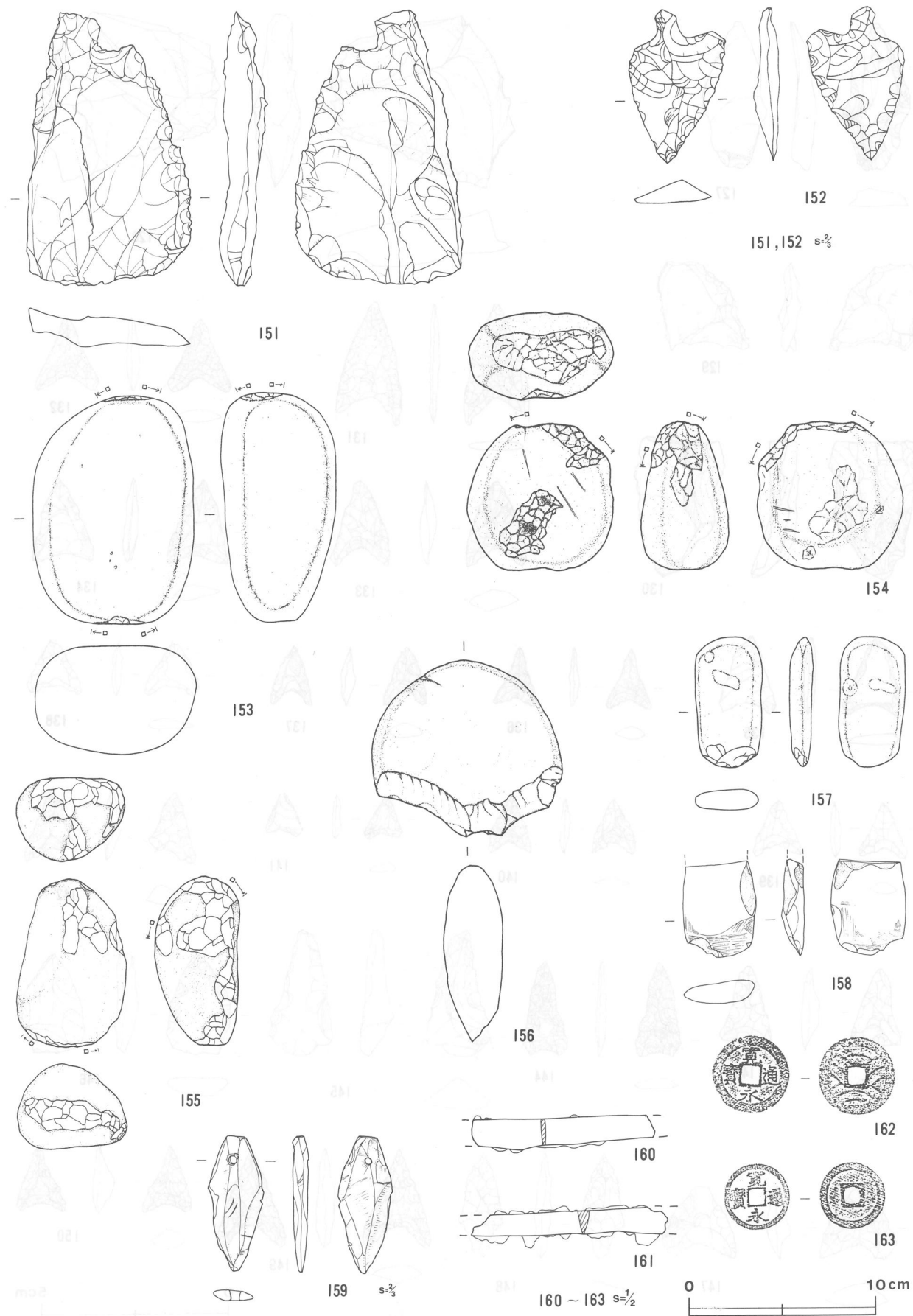
図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第443図101	紡錘車	(3.7)	3.9	1.1	0.7	(15.1)	表採	DP278 一部欠損
102	土玉	3.2	3.3	—	0.7	34.5	表採	DP279
103	土玉	3.0	3.6	—	0.7	41.4	SD3覆土中	DP280
104	土玉	2.7	3.1	—	0.8	24.9	表採	DP281
105	土玉	2.7	2.8	—	0.7	20.3	表採	DP282
106	土玉	2.5	2.4	—	0.6	15.0	SI72覆土中	DP283 一部欠損
107	土玉	3.3	3.8	—	0.8	41.6	SK39覆土中	DP284 ヘラ状工具による沈線有り
108	管状土錘	6.0	2.9	—	1.0	48.1	表採	DP285
109	管状土錘	2.5	2.6	—	0.6	19.2	SD3覆土中	DP286
110	羽口	(14.6)	8.6	—	2.6	(886.4)	表採	DP287 端部欠損 PL98
111	羽口	(8.6)	10.0	—	(10.0)	(344.7)	表採	DP288 破片 PL100
112	泥面子	2.1	1.7	0.6	—	2.0	表採	DP289 下半表面剝離



第444図 遺構外出土遺物実測図(5)



第445図 遺構外出土遺物実測図(6)



第446図 遺構外出土遺物実測・拓影図(6)

遺構外出土石器遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第444図113	剥片	5.1	3.9	1.0	9.1	チャート	表採	Q115
114	剥片	3.1	3.1	1.0	6.1	メノウ	表採	Q116
115	剥片	2.4	3.0	1.1	5.1	チャート	表採	Q117
116	剥片	3.9	2.0	0.9	4.6	メノウ	表採	Q118
117	剥片	1.9	1.1	0.5	1.0	チャート	表採	Q119
118	剥片	2.2	1.9	0.7	2.2	頁岩	表採	Q120
119	剥片	2.3	2.2	0.7	1.7	黒曜石	表採	Q121
120	石核	6.1	5.2	1.9	48.3	頁岩	表採	Q122 PL103
121	楔形石器	4.5	3.1	0.9	12.7	チャート	表採	Q123 PL103
122	石核	4.0	1.9	1.2	10.8	チャート	表採	Q124 PL103
123	楔形石器	3.6	2.0	1.1	7.6	チャート	表採	Q125 PL103
124	石核	3.0	1.6	1.5	4.7	メノウ	表採	Q126
125	ナイフ形石器	6.4	2.2	1.3	13.3	黒曜石	D3h ₉ グリッド	Q127 PL103
126	剥片	7.3	5.6	1.7	51.7	メノウ	SI-116覆土中	Q129 スクレイパーの可能性有り
第445図127	ナイフ形石器	4.0	1.8	0.8	3.6	頁岩	C3h ₃ グリッド	Q128 PL103
128	搔器	5.0	4.5	1.0	20.7	メノウ	C3g ₆ グリッド	Q130
129	調整のある剥片	2.1	2.6	0.6	2.5	チャート	表採	Q158 スクレイパー又は石鏃の未製品の可能性有り
130	剥片	3.8	2.5	1.2	8.4	頁岩	表採	Q159
131	石鏃	1.8	3.3	0.2	1.3	チャート	表採	Q138
132	石鏃	1.7	2.0	0.4	0.7	チャート	表採	Q139
133	石鏃	2.2	1.6	0.6	1.0	チャート	表採	Q140
134	石鏃	2.2	1.7	0.4	1.0	チャート	表採	Q141
135	石鏃	2.1	1.6	0.3	1.0	チャート	表採	Q142
136	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.3	チャート	表採	Q143
137	石鏃	1.6	1.1	0.4	0.5	チャート	表採	Q144 PL104
138	石鏃	1.4	1.6	0.3	0.4	チャート	表採	Q145 PL104
139	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.4	チャート	表採	Q146 PL104
140	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.2	チャート	SI-148覆土中	Q147 PL104
141	石鏃	1.2	1.1	0.2	0.3	チャート	SI-148覆土中	Q148 PL103
142	石鏃	1.3	1.9	0.4	0.7	安山岩	表採	Q149 一部欠損 PL103
143	石鏃	2.2	1.4	0.5	1.1	チャート	表採	Q150 PL103
144	石鏃	1.2	2.5	0.2	0.7	黒曜石	表採	Q151 PL103
145	石鏃	1.8	0.9	3.4	3.3	チャート	表採	Q152 有舌の可能性有り、一部欠損 PL103
146	石鏃	1.7	2.7	0.5	2.7	チャート	表採	Q153 未完成品 PL103
147	石鏃	2.0	2.1	0.6	1.4	チャート	表採	Q154 PL103
148	石鏃	2.8	1.3	0.4	1.0	チャート	表採	Q155 有舌 PL103
149	石鏃	2.7	1.8	0.5	2.3	チャート	SI-88覆土中	Q48
150	石鏃	1.8	1.3	0.6	1.7	チャート	SI-88覆土中	Q49
第446図151	石匙	7.3	4.4	1.2	33.8	チャート	表採	Q156 PL105
152	石匙	4.2	2.7	0.7	4.8	メノウ	表採	Q157 PL104
153	磨石	12.5	8.7	6.2	1145.4	砂岩	表採	Q131
154	敲石	8.1	7.9	4.8	433.9	砂岩	表採	Q132 PL106
155	敲石	9.2	6.0	4.6	338.9	砂岩	表採	Q133 PL106
156	チョッパー	9.6	10.3	3.2	377.6	凝灰岩	表採	Q134 PL102

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第446図157	磨製石斧	7.1	3.6	1.4	47.8	雲母片岩	表採	Q135 局部磨製
158	磨製石斧	5.2	4.0	1.2	34.2	粘板岩	F2a1グリッド	Q136 片刃, 擦痕有り, 断欠
159	石剣	3.7	1.5	0.4	2.6	滑石	表採	Q137 PL103

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第446図160	刀子	(6.6)	1.2	0.2	(5.0)	SI-60覆土中	M1 PL106
161	刀子	(7.0)	0.9	0.4	(8.9)	SI-98覆土中	M2 PL106

図版番号	鑄名	初鑄年	鑄造地名	出土地点	備考
		西暦			
第446図162	寛永通寶	1769	日本	表土中	M3 PL106
163	寛永通寶	1707	日本	表土中	M4 PL106

第4節 まとめ

当遺跡から検出した遺構は、竪穴住居跡193軒、地点貝塚6か所、方形周溝墓1基、地下式壙3基、土坑138基、溝3条である。時期は、旧石器時代から平安時代までとなるが、中心となる時代は縄文時代前期と古墳時代前期である。

ここでは、その2期についての主な遺構と遺物について特記すべき事柄を記述し、まとめとする。

縄文時代前期

(1) 住居跡の分布と形態

当該期の竪穴住居跡は、20軒検出されている。出土遺物は、深鉢形土器片が殆どでニツ木⁽¹⁾・関山Ⅱ式期の土器が中心である。他に、花積下層・黒浜式土器片が少量出土している。また、僅かではあるが田戸下層式期である尖底土器片が数点覆土中から出土している。したがって、縄文時代前期前葉の集落跡と考えられる。

ニツ木式期の住居跡は、第25・36・79・128・129・132・151・160・161・163・164号住居跡（第1群）であり、関山Ⅱ式期の住居跡は、第100・101・105・126・127・140・141・150・152号住居跡（第2群）である。この2群の住居跡間には、立地状況からも明らかな差違が認められる。第1群は、遺跡南部の台地縁辺部に展開しており、第2群は第1群に隣接した中央部にのみ立地している。また、この2群間で重複している住居跡は確認されていない。

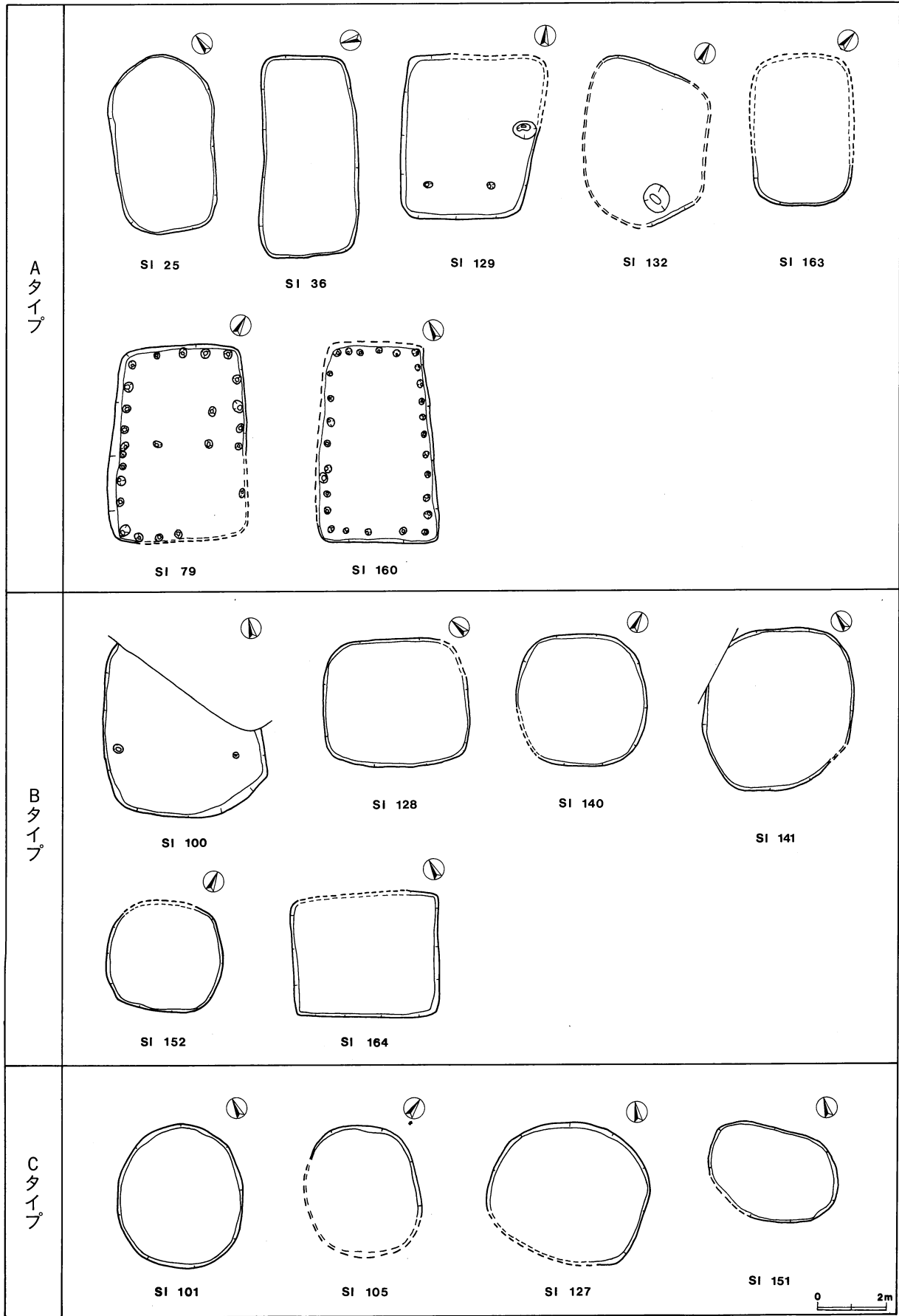
住居跡の形態では、まず、平面形状が隅丸長方形、隅丸方形、楕円形の大きく三タイプ（第447図）に分けることができる。重複・攪乱により形状の不明な住居跡を除き、形状別に分類すると下記の通りである。

Aタイプ 隅丸長方形……………第25・36・79・129・132・160・163号住居跡

Bタイプ 隅丸方形 ……………第100・128・140・141・152・164号住居跡

Cタイプ 楕円形……………第101・105・127・151号住居跡

(不明……………第126, 150, 161号住居跡)



第447図 縄文時代前期住居跡のタイプ別平面形

Aタイプの住居跡は第1群（二ツ木式期）のみであり、B・Cタイプでは第2群（関山Ⅱ式期）が殆どであることも特徴の1つである。

次に、特徴として掲げられる事項は、住居内に主柱穴と思われる柱穴をもつ住居跡が少ないということである。主柱穴が確認されている住居跡は、Aタイプの第79・129・160号住居跡とBタイプの第100号住居跡の4軒である。他時期の住居跡や土坑との重複により柱穴数は明白ではないが、第100・129号住居跡では主柱穴と考えられる柱穴がどちらも2か所確認されている。位置は、2軒とも短軸方向に一对有り、壁寄りに構築されている。第79・160号住居跡は、多くの柱穴が確認されており、当遺跡では特異なタイプである。第79号住居跡では22か所、第160号住居跡では28か所の柱穴が現存しており、どちらも壁柱穴である。同時期又は同タイプの住居跡であっても、柱穴に規則・規格性が見受けられないのも特徴の1つといえる。

(2) 地点貝塚

当遺跡から6か所の地点貝塚が検出されている。時期的には、第2-A、2-B、4号地点貝塚から縄文土器片（二ツ木式期）が出土していることから縄文時代前期前葉と考えられる。

周辺の貝塚としては、当遺跡から直線距離にして約2kmほど北東にシッペイ沢遺跡、約1.5kmほど東には越安貝塚が位置し、どちらも縄文時代前期前葉の貝塚として知られている遺跡である。当遺跡とシッペイ沢遺跡及び越安貝塚は、涸沼前川と涸沼川に挟まれた標高約20～27mの同一台地上に位置している。シッペイ沢遺跡では、住居跡内に形成された貝塚からヤマトシジミを主体にイソシジミ、マガキが確認されている。現時点では涸沼前川に伴う最奥の貝塚である。また、越安貝塚は当遺跡と同じ涸沼川の北岸に位置し、ヤマトシジミ、マガキ、ハマグリ等が確認されている。今回の調査により、当遺跡の貝塚からもヤマトシジミを主体としてマガキが少量であるが確認できた。

当遺跡から出土した貝の総重量は251.6kgであり、その内、ヤマトシジミ244.1kg、マガキ7.3kgである。殆どがヤマトシジミで、全体の97%にも達するが、マガキは2.9%にすぎない。その他としては、カワアイ80.3g、カワニナ25.8g、ハイガイ8.4g、ハマグリ95.2g、イシマキガイ21.1g、アカニシ21.3gが出土している。他にも、微量であるが、長さ2～3mmの微小な巻き貝及び二枚貝のウネナシトマガイが含まれている。汽水性の貝を主体としながらも、マガキ・ハマグリ・ハイガイなど少量であるが海水産の種が混在している。これは、当時、涸沼川が当遺跡周辺まで海水が進入していたことを示す貴重な資料と言える。位置的にも、涸沼川に伴う最奥の貝塚であり、縄文時代の涸沼周辺の古環境を知る手がかりを与えてくれる遺跡である。2～5mmのメッシュの篩で慎重に検出作業を行ったが、6か所の地点貝塚から魚類、小動物等の骨片は確認できなかった。

また、6か所の地点貝塚から出土している貝の種類にも違いがある。第1-A、1-B、4号地点貝塚からは、マガキ・ハイガイは全く出土しておらず、ハマグリは第2-A、2-B号地点貝塚からのみである。これは、自然環境上での小さな変動か、しかも変動が想像以上に短期間のサイクルで存在していたことを示しているのか今後の課題の一つである。

(3) 被熱礫

当遺跡の確認面や住居跡・土坑の覆土中、及び床面等から川原石が多量に出土し、破片まで含めた総数は6,968点になる。多くは、使用後の投棄か流れ込みによるものと考えられる。住居跡内出土の礫も、床面からのものは少ない。床面出土の例は、縄文時代前期の住居跡が殆どであり、この時期に使用されていたものと考えられる。確認面で比較的集中して出土している所があったが、位置関係に規則性は認められない。また、礫周

辺の土が熱を受け焼土化した所も確認されていない。

礫が多量に集中していた位置は、調査区南西端部の台地縁辺部である。この位置は、前述した縄文時代前期前葉の集落である第2群の周辺である。以上のような状況から、その時期の集落による使用後の投棄の可能性が強いと考えられる。

礫は、被熱の認められるものと全く自然石のものとは大きく2分類することができる。被熱礫は、3,635点で全体の52%に当たる。被熱礫での完形礫と破砕礫の割合は、破砕礫が約3倍も多い。自然礫での割合は約1.4倍であるのに対し、被熱礫の方が約2倍も多いことになる。これは、被熱による破砕が原因と考えられる。

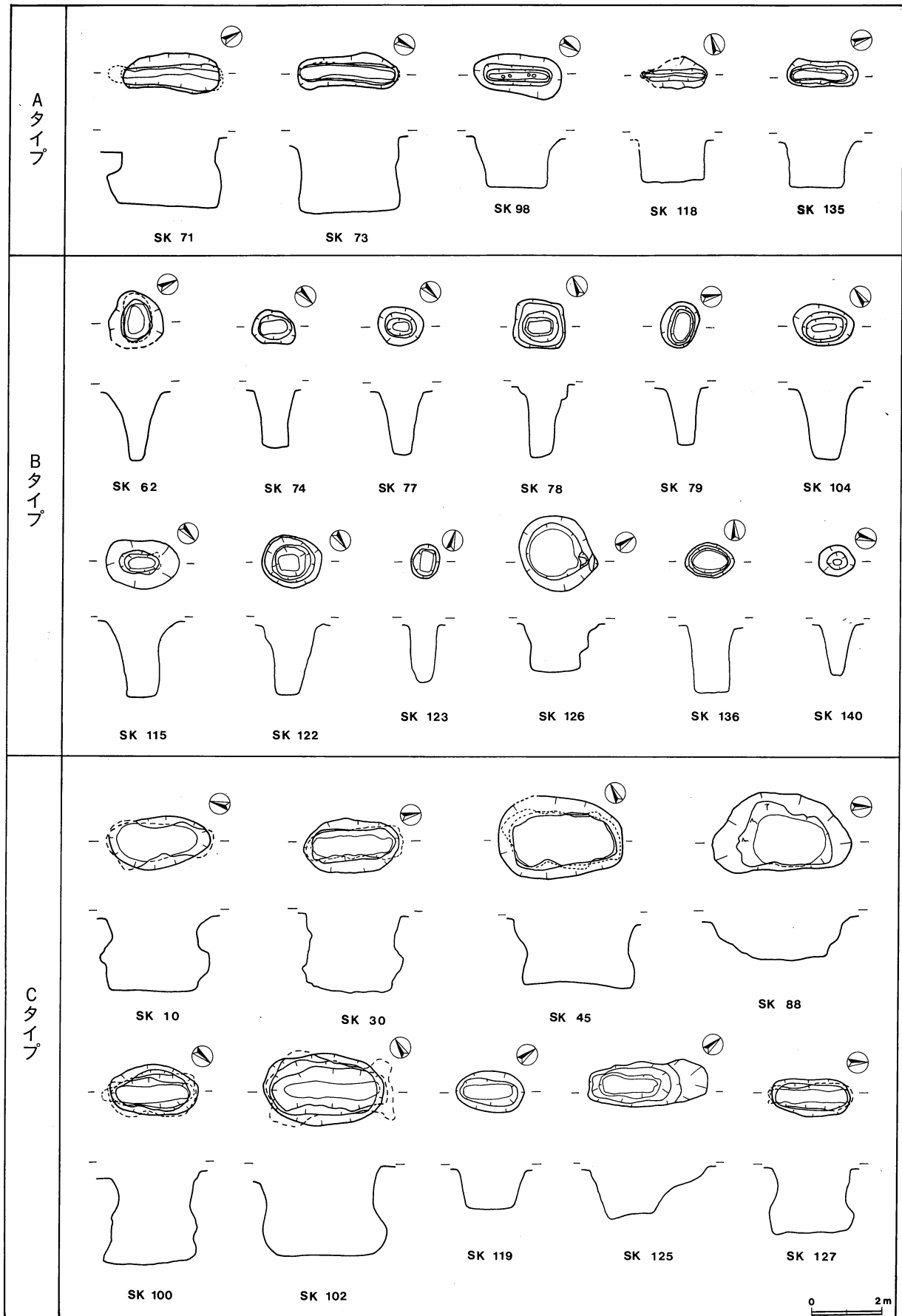
被熱による赤変は、全面に認められるものが多い。また、表面のみでなく完全に中芯まで赤変しており、かなり高熱を受けたものと推測される。このことは、1kgを越える大型のものでも同様な状況である。これらの礫には、煤や炭化物が付着しておらず比較的きれいなものが殆どである。以上のようなことから、結果として礫が焼けたのではなく、礫を焼く行為が意図的に行われたものと推測される。そのようなことから、焼けた礫を煮炊きなどの調理用に使用した可能性が考えられる。

(4) 陥し穴

当遺跡からは土坑が138基検出されているが、その内の26基は陥し穴と考えられる。第73・74・88・102号土坑の覆土中から、二ツ木式期の土器片が少量であるが出土している。時期としては、遺物は覆土中からであるが、他の土坑に比べ壁の崩れが早く、覆土も堆積しやすいためと推測されることや陥し穴の形状の特徴上から、縄文時代前期前葉に近い時代の遺構と考えられる。当遺跡の集落とほぼ同時期と思われるが、直接結びつくかどうかの判断は難しい。一方、陥し穴の分布から見ると、二ツ木式期の住居跡を囲むように位置していることが興味深い。

他の特徴として、規模が大きいということがあげられる。深さが2m前後におよぶものが15基有り、全体の約6割を占めている。また、深さの平均値は約1.8mにもなる。深さだけでなく、平面形の規模も大きく長軸が3mにも及ぶものが6基有る。

形状からは、3タイプ(第4表)に分類することができる。まず、Aタイプは一般的に見られるT形ピットで、5基が確認されている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸に対して短軸が極端に短いのが特徴である。また、両端がオーバーハングしているものも見られる(第71号土坑)。底面には、杭の様なものが立てられていたと推測されるピットを4か所もつものも確認されている(第98号土坑)。規模の平均値は、長軸2.4m、短軸0.9m、深さ1.6mである。Bタイプは、平面形が円形及び楕円形を主体としているもので、例外として方形のものが1基(第78号土坑)ある。このタイプは、12基確認されており全体の半数弱に当たる。特徴としては、平面形の規模が小形であるのに対して深さが深いという点である。規模の平均値は、長軸1.5m、短軸1.2mで、深さは1.8mにもなる。表土の深さも考慮すれば、平均値で2.0mを越えることになる。底面は全て平らで、壁面は上位で僅かに傾斜するが、中位から下位にかけてはほぼ垂直である。Cタイプは、AとBタイプの中間的な形状であり、平面形は隅丸長方形及び楕円形を呈する。規模の平均値は、長軸2.8m、短軸1.6m、深さ1.8mである。長軸はほぼAタイプと同じであるが、短軸が2倍近く長くなっているのが特徴である。断面形もAタイプとほぼ同じであるが、両端がオーバーハングするものが主体となる。以上、3形態に分類できるが、使用目的にどのような差違があったのかは今後の調査例の集成に期待したい。



第448図 タイプ別陥し穴一覧

表4 南小割遺跡陥し穴一覧表

Aタイプ

番号	長径方向	平面形	規模 (m) 長径 × 短径	深さ (cm)	壁面	底面
71	N-30°-E	楕円形	2.78×1.04	206	垂直	平坦
73	N-22°-W	楕円形	2.88×0.86	216	垂直	平坦
98	N-27°-W	楕円形	2.50×1.16	146	垂直	平坦
118	N-34°-E	楕円形	1.90×0.86	120	垂直	平坦
135	N-24°-E	楕円形	2.02×0.70	130	垂直	平坦

Bタイプ

番号	長径方向	平面形	規模 (m) 長径 × 短径	深さ (cm)	壁面	底面
62	N-64°-W	円形	1.64×1.60	194	垂直	平坦
74	N-63°-W	楕円形	1.20×0.94	166	垂直	平坦
77	N-48°-W	楕円形	1.32×1.12	180	垂直	平坦
78	N-66°-W	隅丸方形	1.44×1.40	210	垂直	平坦
79	N-69°-W	楕円形	1.30×1.06	164	垂直	平坦
104	N-46°-W	楕円形	1.72×1.18	208	垂直	平坦
115	N-48°-W	楕円形	2.08×1.26	220	垂直	平坦
122	N-36°-W	楕円形	1.68×1.44	202	垂直	平坦
123	N-23°-W	楕円形	0.94×0.83	160	垂直	平坦
126	N-56°-E	楕円形	2.31×2.07	140	垂直	平坦
136	N-80°-W	楕円形	1.42×1.00	194	垂直	平坦
140	N-10°-W	楕円形	1.02×0.86	150	垂直	平坦

Cタイプ

番号	長径方向	平面形	規模 (m) 長径 × 短径	深さ (cm)	壁面	底面
10	N-20°-W	楕円形	2.90×1.46	210	垂直	平坦
30	N-12°-E	楕円形	2.38×1.50	216	垂直	平坦
45	N-65°-W	楕円形	3.54×2.34	196	垂直	平坦
88	N-13°-E	楕円形	3.66×2.18	124	傾斜	鍋底
100	N-41°-W	楕円形	2.48×1.42	190	垂直	平坦
102	N-53°-W	楕円形	3.42×2.04	258	垂直	平坦
119	N-34°-E	楕円形	1.94×1.16	106	垂直	平坦
125	N-46°-E	隅丸長方形	2.55×1.28	145	垂直	平坦
127	N-3°-W	隅丸長方形	2.21×1.07	195	垂直	平坦

古墳時代前期

住居跡は、193軒検出されているがその内127軒が古墳時代前期に比定されるものである。当時期の集落は、調査区南部に位置する涸沼川寄りに中心がある。また、調査区東端部には方形周溝墓が1基検出されており、同一形式の土師器が出土していることから、集落と同一或いは近い時期に構築されたものと考えられる。集落

と墓域の位置関係を知る好資料といえる。また、この時期の土師器の甕と炉の構造は、顕著な特徴が認められる。ここでは、この2点について記述する。

(1) 小波状口縁を有する土師器甕

住居跡から多くの甕が出土しているが、その中で、口縁部に独特な手法を加えて成形したものが出土している。それは、口縁部が小波状を呈するもので、特に甕類に多く見られる。(遺物観察表中で、波状口縁と特記しておいたので参照していただきたい。)成形技法は、口縁部内・外面をナデ調整した後に、棒又は板状の工具あるいは指頭により、口縁端部を等間隔に押圧することによって形成している。押圧は、外側と内側から交互に丁寧に行われている。小波状の振幅及び間隔幅は土器により違いが大きいが、振幅6～8mm、間隔8～10mmの範囲のものが主体となっている。

また、僅かであるが特異な形状を呈するものが含まれている。一つは、棒状工具を口唇部と直角になるように押圧を施し、キザミ目状を呈するものである。第83号住居跡第155図5や第117号住居跡第216図3がそれに該当する。もう一つは、内・外から押圧するのではなく、内側からのみ押圧して円弧状を形成し、更に円弧間にヘラ状工具によるキザミ目を施している甕である。第108号住居跡第205図10が該当する甕で、他からは出土していない。これは、小波状口縁の簡略化と推測される。

小波状口縁を有する器種は、大半が甕で他に台付甕、鉢等にも見られるが、高坏・埴・器台・碗等には施していない。甕等には明らかに煤や炭化物が付着し、また二次焼成も受けていることから煮炊きに使用していることは確かである。手の込んだ手法であるにもかかわらず、日常使用する土器のみ波状が施されている。また、壺類には波状の認められる口縁はなく、大変興味深い。また、同一住居跡の床面上から出土している甕であっても、波状のないものも共存している。

他地域の類例としては、東京湾岸沿い特に千葉県南部の木更津市、富津市、市原市等に多く見られる。しかし、時期が弥生時代後期～古墳時代前期初頭が主体となり、古墳時代前期前半中葉の遺物としては極稀である。他に、関東では栃木県でも出土しており、特に小山市、佐野市周辺には当遺跡の小波状口縁とよく似た成形技法のものが出土している。時期も古墳時代前期であり、関連が深いと推測される。また、状況として前期の住居跡から出土している甕類の大半が小波状口縁であることから、搬入品とは考えにくい。今後、類例の検討を通し究明せねばならない課題である。

(2) 炉の構造 (炉石等)

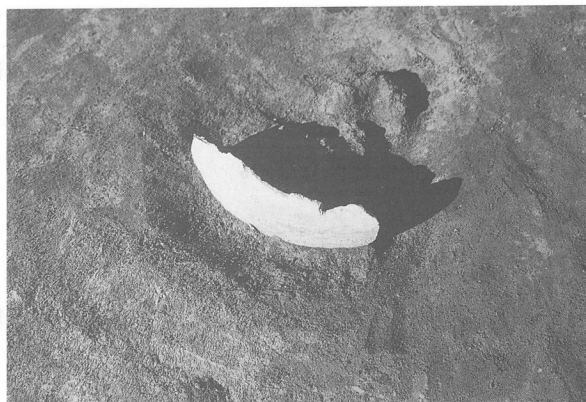
炉石の機能の目的で使用されたと考えられる4種類の遺物が出土している。出土状況は、18軒の住居跡から出土しているが、その内14軒は炉床上からで、1軒が床面上から、残り3軒は覆土中からの出土である。炉床上から出土している14軒の住居跡は、下記の通りである。

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 1 棒状の川原石 | 第100・150号住居跡 |
| 2 土器片 | 第35・84・94・136号住居跡 |
| 3 土製炉石 | 第50・54・78・122・157・166・178号住居跡 |
| 4 土製三脚 | 第62号住居跡 |

遺存状態が良好で配置の明確な物は、いずれも炉の長軸方向に対し垂直になる状態で出土している。据えられている位置は、炉の端部ではなく中央寄りが多い。特に着目したいのは、3・4番である。3は、炉石状に粘土を焼いて作られているもので、断面形が長方形のもの(I形)、逆丁字形(II形)、三角形(III形)の3



第35号住居跡



第84号住居跡



第100号住居跡



第122号住居跡



第166号住居跡



第62号住居跡

タイプがある。数としてはⅠ形が多く、Ⅱ・Ⅲ形はそれぞれ1点のみである。いずれも被熱しており、土製品であるためもろくなっている。破損のため配置状況が明確につかめる住居跡は少ないが、炉床から出土している破片も、やはり中央寄りからが多い。

特に興味深い出土例としては、第143号住居跡出土の土製炉石と器台の例である。土製炉石は、風化が激しく採り上げられなかった。器台は、炉床上に正位でしかも土製炉石に隣接して出土している。被熱しており、土製炉石とセットで使用されていた可能性が高い。器台と炉石は使用目的が別であったことが考えられる。器台が炉床上から出土している例としては、岩井市の高崎貝塚で報告されている。更に、その器台と同様の使われ方であったと思われるのが4の土製三脚である。4は、第62号住居跡のみで確認されている。土製三脚も被熱及び風化が激しいため現存しているものはかなり小さくなっている。ほぼ炉床中央部に、三個体が三角形状

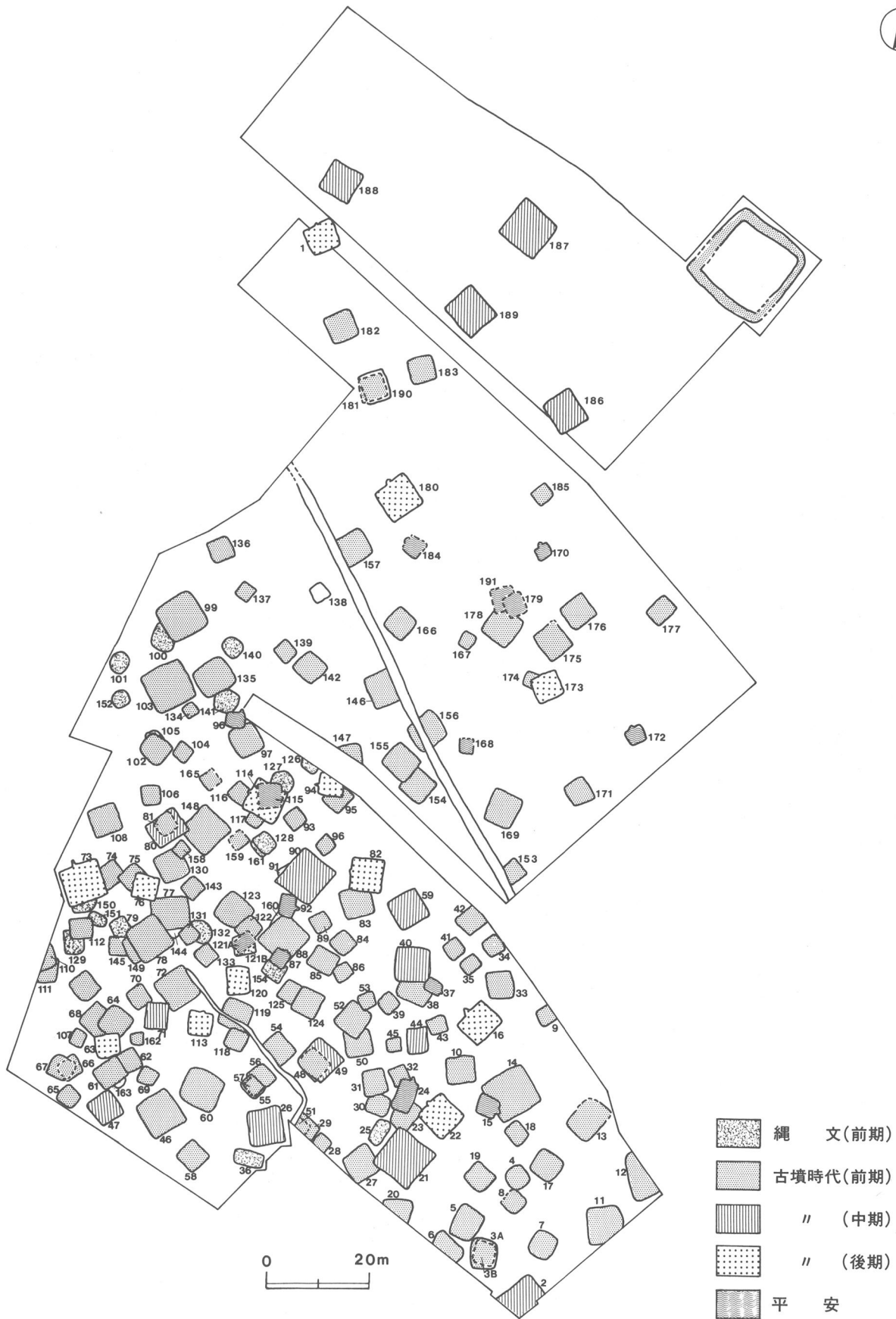
に据えられている。一個体は、直径にして約10cmほどで、形状は下位が方形に近く上位は球形状である。三個体の内二点は、据えられていた状況での内側に当たる部分が、特に被熱し硬化しているのが認められる。直接火の当たる外側ではなく、内側が赤変硬化していることは三脚の中央部の狭い空間に熱源があったと推測される。今後の出土例に期待したい。

注

- (1) 谷藤 保彦 「二ツ木式土器」『群馬の考古学 創立十周年記念論集』群馬県埋蔵文化財調査事業団
1988年11月

参考文献

- ・茨城町史編纂委員会 『茨城町史・通史編』茨城町 1995年2月
- ・鶴見 貞雄 「粗製器台の用途を考える——高崎貝塚出土の器台形土器を例にして——」『研究ノート3号』茨城県教育財団 1994年6月
- ・茨城県教育財団 「高崎貝塚」『茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 1994年3月
- ・千葉県文化財センター 「千原台ニュータウンⅥ——草刈六之台遺跡——」『千葉県文化財報告 第241集』1994年3月
- ・君津郡市文化財センター 「川島遺跡発掘調査報告書——県立君津商業高等学校代替え野球場整備に伴う埋蔵文化財調査——」『財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第66集 1991年3月
- ・君津郡市文化財センター 「打越遺跡・神明山遺跡」『財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第64集 1992年3月
- ・君津郡市文化財センター 「天神前遺跡」『財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第62集 1992年3月
- ・栃木県小山市教育委員会 「牧ノ内 I——方形周溝墓・住居跡編—— 民間開発に伴う発掘調査報告Ⅰ」『栃木県小山市文化財調査報告書』第40集 1997年3月

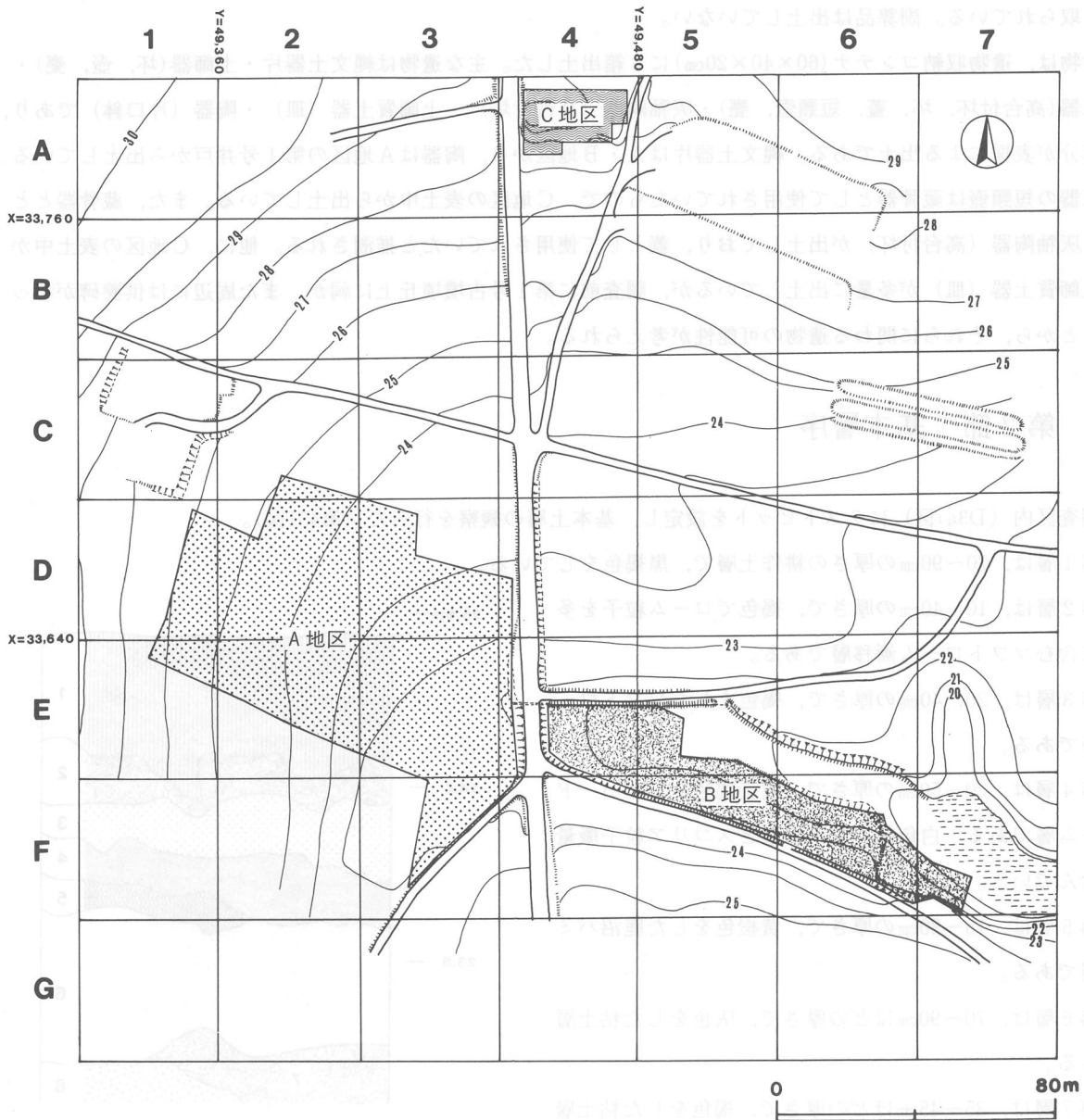


第449図 南小割集落変遷図

第4章 権現堂遺跡

第1節 遺跡の概要

権現堂遺跡は、茨城町の北西部、涸沼川左岸の標高24~26mの河岸段丘上に位置している。遺跡の南側には東西に流れる涸沼川と、水田に利用されている沖積低地が広がっている。東側にはその低地に繋がる支谷があり、谷津田として利用されている。更にその東には南小割遺跡が所在している。調査区の現況は畑・平地林で、水田との比高は12~14mである。南には茨城町地方では一番古いとされている前方後方墳の「宝塚古墳」(4世紀末から5世紀初頭)が所在している。また、南東4.5kmほどの涸沼川対岸の河岸段丘上には、「奥谷遺跡」が所在している。



第450図 権現堂遺跡調査区

調査エリアは3地区(A～C地区)に分かれており、現況は畑地(A・B地区)・平地林(C地区)でいずれも緩やかな傾斜地となっている。今回の調査によって、円墳1基(C地区)、土坑21基(A地区)、溝5条(A地区4条、C地区1条)、井戸1基(A地区)を検出した。

A地区は、傾斜地であるため流れ込みと考えられる表土で厚く覆われている。表土の厚さは、1～1.6mにも及ぶ。また、斜面であるため降雨後は溜水と伏流水により数日間作業ができないことが度々あった。調査は、困難を極め、試掘により遺構が確認された範囲の表土除去を行なった。

B地区は、谷津頭を北東にもつ傾斜地に位置している。南北方向に幅2m、長さ5m、深さ1.8mのトレンチを3本設定し掘り込んだが遺構は確認できなかった。縄文土器片が表土中から出土しているが、隣接する畑地に所在する包蔵地からの流れ込みと思われる。現況は畑地であるが、隣接する畑地の傾斜や標高から判断して、傾斜地を整地して構築したと推測される。

縄文時代の遺構は確認できなかったが、縄文式土器片がB地区で表採及びトレンチから出土している。

古墳時代の遺構としては、古墳時代後期の円墳を1基検出した。盗掘による攪乱がひどく、石室の石材まで抜き取られている。副葬品は出土していない。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に6箱出土した。主な遺物は縄文土器片・土師器(坏, 壺, 甕)・須恵器(高台付坏, 坏, 蓋, 短頸壺, 甕)・灰釉陶器(高台付坏)・土師質土器(皿)・陶器(片口鉢)であり、大部分が表採による出土である。縄文土器片はA・B地区から、陶器はA地区の第1号井戸から出土している。須恵器の短頸壺は蔵骨器として使用されていたもので、C地区の表土中から出土している。また、蔵骨器とともに灰釉陶器(高台付坏)が出土しており、蓋として使用されていたと推測される。他に、C地区の表土中から土師質土器(皿)が多量に出土しているが、調査前に第1号古墳墳丘上に祠が、また周辺には供養碑があったことから、それらに関わる遺物の可能性が考えられる。

第2節 基本層序

調査区内(D3a1区)にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った(第451図)。

第1層は、70～90cmの厚さの耕作土層で、黒褐色をしている。

第2層は、10～40cmの厚さで、褐色でローム粒子を多量に含むソフトローム漸移層である。

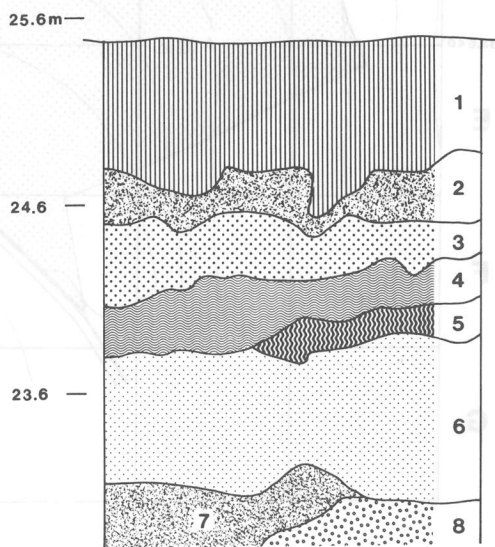
第3層は、20～40cmの厚さで、褐色をしたソフトローム層である。

第4層は、20～50cmの厚さで、明黄褐色をしたハードローム層である。白色粘土粒子少量とスコリア粒子微量を含んでいる。

第5層は、15～20cmの厚さで、黄橙色をした鹿沼パミス層である。

第6層は、70～90cmほどの厚さで、灰色をした粘土層である。

第7層は、35～45cmほどの厚さで、褐色をした粘土層である。砂粒・小石を中量含んでいる。



第451図 権現堂遺跡基本土層図

第8層は、25cmの厚さで、明黄褐色をした粘土層である。小石を多量に含んでいる。

第2～8層はよくしまっており、特に、第4層から第8層にかけてはとても硬い層である。第5層の鹿沼パミス層と第8層は面的な広がりにならず途切れており、第2層では凹凸が激しい。また、緩やかに傾斜している層が多く、早い時期から調査区を含め周辺が斜面であり、降雨等の流水による浸食を受けたと考えられる。地表面から粘土層まで1.6mほどしかなく、そのためか降雨後は数日間水が引かず20～30cm程掘り込んでも水がわき出していた。傾斜地であるため流れ込んだ表土が厚く堆積しており、確認面までの深さが1.8mにもなるところがある。遺構は、第2層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 古墳

C地区から、円墳1基を検出した。既に遺構の西部と南部が削平されており、墳丘として認められるのは全体の40%程にすぎない。残存している墳丘は、高さが表土から2m弱で最上部には調査前まで祠が祀られていた。また、周囲には最近まで墓石が置かれ、墓地として使用されていた。それらは地権者により移設されたが、表土中からは五輪塔の一部と思われる風化した花崗岩の破片や供養碑が出土している。

遺構が構築されている場所の現況は、南方向に緩やかに傾斜している平地林であった。また、墳丘の南側は耕作により削平され、墓道部から羨門部付近にかけて攪乱されている。石室の石材は、すべて盗掘時に抜き取られ僅かに破片が残る程度

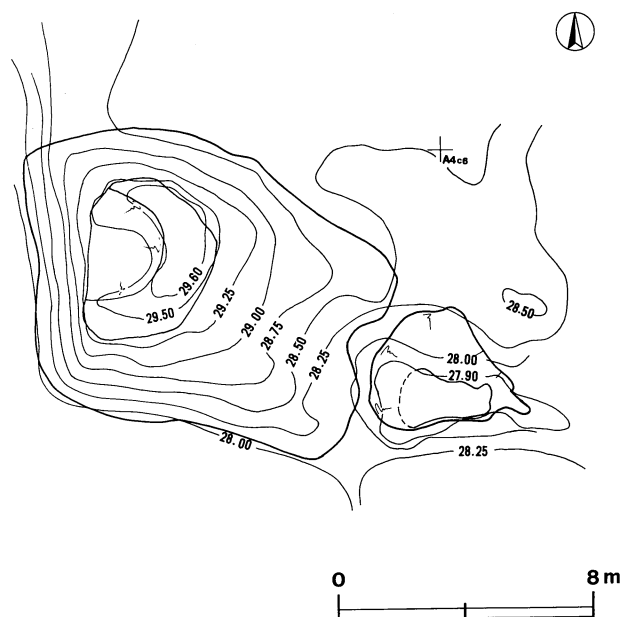
である。石材の破片は、雲母片岩（筑波石）で墳丘上や周溝の覆土中層からも出土している。また、同質の石材がA地区からも出土しており、第1号古墳の石材と考えられる。

以下、遺構の形態や特徴等について記載する。

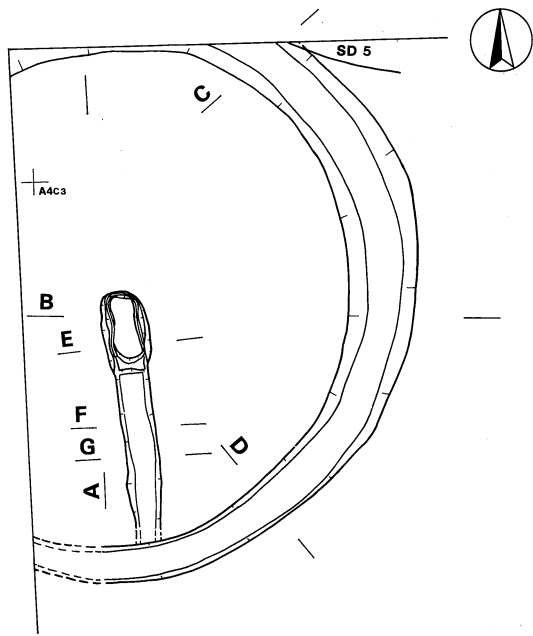
第1号古墳（第453図）

(1) 墳丘

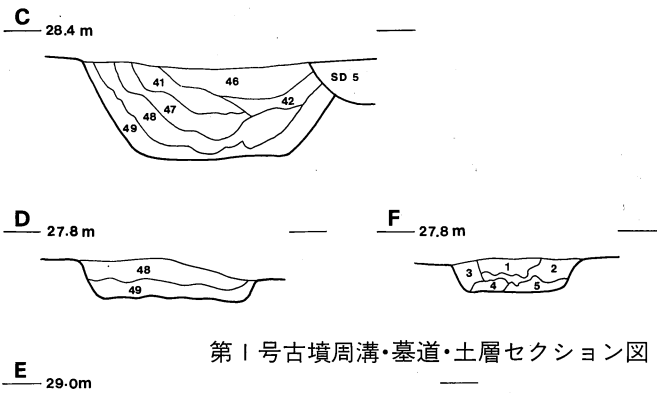
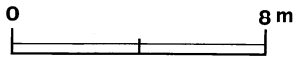
本跡は、C地区西部A4c3区を中心に位置している。墳丘の南部の一部と、周溝及び墳丘の西部はエリア外であり既に削平されている。周辺は山林及び果樹園で、谷津に向かう緩やかな傾斜地上に構築されている。墳丘の規模は現存している部分で、径8～9.5m、高さ1.2mの楕円形である。周溝の調査結果に基づくと、墳径は周溝の内径で12.5～14mであったと考えられる。旧表土からの墳高は0.8mであることから、傾斜地のため周辺の表土が厚さにして40cm程流失したと考えられる。したがって、墳丘の封土は少なくともそれ以上は流れたと思われる。墳頂部は墓地として使用されていたためかほぼ平坦となっているが、これは既に盗掘による攪乱のため墳頂部が落ち込んだことによると推測される。



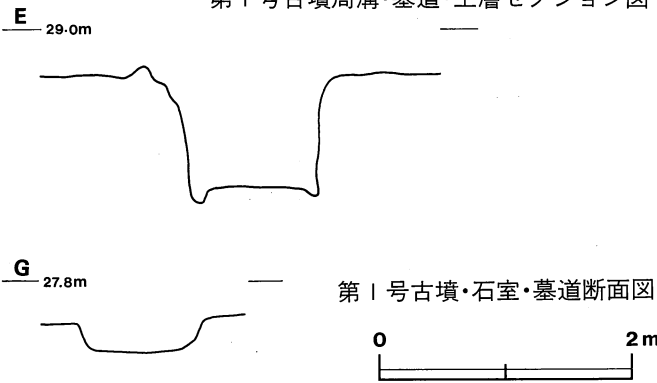
第452図 調査C区現況図



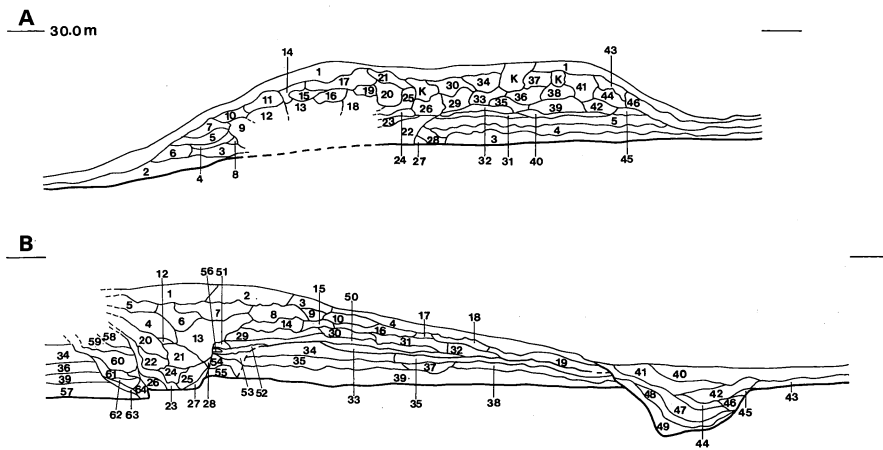
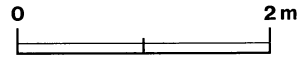
第1号古墳平面図



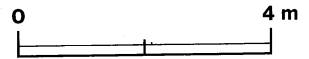
第1号古墳周溝・墓道・土層セクション図



第1号古墳・石室・墓道断面図



第1号古墳 墳丘土層セクション図



第453図 第1号古墳実測図

封土の最下層は、旧表土の上にローム粒子を含む黒色土が8～24cmの層で盛られており、全面が硬く締められている。中層は、褐色・明褐色土で厚さ10～30cmの層から構成されており、各層とも硬く締められている。上層は、暗褐色・黒色土が15～25cmが堆積しており、墳丘縁辺部が厚い。墳頂部から主体部にかけては、褐色土は確認できず、暗褐色・黒褐色土が厚く堆積している。堆積状況は、主体部に流れ込むように傾斜しており、盗掘後の堆積と考えられる。

土層解説

A-A'

1	褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量, 炭化・焼土粒子微量
2	明褐色	ローム粒子多量
3	褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子微量
4	灰褐色	ローム粒子中量
5	黒褐色	ローム粒子微量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 (旧表土) *
6	褐色	ローム粒子多量
7	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量 *
8	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量 *
9	にぶい褐色	ローム粒子多量, ローム小~大ブロック微量 (筑波石破片) *
10	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子微量
11	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量
12	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子少量, 粘土小ブロック微量 *
13	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子少量
14	褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量
15	褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子微量
16	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
17	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック微量
18	明褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子少量
19	灰褐色	ローム粒子中量
20	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
21	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 *
22	明褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック中量, 鹿沼土ブロック微量 *
23	黄橙色	ローム粒子少量, 粘土ブロック有り (筑波石片微量) *
24	褐色	ローム粒子少量, ローム大ブロック中量, 粘土ブロック微量 (筑波石片微量) *
25	褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック中量, 炭化粒子少量, 鹿沼土中ブロック少量
26	灰褐色	ローム粒子少量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子少量
27	褐色	ローム粒子多量 *
28	黒褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
29	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量, 鹿沼土ブロック少量 *
30	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量, 鹿沼土ブロック少量
31	褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子微量 *
32	明褐色	ローム粒子多量 *
33	褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック多量, 炭化粒子少量, 鹿沼土ブロック微量 *
34	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量 *
35	にぶい褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 *
36	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 黒色土ブロック少量 *
37	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 *
38	明褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック微量 *
39	明褐色	ローム粒子多量 *
40	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子微量, 黒色土ブロック少量 *
41	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, 黒色土ブロック少量
42	明褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 鹿沼土ブロック少量 *
43	褐色	ローム粒子中量
44	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
45	明褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック微量, 黒色土ブロック少量
46	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量

B-B', C-C', D-D'

1	黒褐色	ローム粒子微量, 黒色土粒子多量
2	極暗褐色	ローム粒子少量, 黒色土粒子多量 *
3	暗褐色	ローム粒子少量, 黒色土粒子中量 *
4	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量 *
5	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 *
6	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量 *
7	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
8	暗褐色	ローム粒子微量, ローム小ブロック微量
9	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, ローム中ブロック微量 *
10	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小~大ブロック微量, 炭化粒子微量 *
11	暗褐色	ローム粒子微量, 炭化粒子中量 *
12	暗褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子中量 *
13	黒褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, ローム中ブロック少量, ローム大ブロック微量, 炭化粒子中量, 炭化物少量 *
14	暗褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック少量, ローム中ブロック微量, 炭化粒子・物少量 *
15	褐色	炭化粒子少量, 炭化物微量 *
16	褐色	ローム小・中ブロック少量, 炭化粒子少量, 炭化物微量 *
17	褐色	炭化粒子少量 *
18	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量, 炭化粒子中量 *
19	黒褐色	ローム粒子少量, 炭化物微量
20	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量, 炭化粒子多量
21	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック微量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子多量, 炭化物少量 *
22	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子多量
23	褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子中量, 粘土粒子中量
24	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, ローム中ブロック微量, 炭化粒子中量, 炭化物少量 *
25	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量, 炭化粒子少量, 炭化物微量, 粘土粒子中量
26	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, 炭化粒子中量, 粘土粒子少量
27	黒褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子中量, 粘土粒子少量 *
28	暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子少量, 粘土粒子中量

29	褐	色	ローム粒子微量, ローム小~大ブロック微量, 炭化粒子中量, 炭化物中量 *	
30	褐	色	ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量, 炭化粒子中量 *	
31	褐	色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量 *	
32	暗	褐	色	ローム粒子微量, 炭化粒子微量
33	暗	褐	色	炭化粒子少量, 黒色粒子中量 *
34	黒	色	ローム粒子微量 (旧表土) *	
35	黒	色	ローム粒子中量 *	
36	暗	褐	色	ローム粒子微量 *
37	黒	褐	色	ローム粒子微量 *
38	極暗	褐	色	ローム粒子微量 *
39	褐	色	ローム粒子中量 *	
40	暗	褐	色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
41	黒	褐	色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量 *
42	黒	褐	色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子微量 *
43	暗	褐	色	ローム粒子微量 *
44	黒	色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量 *	
45	黒	色	ローム粒子微量, 炭化粒子微量 *	
46	黒	褐	色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
47	黒	褐	色	ローム粒子少量 *
48	暗	褐	色	ローム粒子少量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック微量 *
49	暗	褐	色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子少量 *
50	褐	色	ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子微量 *	
51	褐	色	ローム粒子少量, ローム中ブロック中量, 粘土ブロック少量, 鹿沼土少量 *	
52	灰	褐	色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量, 炭化粒子微量
53	褐	色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック微量, 炭化粒子少量 *	
54	褐	色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量, ローム大ブロック微量, 炭化粒子少量	
55	明	褐	色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム大ブロック少量 *
56	にぶい	褐色	粘土塊, 石英粒子少量, ローム粒子少量 *	
57	明	褐	色	ローム粒子多量
58	にぶい	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 鹿沼土少量 *	
59	にぶい	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 鹿沼土少量 *	
60	褐	色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック少量, 鹿沼土少量 *	
61	にぶい	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 鹿沼土ブロック中量 *	
62	褐	色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 粘土ブロック中量, 鹿沼土ブロック中量	
63	褐	色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 粘土ブロック中量 *	
64	灰	褐	色	ローム粒子少量, 粘土ブロック多量, 小石・砂多量 *

*は硬く版築されている層

F-F'

1	暗	褐	色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 粘土ブロック少量
2	褐	色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量, 粘土ブロック微量	
3	褐	色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック微量, 粘土ブロック微量	
4	灰	褐	色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 粘土ブロック微量
5	明	褐	色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 粘土ブロック微量

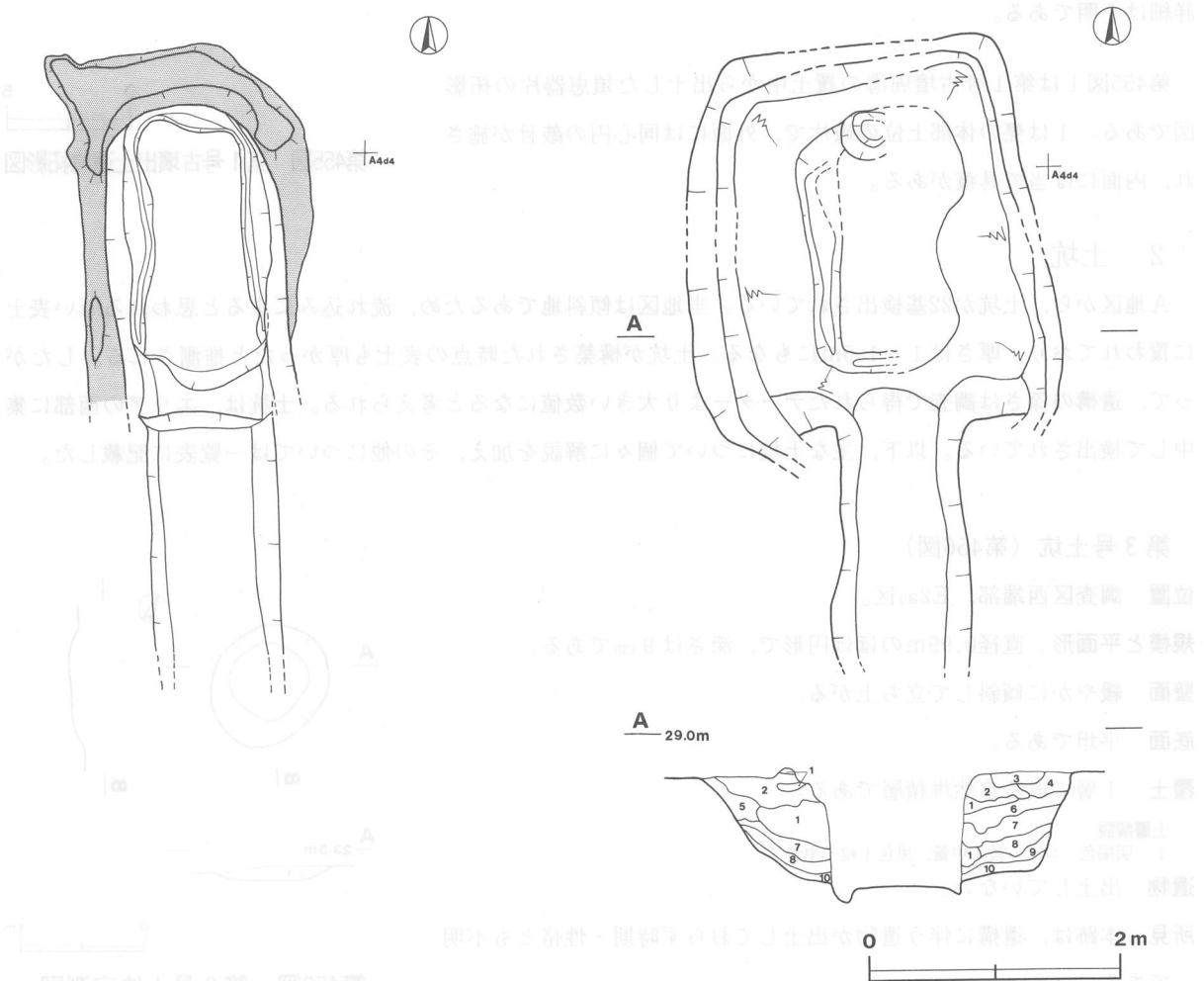
(2) 周溝

周溝は、墳丘を取り囲む様に円形に構築されている。周溝の約半分がエリア外となるが、全周していたと考えられる。規模は上幅1.10~2.50m, 下幅0.90~1.15m, 深さ0.34~0.90mで、断面形は「逆台形」状である。上幅と深さの数値幅が大きいのは墳丘から周溝にかけて南側の削平が激しいためである。堆積状況は自然堆積で、墳丘からの盛り土の流失による堆積と考えられる。どの土層セクションも周溝内側からの流れ込みが多いことを示している。また中・下層にはロームブロックが混入しているが上層にはないことから、下層から中層にかけては比較的早い段階で、急速に盛り土が流入したと推測される。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は、墳丘の中央部からやや南寄りに確認されている。石室構築時の不必要な石材片と思われる小破片が、石室周辺の旧表土中に少量であるが点在している。このことから、まず旧表土を掘り込んで埋葬施設を構築した後に盛り土し、墳丘を築いたと推察される。盗掘による攪乱がひどく不明な点が多いが、横穴式石室で、石材は散乱している破片から雲母片岩（筑波石）と考えられる。石材は全て抜き取られており、破片が石室内や周溝の覆土中及び墳丘上に散乱している。羨道と思われる場所の遺存状態が悪く不明瞭であるが、玄門の石材抜き取り痕と考えられる位置から墓道までの間で、平坦な高まりのある部位が羨道の可能性が高いと判断した。主軸方向はN-5°-Wで、規模は石材の抜き取り痕から判断して、外法で長さ約2.45m, 幅約0.85

～1.14m、内法で長さ2.15m、幅は0.70～0.95mと推測される。攪乱のため高さについては不明である。羨道は、攪乱により明確ではないが現存値で長さ0.40m、幅0.95m、玄室は長さ1.95m、幅は推定で約0.97mである。掘り方は、確認面で長さ3.05m、幅2.95mの長方形で深さ0.88mである。石室と掘り方の間には、裏込めとして粘土と黒色土が詰められ、全層とも突き固められている。また、石室構築時の不必要な石材片と思われる小破片が混入している。



第454図 第1号古墳石室・掘り方平面図、裏込め部土層セクション図

掘り方土層解説

- 1 灰白色 粘土粒子多量、礫少量
- 2 褐色 粘土粒子微量、黒色土粒子多量
- 3 灰褐色 粘土粒子微量、黒色土粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 褐色 粘土粒子微量、黒色土粒子中量、ローム中ブロック微量
- 5 褐色 ローム小ブロック少量、黒色土粒子多量
- 6 暗褐色 粘土粒子微量、黒色土粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック微量、黒色土粒子多量
- 7 暗褐色 黒色土粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量
- 8 暗褐色 黒色土粒子中量、ローム小～大ブロック多量
- 9 黒褐色 黒色土粒子多量、ローム小・中ブロック多量、ローム大ブロック少量
- 10 暗褐色 粘土粒子微量、黒色土粒子多量、ローム中ブロック少量

(4) 遺物

本跡に伴う遺物は出土していない。周溝の覆土中層から、流れ込みと見られる須恵器の甕片が1点出土している。

(5) 所見

本跡は、盗掘・攪乱を受けており副葬品等の遺物は出土しておらず時期決定が困難である。また、石室も石材まで全て抜き取られ構造も明確ではない。周溝の覆土中層から出土している須恵器(甕)の破片が7世紀末と考えられることから、本跡はそれ以前の時期と思われるが、詳細は不明である。



第455図1は第1号古墳周溝の覆土中から出土した須恵器片の拓影図である。1は甕の体部上位の破片で、外面には同心円の敲目が施され、内面には当て具痕がある。



第455図 第1号古墳出土遺物拓影図

2 土坑

A地区から、土坑が22基検出されている。当地区は傾斜地であるため、流れ込みによると思われる厚い表土に覆われており、厚さは1~1.6mにもなる。土坑が構築された時点の表土も厚かったと推測される。したがって、遺構の深さは調査で得られたデータより大きい数値になると考えられる。土坑は、エリアの西部に集中して検出されている。以下、主な土坑について個々に解説を加え、その他については一覧表に記載した。

第3号土坑 (第456図)

位置 調査区西端部, E2a1区。

規模と平面形 直径0.99mのほぼ円形で、深さは9cmである。

壁面 緩やかに傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

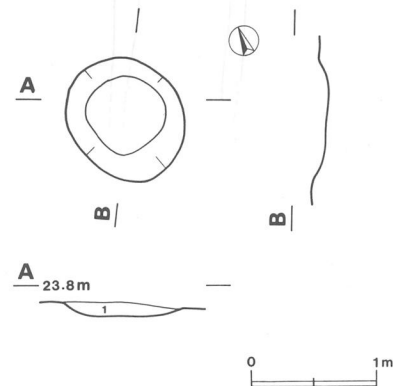
覆土 1層で成る自然堆積層である。

土層解説

1 明褐色 ローム粒子中量, 黒色土粒子中量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。



第456図 第3号土坑実測図

第4号土坑 (第457図)

位置 調査区西端部, E2c2区。

規模と平面形 長径2.16m, 短径1.68mの楕円形で、深さは28cmである。

長径方向 N-14°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層から成る自然堆積層である。

土層解説

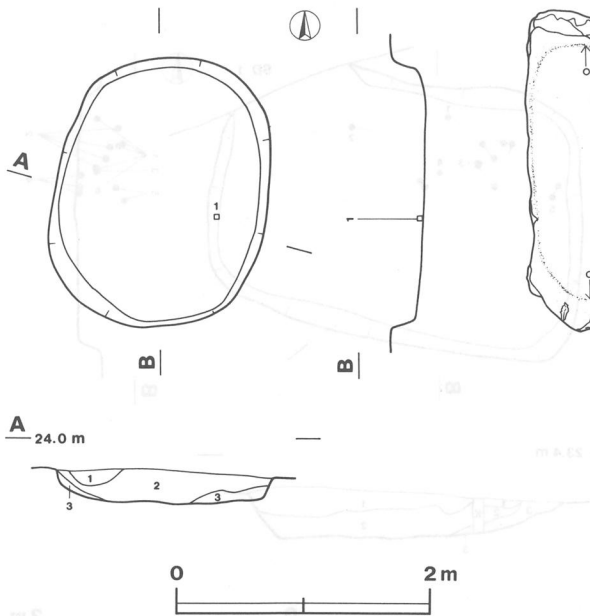
1 褐色 ローム粒子中量

2 褐色 焼土粒子少量, 黒色土粒子中量

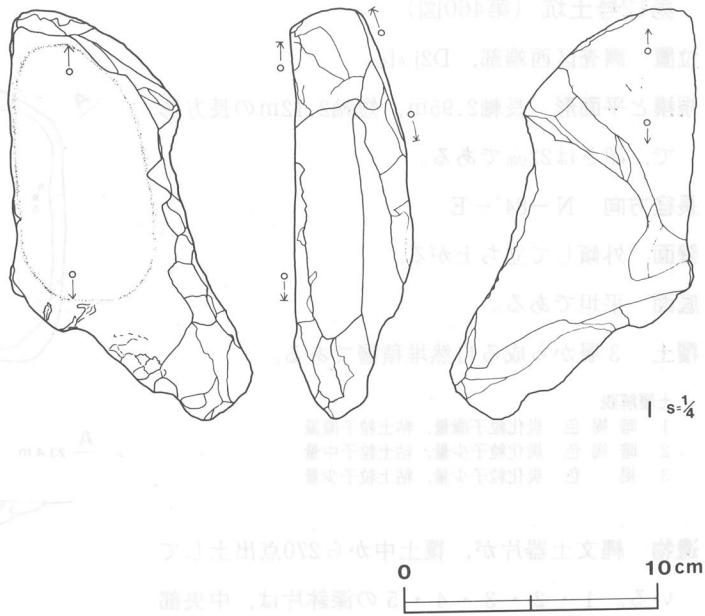
3 明褐色 ローム粒子中量, 黒色土粒子中量

遺物 石器が1点出土している。1の石皿片は、中央部覆土下層から出土している。

所見 本跡は、時期の決定できる遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。



第457図 第4号土坑実測図



第458図 第4号土坑出土遺物実測図

第4号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第458図1	石皿	(21.6)	(12.8)	(6.5)	—	(1567.0)	砂岩	覆土下層	Q160 破片 被熱痕有り

第9号土坑 (第459図)

位置 調査区西部, E2a4区。

規模と平面形 長径3.26m, 短径1.90mの不整楕円形で, 深さは62cmである。

長径方向 N-65°-W

壁面 緩やかに傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

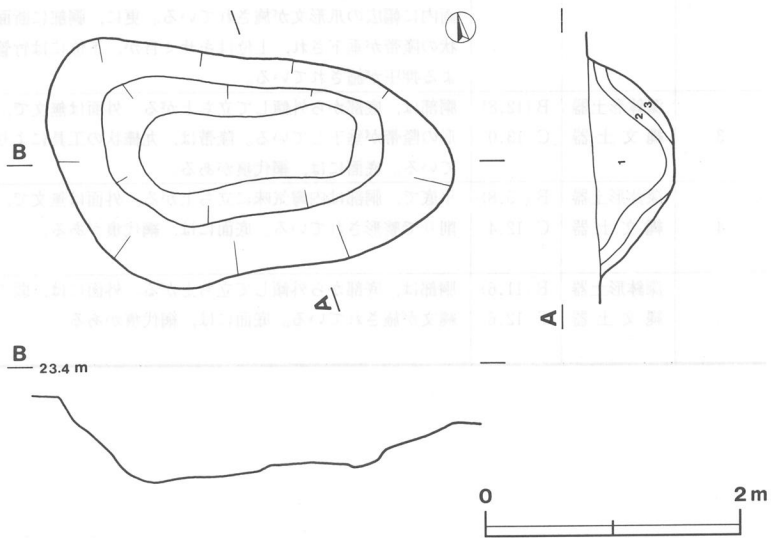
覆土 3層から成る自然堆積層である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量, 黒色粒子多量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 黒色粒子多量
- 3 褐色 ローム粒子多量

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 遺構に伴う遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。



第459図 第9号土坑実測図

第12号土坑（第460図）

位置 調査区西端部，D2j 6区。

規模と平面形 長軸2.95m，短軸2.12mの長方形で，深さは22cmである。

長径方向 N-84°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

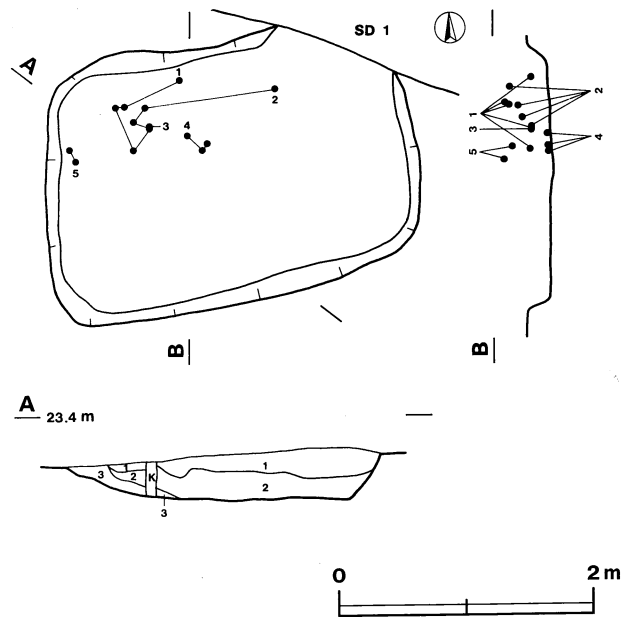
覆土 3層から成る自然堆積層である。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子微量，粘土粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量，粘土粒子中量
- 3 褐色 炭化粒子少量，粘土粒子少量

遺物 縄文土器片が，覆土中から270点出土している。1・2・3・4・5の深鉢片は，中央部付近の覆土中層から破片でそれぞれ出土している。4の深鉢片と9の打製石斧は，中央部の覆土下層から出土している。

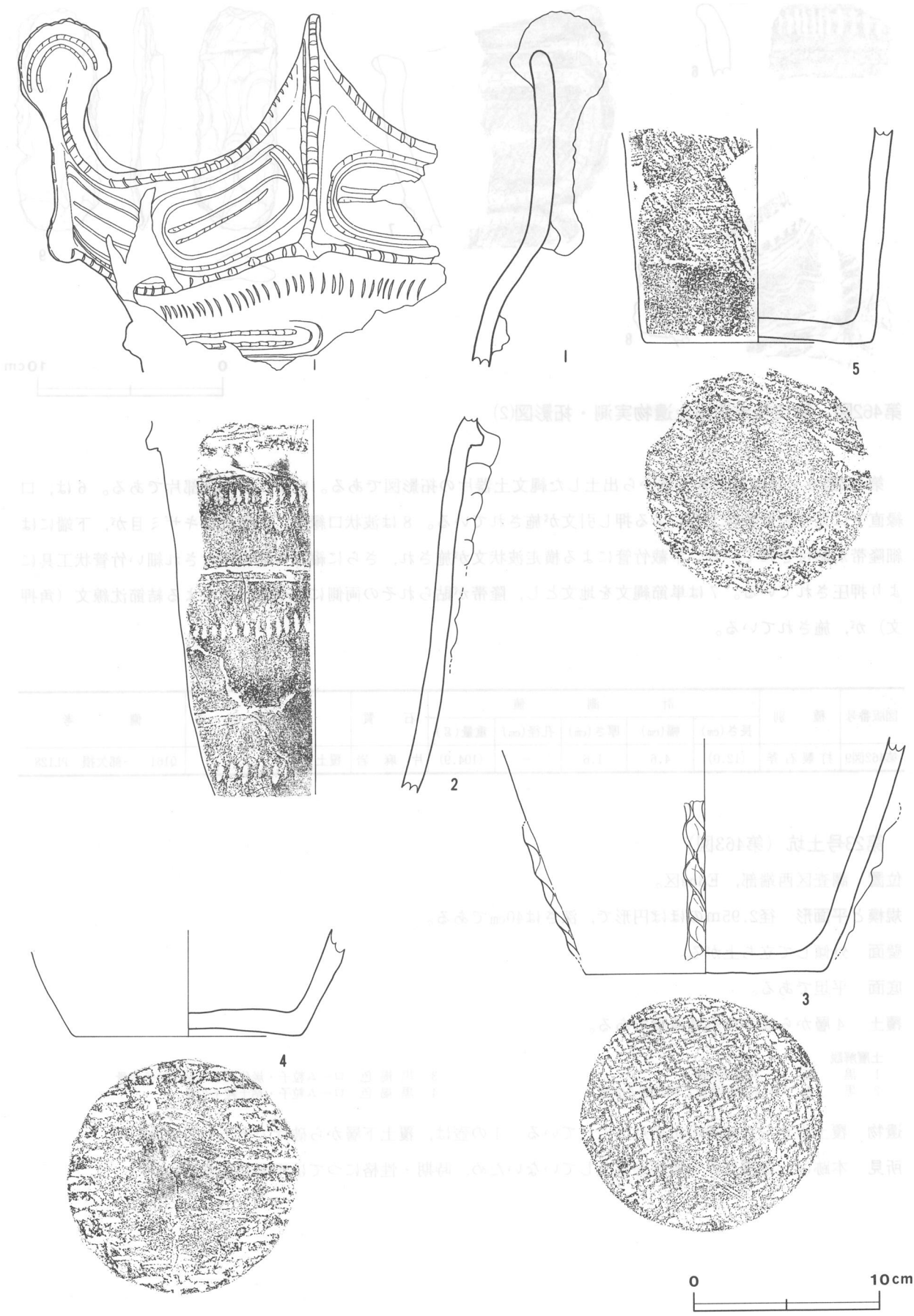
所見 本跡は，出土遺物から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅱ式期）の遺構と考えられる。



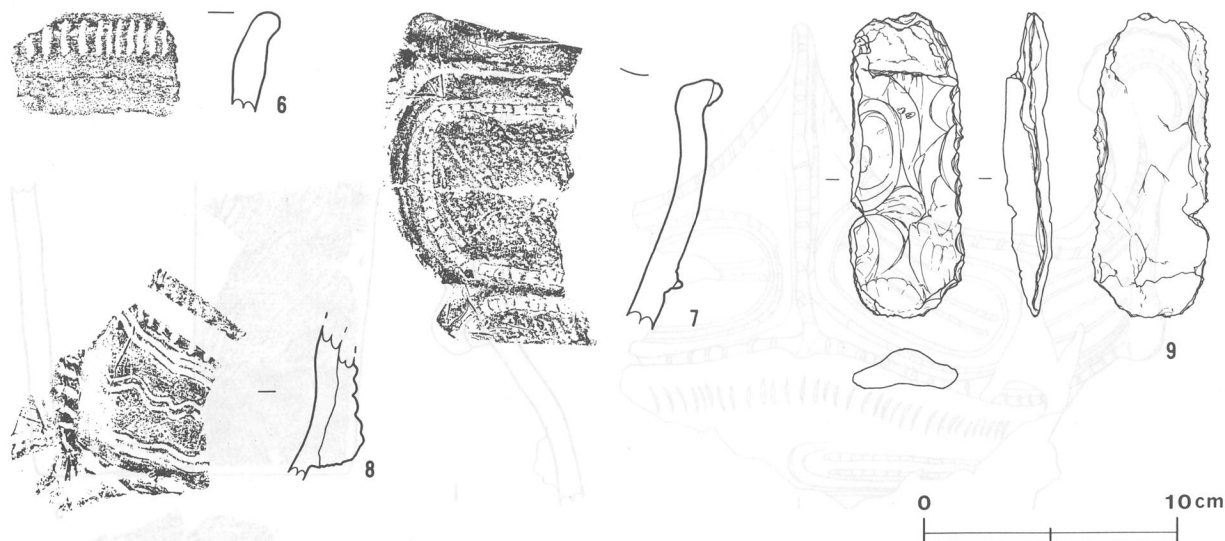
第460図 第12号土坑実測図

第12号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第461図 1	深鉢形土器 縄文土器	A [26.7] B 19.3	口縁部は浅く内彎し，口唇部にはヘラ状工具によるキザミ目が施されている。口縁には扇状の把手を備え，把手の上面にはキザミ目が，側面には弧状の結節沈線文が施されている。把手間は，隆帯により二つに楕円区画され，区画内中央部と隆帯に沿って，二列の結節沈線文が施されている。頸部は，断面三角形の隆帯により区画され，区画内には幅広の爪形文が巡らされている。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P921 10% PL126 中央部覆土中層
2	深鉢形土器 縄文土器	B (20.4)	胴部は円筒形で，底部に向かいすぼまっている。頸部には断面カマボコ状の隆帯が巡る。隆帯に沿って二列の結節沈線文が施されている。胴部は半截竹筴による結節沈線文で三つに区画され，区画内に幅広の爪形文が施されている。更に，胴部に断面半楕円形状の隆帯が垂下され，上位はキザミ目が，下位には竹管状工具による押圧が施されている。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P922 10% PL126 中央部覆土中層 P921と同一個体の可能性有り
3	深鉢形土器 縄文土器	B (12.8) C 13.0	胴部は，底部から外傾して立ち上がる。外面は無文で，断面三角形の隆帯が垂下している。隆帯は，丸棒状の工具により押圧されている。底面には，網代痕がある。	長石・石英・雲母 パミス 赤褐色 普通	P923 10% PL126 中央付近覆土中層
4	深鉢形土器 縄文土器	B (5.8) C 12.4	平底で，胴部は内彎気味に立ち上がる。外面は無文で，横方向の削りで整形されている。底面には，網代痕がある。	長石・石英・雲母 スコリア にぶい橙色 普通	P924 10% 中央部覆土下層
5	深鉢形土器 縄文土器	B (11.6) C 12.6	胴部は，底部から外傾して立ち上がる。外面には，弱く無節Lの縄文が施されている。底面には，網代痕がある。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P925 10% PL126 中央部覆土中層



第461図 第12号土坑出土遺物実測図(1)



第462図 第12号土坑出土遺物実測・拓影図(2)

第462図6～8は第12号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。いずれも口縁部片である。6は、口縁直下に太目の竹管状工具による押し引文が施されている。8は波状口縁で、上端にはキザミ目が、下端には細隆帯が貼付されている。半截竹管による横走波状文が施され、さらに縦長の瘤が貼付され細い竹管状工具により押圧されている。7は単節縄文を地文とし、隆帯が貼られその両側には半截竹管による結節沈線文(角押文)が、施されている。

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第462図9	打製石斧	(12.0)	4.6	1.6	—	(104.9)	片麻岩	覆土下層	Q161 一部欠損 PL128

第23号土坑 (第463図)

位置 調査区西端部, E3h3区。

規模と平面形 径2.95mのほぼ円形で、深さは40cmである。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

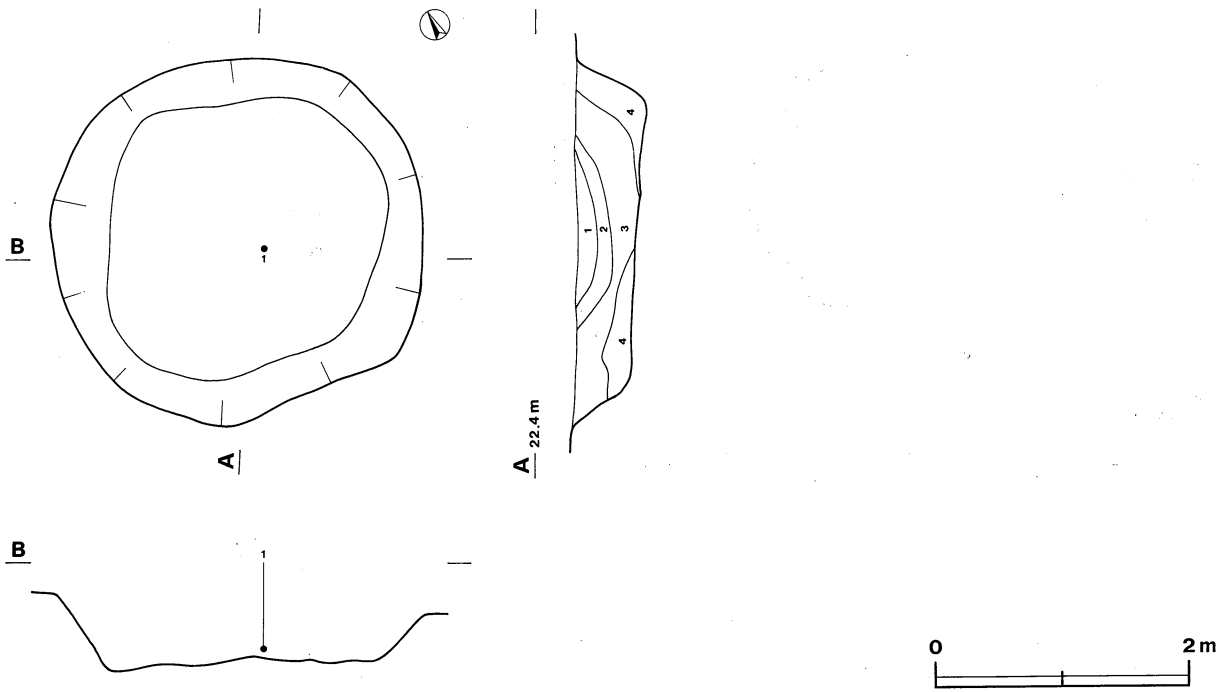
覆土 4層から成る自然堆積層である。

土層解説

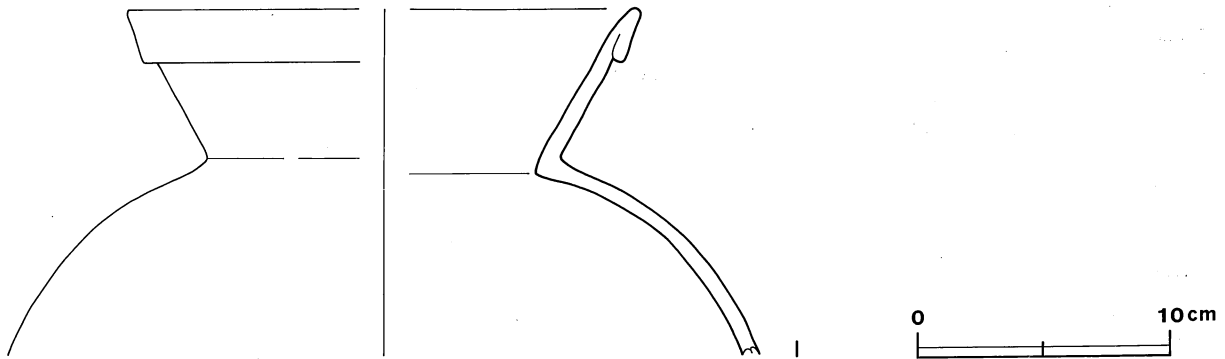
- | | | | |
|------|-----------------|-------|-------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 黒色 | ローム粒子微量, 炭化粒子少量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |

遺物 覆土中から土師器片が16点出土している。1の壺は、覆土下層から破片で出土している。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土していないため、時期・性格については不明である。



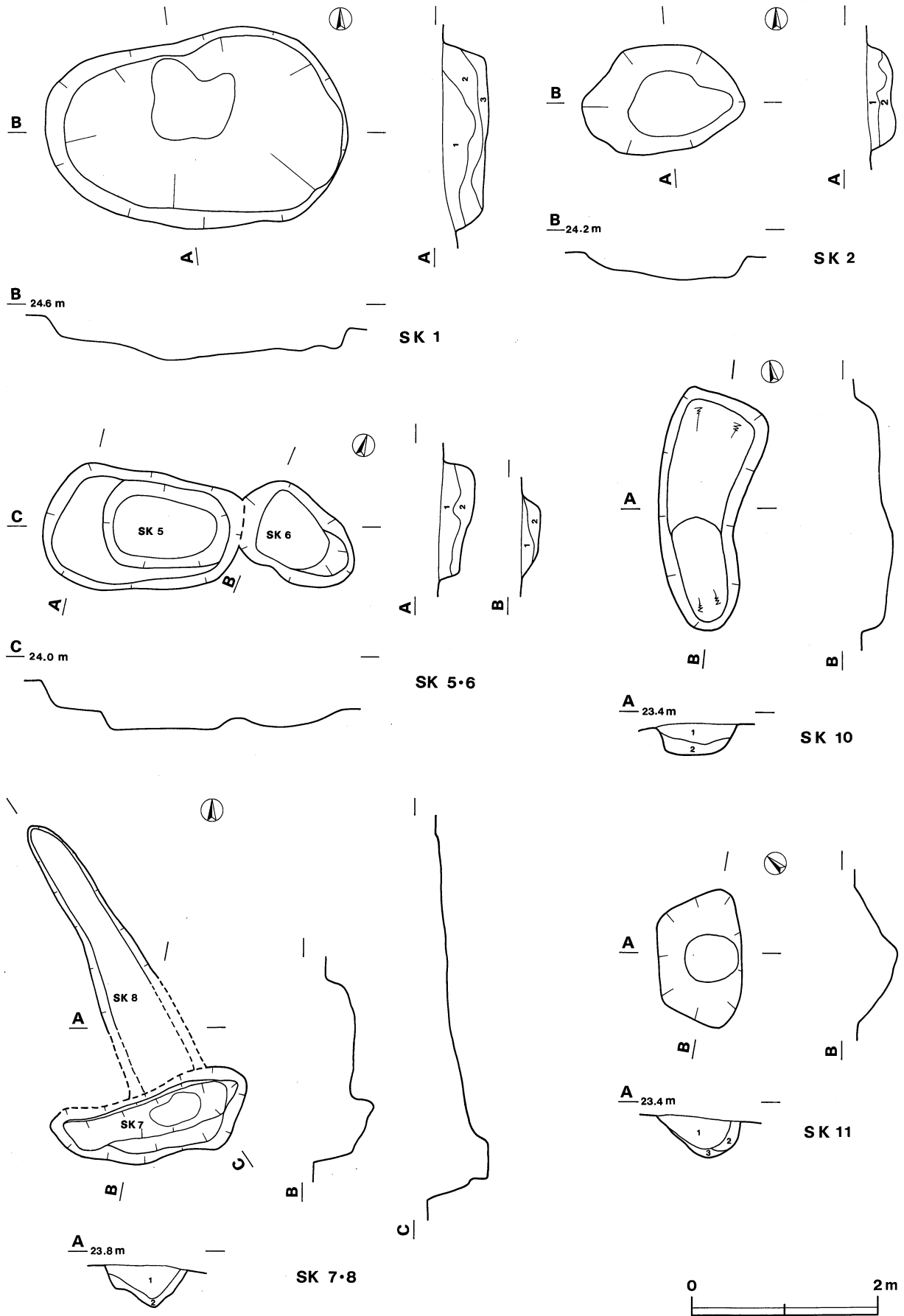
第463図 第23号土坑実測図



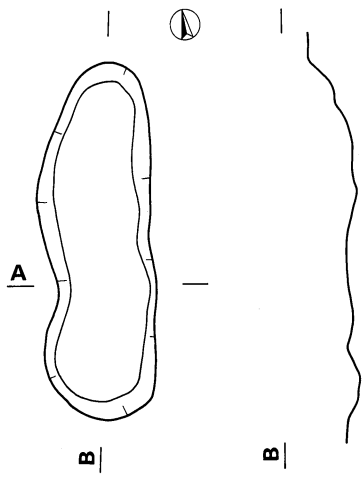
第464図 第23号土坑出土遺物実測図

第23号土坑出土遺物観察表

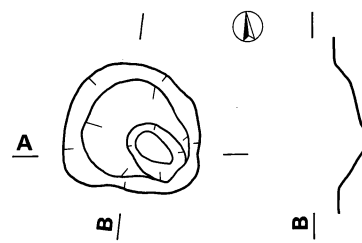
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第464図 1	壺 土師器	A(20.4) B(13.8)	体部上位から口縁部にかけての破片。 体部は内彎し、頸部は「く」の字状 に外反して口縁部に至る。複合口縁 である。	口縁部から体部にかけて、内・外面 横位のナデ。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P929 20% PL126 覆土下層



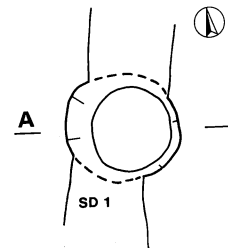
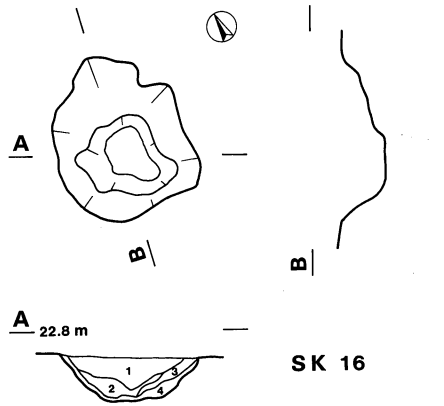
第465図 その他の土坑実測図(1)



A 23.8 m
SK 13

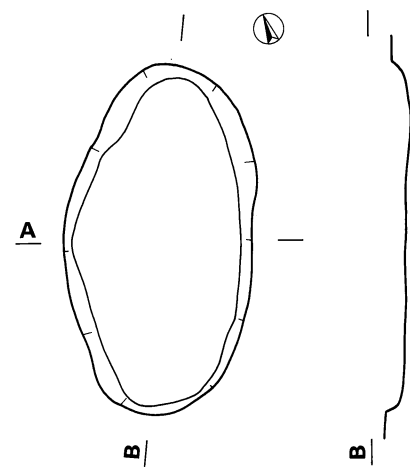


SK 14

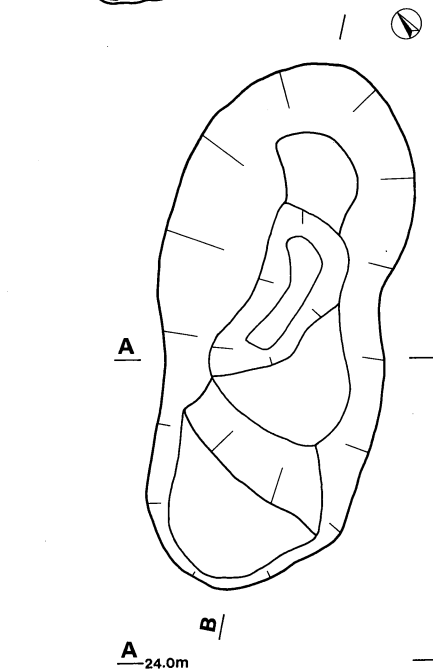


A 23.0 m
SK 15

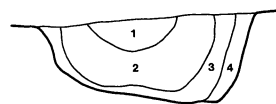
A 22.8 m
SK 17



A 22.8 m
SK 18

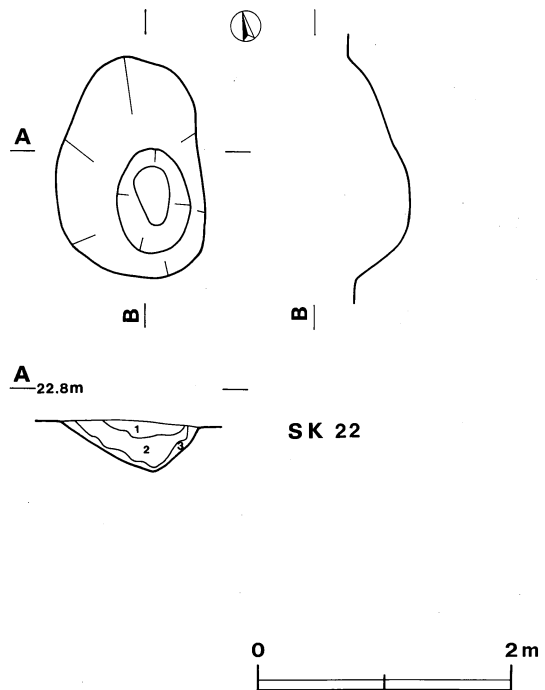
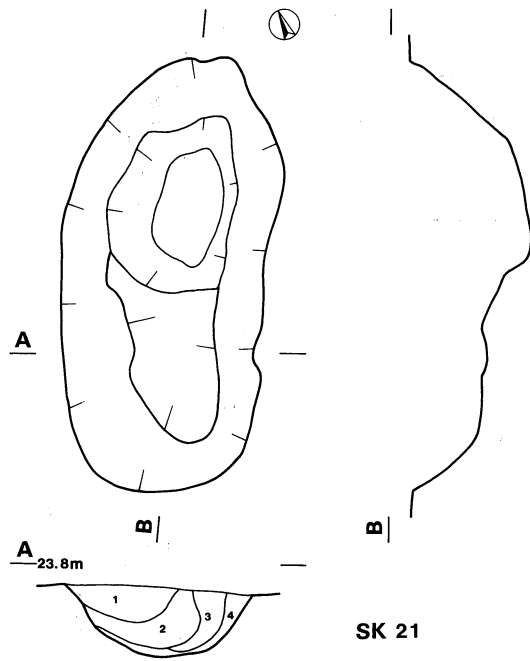


A 24.0 m



SK 20
0 2m

第466図 その他の土坑実測図(2)



第467図 その他の土坑実測図(3)

第1号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 3 橙色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量

第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量, 黒色粒子多量

第5号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

第6号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
炭化粒子少量

第10号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム粒子多量, 黒色粒子中量

第11号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 明黄褐色 ローム粒子中量, 黒色粒子中量
- 3 明黄褐色 ローム粒子中量, 黒色粒子少量

第13号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黄橙色 ローム粒子少量

第14号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量, 粘土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, 粘土粒子多量
- 4 黄褐色 ローム粒子中量, 粘土小ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量, 粘土粒子中量
- 6 黒褐色 ローム粒子微量, 粘土粒子多量

第16号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量, ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量, 黒色粒子少量
- 4 明褐色 ローム粒子多量, 黒色粒子中量

第18号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 黒色粒子中量

第20号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子微量, 黒色粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 黒色粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子多量, 黒色粒子中量

第21号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量, ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子多量, 黒色粒子中量, 鹿沼パミス少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, 黒色粒子中量

第22号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量, 黒色粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量, 黒色粒子中量

表5 権現堂遺跡土坑一覧表

[]推定 () 現存

番号		長軸方向	平面形	規模(m) 軸×短軸	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	D1g ₈	N-83°-W	楕円形	3.26 × 2.06	39	傾斜	平坦	自然	土師器片	
2	D1h ₀	N-87°-W	楕円形	1.73 × 1.16	27	傾斜	平坦			
3	E2a ₁	N-0°	円形	0.99 × 0.88	9	傾斜	平坦	自然	縄文土器片	
4	E2c ₂	N-14°-E	楕円形	2.16 × 1.68	28	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 石器(石皿, 磨石)	
5	E2b ₂	N-74°-E	楕円形	[2.13] × 1.34	53	段状	平坦	人為		
6	E2b ₂	N-73°-W	不整楕円形	1.42 × 0.95	23	傾斜	平坦	-		
7	E2b ₂	N-74°-E	不定形	2.17 × 0.73	64	外傾	凸凹	自然		
8	E2b ₂	N-34°-W	不定形	(3.10) × 0.75	39	傾斜	平坦	自然		
9	E2a ₄	N-65°-W	不整楕円形	3.26 × 1.90	62	傾斜	平坦	自然		
10	E2a ₄	N-12°-E	不定形	2.64 × 1.12	37	傾斜	平坦	自然		
11	D2j ₅	N-40°-E	長方形	1.45 × 0.90	45	傾斜	V字状	人為		
12	D2j ₆	N-84°-E	長方形	2.95 × 2.12	22	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 石器(打製石斧)	
13	D2j ₃	N-10°-E	楕円形	2.83 × 0.90	38	傾斜	平坦	自然		
14	E2e ₅	N-53°-W	長方形	1.87 × 1.28	52	傾斜	V字状	人為		
15	E2c ₆	N-88°-W	円形	0.90 × 0.85	48	垂直	平坦	自然		
16	E2e ₇	N-13°-E	不定形	1.34 × 1.00	35	傾斜	凸凹	人為		
17	E2e ₉	N-43°-W	円形	1.17 × (1.10)	15	傾斜	V字状	人為		
18	E2d ₉	N-25°-E	楕円形	2.78 × 1.49	100	傾斜	平坦	人為		
20	D2a ₇	N-50°-E	楕円形	4.25 × 1.87	90	外傾	凸凹	人為		円筒土坑 (平安時代)
21	D2a ₇	N-35°-E	楕円形	3.50 × 1.60	45	外傾	凸凹	人為		
22	D3h ₈	N-2°-E	楕円形	1.75 × 1.16	10	傾斜	平坦	人為		
23	F3h ₃	N-0°	円形	2.95 × 2.9	40	外傾	平坦	自然	土師器片	

3 井戸

当遺跡からは、井戸が1基検出されている。以下、規模や形状及び出土遺物について記載する。

第1号井戸 (第468図)

位置 調査区西部, D2j₄区。

重複関係 本跡は第1号溝に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長径2.10m, 短径1.90mのほぼ円形で、深さは2.33mである。

長径方向 N-84°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、中位から外傾する。

底面 平坦である。

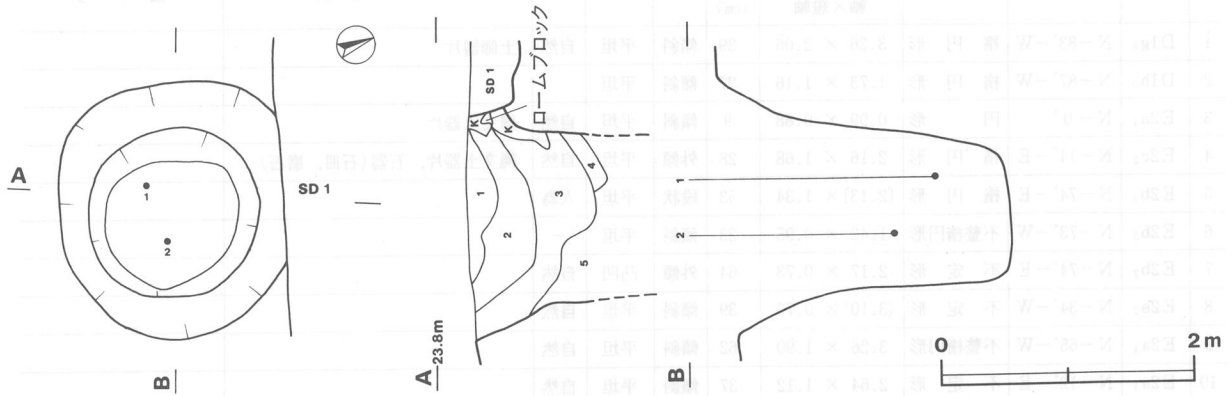
覆土 湧水の為5層までの確認である。自然堆積層である。

土層解説

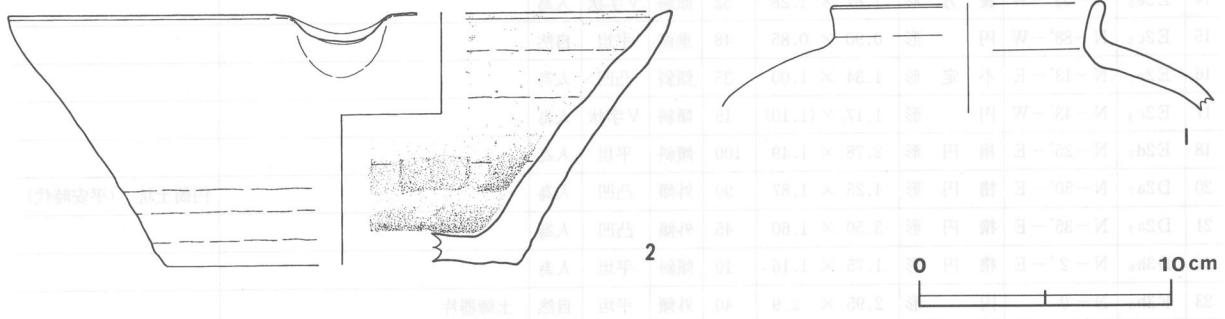
- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子少量 |
| 2 黒色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子多量 |
| 3 黒色 | ローム粒子微量, 炭化粒子少量, 粘土粒子中量 | | |

遺物 覆土中から陶器片が5点, 雲母片岩が9点出土している。1の壺は底面直上から、2の片口鉢は覆土下層からどちらも破片で出土している。

所見 本跡は、遺構の形態と2の遺物から中世（13世紀後半）の井戸と思われる。雲母片岩が数点覆土中から出土しているが、隣接地であるC地区の第1号古墳の石材である雲母片岩が抜き取られていることから推測して、同一の物である可能性が高い。



第468図 第1号井戸実測図



第469図 第1号井戸出土遺物実測図

第1号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第469図 1	短頸壺 陶器	A [11.0] B (4.3)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は大きく内彎し、頸部は直立して口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	P927 5% 底面直上
2	片口鉢 陶器	A [26.6] B 10.0 C [14.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ナデ。体部内・外面に輪積み痕有り。	石英・雲母・パミス にぶい赤褐色 普通	P928 10% PL128 覆土下層

4 溝

当遺跡からは、5条の溝が検出されている。A地区から4条、C地区から1条である。以下、規模と形状等について記載する。

第1号溝（第477図）

位置 調査A地区西部，D2i1～E2d6区。

重複関係 本跡は、第1号井戸の北壁及び第12号土坑の北壁を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と形状 上幅0.42～0.76m，下幅0.28～0.60m，深さ16～32cmで，全長約39mである。底面は平坦で断面形は「逆台形」状である。

方向 当遺跡の西端部から南東方向へほぼ直線的に約22m延び、D2j6区でほぼ直角に向きを変え、更に南西方向へ延びる。

覆土 3層から成る自然堆積層である。各層ともしまりがあり、中・下層は粘土を含む。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 黒色土粒子多量、粘土粒子少量
- 3 黄橙色 ローム粒子微量、粘土粒子多量

遺物 覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片2点、土師器片3点が出土している。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。

第2号溝 (第477図)

位置 調査A地区北西部、D2b6～D2i7区。

規模と形状 上幅0.70～1.20m、下幅0.50～0.95m、深さ28～35cmで、全長約31mである。底面は平坦で断面形は「逆台形」状である。

方向 当遺跡の北東端部から南方向へほぼ直線的に約31m延びている。確認できた南端部はD2i7区までであるが、厚く堆積していた表土中に更に延びていたと思われる。

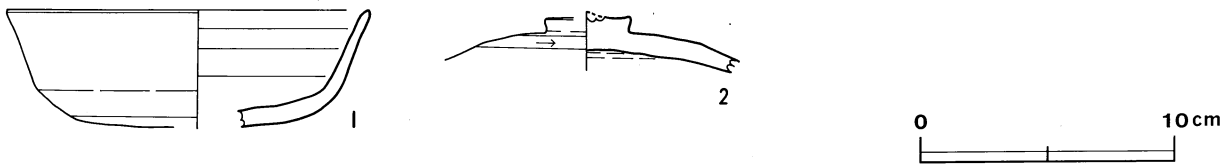
覆土 3層から成る自然堆積層である。各層とも締まりがあり、黒色土粒子を含む。傾斜地であるため、覆土は西側から流れ込んでいるのが堆積状況からわかる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、黒色土粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子微量、黒色土粒子中量
- 3 黒色 ローム粒子少量、黒色土粒子中量

遺物 覆土中から僅かに須恵器片が出土している。1の坏は北端部から、2の蓋は中央部付近からで、どちらも覆土中層から出土している。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土しておらず、時期・性格等については不明である。



第470図 第2号溝出土遺物実測図

第2号溝出土遺物観察表

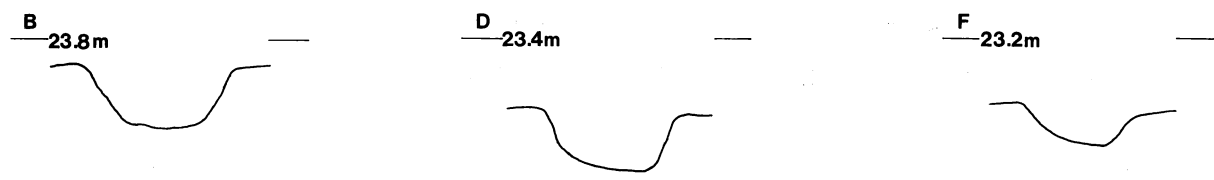
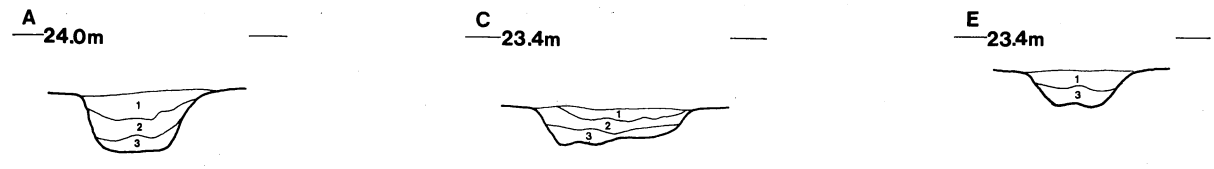
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第471図 1	坏 土師器	A 14.4 B (4.7)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部ナデ。	長石・石英・雲母 淡黄色 普通	P930 50% PL128 北端部覆土中層
2	蓋 土師器	B (2.2) F (3.4) G (0.6)	天井部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部はほぼ平坦である。	つまみ、天井部内・外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P931 50% PL128 中央付近覆土中層

第3号溝 (第477図)

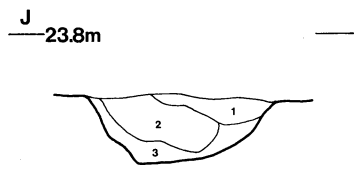
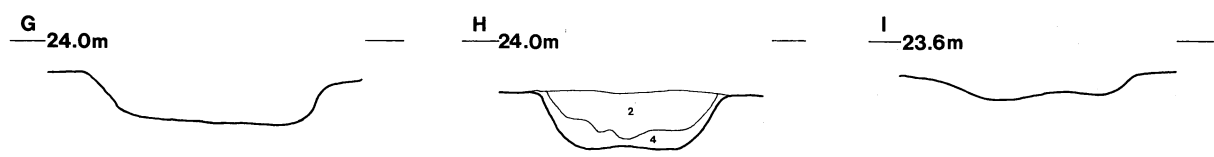
位置 調査A地区中央部、E3c4～E3e7区。

規模と形状 上幅0.54～1.08m、下幅0.18～0.40m、深さ18～25cmで、全長約13.60mである。底面は丸みを帯び、断面形は緩やかな「U」字状である。

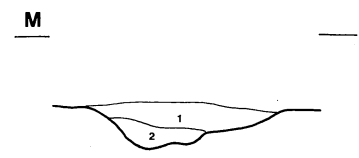
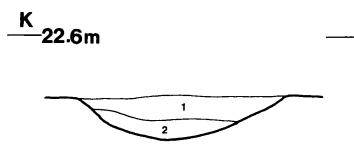
方向 エリア中央部から南東方向へ、ほぼ直線的に延びている。北西端部が確認できていないが、更に北方向



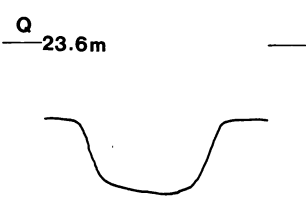
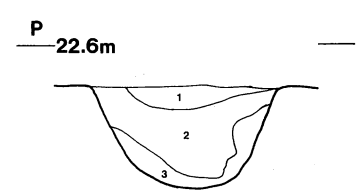
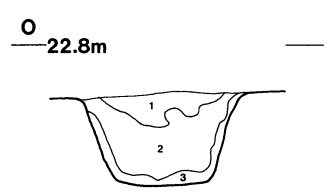
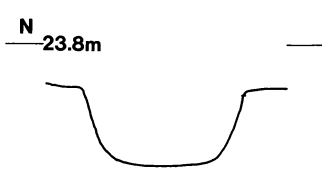
SD 1 (A~F)



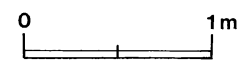
SD 2 (G~J)



SD 3 (K~M)



SD 4 (N~Q)



第471図 第1~4号溝土層セクション・断面図

へ延びていたと思われる。

覆土 2層から成る自然堆積層で、2層ともしまっている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 黒色土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。

第4号溝 (第477図)

位置 調査A地区東部, D3f₈～E4c₁区。

規模と形状 上幅0.75～1.00m, 下幅0.35～0.68m, 深さ35～60cmで、全長約36.50mである。底面は平坦で断面形は「逆台形」状である。

方向 当遺跡の北東端部から南方向へほぼ直線状に約30m延び、更に「L字」状に曲がり東方向に6.50m延びる。北端部及び東端部は、更にエリア外に延びる。

覆土 3層から成る自然堆積層である。上層と下層は、黒色土粒子を含む。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 黒色土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・中ブロック少量
- 3 黒色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 黒色土粒子中量

遺物 覆土中から流れ込みと思われる縄文土器, 土師器の小破片が僅かに出土している。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。

第5号溝 (第478図)

位置 調査C地区北部, A4b₅～A4c₉区。

重複関係 本跡の北西端部は、第1号古墳の北側の周溝を掘り込んでおり、本跡が新しい。

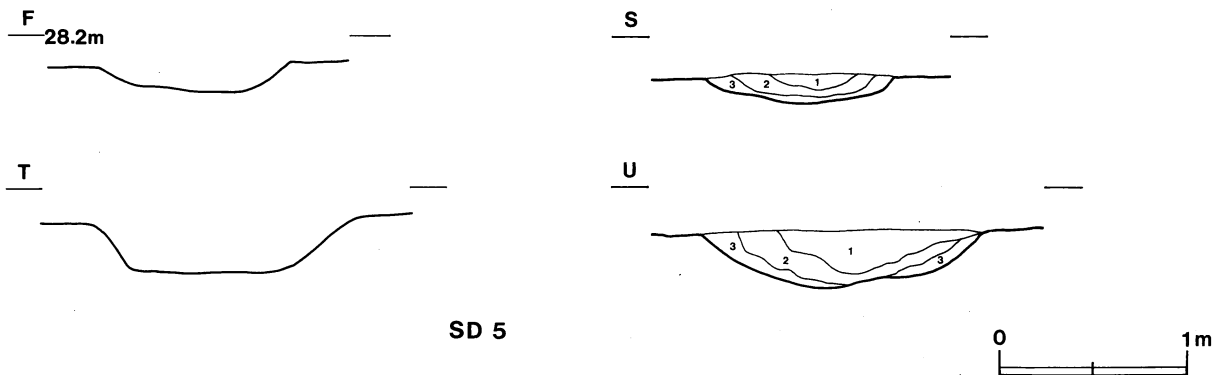
規模と形状 上幅0.95～1.55m, 下幅0.55～0.95m, 深さ42～83cmで、全長約23.50mである。底面は平坦で断面形は「逆台形」状である。

方向 A4b₅区からほぼ直線的に南東方向に延び、更に南東端部はエリア外に延びる。

覆土 3層から成る自然堆積層である。現況が山林であるため、木根による攪乱が大きい。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック少量



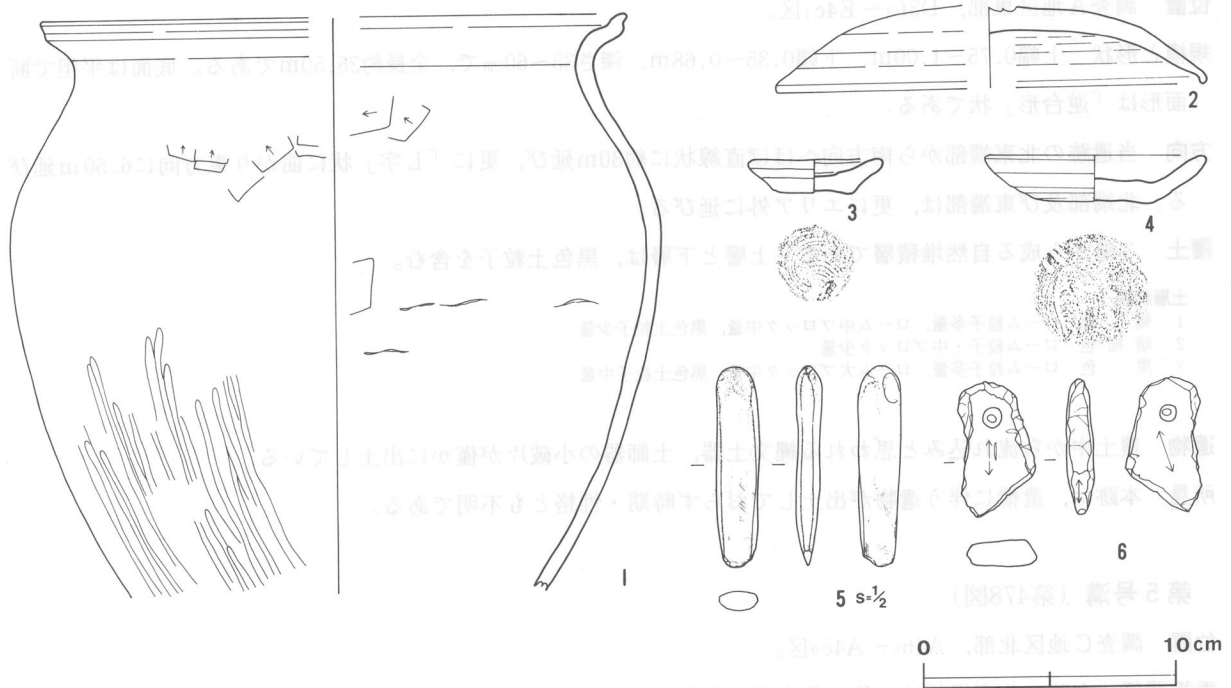
第472図 第5号溝土層セクション・断面図

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。

5 遺構外出土遺物

当遺跡では、調査B区の表土中から縄文土器片が出土しており、主なものについて拓影図により記載した。また、調査C区からは、攪乱された表土中から蔵骨器が横倒しで出土し、蓋として使用されたとされると思われる灰釉陶器も破片で出土した。表土は腐葉土であり遺構の形状は確認できていない。更に、当地区からは、第1号古墳の墳丘や周溝、及びその周辺の表土中から多数の皿(土師質土器)が出土している。

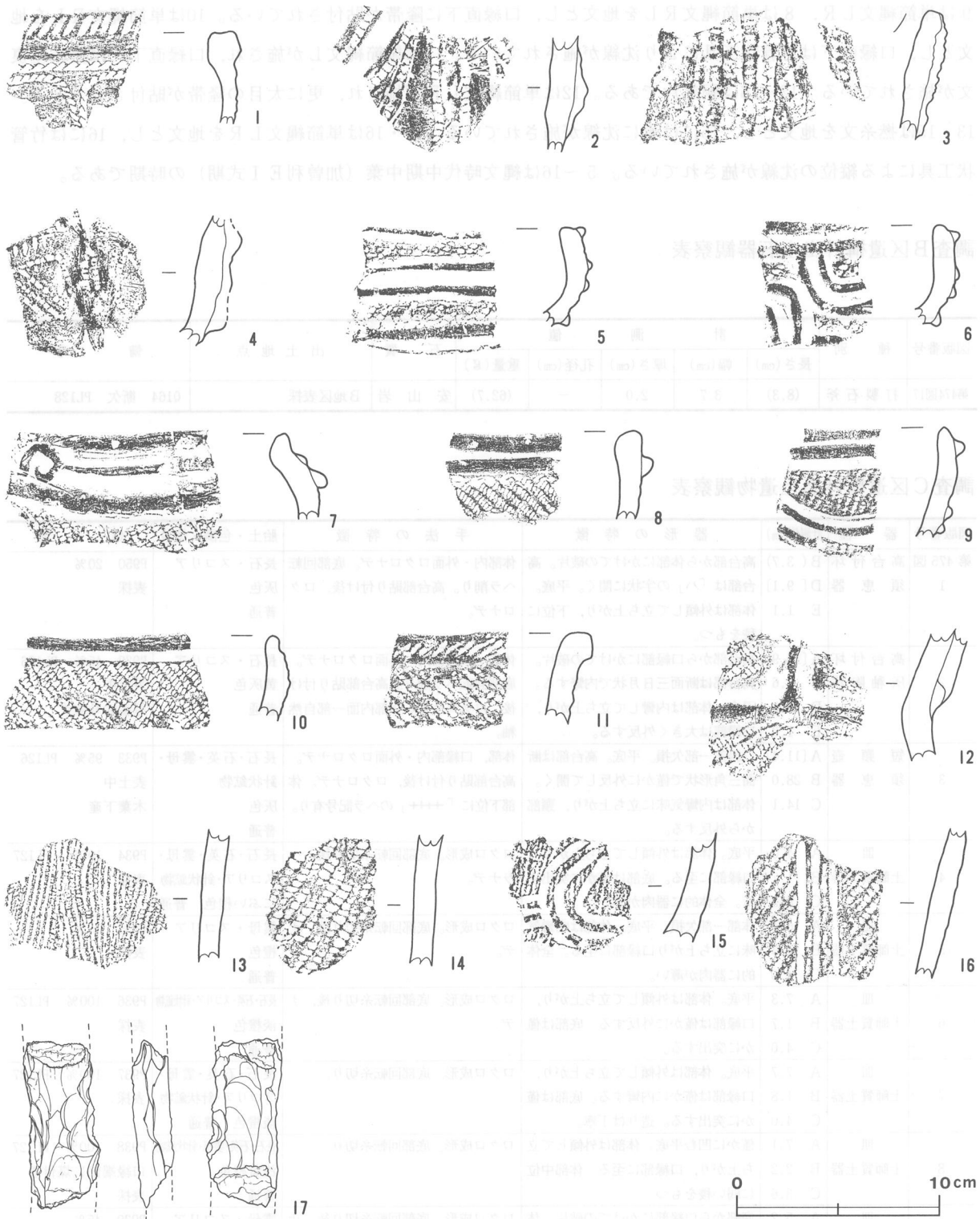


第473図 調査A区遺構外出土遺物実測図

調査A区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第473図 1	甕 土師器	A (23.3) B (22.8)	体部下位から口縁部にかけての破片。体部は内彎する。口縁部は外反して立ち上がり、中位に稜をもつ。口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ、下位から中位縦位のヘラ磨き。体部内面横位のヘラナデ。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P946 20% 表土中
2	蓋 須恵器	A (17.0) B (3.2)	天井部から口縁部にかけての破片。天井部はほぼ平坦で、緩やかに開く。端部は屈曲して垂下する。	天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石・石英・針状鉱物 黄灰色 普通	P947 50% 表土中
3	小皿 土師質土器	A 5.3 B 1.4 C 3.1	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部内面は、一段下がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母・ スコリア・針状鉱物 にぶい橙色 普通	P948 95% PL127 表採
4	皿 土師質土器	A 8.1 B 1.4 C 4.5	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・ スコリア・針状鉱物 橙色 普通	P949 95% PL127 表採

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第473図5	磨製石斧	5.3	1.3	0.6	—	5.5	頁岩	A地区表土中	Q162
6	砥石	(5.4)	(3.1)	1.1	—	(22.0)	緑色凝灰岩	A地区表採	Q163 破片 PL128



第474図 調査B区遺構外出土遺物実測・拓影図

第474図1～16は、調査B区から出土した縄文土器片の拓影図である。1～11は口縁部片で、2～4は波状口縁である。1は竹管状工具により、口唇部にキザミ目を、口縁直下には刺突文が施されている。2・3は半截竹管による押し引文が施され、中央には隆帯が垂下されている。4は縦長の瘤が貼付され竹管状工具により押し引されている。また、口唇部にはキザミ目が施されている。1～4は縄文時代中期前葉（阿玉台式期）の時期である。5・6は縄文を地文とし、細隆帯により区画されている。5・6は同一個体と考えられる。7・

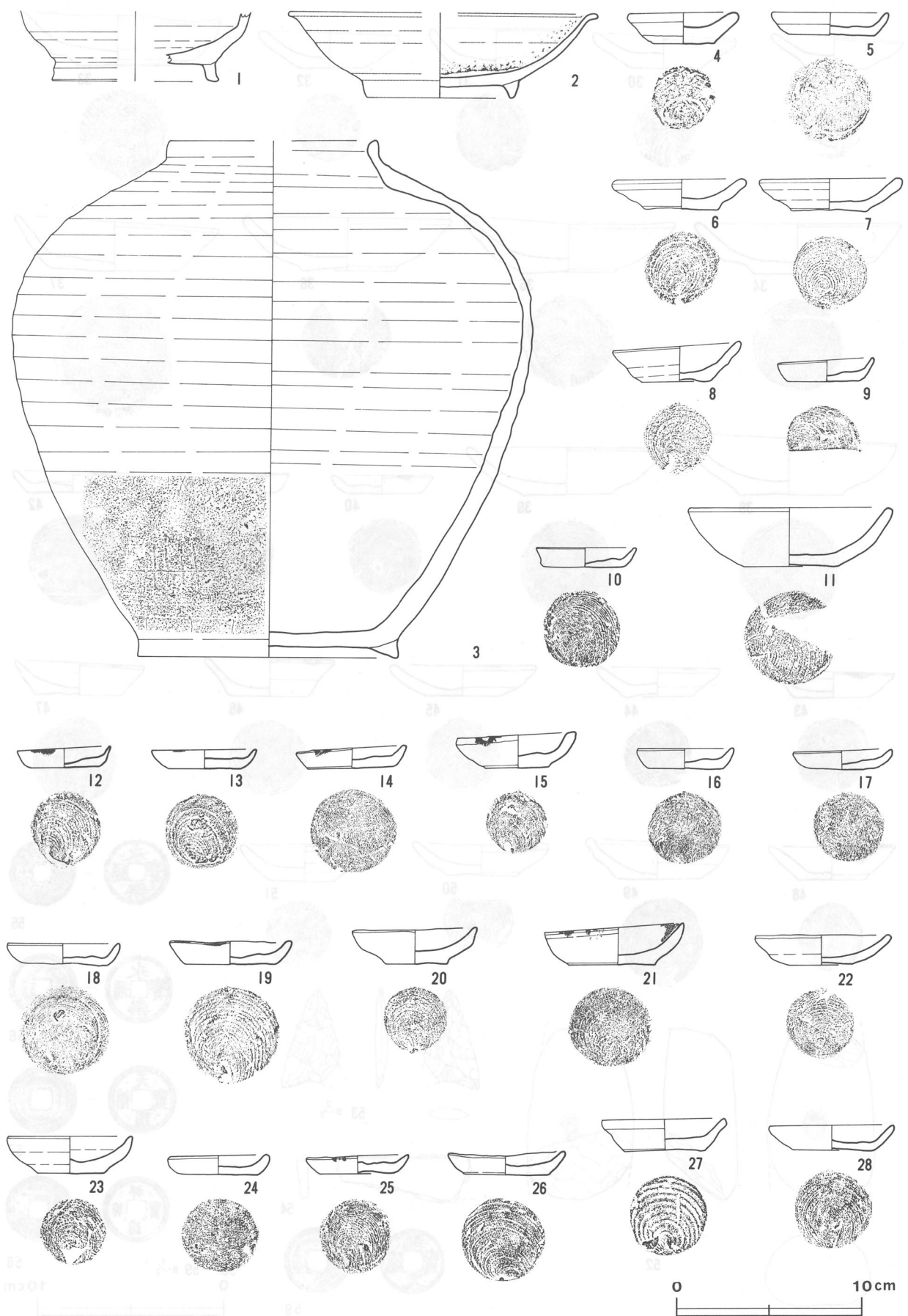
9は単節縄文LR, 8は単節縄文RLを地文とし, 口縁直下に隆帯が貼付されている。10は単節縄文RLを地文とし, 口縁直下は竹管状工具により沈線が施されている。11は無節縄文Lが施され, 口縁直下には捺糸圧痕文が施されている。12~16は胴部片である。12は単節縄文LRが施され, 更に太目の隆帯が貼付されている。13・15は捺糸文を地文とし, 15には更に沈線が施されている。14・16は単節縄文LRを地文とし, 16には竹管状工具による縦位の沈線が施されている。5~16は縄文時代中期中葉(加曾利E I 式期)の時期である。

調査B区遺構外出土石器観察表

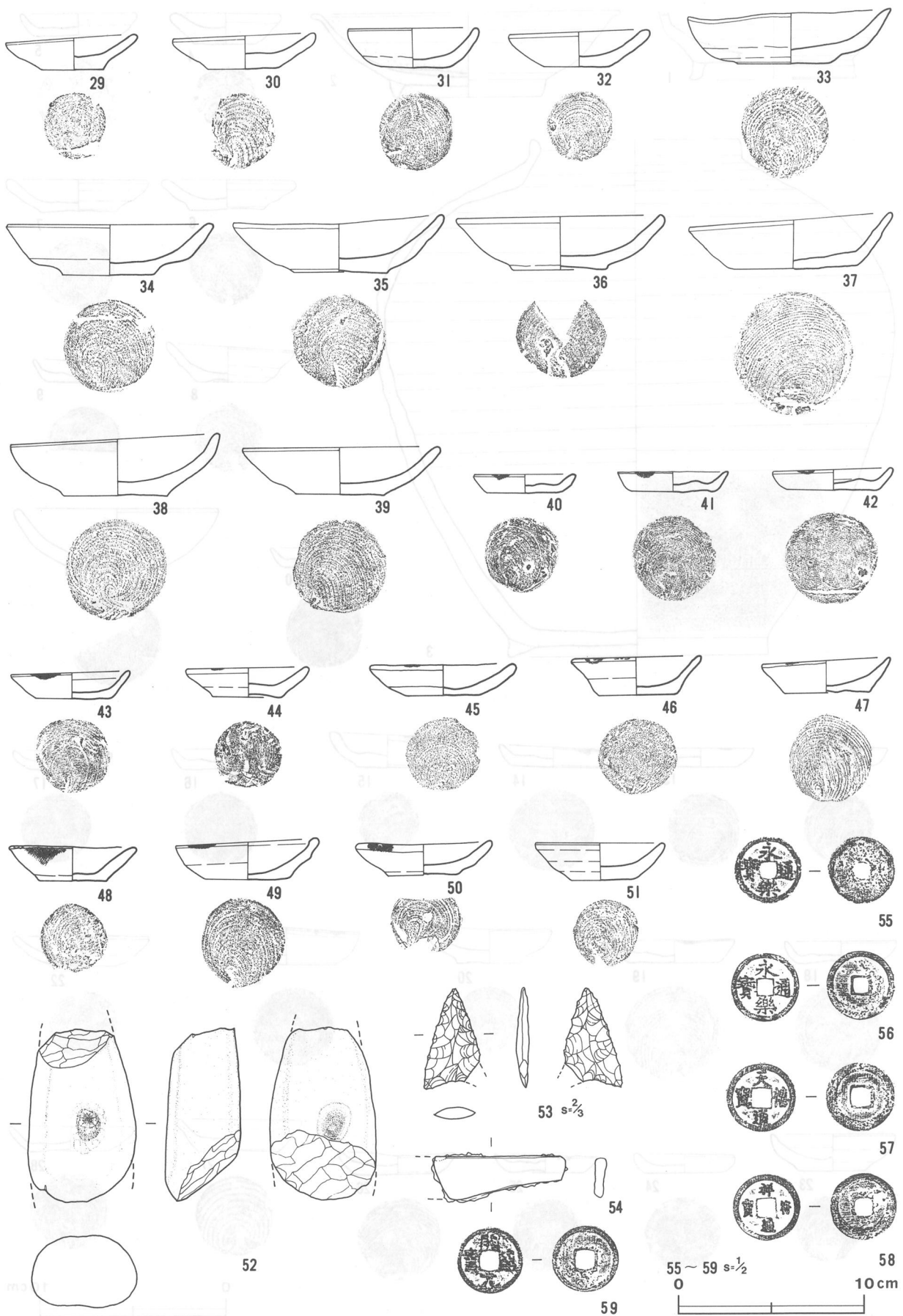
図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第474図17	打製石斧	(8.3)	3.7	2.0	—	(62.7)	安山岩	B地区表採	Q164 断欠 PL128

調査C区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第475図1	高台付坏須恵器	B (3.7) D (9.1) E 1.1	高台部から体部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は外傾して立ち上がり, 下位に稜をもつ。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け後, ロクロナデ。	長石・スコリア 灰色 普通	P950 20% 表採
2	高台付坏灰釉陶器	A (16.9) B 4.6 D 8.1 E 1.0	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は断面三日月状で内彎する。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は大きく外反する。	体部, 口縁部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け後, ロクロナデ。体部内面一部自然釉。	長石・スコリア 黄灰色 普通	P932 45% PL126 表土中 黒笹90号窯式
3	短頸壺須恵器	A (11.4) B 28.0 C 14.1	口縁部一部欠損。平底。高台部は断面三角形で僅かに外反して開く。体部は内彎気味に立ち上がり, 頸部から外反する。	体部, 口縁部内・外面ロクロナデ。高台部貼り付け後, ロクロナデ。体部下位に「++++」のヘラ記号有り。	長石・石英・雲母・針状鉱物 灰色 普通	P933 95% PL126 表土中 木葉下産
4	皿土師質土器	A 4.0 B 1.7 C 3.3	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。底部は僅かに突出する。全体的に器肉が厚い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後, ヘラナデ。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物 にぶい橙色 普通	P934 100% PL127 表採
5	皿土師質土器	A 6.4 B 1.3 C 4.6	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。全体的に器肉が薄い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後, ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P935 95% 表採
6	皿土師質土器	A 7.3 B 1.7 C 4.0	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部は僅かに外反する。底部は僅かに突出する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後, ナデ。	長石・石英・スコリア・針状鉱物 淡橙色 普通	P936 100% PL127 表採
7	皿土師質土器	A 7.7 B 1.8 C 4.0	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部は僅かに内彎する。底部は僅かに突出する。造りは丁寧。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物 淡橙色 普通	P937 100% PL127 表採
8	皿土師質土器	A 7.1 B 2.2 C 3.6	僅かに凹む平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。体部中位に弱い稜をもつ。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母・針状鉱物 浅黄橙色 普通	P938 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
9	皿土師質土器	A 5.2 B 1.2 C 4.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。器肉は薄い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後, ナデ。	雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P939 45% 表採
10	皿土師質土器	A 5.4 B 1.1 C 4.5	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。底部内面中央部が凹む。器肉は薄い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後, ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P940 95% 表採
11	皿土師質土器	A 11.1 B 3.2 C 5.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部に至る。体部の器肉は薄い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後, ナデ。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P941 60% 表採



第475図 調査C区遺構外出土遺物実測図(1)



第476図 調査C区遺構外出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 475 図 12	皿 土師質土器	A 5.2	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面中央部が凹む。器肉は薄い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	石英・スコリア にぶい橙色 普通	P942 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.2				
		C 3.8				
13	皿 土師質土器	A 5.7	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底径が大きい。体部の器肉は薄い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P943 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.1				
		C 3.9				
14	皿 土師質土器	A 6.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底径が大きい。体部の器肉は薄い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア・ 針状鉱物 にぶい橙色 普通	P944 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.1				
		C 4.2				
15	皿 土師質土器	A 6.4	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面中央部が凹む。口縁端部は僅かに器肉が厚い。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	スコリア 浅黄色 普通	P945 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.8				
		C 3.3				
16	皿 土師質土器	A 5.3	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面中央部が凹む。底径が大きい。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P951 95% PL127 表採
		B 1.2				
		C 4.0				
17	皿 土師質土器	A 5.4	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面中央部が凹む。底径が大きい。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P952 100% 表採
		B 1.1				
		C 3.6				
18	皿 土師質土器	A 6.1	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面中央部が凹む。底径が大きい。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P953 100% PL127 表採
		B 1.2				
		C 4.3				
19	皿 土師質土器	A 6.6	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面中央部が凹む。底径が大きい。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P954 100% 表採
		B 1.3				
		C 5.0				
20	皿 土師質土器	A 6.9	平底。底部は突出する。体部は内彎気味に立ち上がり外面は中位から外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P955 100% PL127 表採
		B 1.9				
		C 3.4				
21	皿 土師質土器	A 7.6	平底。底部は僅かに突出する。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・ スコリア・針状鉱物 普通	P956 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 2.3				
		C 4.7				
22	皿 土師質土器	A 7.5	僅かに凹む平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母・ スコリア・針状鉱物 普通	P957 98% 表採
		B 1.6				
		C 3.4				
23	皿 土師質土器	A 6.8	平底。底部は僅かに突出する。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・ スコリア・針状鉱物 普通	P958 90% PL127 表採
		B 2.0				
		C 3.6				
24	皿 土師質土器	A 5.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底径が大きい。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P959 95% 表採
		B 1.1				
		C 4.1				
25	皿 土師質土器	A 5.6	僅かに凹む平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面に凹凸有り。底径が大きい。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P960 90% 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.0				
		C 4.0				
26	皿 土師質土器	A 6.8	口縁部一部欠損。底部は僅かに突出する。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	雲母・スコリア 橙色 普通	P961 95% 表採
		B 1.3				
		C 4.6				
27	皿 土師質土器	A 6.8	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は僅かに膨らむ。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母・ スコリア にぶい橙色 普通	P962 95% PL127 表採
		B 1.7				
		C 4.4				
28	皿 土師質土器	A 6.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底径が大きい。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P963 90% 表採
		B 1.4				
		C 4.2				
第 476 図 29	皿 土師質土器	A 7.2	口縁部一部欠損。底部は僅かに突出する。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア・ 針状鉱物 にぶい橙色 普通	P964 95% PL127 表採
		B 1.9				
		C 3.3				
30	皿 土師質土器	A 7.8	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は僅かに膨らむ。器肉が厚い。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母 スコリア 橙色 普通	P965 90% 表採
		B 1.9				
		C 3.9				

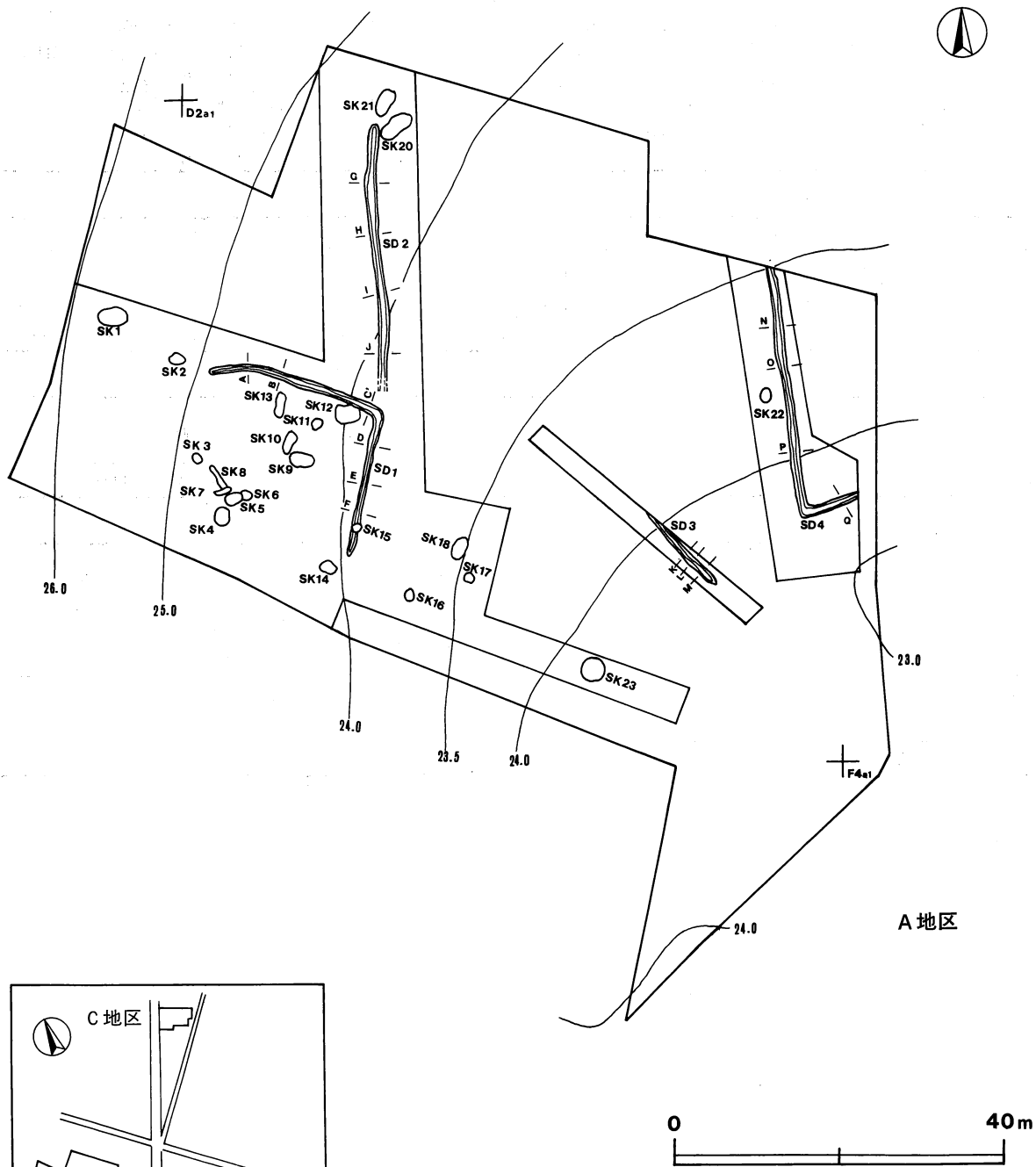
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第476図 31	皿 土師質土器	A 7.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面僅かに凹凸有り。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物にぶい橙色 普通	P966 95% 表採
		B 2.1				
		C 3.9				
32	皿 土師質土器	A 7.8	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は僅かに膨らむ。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア 普通 にぶい橙色	P967 95% 表採
		B 2.1				
		C 3.7				
33	皿 土師質土器	A 11.0	底部は突出する。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は僅かに外反する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ハラナデ。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物 浅黄橙色 普通	P968 100% 表採
		B 3.0				
		C 5.1				
34	皿 土師質土器	A 11.3	口縁部一部欠損。底部は突出する。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。体部の器肉は厚い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P969 90% 表採
		B 2.7				
		C 5.0				
35	皿 土師質土器	A 11.4	底部は僅かに突出する。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。体部に歪み有り。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物 浅黄橙色 普通	P970 95% 表採
		B 3.1				
		C 5.0				
36	皿 土師質土器	A 11.3	底部は突出する。僅かに凹む平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。体部の器肉は厚い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物にぶい橙色 普通	P971 70% 表採
		B 2.9				
		C 5.1				
37	皿 土師質土器	A 11.1	体部一部欠損。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面は僅かに凹む。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリアにぶい橙色 普通	P972 70% 表採
		B 2.9				
		C 7.0				
38	皿 土師質土器	A 11.4	体部一部欠損。底部は突出する。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物にぶい橙色 普通	P973 80% 表採
		B 3.4				
		C 5.5				
39	皿 土師質土器	A 10.7	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、中位から口縁部にかけて直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P974 60% 表採
		B 2.6				
		C 4.8				
40	皿 土師質土器	A 5.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。底部内面は僅かに凹む。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P975 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.1				
		C 3.9				
41	皿 土師質土器	A 6.0	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部の器肉は薄い。底部内面に凹凸有り。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P976 95% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.2				
		C 4.5				
42	皿 土師質土器	A 6.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。底部内面に凹凸有り。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P977 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.3				
		C 4.9				
43	皿 土師質土器	A 6.6	僅かに凹む平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。底部内面は凹む。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P978 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.5				
		C 4.1				
44	皿 土師質土器	A 6.7	底部は僅かに突出する。僅かに凹む平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物 明褐色 普通	P979 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.6				
		C 3.8				
45	皿 土師質土器	A 8.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。体部の器肉は厚い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物にぶい橙色 普通	P980 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.7				
		C 4.0				
46	皿 土師質土器	A 7.1	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、中位から僅かに外反して口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P981 100% PL127 口縁端部に煤多量付着 表採
		B 2.1				
		C 4.2				
47	皿 土師質土器	A 7.0	底部は僅かに突出する。僅かに凹凸のある平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物にぶい赤褐色 普通	P982 98% 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.9				
		C 4.8				
48	皿 土師質土器	A 7.0	底部は僅かに突出する。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。底部の器肉は薄い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P983 100% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 1.9				
		C 3.6				
49	皿 土師質土器	A 7.9	底部は僅かに突出する。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。体部中位に弱い稜をもつ。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア・針状鉱物にぶい橙色 普通	P984 95% PL127 口縁端部に煤付着 表採
		B 2.2				
		C 4.6				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第476図 50	皿 土師質土器	A 7.4	底部から口縁部にかけて一部欠損。 底部は僅かに突出する。平底。体部 は内彎気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナ デ。	雲母・スコリア・ 針状鉱物 にぶい橙色 普通	P985 70% 口縁端部に煤附着 表採
		B 2.8				
		C 3.8				
51	皿 土師質土器	A 7.1	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、 口縁部に至る。全体的に器肉は厚い。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナ デ。	長石・石英・雲母・ スコリア にぶい橙色 普通	P986 70% 表採
		B 2.1				
		C 3.6				

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第476図52	凹石	(9.3)	5.8	4.1	—	(299.0)	砂岩	C地区表採	Q165 一部欠損 PL128
53	石鏃	(2.7)	(1.6)	0.3	—	(1.1)	チャート	C地区表採	Q166 一部欠損 PL128

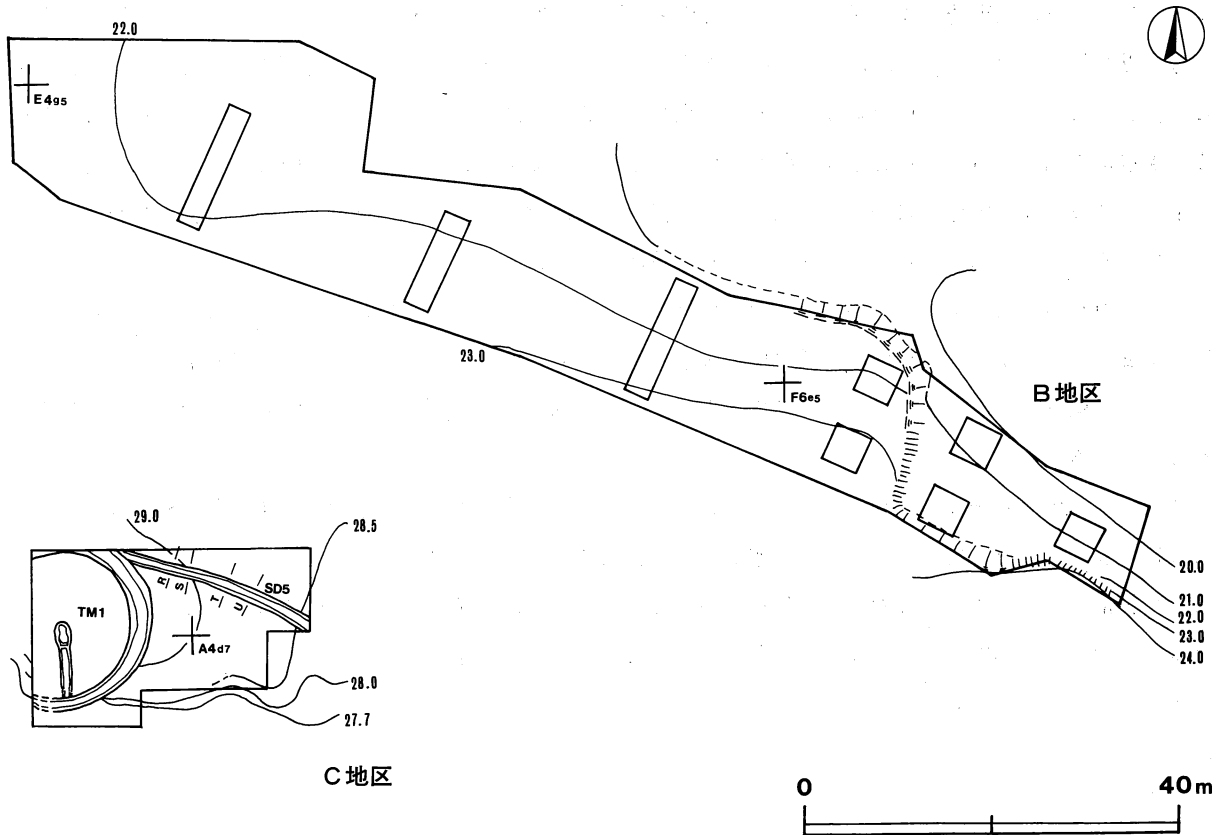
図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第476図54	不明鉄製品	(7.4)	(2.7)	0.7	—	(32.5)	覆土中	M12 破片 PL128

図版番号	鑄名	初鑄年	鑄造地名	出土地点	備考
		西暦			
第476図55	永樂通寶	1408	明	調査C区表土中	M5 PL128
56	永樂通寶	1408	明	調査C区表土中	M8 PL128
57	天禧通寶	1017	北宋	調査C区表土中	M6 PL128
58	祥符通寶	1009	北宋	調査C区表土中	M10
59	開元通寶	960	南唐	調査C区表土中	M7 PL128



権現堂遺跡地区割概念図

第477図 権現堂遺跡遺構全体図(1)



第478図 権現堂遺跡遺構全体図(2)

第4節 まとめ

当遺跡は、3か所の調査区に分かれており、それぞれの区で出土遺構・遺物に特徴が見出せる。調査区別に、その特徴について簡潔に記述しまとめとする。

<調査A区>

土坑21基、井戸1基、溝4条が検出された。傾斜地であり流れ込みによる表土が多く、また降雨後は湧水の多い地区である。そのことにより、居住場所としては不向きであるためか、住居跡は確認されていない。

縄文時代中期阿玉台式期の土坑が1基検出されたが、その他に当時期の遺構はない。溝は、当区から4条検出されているが、遺構に伴う遺物がなく時期は不明である。しかし、低地方向に走る溝であることから、排水目的である可能性が高い。

<調査B区>

遺構は確認されず、トレンチ調査で終了となった。エリアの北側と西側は道路が走り、自然地形は攪乱を受けている。また、当調査区は、谷津に面した耕作地であり整地されている。縄文時代中期の土器片が出土しているが、西側に隣接する包蔵地からの流れ込みと思われる。この包蔵地で、同時期の縄文土器が多量に実見できること、平坦地であることなどから、遺構は調査区の西側に広がると推測される。

<調査C区>

古墳(円墳)1基、溝1条が検出されている。古墳については、前述したように攪乱及び盗掘により良好な資料は得られなかった。出土遺物としては、周溝の覆土中から出土した同心円の敲き目がある須恵器片だけで

ある。7世紀末の須恵器の甕と考えられることから、覆土の堆積状況や出土位置から推測して、7世紀後半の築造と思われる。埋葬施設は、横穴式石室である。石室の石材は雲母片岩（筑波石）で、墳丘や周溝の覆土中に散在しており、同一の石材が調査A区でも出土している。ほぼ、全ての石材が抜き取られているため埋葬施設の構造は不明である。石室と掘り方の間には、裏込めとして粘土と黒色土が突き固められている。裏込めの土中に、10cm程度の雲母片岩が所々に見られる。裏込め部は攪乱を受けていないことから、石室を製作中に混入していると考えられる。石組みの過程で生じた破片と思われる。

また、攪乱された腐葉土が多い表土中から横位の状態で蔵骨器が出土している。蔵骨器には、火葬骨がよく残っており、そのすぐ脇から灰釉陶器の坏が破片で出土している。位置関係から蓋として使用されていたと考えられる。蔵骨器の短頸壺は、木葉下産で9世紀中頃、灰釉陶器の高台付坏は黒笹90号窯式で9世紀後半の時期と思われる。

他に、表土中から多数の土師質土器の皿が出土している。小形・中形・大形の3タイプが認められるが、小形の皿の多くには煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと思われる。底部が糸切りの平底であること、口縁部の器肉が厚いことから15～17世紀頃のものと考えられるが、詳細については不明である。元禄13年と刻まれた墓碑の周囲から特に多く出土していることから、その関連性が考えられる。時期の細分については、今後の分析に期待したい。

参考文献

- ・塩谷 修 「終末期古墳の地域相 —— 茨城県桜川河口域の事例から ——」 『土浦市立博物館紀要』第4号 土浦市立博物館 1992年3月
- ・茨城町史編纂委員会 『茨城町史・通史』茨城町 1995年2月
- ・白石 太郎 「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991年3月

第5章 親塚古墳

第1節 遺跡の概要

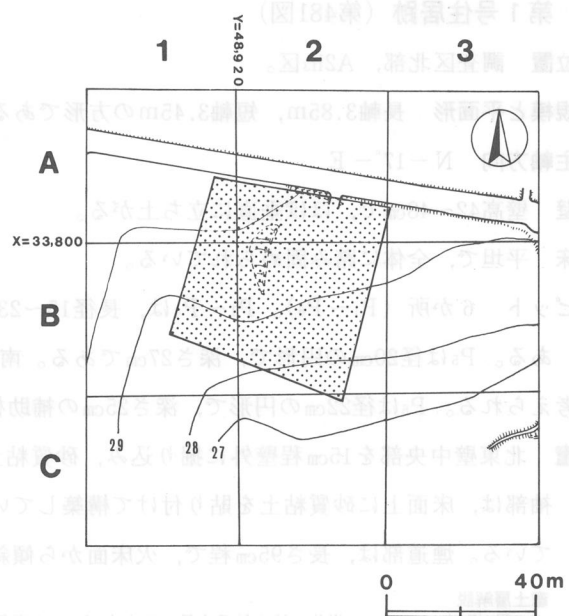
親塚古墳は、茨城町の北西部、涸沼川左岸の標高24～26mの河岸段丘上に位置している。遺跡の南側には東西に流れる涸沼川と、水田に利用されている沖積低地が広がっている。東には、南小割遺跡、権現堂遺跡が所在している。調査区の現況は畑・平地林で、水田との比高は12～14mである。南東には茨城町地方では一番古いとされている前方後方墳の「宝塚古墳」（4世紀末から5世紀初頭）が所在している。また、南東5kmほどの涸沼川対岸の河岸段丘上には、「奥谷遺跡」が所在している。

今回の調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、塚1基、火葬墓2基、土坑3基である。塚は、東部半分が削平され耕作地として使用されている。

また、現存している西部のほぼ中央は掘り込まれ攪乱されている。当遺跡は、調査前までは古墳として周知されていたが、主体部や周溝をもたないことから塚であることが確認できた。塚及び土坑は出土遺物がなく、時期や性格等については不明である。

奈良・平安時代の遺構として、竪穴住居跡を1軒、火葬墓2基を検出した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に2箱出土した。主な遺物は、土師器(坏, 甕)・須恵器(坏)である。



第479図 親塚古墳調査区

第2節 基本層序

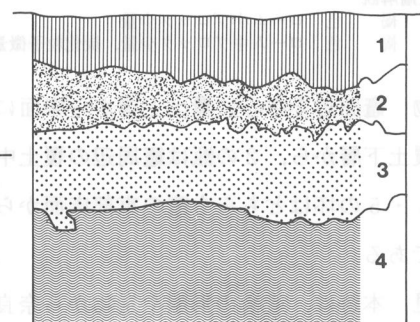
調査区内 (B2e9区) にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った (第480図)。

第1層は、24～42cmの厚さの褐色土で、ソフトローム層である。しまり、粘性ともに強い層である。 28.8m—

第2層は、18～35cmの厚さの明褐色土で、ハードローム層である。本層の下位には鹿沼パミスが混入している。

第3層は、30～48cmの厚さで、黄褐色をした鹿沼パミス層である。 27.8 —

第4層は、50cm以上の厚さで、明褐色をした粘土層である。白色粘土粒子少量とスコリア粒子微量を含んでいる。



第480図 親塚古墳基本土層図

ローム層から鹿沼パミスまでの深さは約60cmとかなり浅いことや、第2・3層の境界は凹凸が激しいことなどから、強く流水による影響を受けたものと考えられる。遺構は、第1層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

調査エリア北部で竪穴住居跡1軒を検出した。塚の盛土を全て除去した後、更に遺構確認を行ったが遺構は検出されなかった。隣接して北東方向には後原遺跡があり、そこでは住居跡は確認されていないことから、集落が北西方向に広がっている可能性がある。

以下、遺構の規模や形態、遺物について記載する。

第1号住居跡（第481図）

位置 調査区北部、A2h3区。

規模と平面形 長軸3.85m、短軸3.45mの方形である。

主軸方向 N-17°-E

壁 壁高42~48cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、全体に踏み固められている。

ピット 6か所（P₁~P₆）。P₁~P₄は、長径15~23cm、短径10~21cmの楕円形で、深さ22~26cmの主柱穴である。P₅は径20cmの円形で、深さ27cmである。南西壁方向に傾斜しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₆は径22cmの円形で、深さ25cmの補助柱穴と思われる。

竈 北東壁中央部を15cm程壁外に掘り込み、砂質粘土で構築している。規模は、長さ65cm、幅132cmである。袖部は、床面上に砂質粘土を貼り付けて構築している。火床部は、浅い「皿」状で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は、長さ95cm程で、火床面から傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム・炭化・焼土粒子少量、焼土小ブロック微量、ローム小ブロック微量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子・炭化物微量、砂中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック微量、炭化・焼土粒子中量 |
| 4 赤褐色 | 炭化・焼土粒子多量、焼土中・大ブロック微量 |
| 5 赤褐色 | 炭化・焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、焼土中ブロック微量 |
| 6 暗赤褐色 | 炭化・焼土粒子多量、焼土小ブロック多量、焼土中ブロック中量 |
| 7 褐色 | 炭化・焼土粒子中量、砂中量 |

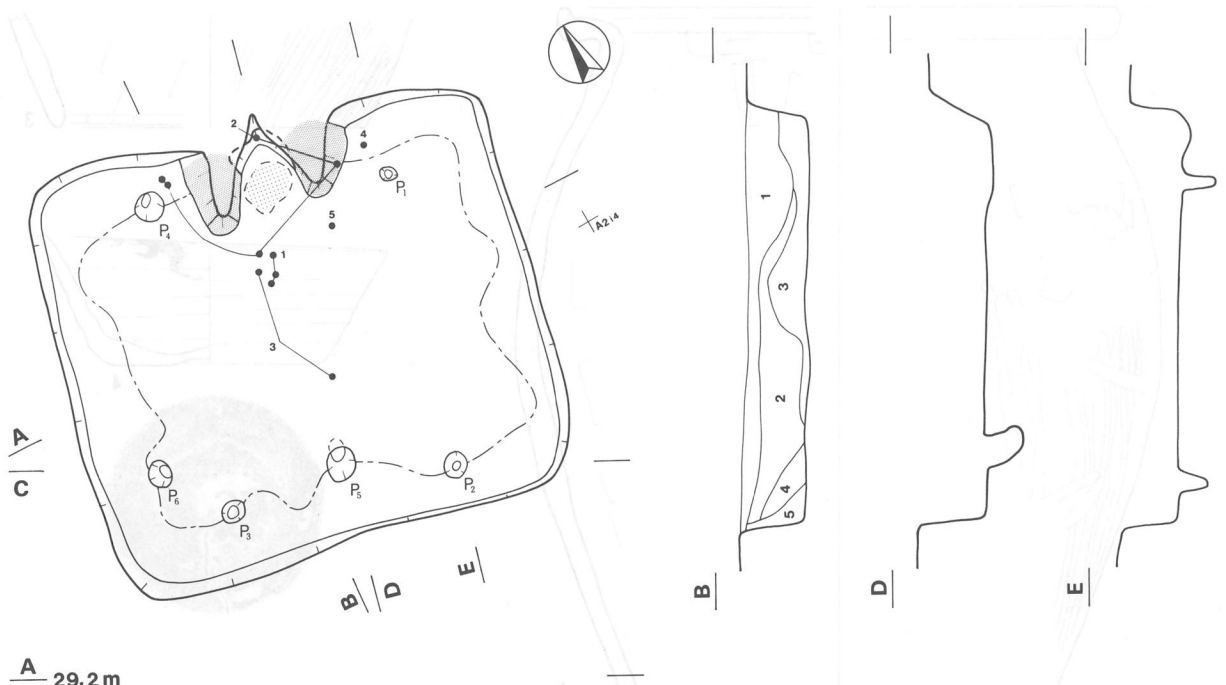
覆土 5層から成る自然堆積である。中・下層には炭化粒子を微量含んでいる。各層ともしまり、粘性が弱い。

土層解説

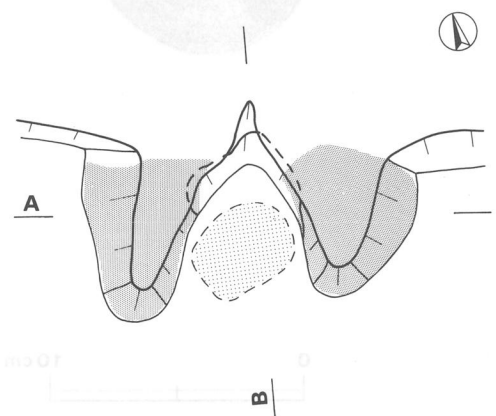
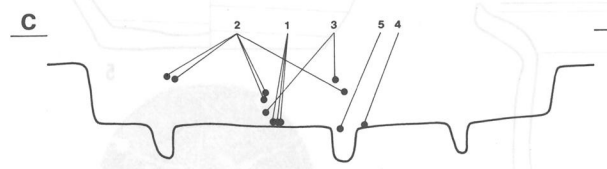
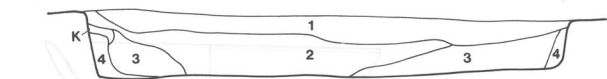
- | | | | |
|------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック少量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化・焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム中ブロック少量、炭化粒子微量 | 4 明褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| | | 5 明褐色 | ローム粒子多量 |

遺物 竈周辺を中心に覆土上層から床面にかけて土師器片、須恵器片が36点出土している。1の甕は竈の南部覆土下層から、2の甗は竈周辺の覆土中から、3の甗は中央部の覆土中層からそれぞれ破片で出土している。4・5の坏はどちらも竈の東部床面から正位で出土している。その他に礫が14点出土し、内3点が雲母片岩である。

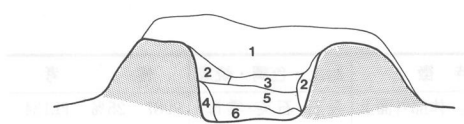
所見 本跡は、遺構の形態や遺物から奈良時代（8世紀後半）の住居跡と思われる。



A 29.2m



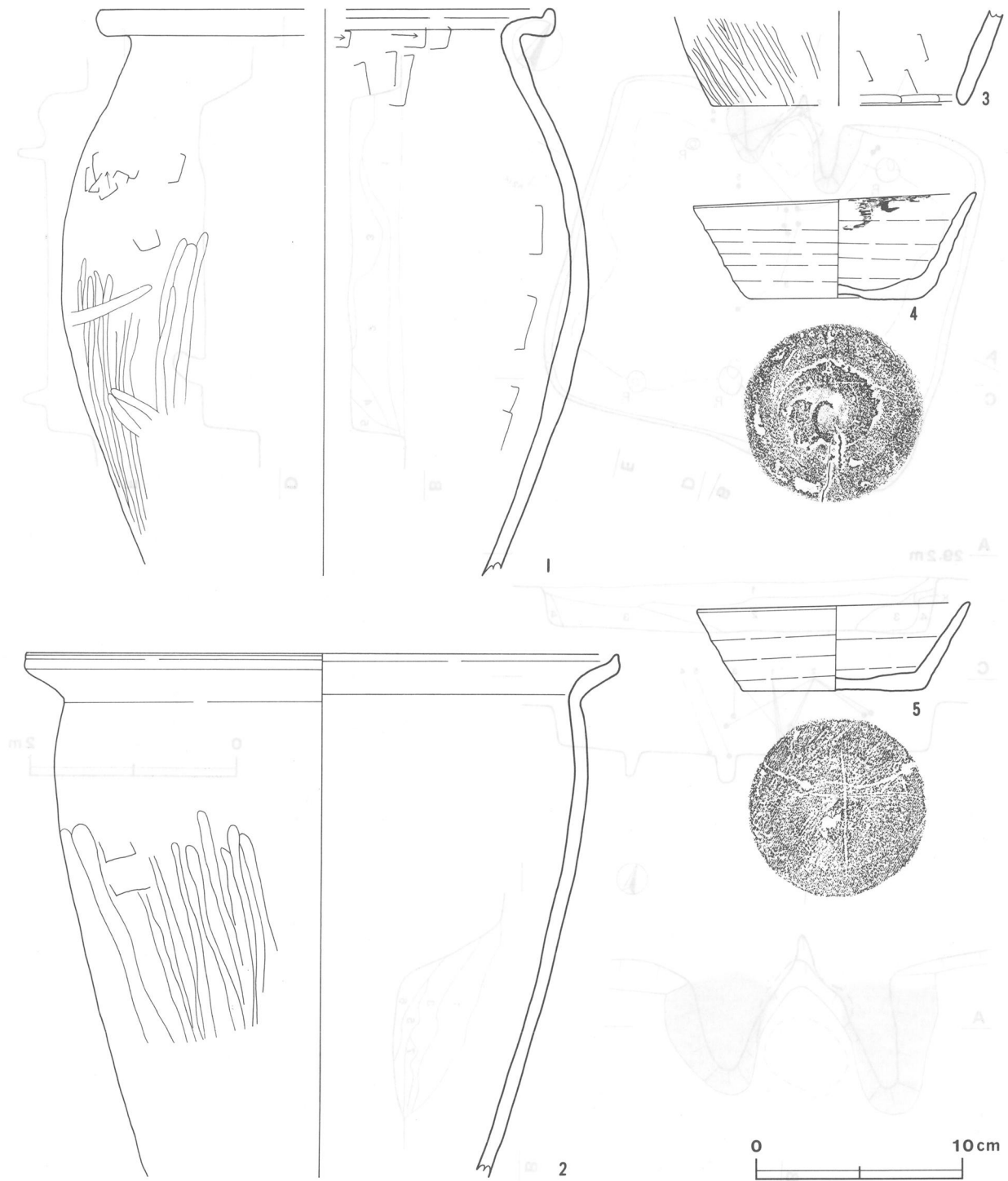
A 29.0m



第485图 第1号住居跡実測图

第486图 第1号住居跡实测图

第481图 第1号住居跡实测图



第482図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第482図 1	甕 土師器	A [22.4] B (27.5)	体部から口縁部の破片。口縁部は、強く外反して立ち上がり、中位に稜をもつ。端部は、つまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ、中位ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母・スコリアにぶい橙色普通	P987 25% PL134 竈南側覆土下層

図版実測図番号「第482図」

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第482図 2	甌 土師器	A 29.0 B (25.5)	体部から口縁部の破片。口縁部は、外反して立ち上がり、中位に稜をもつ。端部は、つまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、中位ヘラ磨き。内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P988 30% PL134 甕付近覆土中
3	甌 土師器	B (4.6) C (12.4)	底部から体部下位にかけての破片。多孔式。体部は、外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ磨き。内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P989 5% 中央部覆土中層
4	坏 須恵器	A 13.8 B 4.9 C 8.4	平底。体部は、直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。端部は、僅かに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。底部周縁部ナデ。	長石・石英・スコリア・針状鉱物 にぶい橙色 普通	P990 98% PL134 甕東側床面 体部外面煤付着 二次焼成 木葉下産
5	坏 須恵器	A 13.4 B 4.3 C 8.7	平底。体部は、直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。端部は、僅かに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	長石・石英・スコリア・針状鉱物 灰色 普通	P991 95% PL134 甕東側床面 木葉下産

2 塚

当遺跡からは、塚が1基検出されている。当初、古墳の可能性があると調査を開始したが、周溝や主体部が存在した形跡がないこと、遺物を伴わないことなどから塚と判断した。東部半分は、耕作地造成のため削平され平地となっている。また、現存している盛土のほぼ中央部分は、重機によると思われる大きな掘り込みがある。

以下、遺構の形態や特徴等について記載する。

第1号塚（第483図）

位置 調査区中央部、B2a1区。

規模と形状 南北幅17.7m、東西幅（16.2）mの不整円形で、高さ2.8mである。

長径方向（N-0°）

盛土 19層から成る人為堆積である。盛土上は木根による攪乱が激しいため、層の境界が不明瞭な所が多い。

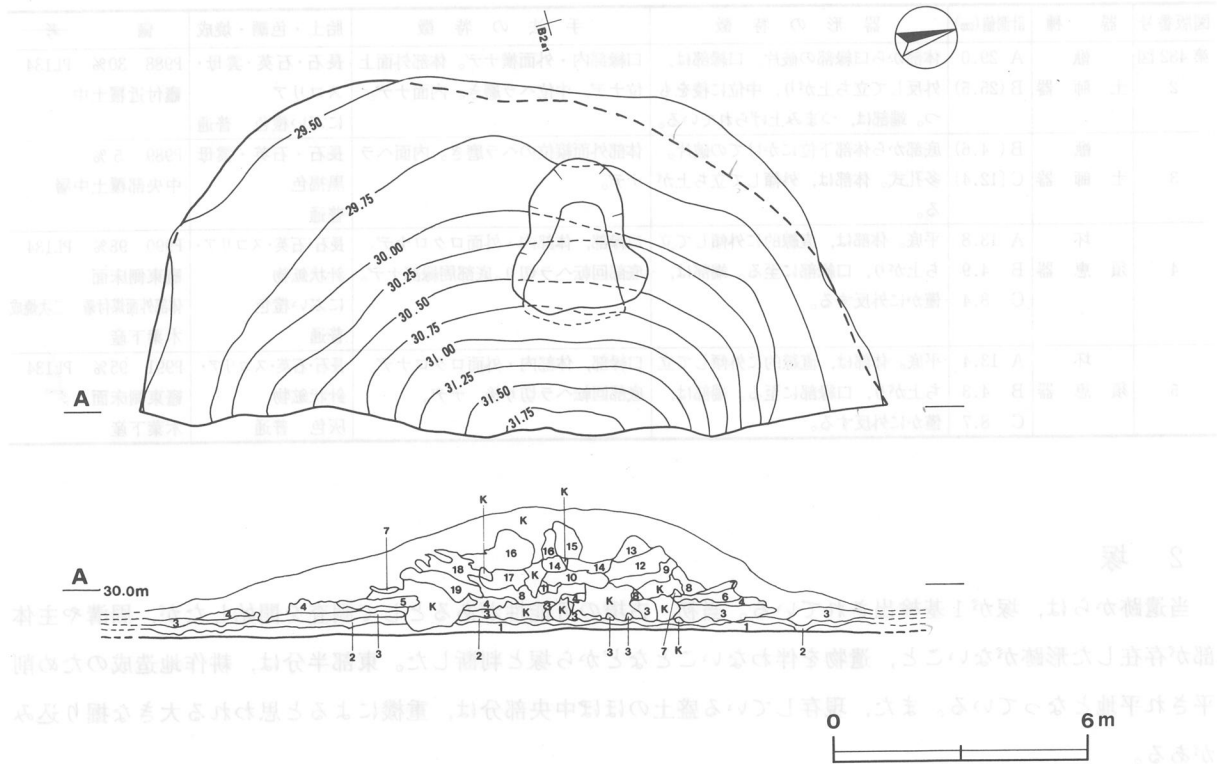
全体的に軟らかい層で、しまった層は確認できなかった。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、黒色土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・黒色土粒子中量
- 3 黒色 ローム粒子微量、黒色土粒子多量
- 4 黒色 ローム粒子微量、ローム小ブロック微量、黒色土粒子多量
- 5 黒色 ローム粒子中量、黒色土粒子多量
- 6 黒色 ローム粒子微量、ローム小ブロック微量
- 7 黒色 ローム粒子少量、黒色土粒子多量
- 8 黒色 ローム粒子微量、黒色土粒子多量
- 9 黒褐色 ローム粒子多量、黒色土粒子少量、ローム小ブロック中量、ローム中・大ブロック微量
- 10 黒色 ローム粒子少量、黒色土粒子多量
- 11 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック多量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量
- 12 黒色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、鹿沼パミス中量
- 13 暗褐色 黒色粒子多量、ローム中ブロック微量、鹿沼パミス中量
- 14 黒色 ローム粒子少量、黒色土粒子多量
- 15 黒褐色 ローム粒子微量、黒色土粒子中量
- 16 黒色 ローム粒子微量、黒色土粒子多量
- 17 黒褐色 ローム粒子少量、黒色土粒子中量
- 18 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小・中ブロック微量
- 19 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく時期・性格等について不明である。



第483図 第1号塚現況図・土層セクション図

3 火葬墓

当遺跡からは、火葬墓が2基検出されている。現況が、山林を整地した耕作地となっているため上層は既に削平されている。そのため遺構の下部から中部までの確認で、両遺構とも蔵骨器の上半は損失している。以下、遺構の形態や遺物等について記載する。

第1号火葬墓 (第484図)

位置 調査区南東部, B2g5区。

規模と形状 長径77cm, 短径64cmの

不整楕円形で、深さ30cmである。

長径方向 N-90°-E

壁 壁高30cmで、内彎して立ち上がる。

底面 平坦である。

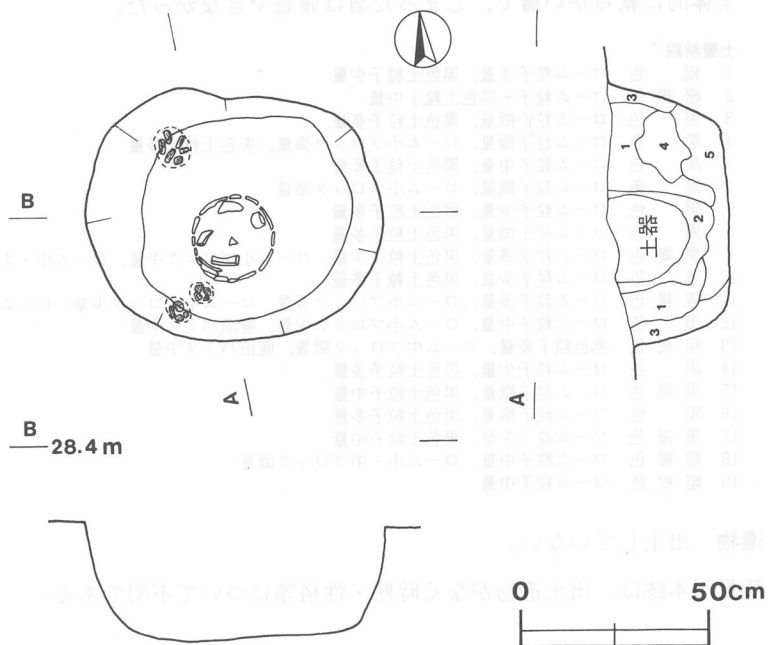
覆土 5層から成る人為堆積である。

炭化材が全体的に含まれている。

各層とも軟らかく、締まりがない。

土層解説

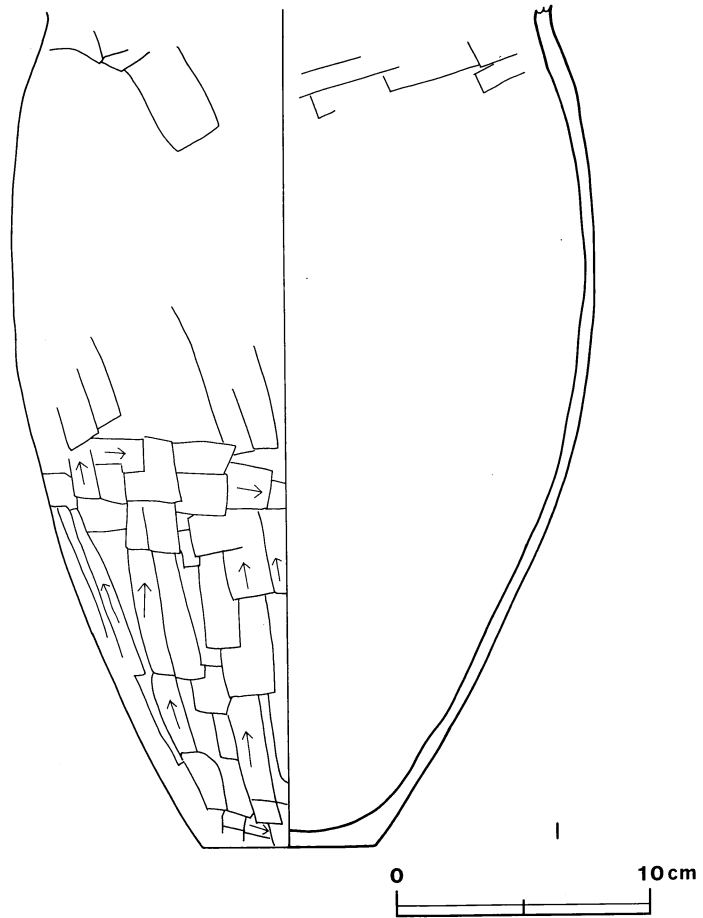
- 1 褐色 炭化物中量, ローム粒子少量, ローム中ブロック中量
- 2 暗褐色 炭化物中量, ローム粒子中量, 黒色土粒子微量
- 3 明褐色 ローム粒子多量
- 4 黒褐色 炭化物多量, ローム粒子中量
- 5 褐色 炭化物中量, ローム粒子中量



第484図 第1号火葬墓実測図

遺物 土壌内のほぼ中央部で、底面の上方約5cmの位置から、1の甕が正位で出土している。甕内には黒色土が堆積しており、僅かであるが骨片が確認できた。

所見 土壌の掘り方の径は、甕の径の約3倍となり蔵骨器に比べ大きく掘り込んでいる。本跡は、遺物から平安時代（9世紀後半）の火葬墓と考えられる。



第485図 第1号火葬墓出土遺物実測図

第1号火葬墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第485図 1	甕 土師器	B (33.3) C 6.8	口縁部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面上半ヘラナデ、下半ヘラ削り。内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P992 60% PL134 覆土下層

第2号火葬墓（第486図）

位置 調査区北東部，B2a2区。

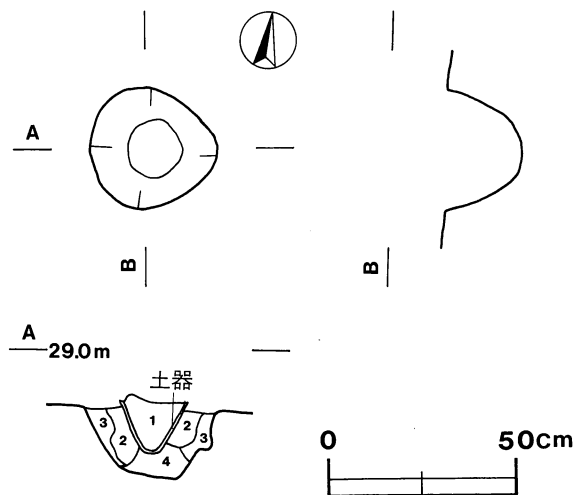
規模と形状 長径34cm，短径32cmの不整楕円形で、深さ22cmである。

長径方向 N-85°-E

壁 壁高22cmで、緩やかに内彎して立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 3層から成る人為堆積である。炭化粒子が全体的に含まれている。蔵骨器の周囲の層は、硬く締まっている。



第486図 第2号火葬墓実測図

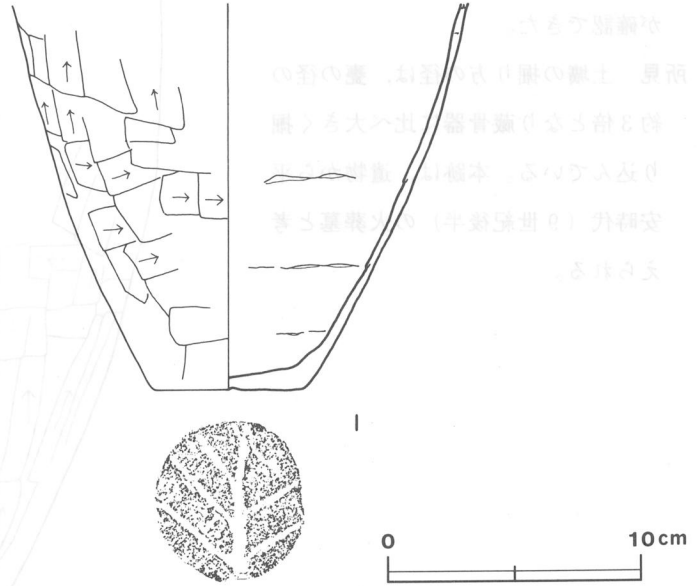
土層解説

- 1 ローム粒子・小ブロック少量，炭化粒子中量
- 2 ローム粒子中量，ローム小・中ブロック少量，炭化粒子中量

- 3 ローム粒子・小・中ブロック少量，炭化粒子少量

遺物 土壌内の中央部で，底面の上方約7 cmの位置から，1の甕が正位で出土している。甕内には黒色土が堆積しており，僅かであるが骨片が確認できた。

所見 土壌の掘り方の径は，甕の径の約2倍程で蔵骨器の大きさに合わせたかのようなのである。また，蔵骨器周囲の覆土は硬くしめられており，埋設後に傾かないよう念入りに埋土したものと思われる。本跡は，遺物から平安時代（9世紀後半）の火葬墓と考えられる。



第487図 第2号火葬墓出土遺物実測図

第2号火葬墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第487図 1	甕 土師器	B 15.3 C 6.0	体部上半から口縁部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面下半へら削り，内面ナデ。内面に輪積み痕，底部に木葉痕有り。	長石・石英・雲母 スコリア 橙色 普通	P993 30% PL134 覆土下層



図版実基葬火号S第 図884第

4 土坑

当遺跡からは、土坑が3基検出されている。3基とも長方形で、長軸方向はほぼ北を向いている。遺物は何れからも全く出土していないが、近接して火葬墓が確認されていること等から、墓壙の可能性が考えられる。

以下、規模や形状等について記載した。

第1号土坑（第488図）

位置 調査区中央部，B2c6区。

規模と平面形 長径1.85m，短径1.07mのほぼ楕円形で，深さは0.71mである。

長径方向 N-9°-W

壁面 緩やかに傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層で成る自然堆積層である。

土層解説

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 3 暗褐色 ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | |

遺物 出土していない。

所見 本跡は，出土遺物がなく時期・性格等は不明である。

第2号土坑（第488図）

位置 調査区中央部，B2a4区。

規模と平面形 長径1.55m，短径0.98mの楕円形で，深さは0.68mである。

長径方向 N-15°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層から成る人為堆積層である。

土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 極暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック中量 | 3 褐色 ローム小ブロック中量，黒色粒子多量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量 | 4 褐色 ローム粒子多量 |

遺物 出土していない。

所見 本跡は，出土遺物がなく時期・性格等は不明である。

第3号土坑（第488図）

位置 調査区北西部，A2g1区。

規模と平面形 長径1.78m，短径0.97mの不整楕円形で，深さは0.30mである。

長径方向 N-0°

壁面 緩やかに傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

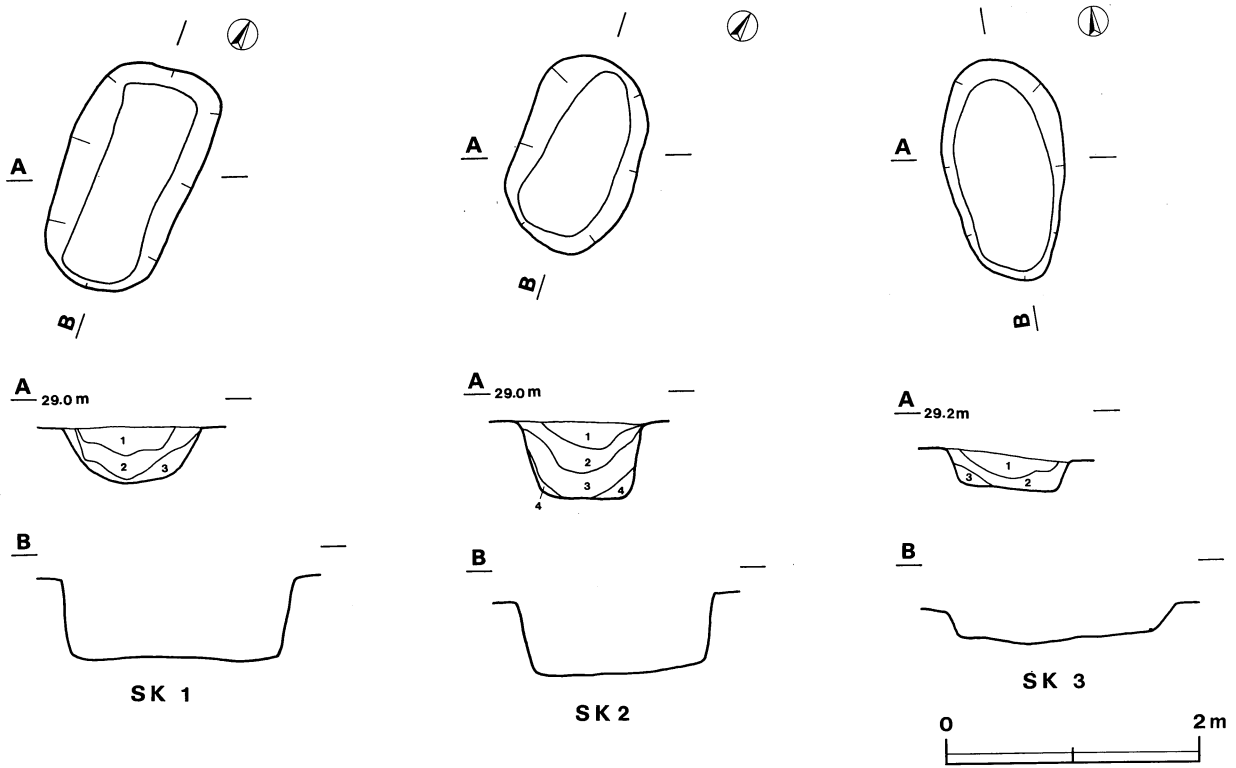
覆土 3層から成る自然堆積層である。

土層解説

- | | |
|---------------------|--------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 褐色 ローム粒子多量 |
| 2 褐色 ローム粒子中量，黒色粒子多量 | |

遺物 出土していない。

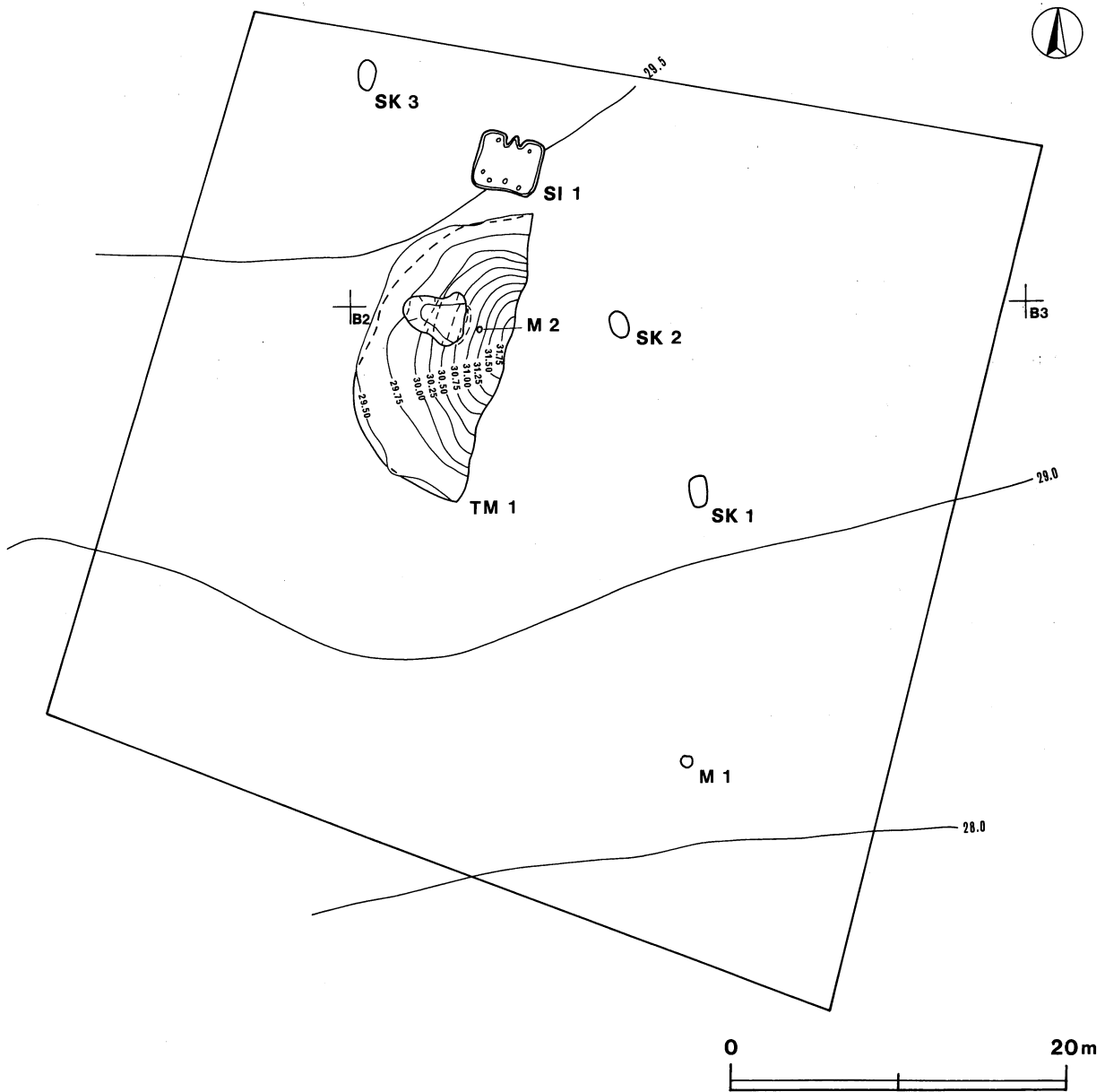
所見 本跡は、出土遺物がなく時期・性格等は不明である。



第488図 第1～3号土坑実測図

表6 親塚古墳土坑一覧表

番号		長軸方向	平面形	規模(m) 軸×短軸	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	B2c ₆	N-9°-W	楕円形	1.85×1.07	71	垂直	平坦	自然	土師器(坏, 甕, 甌), 須恵器	墓塚の可能性有り
2	B2a ₄	N-15°-W	楕円形	1.55×0.98	68	外傾	平坦	自然		墓塚の可能性有り
3	A2g ₁	N-0°	不整楕円形	1.78×0.97	30	外傾	凸凹	自然		墓塚の可能性有り



第489図 親塚古墳遺構全体図

第4節 まとめ

当遺跡からは、竪穴住居跡1軒、塚1基、火葬墓2基、土坑3基が検出されている。塚は、前述したように攪乱を受けており、現存しているのは塚全体の40%程と推測される。遺跡名からも推測できるように、塚としてとらえられていた時期と古墳としてとらえられた時期があったのであろうが、今回の調査により塚であることが明白になった。性格・時期を判断できる資料は得られなかったが、塚の北端部盛土下から第2号火葬墓が検出されていることから、9世紀後半以降に構築されたと推測される。

住居跡は、唯一1軒の検出である。時期は、出土遺物・遺構の形状から8世紀末と判断される。しかし、当遺跡から北東方向に隣接している後口原遺跡からは、住居跡は確認されておらず、集落の範囲はとらえられない。火葬墓を2基検出しているが、火葬骨は微量で、細かく顆粒状に近い形状である。覆土は、炭化材・炭化

粒子を含んでいる。隣接する後口原遺跡でも、火葬墓が2基検出されている。覆土中の炭化材・炭化粒子の混入状況は本跡のものに似ている。しかし、出土状況が本跡では正位であるのに対し、後口原遺跡では逆位である。那珂川流域では、逆位での埋納が多く見られることは既に指摘されているが、ここ涸沼川流域でも同様に正位・逆位が混在する事を示す好資料である。時期では、本跡が9世紀後半、後口原遺跡は9世紀末～10世紀であることから同時期の墓域であった可能性が考えられる。

土坑は3基検出されているが、いずれも遺物が出土しておらず時期・性格等については不明である。遺構の形状と当遺跡の性格から推測して、墓壙である可能性も考えられる。しかし、覆土の堆積状況がレンズ状であり、ロームブロックの混入もないことから埋め戻された様子がなく墓壙とは考えられない。

以上、今回の調査により親塚古墳は塚であり、また、隣接する後口原遺跡とともに9世紀後半から10世紀にかけての墓域であった可能性を示唆する資料を得ることができた。

参考文献

- ・茨城町史編纂委員会 『茨城町史・通史編』1995年2月
- ・吉澤 悟 「茨城県における古代火葬墓の地域性 —— 土浦市立博物館保管の骨臓器の資料紹介および県内事例の集成から —— 」 『土浦市立博物館紀要』 第6号 土浦市立博物館 1995年3月
- ・仲山 英樹 「古代東国における墳墓の展開とその背景」 『研究紀要』 第1号（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1992年3月

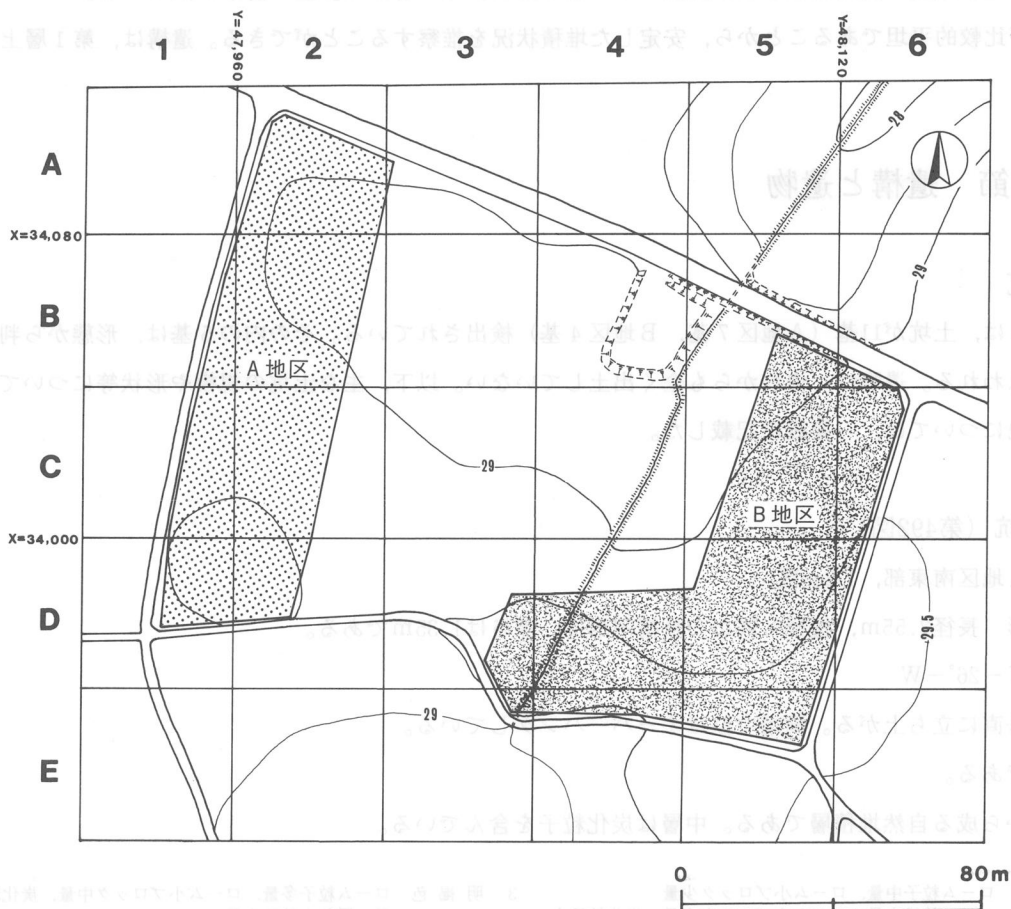
第6章 後原遺跡

第1節 遺跡の概要

後原遺跡は、茨城町の北西部、涸沼川左岸の標高24~26mの河岸段丘上に位置している。遺跡の南側には東西に流れる涸沼川と、水田に利用されている沖積低地が広がっている。遺跡から200m程北には、湧水で成る湛沼が有る。東には南小割遺跡、権現堂遺跡、親塚古墳が所在している。調査区の現況は畑（桑）・平地林で、水田との比高は12~14mである。南東には、茨城町地方では一番古いとされている前方後方墳の「宝塚古墳」（4世紀末から5世紀初頭）が所在している。また、南東6kmほどの涸沼川対岸の河岸段丘上には、「奥谷遺跡」が所在している。

調査エリアはA、Bの2地区に分かれており、今回の調査によって検出された遺構は、A地区から溝7条、土坑7基、B地区からは溝2条、土坑4基である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に1箱出土した。主な遺物は、土師器片(坏, 甕)・須恵器(坏, 高坏)である。



第490図 後原遺跡調査図

第2節 基本層序

調査A地区内（D2e5区）にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った（第491図）。湧水のため5層までの確認である。

第1層は、28～34cmの厚さの褐色土で、ソフトローム層である。炭化粒子を少量含んでいる。しまり、粘性ともに強い層である。

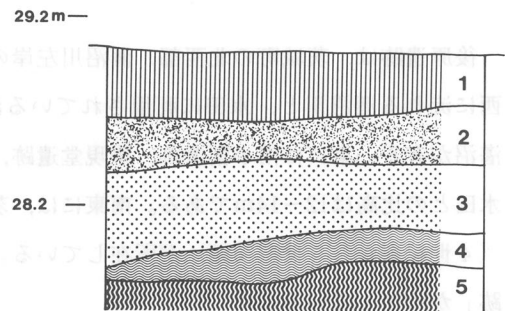
第2層は、16～30cmの厚さの明褐色土で、ハードローム層である。ローム粒子少量でローム中ブロックを中量含んでいる。

第3層は、30～50cmの厚さで、明褐色をしたハードローム層である。第2層に類似しているが、第3層は黒色土粒子が少量含まれている。

第4層は、5～24cmの厚さで明黄褐色の、ローム粒子と鹿沼パミスが混在した層である。白色粘土粒子少量とスコリア粒子を微量含んでいる。

第5層は、12cm以上の明黄褐色をした鹿沼パミス層である。この層から多量の湧水が出ている。

各層の面が比較的平坦であることから、安定した堆積状況を推察することができる。遺構は、第1層上面で確認した。



第491図 後原遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 土坑

当遺跡からは、土坑が11基（A地区7基、B地区4基）検出されている。その内の5基は、形態から判断して陥し穴と思われる。遺物は、何れからも全く出土していない。以下、主な土坑の規模や形状等について記載した。その他については、一覧表に記載した。

第1号土坑（第492図）

位置 調査A地区南東部、D2a5区。

規模と平面形 長径2.55m、短径0.90mの長楕円形で、深さは1.35mである。

長径方向 N-26°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。両端中位はオーバーハングしている。

底面 平坦である。

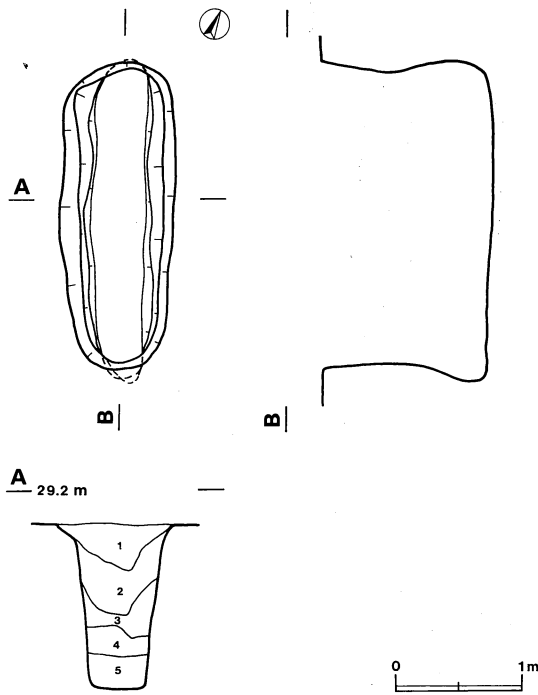
覆土 5層から成る自然堆積層である。中層は炭化粒子を含んでいる。

土層解説

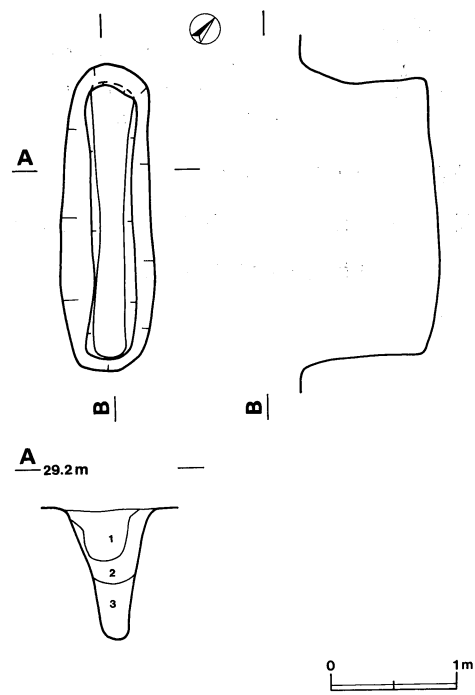
- | | | | |
|-------|---------------------------|---------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量 | 3 明褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子少量，黒色土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，炭化粒子少量 | 4 褐色 | ローム小ブロック少量，黒色土粒子中量 |
| | | 5 にぶい褐色 | ローム大ブロック少量，鹿沼パミス少量 |

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明であるが、遺構の形態から陥し穴と考えられる。



第492図 第1号土坑実測図



第493図 第3号土坑実測図

第3号土坑（第493図）

位置 調査A地区南部，C1e0区。

規模と平面形 長径2.42m，短径0.75mの長楕円形で，深さは1.10mである。

長径方向 N-39°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層から成る自然堆積層である。下層は褐色土で，厚く堆積していることから壁面の崩れが，比較的早く進んだと思われる。

土層解説

1 極暗褐色 ローム粒子少量，黒色土粒子多量
2 暗褐色 ローム粒子中量，黒色土粒子中量

3 褐色 ローム粒子多量，黒色土粒子微量

遺物 出土していない。

所見 本跡は，出土遺物がなく時期は不明であるが，遺構の形態から陥し穴と考えられる。

第4号土坑（第494図）

位置 調査A地区中央部，C2e5区。

規模と平面形 長径2.51m，短径1.55mの楕円形で，深さは1.30mである。

長径方向 N-2°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

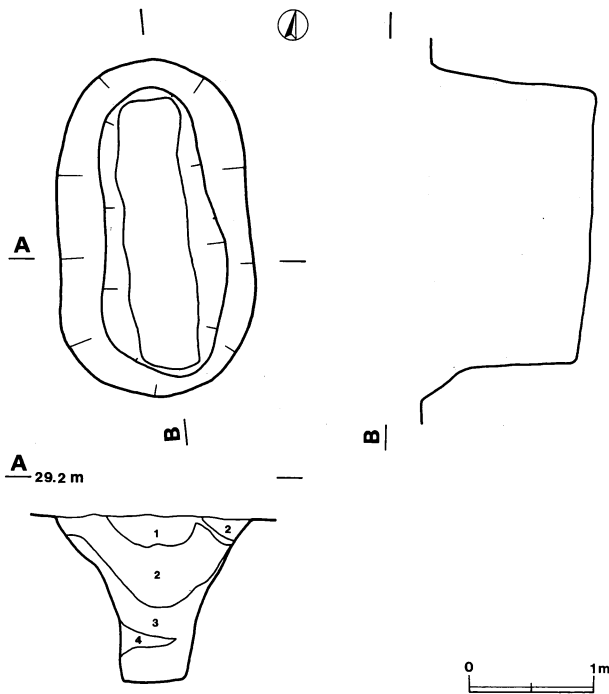
覆土 4層から成り，褐色土層と黒褐色土層が，互層になっていることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, 黒色土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子多量, 黒色土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 黒色土粒子多量

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 出土遺物がなく時期は不明であるが, 遺構の形態から陥し穴と考えられる。



第494図 第4号土坑実測図

第5号土坑 (第495図)

位置 調査A地区中央部, B2f5区。

規模と平面形 長径3.07m, 短径1.50mの長楕円形で, 深さは1.75mである。

長径方向 N-61°-W

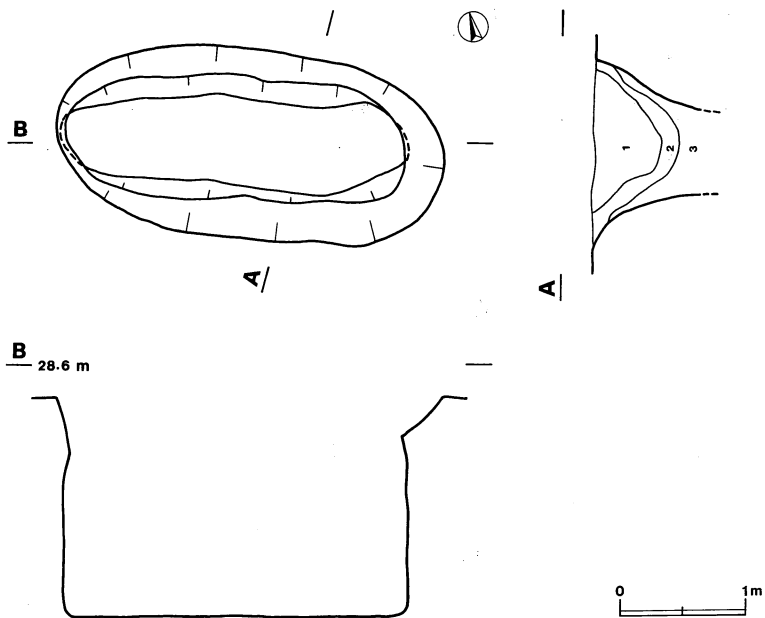
壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層から成る自然堆積層である。下層には, 壁面の崩れによると思われる褐色土層が堆積している。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 黒色土粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック中量, 炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック多量, 黒色土粒子中量



第495図 第5号土坑実測図

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 出土遺物がなく時期は不明であるが, 遺構の形態から陥し穴と考えられる。

第6号土坑 (第496図)

位置 調査A地区北端部, A2g8区。

規模と平面形 長径1.85m, 短径1.35mの楕円形で、深さは1.20mである。

長径方向 N-31°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

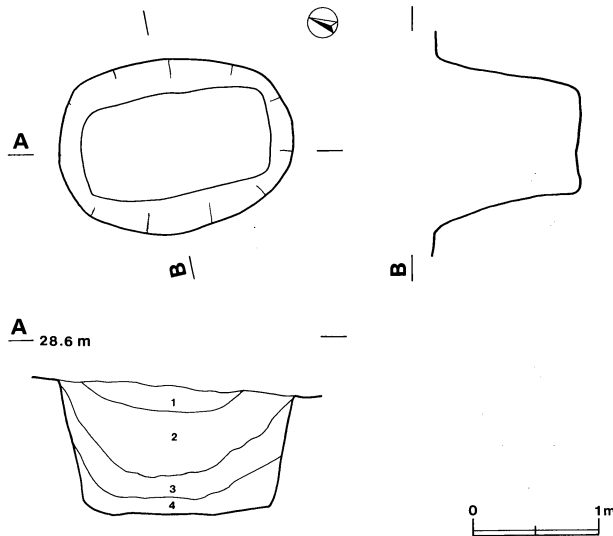
覆土 4層から成る自然堆積層である。

土層解説

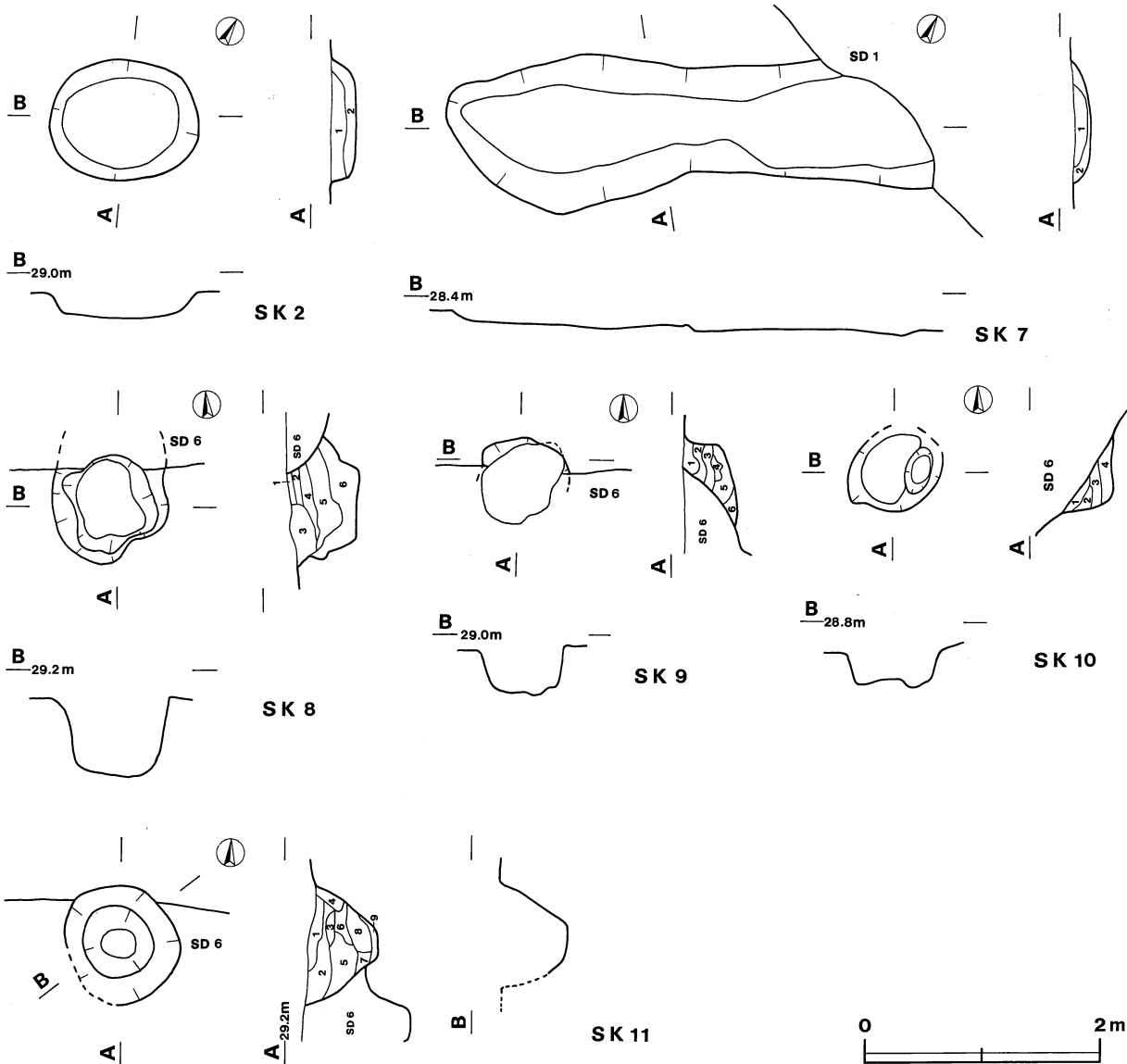
- 1 黒色 ローム粒子微量, 黒色土粒子多量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 黒色土粒子多量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 黒色土粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 黒色土粒子少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明であるが、遺構の形態から陥し穴と考えられる。



第496図 第6号土坑実測図



第497図 その他の土坑実測図

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック微量

第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量

第8号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量

第9号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中・大ブロック少量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

第11号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小・中ブロック極微量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 6 黄褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック中量
- 7 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック微量, ローム大ブロック中量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小・中ブロック微量
- 9 黄褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック多量, ローム大ブロック微量

2 溝

当遺跡からは、溝が7条（調査A地区5条、調査B地区2条）検出されている。何れも、調査エリア外に延びている。東西方向に延びている溝が4条、南北方向が2条、「L字」状の形態のものが1条である。

以下、溝の規模や形状等について記載する。

第1号溝（第499・502図）

位置 調査A地区中央部、D2i₁～E2d₆区。

規模と形状 上幅1.22～1.54m、下幅0.11～0.42m、深さ54～68cmで、全長約36mである。底面は平坦で断面形は「逆台形」状である。

方向 当遺跡の西端部から東方向へ、ほぼ直線的に約36m延びる。両端は更に調査エリア外に続く。

覆土 4層から成る自然堆積層である。下層には、壁面の崩れによると思われるローム小・中ブロックが堆積している。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック中量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。

第2号溝（第499・502図）

位置 調査A地区中央部、D2b₆～D2i₇区。

規模と形状 上幅0.22～0.74m、下幅0.14～0.38m、深さ8～15cmで、全長約23mである。底面は丸みを帯び、断面形は緩やかな「U」字状である。

方向 西端部から東方向へ、ほぼ直線的に約23m延び調査エリア中央部で止まる。西側は、更に調査エリア外に続く。

覆土 2層から成る自然堆積層である。下層は、ローム粒子が多量に含まれている褐色土が堆積している。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構に伴う遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。

第3号溝（第499・502図）

位置 調査A地区南部，E3c4～E3e7区。

重複関係 本跡は，南側壁を第4・5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 上幅1.35～1.72m，下幅0.36～0.65m，深さ76～84cmで，全長約36mである。底面は丸みを帯び、断面形は「逆台形」状である。

方向 当遺跡の西端部から東方向へ，ほぼ直線的に約36m延びる。両端は更に調査エリア外に続く。

覆土 4層から成る自然堆積層である。黒褐色土と黒色土の互層になっている。ロームブロックが下層と上層に混入しており，上層は人為堆積の可能性も考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量，ローム大ブロック微量
- 2 黒色 ローム粒子少量，ローム小ブロック少量
- 3 黒色 ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック微量

遺物 須恵器の坏が，2点出土している。1と2の坏は覆土中層から，1は斜位で，2は破片でそれぞれ出土している。

所見 覆土中層から出土している坏は，平安時代（9世紀中葉）の時期と考えられる。しかし，本跡に伴う遺物がなく，時期・性格等については不明である。

第4号溝（第499・502図）

位置 調査A地区南部，D3f8～E4c1区。

重複関係 本跡は第3・5号溝を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と形状 上幅0.95～1.8m，下幅0.32～0.51m，深さ64～71cmで，全長約50mである。底面は平坦で，断面形は「逆台形」状である。

方向 当遺跡の南西端部から東方向へ，ほぼ直線的に約32m延び，更にほぼ直角に曲がり北方向に約18m延びる。南西端部は，更にエリア外に延びる。

覆土 5層から成る自然堆積層である。下層にはローム大ブロックが混入している。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
- 3 黒色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子多量，黒色土粒子中量

遺物 覆土中から，流れ込みと思われる土師器の小破片が僅かに出土している。

所見 本跡は，遺構に伴う遺物が出土しておらず時期・性格とも不明である。

第5号溝 (第500・502図)

位置 調査A地区南部, A4b5～A4c9区。

重複関係 本跡は第3号溝の南側壁を掘り込み, 南端部は第4号溝に掘り込まれている。したがって, 本跡は第3号溝より新しく, 第4号溝より古い。

規模と形状 上幅0.74～1.72m, 下幅0.26～0.58m, 深さ35～79cmで, 全長約22mである。底面は平坦で, 断面形は「逆台形」状である。

方向 ほぼ直線的に南東方向に伸び, 更に南東端部はエリア外に伸びる。

覆土 4層から成る自然堆積層である。下層には, 壁面の崩れによると思われるローム小・中ブロックが堆積している。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 | 4 黒褐色 | ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量, ローム大ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック中量 | | |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小・中ブロック少量 | | |

遺物 須恵器の坏が1点出土している。3の坏は, 中央付近の覆土上層から破片で出土している。

所見 覆土上層から出土した須恵器の坏は, 平安時代(9世紀中葉)の時期のものと考えられる。しかし, 本跡に伴う遺物がなく, 時期・性格等については不明である。

第6号溝 (第500・502図)

位置 調査B地区南部, D5e2～D6g1区。

重複関係 本跡の西部は, 第8～11号土坑に掘り込まれており, 本跡が古い。

規模と形状 上幅1.92～2.44m, 下幅0.26～0.58m, 深さ58～92cmで, 全長約36mである。底面は平坦で, 断面形は「逆台形」状である。

方向 当遺跡の東端部から南西方向へ, ほぼ直線的に約36m伸びている。東部は, 更にエリア外へ伸びている。

覆土 5層から成る自然堆積層である。下層には, 表土が流れ込んだと思われる暗褐色土が厚く堆積している。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------------|--|--|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 | | |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子・焼土粒子微量 | | |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子微量 | | |
| 4 黄褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量 | | |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子微量 | | |

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 遺構に伴う遺物がなく, 時期・性格等については不明である。

第7号溝 (第500・502図)

位置 調査B地区南部, D5c2～E4d0区。

規模と形状 上幅1.02～1.94m, 下幅0.26～0.38m, 深さ86～94cmで, 全長約39mである。底面は平坦で断面形は「逆台形」状である。

方向 当遺跡の北端部から南方向へ, ほぼ直線的に約39m伸びている。両端は, 更にエリア外に伸びる。

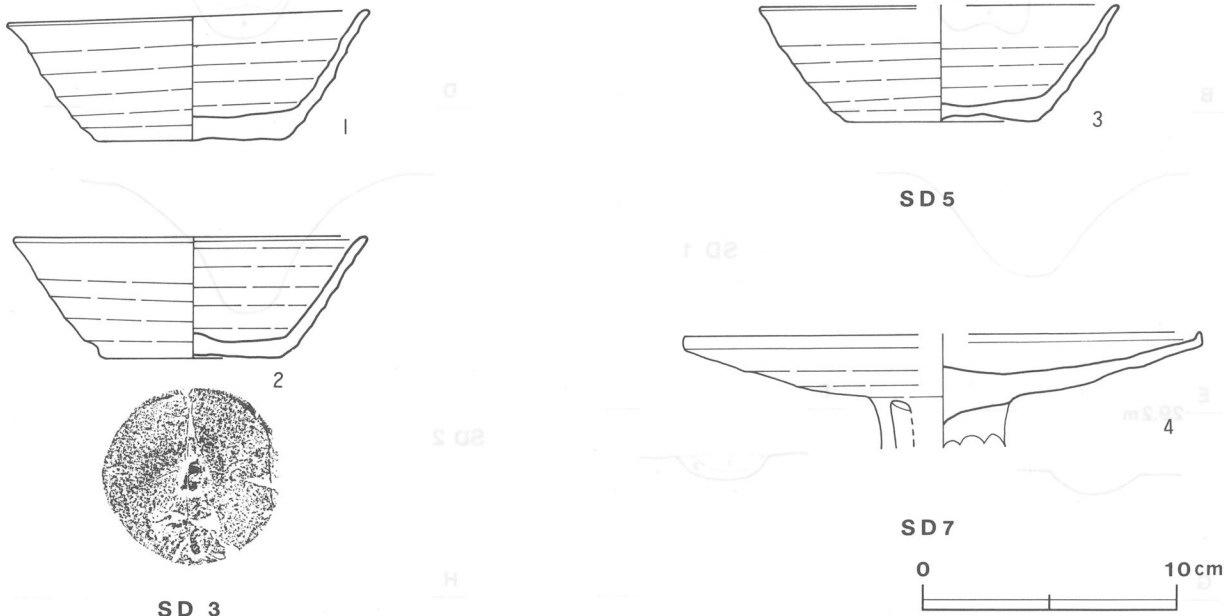
覆土 3層から成る自然堆積層である。下層には, 表土が流れ込んだと思われる黒色土が堆積している。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 | 3 黒色 | ローム粒子微量, ローム小ブロック微量, 鹿沼パミス微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子微量 | | |

遺物 覆土中から須恵器片が1点出土している。4の須恵器の高坏は、南部の東壁際覆土下層から斜位で出土している。

所見 覆土下層から出土している高坏は、8世紀末の時期と考えられる。しかし、本跡に伴う遺物がなく、時期・性格等については不明である。



第498図 第3・5・7号溝出土遺物実測図

第3号溝出土遺物観察表

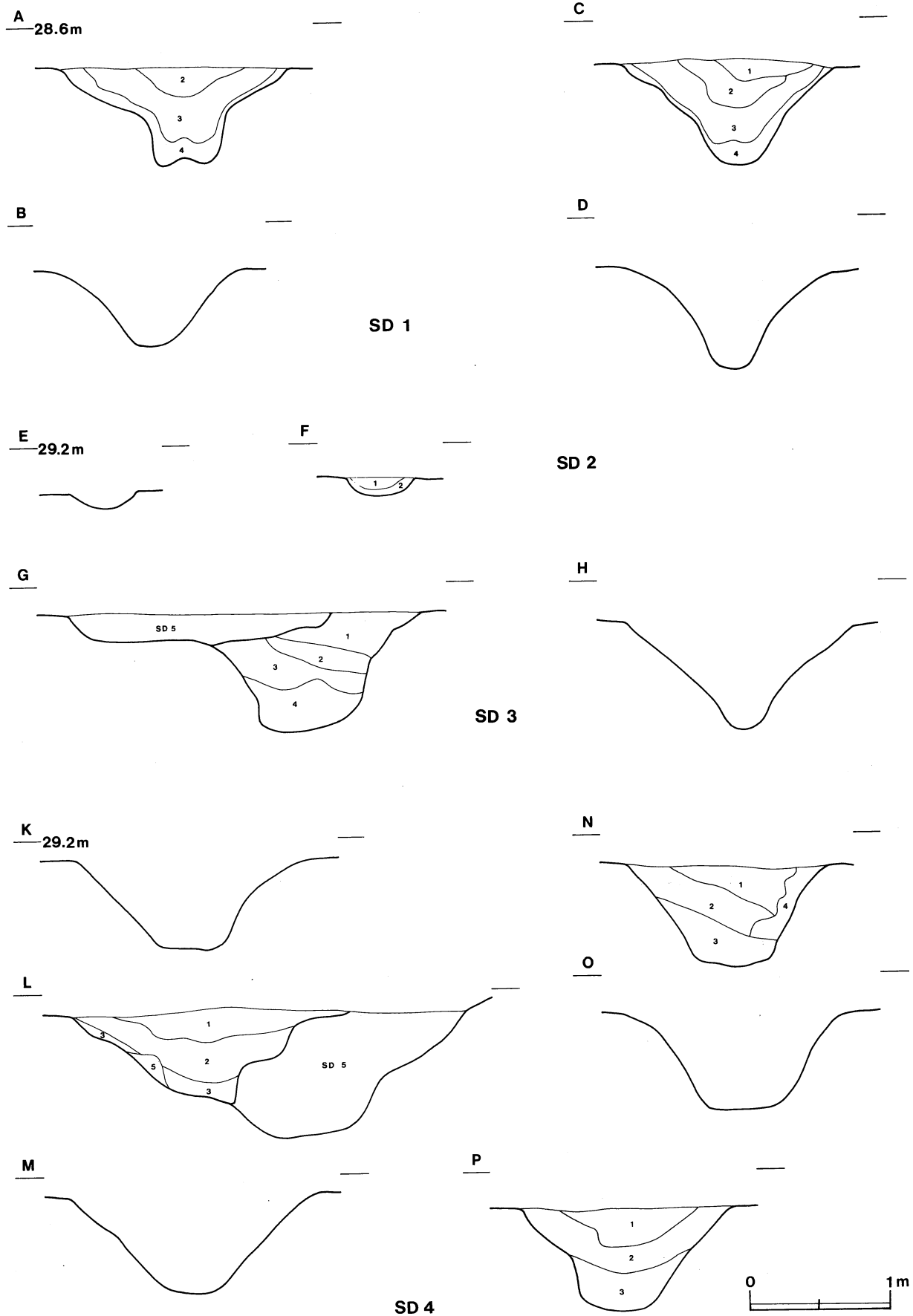
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第498図 1	坏 須恵器	A 14.4	平底。体部は、直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。端部は、僅かに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、無調整。	長石・石英・雲母・針状鉱物 灰色 普通	P994 90% PL134 西端部覆土中層 木葉下産
		B 5.0				
		C 7.6				
2	坏 須恵器	A 14.1	平底。体部は、直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。端部は、僅かに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ヘラナデ。底部に「×」状のヘラ記号有り。	長石・石英・雲母・針状鉱物 灰色 普通	P995 80% PL134 西端部覆土中層 木葉下産
		B 4.9				
		C 7.1				

第5号溝出土遺物観察表

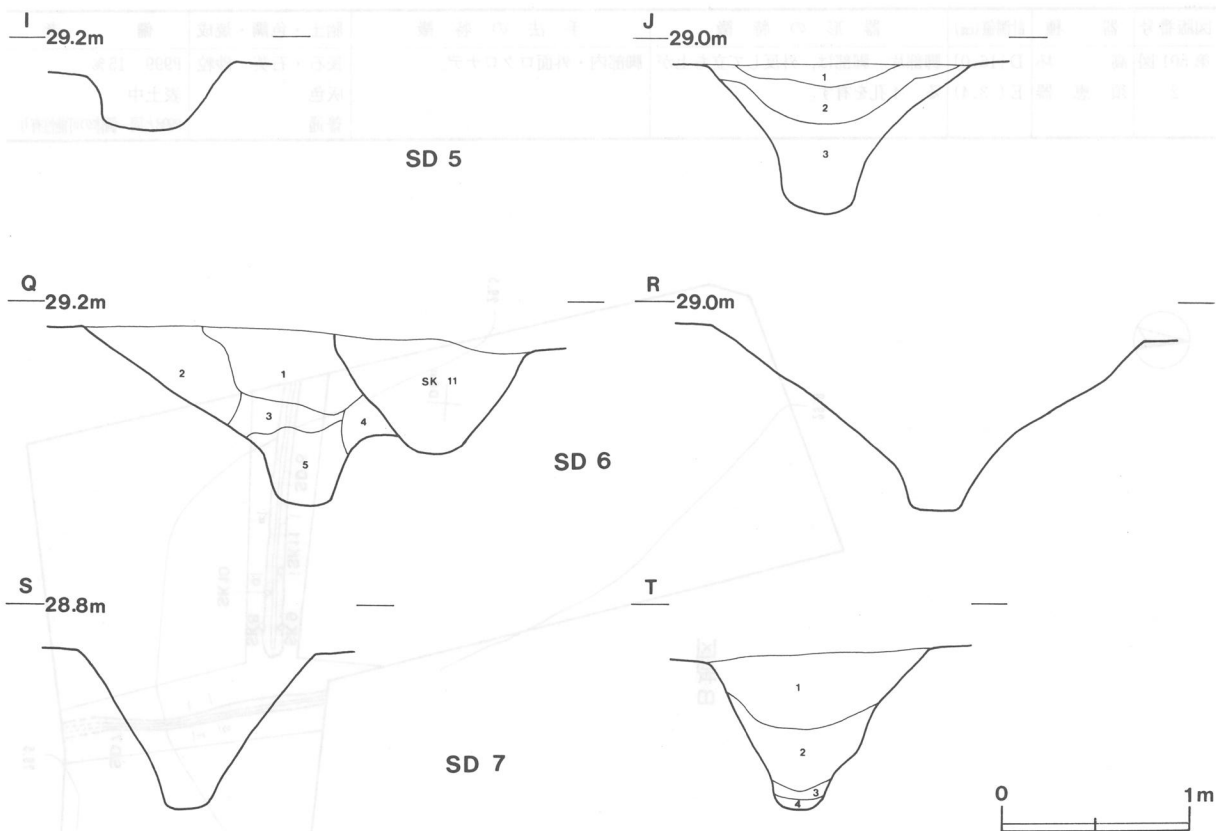
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第498図 1	坏 須恵器	A [14.2]	底部から口縁部にかけての破片。僅かに凹む平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、無調整。	長石・石英・スコリア・針状鉱物 灰色 普通	P996 60% PL134 北部覆土上層 木葉下産
		B 4.6				
		C 7.7				

第7号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第498図 1	高坏 須恵器	A [20.5]	脚部の大半を欠損。脚部は内傾し、三孔を有す。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・砂粒 灰色 普通	P997 50% PL134 南部東壁際覆土下層
		B (4.5)				
		E (2.0)				



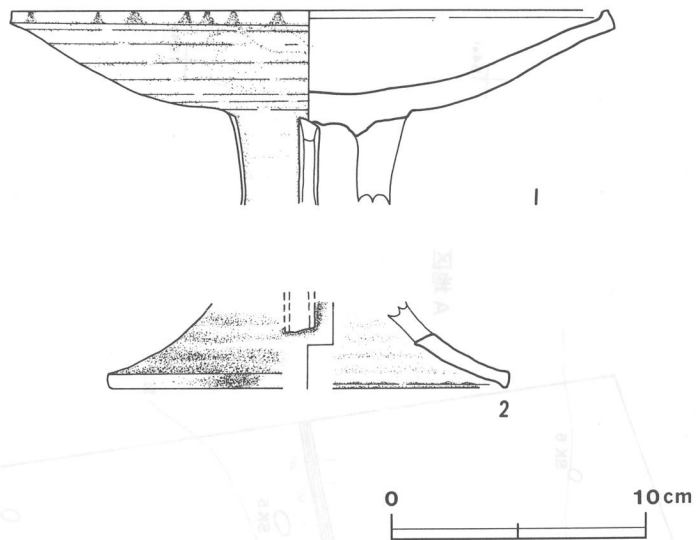
第499図 第1～4号溝土層セクション・断面図



第500図 第5～7号溝土層セクション・断面図

3 遺構外出土遺物

当遺跡は、出土遺物が極めて少ない。遺構外の遺物として、調査エリアA区の南部で東側エリア境付近の表土中から第501図1の須恵器の高坏が逆位で出土している。調査エリアB区の第7号溝からも同様の須恵器の高坏が出土しているが、それよりも新しく9世紀前半の時期の遺物と思われる。また、2の脚部片はA地区の表土中から出土している。

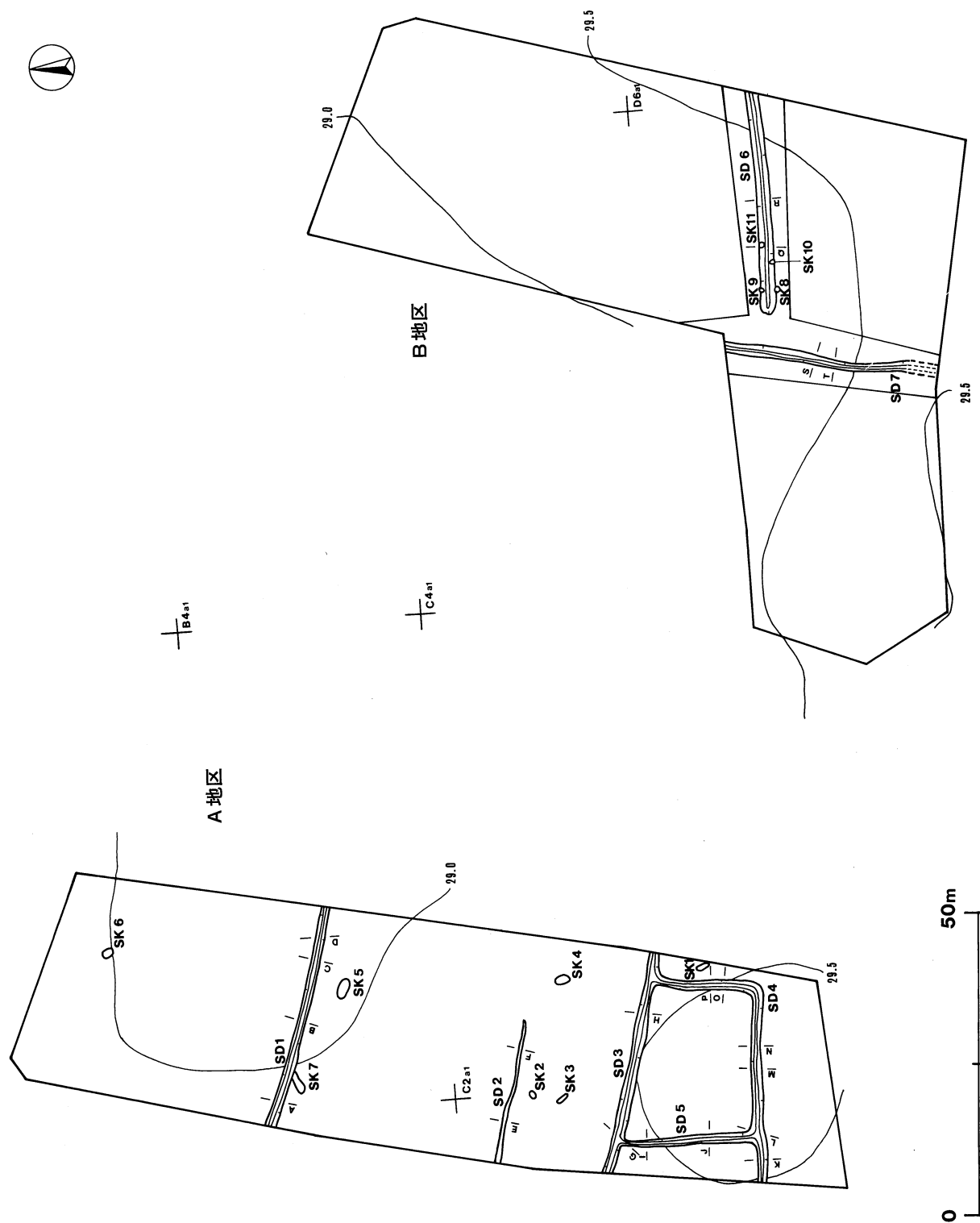


第501図 調査A区遺構外出土遺物実測図

調査A区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第501図 1	高坏 須恵器	A 23.9 B (7.7) E (3.7)	脚部の大半を欠損。脚部は内傾し、3孔を有す。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・砂粒 灰色 普通	P998 60% PL134 表土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第501図 2	高坏 須恵器	D(16.0) E(3.4)	脚部片。脚部は、外反して立ち上がる。4孔を有す。	脚部内・外面クロナデ。	長石・石英・砂粒 灰色 普通	P999 15% 表土中 P998と同一個体の可能性有り



第502図 後原遺跡遺構全体図

表7 後原遺跡土坑一覧表

A区 SK1～7

B区 SK8～11

番号		長軸方向	平面形	規模(m) 軸×短軸	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	D2a5	N-26°-W	長楕円形	2.55 × 0.90	135	垂直	平坦	自然		陥し穴
2	C1d0	N-51°-W	楕円形	1.25 × 1.02	25	緩斜	平坦	自然		
3	C1e0	N-0°	長楕円形	2.42 × 0.75	110	垂直	平坦	自然		陥し穴
4	C2e5	N-2°-W	楕円形	2.51 × 1.55	130	垂直	平坦	人為		陥し穴
5	B2f5	N-61°-W	長楕円形	3.07 × 1.50	175	垂直	平坦	自然		陥し穴
6	A2g8	N-31°-W	楕円形	1.85 × 1.35	120	垂直	平坦	自然		陥し穴
7	B2d2	N-71°-E	不定形	(4.15) × 1.35	15	緩斜	平坦	自然		
8	D5f3	N-29°-E	不定形	(1.30) × 1.02	68	外傾	平坦	自然		
9	D5e3	N-44°-E	不定形	(0.85) × (0.85)	39	外傾	凸凹	自然		
10	D5f4	N-50°-E	円形	(0.88) × 0.69	33	外傾	凸凹	自然		
11	D5f5	N-35°-E	円形	1.04 × (0.92)	64	外傾	V字状	自然		

第4節 まとめ

当遺跡から検出された遺構は、溝7条、土坑11基である。調査区は2か所に分かれており、調査A区の東方向約130mに調査B区が位置している。現況は、調査A区は桑畑、調査B区が山林でありどちらも平坦地である。梅雨時期に試掘を行ったが、湧水により困難な状況であった。北西方向には湛沼があり、台地上であっても水はけの悪い地形である。検出した土坑・溝についての概要を記述しまとめとする。

(1) 溝

調査A区からは溝が5条検出されているが、遺物が出土しているのは、第3・5号溝である。時期は、出土している須恵器の坏が9世紀中葉であるが、覆土中からの出土のため不明である。また、第3・4・5号溝は、重複している。第4号溝は第3・5号溝を掘り込んでおり、第4号溝は第3号溝を掘り込んでいることが、覆土の重複関係から判断できる。したがって、第3号、第5号、第4号の順に構築されたと思われる。

調査B区では、2条の溝が検出されている。この第6・7号溝は、規模・断面形ともに類似しており近い時期に構築されていると思われる。第6号溝からは遺物は出土していないが、第7号溝の覆土中からは8世紀末頃の須恵器の高坏が出土している。調査A区の表土中からも、同時期の須恵器の高坏が出土しているが、いずれも覆土中のため、溝の時期については不明である。また、性格等も不明であるが、溝7条の内5条は東西方向に構築され並行関係にあるということが特徴としてあげられる。

(2) 土坑

調査A区から7基、調査B区から4基の土坑を検出した。特に、調査A区の7基の内第1・3・4・5・6号土坑の5基は、形状から判断して縄文時代の陥し穴と思われる。第1・3・4・6号土坑は長軸方向が、湛沼の方向に向いており大変興味深い。湛沼は、湧水によって豊かな水を蓄えている場所である。縄文時代においては、現在以上に豊かな水を湛えていたと思われ、水を求めて集まる小動物を捕らえる絶好の狩り場であったと想像できる。

参考文献

・茨城町史編纂委員会 『茨城町史・通史』茨城町 1995年3月

付 章

- 1 南小割第2地点貝塚試料の分析
— 「縄文時代前期貝塚の意味を考える」ための基礎的な作業 —
- 2 南章割遺跡出土炭化材樹種

南小割第2地点貝塚試料の分析

— 「縄文時代前期貝塚の意味を考える」ための基礎的な作業 —

鈴木 素行

1. はじめに

茨城県東茨城郡茨城町に所在する南小割遺跡において検出された、縄文時代前期の地点貝塚の調査と、ここから採取された試料について実施した分析のうち、混土率、合貝含有率、焼貝含有率、貝種組成比率の4つについて報告する。

第129号住居跡内に堆積する貝層は、第2地点貝塚と記号化されている。本稿では「南小割第2地点貝塚」を「南小割貝塚」と省略して記述を進めることにする。

2. 試料の採取

第129号住居跡から出土した土器は縄文時代前期前葉の「二ツ木式」であり、南小割貝塚も同時期に形成されている。南小割貝塚は、住居跡中央部に堆積する貝塚Aと、北壁付近に堆積する貝塚Bに分かれている。第129号住居跡は、古墳時代に構築された第112号住居跡が重複することで北東部が破壊されているが、第112号住居跡の掘り方及び覆土には貝殻の含有が認められず、貝塚A・Bとも大きな破壊は受けなかったと考える。

貝塚Aは、貝層範囲を50cm方眼のA1～12区に分割して調査を進めた。貝層の平面形状は、不整形であり、円形ないしは楕円形を単位と想定するならば、3単位以上が複合するようにも見える。調査を進める中で、混土の質量、貝種の組成、貝殻の大きさ、貝殻の状態等の観察からは、貝層を分けることができなかった。50cm方眼で各断面をも観察したが、これによっても分層はできない。A8区を試料採取の対象とし、この東側の幅約20cmの部分を試料1、西側の残りを試料2とする。試料1は、貝層部分に限定した採取が可能であるが、試料2は、周囲の土壌をも含むことになる。試料1・2とも、貝層上面の最も低い部分から下面までの厚さを略3等分して、上部・中部・下部とし、下面とした位置から住居跡の床面あるいは炉床までの間を最下部とした。

貝塚Bは、貝層範囲を略2等分する位置で断面を観察し、これを境界としてB1・2区に分割した。分層には至らなかったが、中位の垂直位置にマガキが集中する。B1区を試料採取の対象として、マガキが集中する部分を中部、その上下を上部・下部とした。

調査では、土器等の遺物が位置を記録して、試料とは別個に取り上げられた。貝殻についても状態の良いものは、試料分析までに破損の恐れがあることから、別個に取り上げられたものがある。

3. 混土率

調査で「混土貝層」と観察された試料について、その「混土」の比率を算出する(第1表)。作業の手順は以下の通りである。試料を直射日光の当たらない場所で乾燥させ、全体の重量を計測する。5mm・3mm・1mm方眼の順序で重ねた篩に試料をのせて、特に5mm方眼の篩上には土壌の残留がないよう水洗した。これにより試料は3つの篩上の残留物に分けられる。5mm方眼の篩を通過したものを「土」と見做し、試料の重量から5mm方眼の篩上の残留物の重量を差し引いて「土」の重量を求めた。試料の重量に占める「土」の重量の比率を混土率Aとする。厳密に土壌そのものを選別して重量を求めることは、途方もない作業量を必要とすることから、現実的ではない。「土」と見做す段階を5mm未満に設定したことになる。次に、5mm方眼の篩上の残留物を対象に、選別した遺物を「貝殻」・「貝殻以外」の2つに大別する。試料の重量から5mm方眼の篩上の「貝殻以外」の重量を差し引いて「土・貝殻」の重量とした。「土・貝殻」の重量に占める「土」の重量の比率を混土率Bとする。調査の方法及び精度により、試料に含まれる「貝殻以外」、例えば土器、石器、骨角等の遺物の量が著しく異なることを考慮し、特に他の貝塚との比較のための数値として設定してある。

南小割貝塚の試料は、混土率Aと混土率Bに大きな差が認められない。混土率Bの方が高く算出されることになるが、

第1表 南小割第2地点貝塚試料の混土率

	A 8 試料				B 1 試料		
	最下部試料 1	下部試料 1	中部試料 1	上部試料 1	下部試料	中部試料	上部試料
試料全重量	1126 g	2098 g	2258 g	5988 g	3456 g	2426 g	1226 g
貝殻重量	481 g	1476 g	1602 g	3791 g	1156 g	1499 g	856 g
貝殻以外遺物重量	52 g	2 g	3 g	76 g	36 g	14 g	3 g
「土」重量	593 g	620 g	653 g	2121 g	2264 g	913 g	367 g
混土率 A	52.7%	29.6%	28.9%	35.4%	66.5%	37.6%	29.9%
混土率 B	55.2%	29.6%	29.0%	35.9%	66.2%	37.9%	30.0%

第2表 南小割第2地点貝塚試料の合貝含有率

	A 8 試料 ヤマトシジミガイ					B 1 試料 ヤマトシジミガイ			
	最下部試料	下部試料	中部試料	上部試料	全部(不明含む)	下部試料	中部試料	上部試料	全部
貝殻個体数	454個	3086個	3128個	2406個	9646個	377個	166個	310個	843個
合貝個体数	5個	69個	44個	45個	180個	2個	1個	3個	6個
合貝含有率	1.1%	2.2%	1.4%	1.9%	1.9%	0.5%	0.6%	1.0%	0.7%

その差は最大で2.5%であった。混土率Bの数値を使用して、貝層の堆積について検討する。混土の質量からは単一の「混土貝層」と捉えられた貝塚Aの試料は、下部試料1が29.6%、中部試料1が29.0%とともに近い数値を示す。上部試料1が35.9%と比較的高い数値であるのは、上位の土層の一部が試料とともに採取されたことが考えられる。これに対して、最下部試料1が55.2%であるのは、床面及び炉床の一部が試料とともに採取されたことを考慮しても、なお高い数値と考えられる。貝層断面の観察により床面直上に堆積しているように見えても、住居の廃絶から貝層の堆積までの間には、床面上に薄く土層が堆積していたことが想定されてくる。次に、貝塚Bの試料は、上部試料が30.0%と貝塚Aの下部・中部試料1に近い数値を示す。中部試料が37.9%と比較的高い数値であるのは、貝殻にマガキが多く、貝殻どうしの堆積に隙間が生じたことによるとも考えられる。これに対して下部試料は66.2%と高い。貝塚Bは、貝層断面の観察により第5層の壁際部分の堆積が始まって後に形成されたことが明らかであり、やはり大部分が床面直上に堆積しているように見えても、住居の廃絶から貝層の堆積までの間には、床面上に土層が堆積していたことが確実と考えられる。

4. 合貝含有率

斧足綱、所謂「二枚貝」の貝殻が閉じたままの状態のものを「合貝」と呼ぶ。南小割貝塚の試料については、ヤマトシジミガイを対象として、その個体数に占める合貝の比率を算出した。A 8 試料各部は0.8~2.2%の範囲にあり、A 8 試料全部では1.9%、B 1 試料各部は0.5~1.0%の範囲にあり、B 1 試料全部では0.7%である(第2表)。

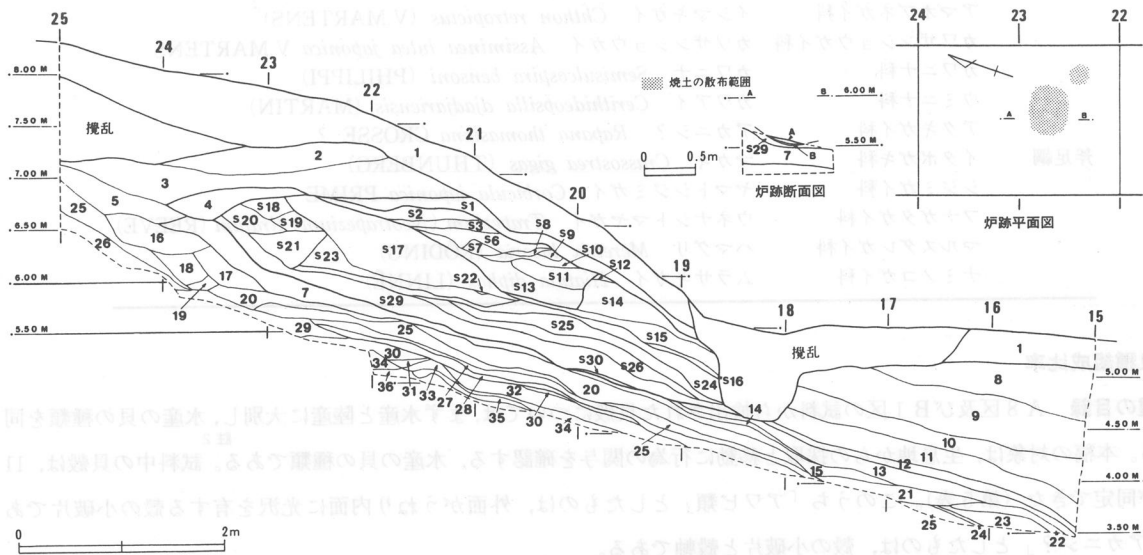
商品として買い求めたヤマトシジミガイを煮沸したところ、貝殻の開かないものが1.1%含まれていた。また、溜沼で採取したヤマトシジミガイを煮沸したところ、貝殻の開かないものが1.2%含まれていた。貝殻の開かないものは、食用ができない。南小割貝塚の合貝の比率は、これらに近い数値と考える。

なお、南小割貝塚の合貝を開けたところ、A 8 試料下部のヤマトシジミガイの貝殻の中にイシマキガイの貝殻が入っているということがあった。

5. 焼貝含有率

かつて「焼けた痕跡を有する貝の比率」[鈴木1986]としたものであり、貝塚の主体となる貝種について、その総重量に占める比率を算出する(第3表)。5mm方眼の篩上のヤマトシジミガイを対象として、この中から、被熱による変色で貝殻が灰色を呈するものを肉眼で識別し「焼貝」とした。ヤマトシジミガイ以外ではマガキにも焼貝が認められる。

南小割貝塚の試料は、貝塚Aの下部・中部・上部試料1、貝塚Bの下部・中部・上部試料が0~0.2%と低い数値を示す。これに対して、貝塚Aの最下部試料1は1.3%と比較的高い数値にある。他の6つの試料の平均値が0.1%未満であることと比較すれば、10倍以上の数値となる。これは、貝塚AのA 8 区が第129号住居跡の炉跡の上に位置し、最下部試料1が炉床上の堆積物までを採取したものであることによると考える。南小割貝塚には、貝層中において燃焼を伴う行為の痕跡は検出されておらず、焼貝を貝の調理に伴い生成されたものと推定する。調理は、貝殻全てが直接に火熱を受ける方法でなく、被熱の痕跡を有する貝殻が極く少数だけ出現する。例えば、煮沸する土器からこぼれ落ちた数個であろうか。



第1図 大串貝塚B地点の貝層堆積と「S29層」上面の炉跡([鈴木1986]より引用)

第3表 南小割第2地点貝塚試料の焼貝含有率

	A 8 試料 ヤマトシジミガイ				B 1 試料 ヤマトシジミガイ		
	最下部試料 1	下部試料 1	中部試料 1	上部試料 1	下部試料	中部試料	上部試料
貝殻全重量	644.1 g	4545.9 g	4821.0 g	5262.7 g	938.2 g	455.3 g	762.1 g
焼貝重量	8.5 g	4.7 g	3.2 g	2.1 g	0.8 g	0.9 g	0 g
焼貝含有率	1.3%	0.1%	0.1%	<0.1%	0.1%	0.2%	0%

第4表 大串貝塚B地点試料の焼貝含有率

	S13層		S15層		S25層	
	ヤマトシジミガイ	マガキ	ヤマトシジミガイ	マガキ	ヤマトシジミガイ	マガキ
貝殻全重量	14491.9 g	711.7 g	24870.3 g	939.2 g	15674.1 g	875.4 g
焼貝重量	1382.6 g	19.7 g	2526.4 g	113.0 g	356.9 g	19.6 g
焼貝含有率	9.5%	2.8%	10.2%	12.0%	2.3%	2.2%

	S26層		S29a層		S29b層	
	ヤマトシジミガイ	マガキ	ヤマトシジミガイ	マガキ	ヤマトシジミガイ	マガキ
貝殻全重量	14808.0 g	1229.8 g	7263.8 g	780.2 g	3429.2 g	631.0 g
焼貝重量	1694.7 g	193.0 g	936.0 g	202.8 g	371.7 g	133.2 g
焼貝含有率	11.4%	15.7%	12.9%	26.0%	10.8%	21.1%

貝が住居内の炉で調理されることにより、第129号住居跡の炉跡に残された「焼貝」が、最下部試料には比較的多く含まれることになったと考えておきたい。

最も高い数値でも1.3%にすぎない南小割貝塚に対して、水戸市大串貝塚B地点 [鈴木1986] のヤマトシジミガイに認められる焼貝含有率は、「S25層」を除いて10%前後を占める(第4表)。これは、「S29層」上面で検出された炉跡のように、貝層上において燃焼を伴う行為が展開されたことによると考える。大串貝塚B地点においては、「S29層」のみならず貝塚の大部分が、南小割貝塚とは相違する行為の複合により形成されたことを確認しておく。大串貝塚B地点におけるマガキを対象とした焼貝含有率には、数値がヤマトシジミガイと異なる貝層もある。これは、マガキがブロック状に集中して検出されることに関連すると考える。燃焼を伴う行為がマガキの集中地点にあれば高い数値に、これを外れれば低い数値になる。ヤマトシジミガイが2.3%、マガキが2.2%とともに低い数値の「S25層」については、斜面による再堆積で貝殻が混在し数値を高くしている可能性があり、燃焼を伴う行為が複合しないことも考えられる。

第5表 南小割第2地点貝塚試料の貝種目録

(貝種名及び配列は[波部他1967]による)

腹足綱	ミミガイ科	アワビ類 <i>Haliotis</i> sp.
	アマオブネガイ科	イシマキガイ <i>Chthon retropictus</i> (V.MARTENS)
	カワザンショウガイ科	カワザンショウガイ <i>Assiminea lutea japonica</i> V.MARTENS
	カワニナ科	カワニナ <i>Semisulcospira bensoni</i> (PHILIPPI)
	ウミナナ科	カワアイ <i>Cerithideopsisilla djadjariensis</i> (MARTIN)
	アクキガイ科	アカニシ? <i>Rapana thomasiana</i> CROSSE ?
斧足綱	イタボガキ科	マガキ <i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG)
	シジミガイ科	ヤマトシジミガイ <i>Corbicula japonica</i> PRIME
	フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ <i>Trapezium (Neotrapezium) liratum</i> (REEVE)
	マルスグレガイ科	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i> (RÖDING)
	ナミノコガイ科	ムラサキガイ <i>Hiatula diphos</i> (LINNÉ)

6. 貝種組成比率

貝種の目録 A8区及びB1区の試料から検出された貝殻については、まず水産と陸産に大別し、水産の貝の種類を同定²する。本稿の対象は、生息地からの採取と移動に行為の関与を確認する、水産の貝の種類である。試料中の貝殻は、11種類が同定できた(第5表)。このうち「アワビ類」としたものは、外面がうねり内面に光沢を有する殻の小破片であり、「アカニシ?」としたものは、殻の小破片と殻軸である。

分析の方法 貝種組成は、重量と個体数の2通りで算出する。

重さを量る対象としたのは、5mm方眼の篩上の残留物から選別された「貝殻」である。これを貝種で選別することになるが、実際の作業はヤマトシジミガイ以外の抽出である。残存状態の良好な個体により作成された貝種目録にほぼ限定しながら、微細な破片についても貝種を推定していることになり、厳密には貝種目録を貝種の全てと見做した上での組成と表現すべきである。

個体を数える対象としたのも、5mm方眼の篩上の残留物から選別された「貝殻」である。腹足綱の貝殻については殻頂あるいは殻口のうち多い方の数を最小個体数とし、斧足綱の貝殻については、左右の殻についてそれぞれ殻頂の数を求め、多い方の数を最小個体数とした。残存する貝殻に殻頂部分が含まれない貝種については、総数に加えていないが、これを1個体と見做しても比率は0.1%未満となる。また、3mm方眼の篩上の残留物から検出された殻頂を有する貝殻³、1mm方眼の篩上の残留物から検出されたカワザンショウガイとウネナシトマヤガイについて、個体数を報告しておく(第10表)。1mm方眼の篩上の残留物までを対象としたとき、ウネナシトマヤガイは個体数でマガキを上回ることになる。

重量による貝種組成 重量により算出された貝種組成の比率は一覧表(第6・8表)の通りである。

A8試料の「貝殻」総重量は16,551.4gである。ヤマトシジミガイが16,459.5gで、99.4%を占めている。ハマグリ・マガキ・ムラサキガイ・ウネナシトマヤガイ・イシマキガイ・カワアイ・カワニナ・アワビ類の8種の合計が91.9gで、0.6%にすぎない。これら各貝種とも0.2%以下の比率であり、ウネナシトマヤガイ・イシマキガイ・カワアイ・カワニナ・アワビ類の5種は、0.1%未満である。分割した試料各部についても、ヤマトシジミガイが99%以上を占めることに変わりなく、1%未満の比率の中に他の貝種が含まれている。

B1試料の「貝殻」総重量は3,522.1gである。ヤマトシジミガイが2,155.6gで61.2%、マガキが1,350.9gで38.4%を占める。ウネナシトマヤガイ・ムラサキガイ・アカニシ・イシマキガイ・カワニナの5種と不明の合計が15.6gで、0.4%にすぎない。これら各貝種とも0.3%以下の比率であり、ウネナシトマヤガイ・ムラサキガイ・イシマキガイ・カワニナの4種は、0.1%未満である。分割した試料各部については数値が大きく異なる。下部は、ヤマトシジミガイが938.2gで81.2%、マガキが216.0gで18.7%。中部は、ヤマトシジミガイが455.3gで30.4%、マガキが1,041.2gで61.2%。上部は、ヤマトシジミガイが762.1gで88.9%、マガキが93.7gで10.9%。マガキの集中が捉えられた中部において比率の逆転が認められる。

個体数による貝種組成 個体数により算出された貝種組成の比率は一覧表(第7・9表)の通りである。

A8試料の「貝殻」総個体数は9,702個である。ヤマトシジミガイが9,646個で、99.4%を占めている。ハマグリ・マガ

第6表 南小割貝塚A8 試料貝種重量組成 (5mm方眼篩上)

A8試料	最下部			下部			中部			上部			不明	合計				
	調査	試料1	試料2	小計	調査	試料1	試料2	小計	調査	試料1	試料2	小計						
ヤマトシジミガイ		480.7g 99.9%	163.4g 100.0%	644.1g 99.8%	1466.1g 99.4%	3079.8g 99.8%	4545.9g 99.4%	1593.4g 99.4%	3227.6g 99.8%	4821.0g 99.3%	3781.9g 99.8%	1480.8g 99.2%	5262.7g 99.5%	1185.8g	16459.5g 99.4%			
ハマグリ				12.6g			12.6g 0.3%	16.9g				16.9g 0.3%			29.5g 0.2%			
マガキ		<0.1g <0.1%		<0.1g <0.1%	7.7g 0.5%		7.7g 0.2%	6.4g 0.4%	0.2g <0.1%	6.6g 0.1%	8.5g		8.5g 0.2%	4.0g	26.8g 0.2%			
ムラサキガイ					0.3g <0.1%	1.9g 0.1%	2.2g <0.1%	0.7g	0.8g <0.1%	4.5g 0.1%	6.0g 0.1%	3.3g	0.6g <0.1%	11.0g 0.7%	14.9g 0.3%			
ウネナシトマガイ							<0.1g			<0.1g					<0.1g <0.1%			
イシマキガイ		0.5g 0.1%		0.5g <0.1%	0.4g <0.1%	2.9g 0.1%	3.3g 0.1%	0.4g		1.0g <0.1%	1.4g <0.1%	0.2g	0.1g <0.1%		0.3g <0.1%			
カワアイ													1.6g 0.1%		1.6g <0.1%			
カワニナ	1.1g	<0.1g <0.1%		1.1g 0.2%	1.0g 0.1%	<0.1g <0.1%	1.0g <0.1%	1.4g 0.4%	0.5g <0.1%	1.9g 0.1%	0.1g <0.1%				0.1g <0.1%			
アワビ類								0.6g	0.3g <0.1%	1.2g <0.1%			<0.1g <0.1%		<0.1g <0.1%			
各列合計	1.1g	481.2g 100.0%	163.4g 100.0%	645.7g 100.0%	12.6g	1475.5g 100.0%	3084.7g 100.0%	4572.8g 100.0%	18.6g	1602.3g 99.9%	3234.1g 99.9%	4855.0g 99.8%	3.5g	3791.2g 100.0%	1493.4g 100.0%	5288.1g 100.0%	1189.8g	16551.4g 99.9%

第7表 南小割貝塚A8 試料貝種個体数組成 (5mm方眼篩上)

A8試料	最下部			下部			中部			上部			不明	合計				
	調査	試料1	試料2	小計	調査	試料1	試料2	小計	調査	試料1	試料2	小計						
ヤマトシジミガイ		L 300 R 337 99.7%	L 129 R 117 100.0%	L 429 R 454 99.6%		L 943 R 922 99.8%	L 2064 R 2164 99.4%	L 3007 R 3086 99.5%		L 954 R 972 99.5%	L 2132 R 2156 99.5%	L 3086 R 3128 99.4%		L 1640 R 1655 99.8%	L 766 R 749 98.3%	L 2406 R 2404 99.1%	L 543 R 574	L 9471 R 9646 99.4%
ムラサキガイ							L 3 R 5 0.2%	L 3 R 5 0.2%	R 1	L 1 R 2 0.2%	L 5 R 7 0.3%	L 6 R 10 0.3%	L 5 R 2	L 1 R 1 0.1%	L 10 R 11 1.4%	L 16 R 13 0.7%		L 25 R 28 0.3%
ハマグリ					L 1		L 1 <0.1%											L 1 <0.1%
マガキ														L 1 R 1 0.1%		L 1 R 1 <0.1%		L 1 R 1 <0.1%
ウネナシトマガイ									R 1			R 1 <0.1%						R 1 <0.1%
イシマキガイ		1 0.3%		1 0.2%	1 0.1%	9 0.4%	10 0.3%	1		3 0.1%		4 0.1%	1	1 0.1%		2 0.1%		17 0.2%
カワアイ															2 0.3%	2 0.1%		2 <0.1%
カワニナ	1			1 0.2%	1 0.1%		1 <0.1%		3 0.3%	1 <0.1%		4 0.1%						6 0.1%
アワビ類																		
各試料合計	1	338 100.0%	129 100.0%	456 100.0%	1	945 100.0%	2178 100.0%	3103 100.0%	3	977 100.0%	2167 99.9%	3147 100.0%	6	1658 100.1%	779 100.0%	2427 100.0%	574	9702 100.0%

キ・ムラサキガイ・ウネナシトマガイ・イシマキガイ・カワアイ・カワニナ・アワビ類の8種の合計が56個で、0.6%にすぎない。ムラサキガイが28個で0.3%、イシマキガイが17個で0.2%、ハマグリ・マガキ・ウネナシトマガイ・カワアイ・カワニナ・アワビ類の6種は0.1%未満である。分割した試料各部についても、上部試料2以外は、ヤマトシジミガイが99%以上を占めている。上部試料2にはムラサキガイが11個で1.4%ある。なお、試料1と比較して試料2に、ムラサキガイが多く含まれており、A8区貝層の東側端部に集中していたことが推定される。

B1試料の「貝殻」総個体数は932個である。ヤマトシジミガイが843個で90.5%、マガキが77個で8.3%を占める。ウネナシトマガイが8個で0.9%、カワニナ・イシマキガイがともに2個で0.2%である。分割した試料各部については数値が大きく異なる。下部は、ヤマトシジミガイが377個で94.5%、マガキが15個で3.8%。中部は、ヤマトシジミガイが166個で73.5%、マガキが56個で24.8%。上部は、ヤマトシジミガイが310個で97.5%、マガキが6個で1.9%。比率は逆転しない。

7. まとめにかえて

試料の貝殻重量を基準にして、面積の比率から南小割貝塚の貝殻総重量を推定した数値と、実際に整理作業で計量された貝殻総重量 [江幡他1998] とを比較してみる。比較の対象は、ヤマトシジミガイとマガキである。

貝塚Aの平面積は約1.26㎡、A8区の貝層範囲の平面積は約0.18㎡であり、貝塚AをA8試料の7.0倍と見積もる。貝塚Bの平面積は約0.21㎡、B1区の貝層範囲の平面積は約0.11㎡であり、貝塚BをB1試料の1.9倍と見積もる。この比率から算出される南小割貝塚のヤマトシジミガイの貝殻総重量は119,312g、マガキの貝殻総重量は4,283gである。

表 8 表 南小割貝塚B1 試料貝種重量組成 (5mm方眼篩上)

B1試料	下部			中部			上部			合計
	試料	調査	試料	調査	試料	小計	調査	試料	小計	
ヤマトシジミガイ	938.2g 81.2%		455.3g 30.4%		455.3g 30.2%		762.1g 89.1%		762.1g 88.9%	2155.6g 61.2%
マ ガ キ	216.0g 18.7%		1041.2g 69.5%		1041.2g 69.0%		93.7g 10.9%		93.7g 10.9%	1350.9g 38.4%
ウネナシトマヤガイ	0.6g 0.1%		0.2g 0.1%		0.2g 0.1%					0.8g 0.1%
ムラサキガイ			0.1g 0.1%		0.1g 0.1%					0.1g 0.1%
アカニシ		10.3g	2.0g 0.1%		12.3g 0.8%					12.3g 0.3%
イシマキガイ	0.5g 0.1%		0.1g 0.1%		0.1g 0.1%					0.6g 0.1%
カワニナ	0.3g 0.1%						1.4g		1.4g 0.2%	1.7g 0.1%
不明	0.2g 0.1%									0.2g 0.1%
各列合計	1155.8g 100.0%	10.3g	1498.9g 100.0%		1509.2g 100.0%		855.8g 100.0%		857.2g 100.0%	3522.1g 99.9%

表 9 表 南小割貝塚B1 試料貝種個体数組成 (5mm方眼篩上)

B1試料	下部			中部			上部			合計
	試料	調査	試料	調査	試料	小計	調査	試料	小計	
ヤマトシジミガイ	L 377 R 367 94.5%		L 154 R 166 73.5%		L 154 R 166 73.5%		L 256 R 310 98.1%		L 256 R 310 97.5%	L 787 R 843 90.5%
マ ガ キ	L 15 R 5 3.8%		L 56 R 29 24.8%		L 56 R 29 24.8%		L 6 R 4 1.9%		L 6 R 4 1.9%	L 77 R 38 8.3%
ウネナシトマヤガイ	L 4 R 6 1.5%		L 3 R 2 1.3%		L 3 R 2 1.3%					L 7 R 8 0.9%
ムラサキガイ			○		○					○
イシマキガイ	1 0.3%		1 0.4%		1 0.4%					2 0.2%
アカニシ		○	○		○					○
カワニナ	○						2		2 0.6%	2 0.2%
不明	○									○
各列合計	399 100.0%	○	226 100.0%		226 100.0%		2		316 100.0%	318 100.0%

表 10 表 南小割第2 地点貝塚試料検出の貝類 (3mm・1mm方眼篩上)

A8試料	最下部			下部			中部			上部			不明	合計	
	試料1	試料2	小計	試料1	試料2	小計	試料1	試料2	小計	試料1	試料2	小計			
3mm	ヤマトシジミガイ	L 1 R 2	L 2 R 1	L 3 R 3	L 1	L 18 R 20	L 19 R 20	L 5	L 7 R 6	L 12 R 6	L 3 R 2	L 2 R 4	L 5 R 1	L 2 R 1	L 41 R 34
	ムラサキガイ				L 1	L 1			L 3 R 3	L 3 R 3		L 1 R 3	L 1 R 3	L 1 R 1	L 6 R 7
	ウネナシトマヤガイ				L 1	L 1		R 1		R 1		L 2 R 1		L 2 R 1	L 3 R 2
1mm	ウネナシトマヤガイ							L 1 R 1							L 1 R 1
	カワザンショウガイ				1										1

B1試料	下部			中部			上部			合計
	試料	調査	試料	調査	試料	小計	調査	試料	小計	
3mm	ヤマトシジミガイ	L 1 R 1				L 2 R 1				L 3 R 1
	ムラサキガイ									
	ウネナシトマヤガイ	L 19 R 18	L 18 R 25	L 1 R 1		L 1 R 1				L 38 R 44
1mm	ウネナシトマヤガイ	L 25 R 17	L 26 R 26	L 2 R 2		L 2 R 2				L 53 R 45
	カワザンショウガイ									

これに対して、実際に計量されたヤマトシジミガイの貝殻総重量は109,815g、マガキの貝殻総重量は5,978gであった。推定と計量との誤差は、ヤマトシジミガイが8.6%、マガキが39.6%である。ヤマトシジミガイが多く推定されたのは、貝塚Aのなかで堆積状態の良好な部分を試料採取地点として選択したことによると考える。マガキが少なく推定されたのは、貝塚Aのなかに比較的集中して堆積する部分があったことによると考える。調査における観察では、貝塚Bに近いA4区にこれが認められている。

註1 5mm方眼の篩上の「貝殻以外」には、礫、土器破片、炭化物がある。1mm方眼の篩上まで対象にすると、A8試料最下部・中部・上部から、剥片石器の製作に関わる破片が検出されている。

註2 南小割貝塚の試料から検出された陸産の貝類は全て、「微小巻貝」などとも呼ばれる貝殻の小さなものであった。これらは、対象として採取されたものとは考え難い。ヒダリマキマイマイなど貝殻の大きなものについては、集中して検出された状況から、食用として採取された可能性も指摘されている [酒詰1939]。

註3 B1試料下部の1mm方眼の篩上からは、魚類の歯が2点と、節足動物であるフジツボ類の殻の破片が1点検出されている。これらが、試料から検出された、貝類以外の動物遺存体の全てである。

参考文献

吉良 哲明 1992 『原色日本貝類図鑑』(増補改訂版) 保育社
 酒詰 仲男 1939 「日本の石器時代及び原史時代にマイマイ類を食用に供せし痕跡がある。」『貝塚』第6号 東京考古学会
 鈴木 素行 1984 「縄文時代・前期 - 縄文時代前期貝塚の意味を考える -」『古河市遺跡分布調査報告書』古河市史料第8集 古河市
 鈴木 素行 1986 「大串貝塚B1トレンチの調査」『大串貝塚』常澄村文化財調査報告第2集 常澄村教育委員会
 波部 忠重他 1967 『貝』標準原色図鑑全集3 保育社

南小割遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

茨城県では、これまでに沿海地から内陸部に至る、主として台地上に分布する遺跡で住居構築材の樹種同定が行われている。その結果、沿海地ではコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属など、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）を構成する種類が確認されている。これらの種類は、内陸部に向かうにつれて減少し、変わってコナラ属コナラ亜属クヌギ節やコナラ節が多く使用されるようになる。このような変化は、高橋・植木(1994)が指摘した遺跡周辺の植生の違いを反映した結果と考えられるが、1遺跡あたりの同定点数が少ないために詳細は明らかではない。

本報告では、南小割遺跡の古墳時代前期・中期・後期の各住居跡から出土した構築材の樹種を明らかにし、その用材選択に関する検討を行う。

1. 試料

試料は、SI-60（古墳時代前期）、SI-90（古墳時代中期）、SI-16（古墳時代後期）の各住居跡から出土した、構築材と考えられる炭化材15点（試料番号1～15）である。試料とされた炭化材は図面によれば、いずれも住居壁付近から出土している。各試料の詳細については、樹種同定結果とともに表1に記した。

2. 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

炭化材は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節またはコナラ属コナラ亜属コナラ節のいずれかに同定された（表1）。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・ハンノキ属（*Alnus* sp.）カバノキ科

散孔材で、管孔は単独もしくは放射方向に2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織とがある。柔組織は短接線状～散在状。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.）ブナ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材では孔圏部は1～4列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

表1 南小割遺跡出土炭化材の樹種

遺構名	時代・時期	用途	番号	樹種
SI-60	古墳時代初頭	住居構築材	1	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			2	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			3	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			4	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			6	コナラ属コナラ亜属コナラ節
SI-90	古墳時代中期	住居構築材	7	ハンノキ属
			8	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			9	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			10	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			11	ハンノキ属
			12	クリ
SI-16	古墳時代後期	住居構築材	13	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			14	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			15	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

4. 考察

構築材には，クヌギ節・コナラ節・クリ・ハンノキ属の4種類が認められ，とくにクヌギ節が多い。この結果は，関東地方中央部の台地上の遺跡で古墳時代の構築材にクヌギ節・コナラ節が多く確認されているこれまでの結果（高橋・植木，1994）とも一致する。このことから，本地域においても古墳時代にクヌギ節が構築材として多く使用されていたことが推定される。

今回調査を行った住居跡は，いずれも時期が異なる。樹種構成を比較すると，古墳時代前期のSI-60ではクヌギ節とコナラ節，古墳時代中期のSI-90ではクヌギ節・ハンノキ属・クリ，古墳時代後期のSI-16ではクヌギ節がそれぞれ使用され，住居跡によって樹種構成が異なっている。このことから，住居跡によって用材選択が異なっていた可能性がある。しかし，今回は各時期で1軒の住居が分析調査の対象とされたため，今回得られた結果が住居構築材の用材選択の時期差を反映しているとは限らない。群馬県中筋遺跡の調査例にも見られるように（高橋，1988；橋本ほか，1993），同時期の住居跡であっても住居単位で構築材の種類構成に違いがあった可能性もある。焼失住居跡から出土する炭化材は，火災とその後の埋積過程を経て残存したものであり，出土した炭化材全点を同定しても当時の樹種構成を正確に復元できるとは限らないが，本遺跡において住居構築材の用材選択の時期差について詳細に検討していくためには，今後さらに樹種同定に関する資料を蓄積する必要がある。

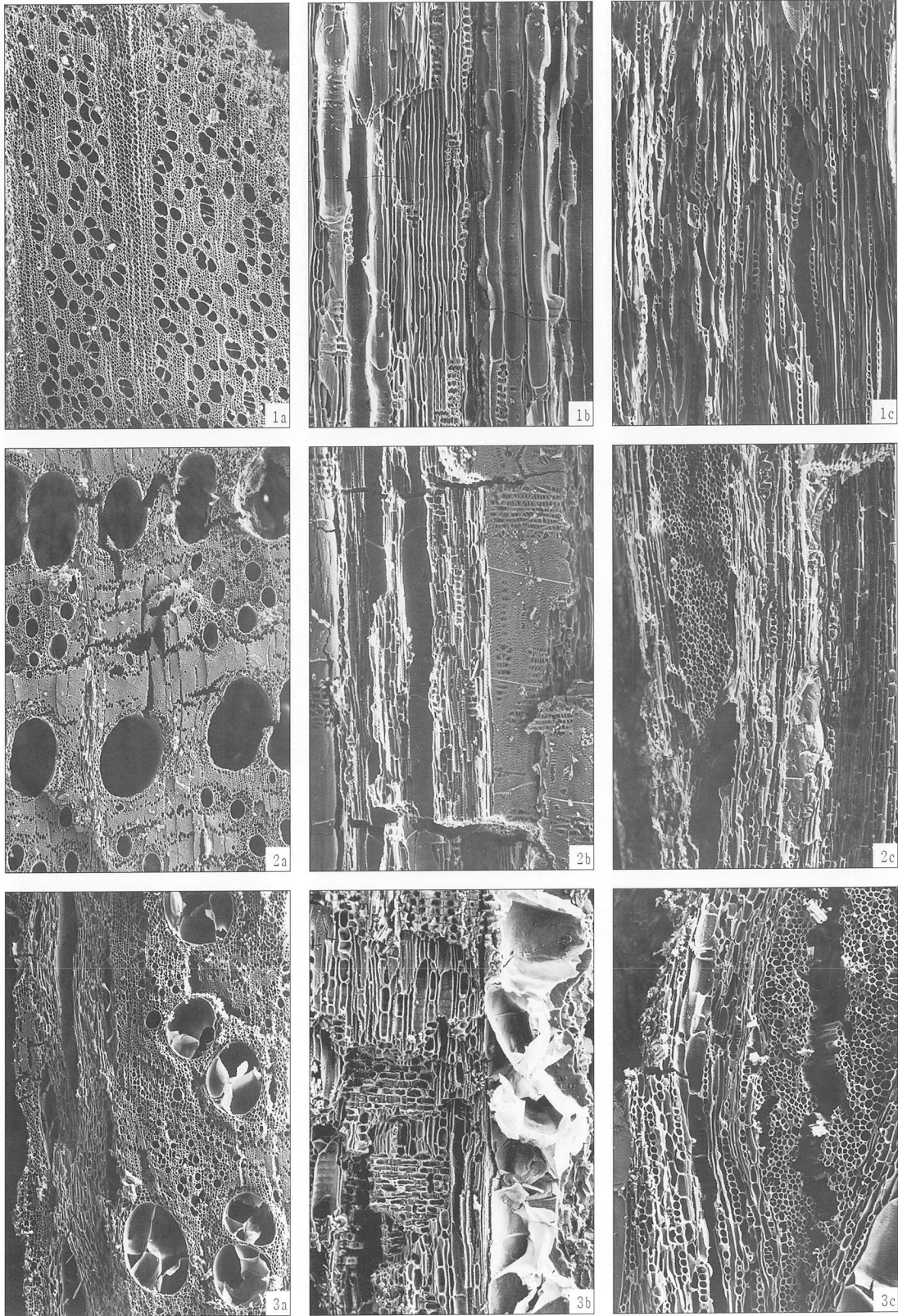
<引用文献>

橋本真紀夫・馬場健司・田中義文・高橋 敦（1993）渋川市中筋遺跡（第7次調査）の自然化学分析調査，渋川市発掘調査報告書第34集「中筋遺跡 第7次発掘調査報告書」，P.40-60，群馬県渋川市教育委員会。

高橋利彦（1988）中筋遺跡出土炭化材の樹種，渋川市発掘調査報告書第18集「中筋遺跡 第2次発掘調査概要報告書」，P.42-47，群馬県渋川市教育委員会。

高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択，PALYNO，2，P.5-18。

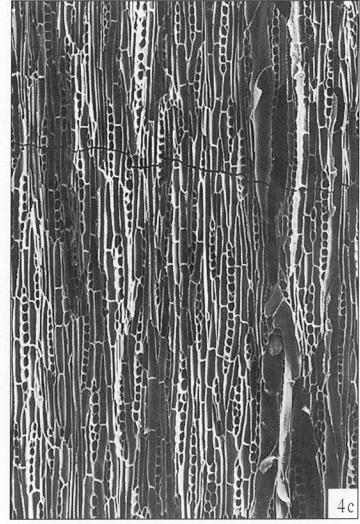
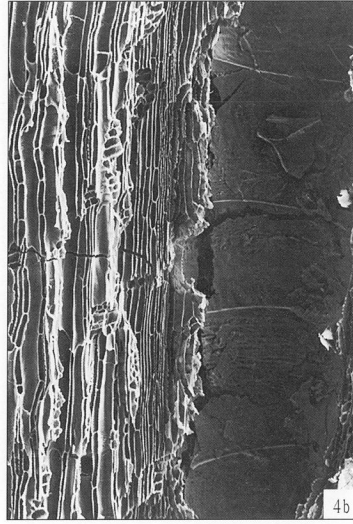
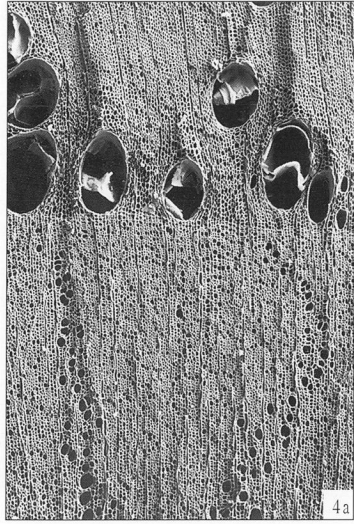
図版1 南小割遺跡・炭化材(1)



1,ハンノキ属 (試料番号11)
 2,コナラ属コナラ亜属クヌギ節(試料番号13)
 3,コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号6)
 a:木口, b:柁目, c:板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

図版2 南小割遺跡・炭化材(1)



4,クリ (試料番号12)
a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c